六月

明治四十二年六月一日發行（毎月一回一日發行）明治三十七年十二月九日第三種郵便物認可

女子文壇



第五年第八號

東京 女子文壇社 發行

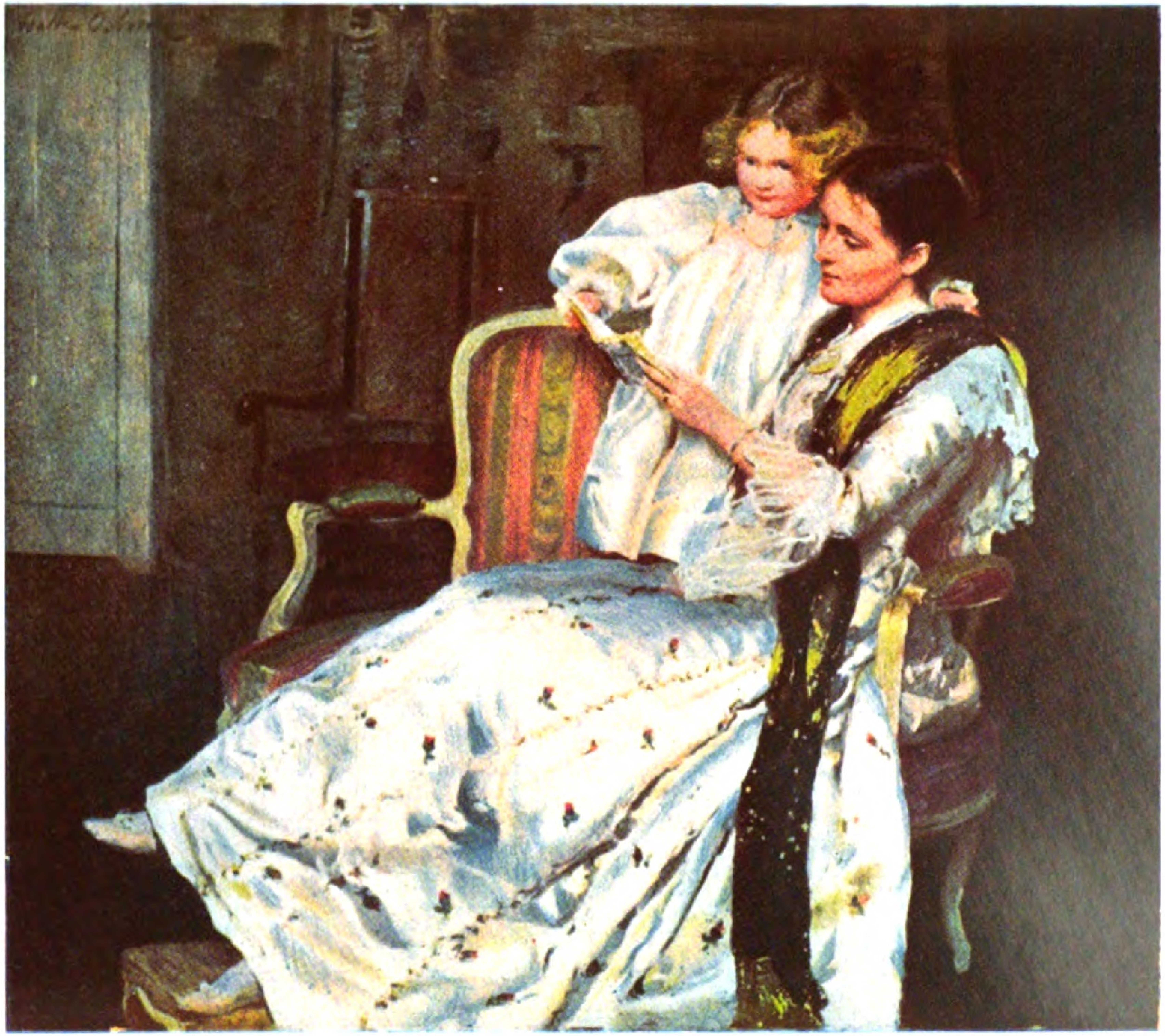
女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



【本　欄】

目次

慈愛



（大江三色寫眞版印刷）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

◎初めから終まで一字一句も無駄のない雜誌◎

婦人世界

六月一日發行 四卷第七號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共一圓五錢 一年分二圓五錢

△女中欄 主婦と女中と一緒に働く、感心なる女中の實例（懸賞發表）……横河下枝

▲初めて女中を置いた時……（田中秀子）

▲父母より受けた教訓……跡見花蹊

▲茶ばなし

△私は婦より如何なる教訓を受けし乎……三輪田元道氏夫人 三輪田秀子

△私の今日はある全く親友のお蔭なり……東洋婦人會主事 清藤秋子

△學校を卒業せし盲人夫婦の家庭を訪ふ記……婦人記者

▲婦人界に流行の小皺……（幸清次郎）

▲分娩時に守るべき攝生……醫學博士 榊順次郎

△家庭には滑稽趣味が必要なり……村井弦齋

▲神に祭られし婦人……一記者

▲（歴史談）逢はずの橋

▲弦齋夫人の料理談

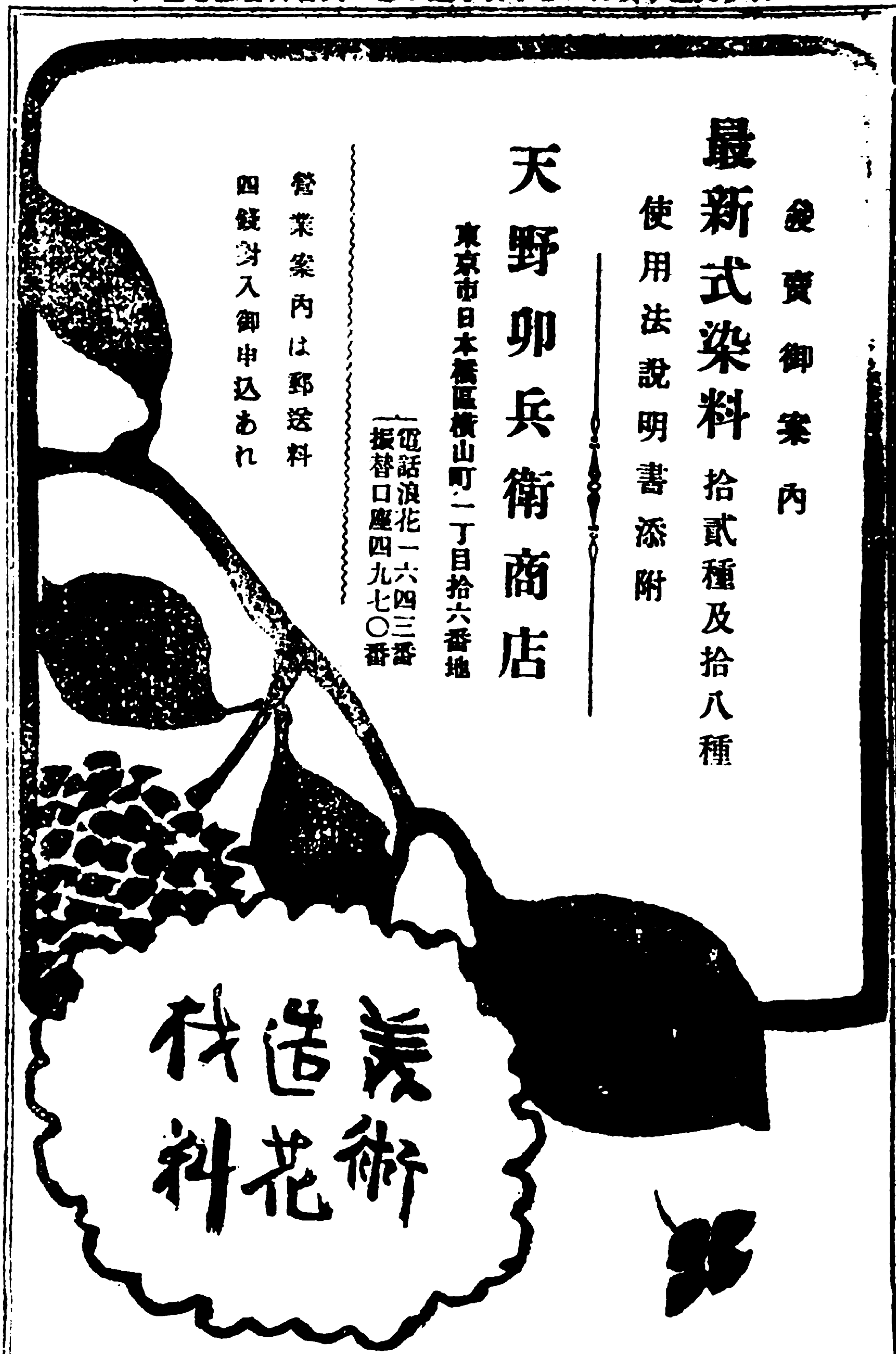
△洋行歸りの娘から聞いたおみやげ話……貴族院議員伊澤修二氏夫人 伊澤千世子

△私が交際場裡に出入して得たる利益……陸軍中將夫人 比志嶋雪子

△弟と共に苦學して成功せる婦人の苦心實歷……小林富子

△米國に於ける日本婦人の裁縫教授……米國サンフランシスコ 川嶋政子

東京京橋區南紺屋町十二 實業之日本社 （郵便振替貯金口座參武六番）（電話新橋八七四番） 全國賣捌書店



發賣御案内
最新式染料 拾貳種及拾八種
使用法說明書添附
天野卯兵衛商店
東京市日本橋區横山町二丁目拾六番地
電話浪花一六四三番
振替口座四九七〇番
營業案内は郵送料
四錢封入御申込あれ
美術造花材料

文士の夫人



島崎藤村氏夫人



田山花袋氏夫人と愛兒

婦人畫家



石川玉溪女史



水野秀方女史



歌川若菜女史

新輸入美容内服 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製式劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を現はゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は普製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる内服劑 サーサパリラ

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**淸血劑**にして頑強なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒痔毒リウマチス等の病毒及び男女體內の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を淸淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の內服水劑なり（注意）從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり（今回英國より輸入し當舖にて一手專賣致候）色白新劑と「サーサパリラ」と內外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

價壹劑二圓七拾錢△參劑七圓九拾錢△五劑拾貳圓拾錢

色白特効 ペーアス石鹸

此石鹸は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず曾だ單に其主眼たる特効の一二を揭げんに**皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質**を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する內國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ（昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む）

壹個代價送料共八拾五錢△三個函入同上貳圓參拾錢

以上三種專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

有効保險 前代未發 秘傳奇術

全壹冊正價郵税共金拾五錢△郵券代用は月拾五錢封送の事

（月錄六十〇）神經衰弱の新療法◎陰萎病を必治する新法◎陰〇の爛れを治する法◎消渇を必治する法◎頭癬の必治法◎人造麝香の製法◎上等香水製法◎香袋製法◎美顔クリーム製造法◎音聲を清良にする法◎齒痛即治藥製法◎髮の脱落するを止むる法◎化粧石鹸製法◎西洋白粉製法◎毛髮必生法◎臭汗治法◎白髮を染むる法◎毛髮の光澤を美にする新藥◎齒磨粉製法◎西洋椿油製造新法◎にきび即治法◎ほくろを落す法◎ピットル酒製法◎夏日室內を爽涼にする法◎羅紗類を汚せるインキ斑痕を除く法◎◎白瓜を一年新鮮に貯ふ法◎蚤を驅除する良法◎氷を即時製造する法◎百年長壽の奇法◎生涯病に罹らざる奇法◎人の生死を前知する法◎船中より海の底を見る法◎百日眠らずに堪へざる法◎拔毛劑新法◎廢人たる若に答へしむる法◎禿頭病必治法◎癡入りたる男女の心中を知る法◎白なまず即治法◎五十の老婆を二八の娘に變ずる法◎脚氣病必治法◎妖怪變化を見顯はす神術◎人體不死の奇法◎千里一足飛行の神術◎盗人を見顯はす神術◎女に○れらるゝ藥法◎硬き毛髮を柔軟にする法◎思ふ女を○○かす藥法◎堅き女の氣を○○す藥法◎陰○を長大にする藥法◎そばかす必治法◎女を○○にて治す神藥◎夢に戀人と語る秘術◎見染し女を手に○れる神法◎待人來る神術◎一生戀中に變らぬ秘術◎悋氣深き女を治する藥法◎闇中の秘藥◎即座に男精を增す法◎毒蟲に螫れたる時腫ぬ特効藥◎過食の仙術◎神速に精力を強む法◎即座陰身術◎人を眠らす秘法即ち催眠術◎顔赤く吹出物生ずるを治す法◎過房を治する妙法◎多情を抑制する秘法◎色慾なき女に情を○せしむる法◎記臆力を增進する法◎女孕みの仙術◎男女梅毒の有無を知る法◎淫婦觀破の奇術◎黒字夜光の奇術◎老人終身職取りの奇術◎腋臭を治する法◎色を白くする內服劑新法◎寶丹の藥法◎腹痛速治法◎疥癬病の藥法◎生たる鯉を遠國へ送る法◎脱肛を治する法◎黄疸を治する法◎鮫肌を直す秘法◎味噌の損じたるを直す法◎痳病の治法◎月經の不順を治する法◎痢氣の妙劑◎齒痛を治する法◎陰部の臭きを治する法◎陰部の虱を去る法◎にきびを去る最新法◎頭髮を長くする法◎毛生藥の最新法◎梅毒必治の新法◎便毒必治の新法◎下疳を治する奇法◎胃病の新劑◎百日咳の妙法◎肺病必治の新藥◎中風豫防の新法◎凍瘡の妙法◎衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法◎火傷即治の秘法◎シャクリ即治法◎聲を能くする新術◎白髮豫防新法◎土藏の風穴を塞ぎ再び明けぬ法◎寢小便を治する秘法◎頭瘡を治する法◎耳だれを治する法◎いぼを取る法◎あざを拔く新法◎乳の出る妙藥◎陰部の諸瘡治する法◎虎列拉病療治簡易法◎梅毒豫防の奇法◎思ふ時目を覺す法◎年齡により房事の度數◎病氣前知の奇術◎男女全身の色を白くし且つ艶美ならしむる法◎毒酒を製造する法◎富を造るの秘法◎一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法◎夏帽子洗濯新法◎疊の汚染を落す新法◎新しき鍋釜の鐵氣を止る法◎簡易美顔術新法◎衣服に油の付たるを落す良法◎以下數拾法略す（合計壹百四十法あり）著金即刻送本す

專賣元 東京市神田區五軒町拾九番地 **日新館商店**

(ろノ四)

夏の夢


"VOICI L'ÉTÉ.
LES VENTS VONT S'EMBRA
SSER CE BOUQUET!
QUE C'EST BEAU!
QUE C'EST
BEAU!"
GM.

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇の讀者へ

皆様の御知己の方て小供のある家庭へ進物をなさる時は菓子や玩具抔は一時的にて陳廢なり本誌の如き善良なる雑誌を一ヶ年分なり半ヶ年分なり前金にて本社へ注文あれば其期間丈け先方へ送り升から最も永く喜ばれて小供の爲めになりますから先きの兩親は何より有難く思ぶてせう

斬新なる良法提供

材料豊富

少年之友

記事清新

六月一日發行　四巻六號

（價）一冊郵税共金九錢　壹年分九十六錢

美麗なる口繪

●英雄少年時代北條時宗馬上の弓勢（石版密畫）△北米の大偉人ローズヴェルト氏退任式の盛儀△誌友の面影と卒業生の活人畫△木登り競争△米國少年の動物好き……

面白きお噺

●道長の犬（木村小舟）●北極熊と日本猿（動物園主任黑川義太郎）●探險船日東丸（長田介二）●田園の逍遙（理科大學XYZ生）●象の鼻の由來（野口米次郎）●動物の隠れん坊（ベルタ博士）●少女小説菊子の友愛（横井さと子）●電車ごつこ（西村醉夢）

好きな讀物

△梅雨の歌

△六月の花

△雀の歌

△少年十二訓

△蛙の生育

△玩具と手工

毎號懸賞 ◀少年文壇▶

●長文●短文●日記文●短詩●和歌●俳句●わらひばなし●新考物●少年倶樂部●少年筆蹟●スケッチ●畫さがし等

發行所　東京神田旅籠町一　文光堂（振替壹九五五番）

賣捌　東京堂○北隆館○上田屋　東海堂○良明堂○至誠堂

（はノ一）

梅毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一のばい毒根治特効新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘡毒。ろいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓つて根治**することを確證す從來醫療實藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。

藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

生殖機病特効新劑……（獨逸新輸入藥）

内服 ヨヒンビン

拾錠入壹劑 藥價送料共 壹圓九拾錢 郵券貳割增

本劑は獨逸國伯林大學教授博士スヒーゲル氏の發見に係る男女**生殖機不能**即ち**陰萎病。腎虚神經衰弱**遺精。夢精。早漏。過房。元氣衰弱。老衰無力。生殖虚弱。生殖機能障害。早老者。精液精蟲缺乏。不妊娠。冷症。發育不全等に用ひ輕症は參四劑重症は五六劑慢性難症は八九劑にて根治の目的を達する天下無比**可驚奇効**ある最新發見藥也**精力**を**增進**し生殖器を强健ならしめんと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効眞に**如電光**世にありふれたる誇大なる奇言を臚列する内地製無効實藥と同一視することなかれ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白也

奏効確證 美容新劑 やせる藥

本劑（藥名ヨードチサン錠）は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤くほてり、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢 特別製分九圓拾錢 着金即刻送藥す

世界唯一 痳病消渇の根治新藥

麻滅

麻滅は最も進歩したる最新の痳病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の實藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して**痳病消渇**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より**根治**確證す

但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢

郵券代用貳割增しの事

腋臭 わきが

根治確證 新發見藥

醫療實藥百方手を盡せし如何種頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦腦を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徴したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、陰部に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮着々と發生する特効あること確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視すること勿れ

特別製分 金五圓三拾錢 大瓶貳圓卅錢 中瓶壹圓廿錢

以上六藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新舘藥房**（電話下谷五四六番）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

しら髪赤毛染

美人印白髪赤髪染「ベーヤ」は、瑞西國サンド化學工業會社最近の發明品にして、毛髪は損傷する憂なく染色堅牢にして、長日月を保留する點に於て一大特性を有す

完全無比の白赤毛染

TRADE MARK



美人印

BEAR

ベーヤ

定價	
小瓶	金貳拾錢
大瓶	金參拾錢
大瓶小瓶とも壹箱は一打入なり	

輸入元
東京神田區豊島町
江端商會

發賣元
東京市神田區花房町
山崎帝國堂

同
東京市日本橋區馬喰町四丁目
南川商店

●取次販賣店は全國到る處の賣藥化粧品、藥店、小間物店に有り



（榊原芙雪君寄）

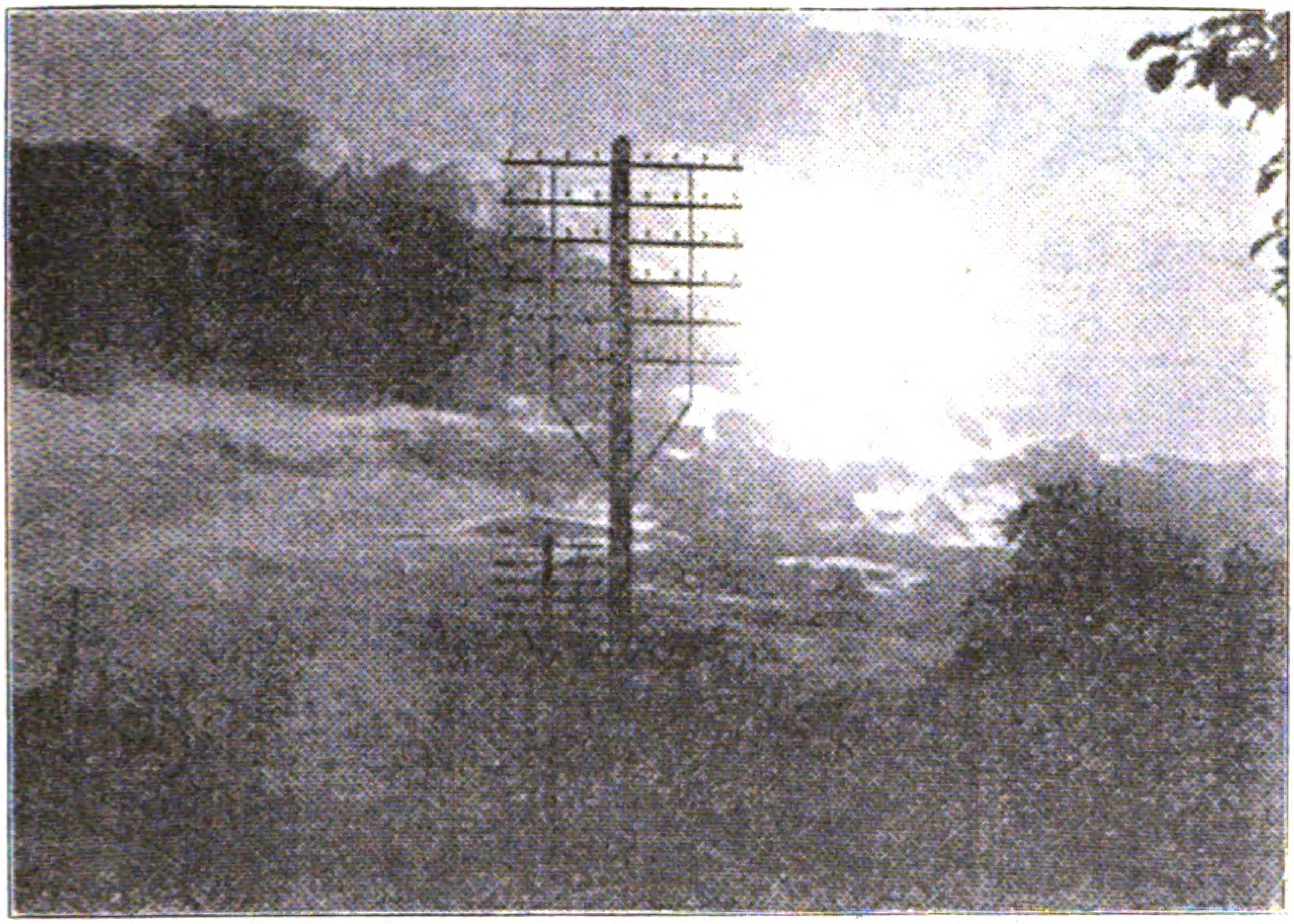
露國婦人

韓國婦人

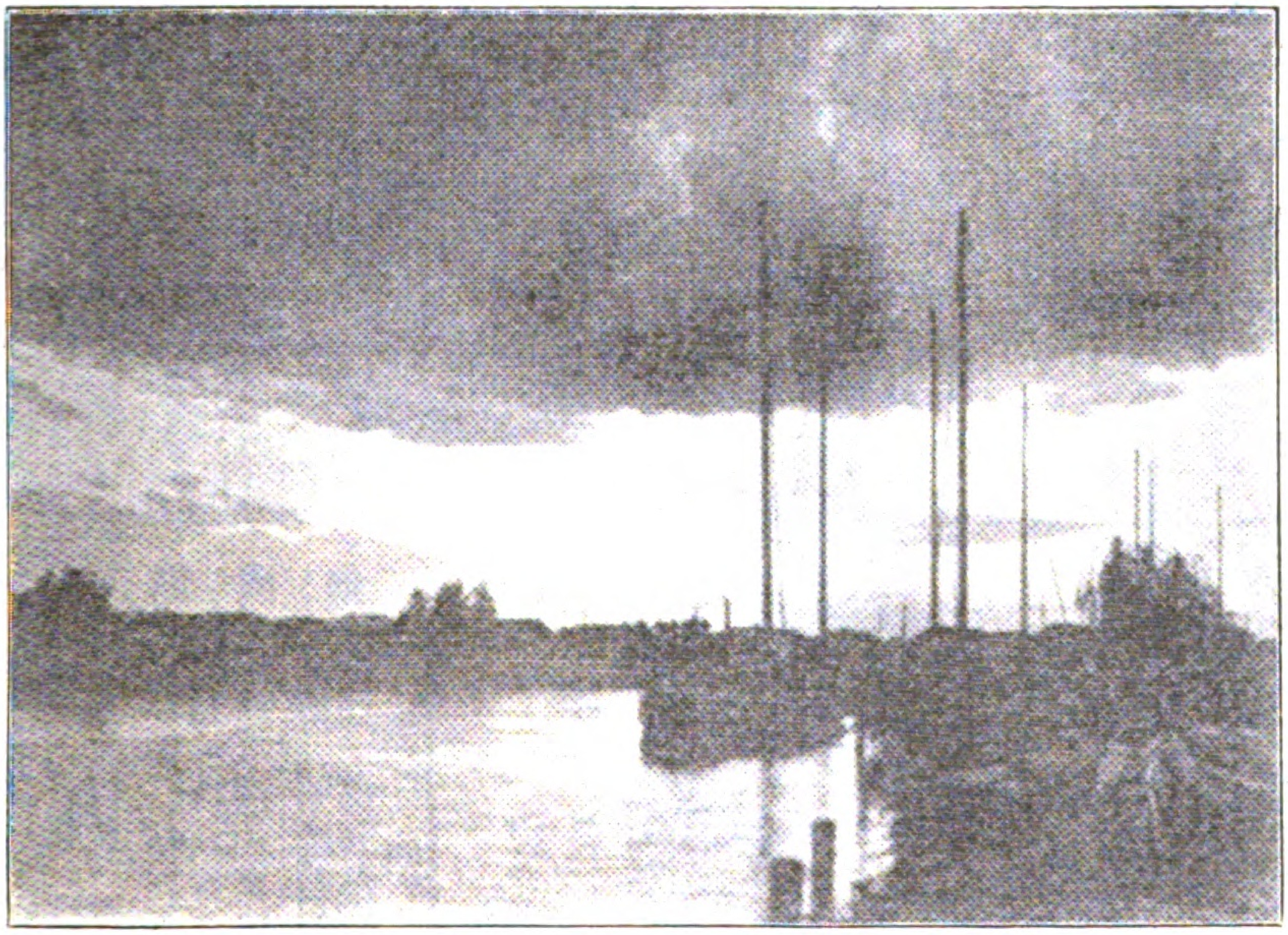


（出利葉靜枝君寄）

雲



露領ブラゴウエスチエンスク市（大阪、榊原芙雪君寄）



霞浦の夕照　（常陸、久保谷君寄）

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

美容劑

やせる藥コーヂピン

醫術開業試驗委員
陸軍三等軍醫正
從三位勳四等
醫學士
田村化三郎

本劑は余が多年の間苦心と研究の上發見したる最新の靈藥にして有病と無病とに拘はらずすべて身體の肥り過ぎた人には其風彩容貌の醜惡を美容艷麗なる姿に變化ならしめ且つ身體を完全に健康となすの特長を有し卒中其他肥滿なる病に伴ふ惡しき諸病を未發に防ぐの特効ある靈藥なり

藥價
十日分 金壹圓
卅日分 金貳圓七拾錢
送料八錢

東京市日本橋區檜物町十八番地

發賣 龜田藥局
【振替東京一八六九五番】

女子文壇の廣告に依り御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

肥滿病新藥

プリッテー PRETTY

小供の折美愛と稱せられし人も年頃になりてよりぶとく〱肉太りたるため左圖の如く醜婦となる人少なしとせず本剤は獨乙ペンツオルト氏の發見竈にて脂肪多き人◎ぶと〱ふとり血太り肉太り酒太り水太りにきび顔赤◎ふき出物多き人◎脹滿◎ぶつ〱逆上腫等輕症は一二剤如何程の惡性も三剤分連服せば色は艶白となり程よくやせて緊つて美顔窈窕たる美人となる美事を保證す

諸孃姉の福音



藥價 一剤一圓五拾錢 二剤二圓九十錢 三剤四圓卅錢 送料十錢宛

△肥藥性に苦む人は他藥に迷はず速に服用あれ

◎世界的月やく下し藥

……見よ……病める婦人 月經なき女子

專門博士賞賛指導の新發見良藥

△勿驚……藥力最強度……其效極て峻烈……有効無害……保險藥



本剤は婦人二三ヶ月の月經不順月經閉止月經滯りは一二剤にて必ず流下す四五月以上又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す夙に各婦人病院に於て効力卓絶なりと賞賛せられたるは此の女月丸なり滯り又は不順にて苦む人は速に服用あれ

△藥價一剤六十錢、二剤一圓十錢、特製二圓廿錢、別製分三圓卅錢、送料四錢

發賣本舖 東京々橋區中橋和泉町 振替口座一〇六七七番 小宮愛生堂

たち姿


（鹿兒島縣）福迫てる子


（東京）北村千代子


（愛媛縣）勉子

小照


津田かね子（富山市）


倉利子（河內）


高濱春枝子（上總）


村上潮六（新潟縣）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

習字速成通信教授

本會獨特の特許速成通信教授の方法に依りて練習すれば如何なる悪筆にても短日にて頗る上達すること全く機械的であります

書者 小野鵞堂先生 外講師數名

草行假名共六ケ月卒業

●見本 詳細會則 無代進呈 ■■ 東京本郷區森川町 電話下谷三〇一壹 (振替六八參壹)

帝國習字速成學會

繪畫界の福音出づ

執筆畫伯 川端玉章先生 河合玉堂先生 寺崎廣業先生 鈴木華邨先生 梶田半古先生 外大家執筆講義

專賣特許

繪畫速成練習帖

添削無料

美濃半紙形羅紗紙表紙 絹糸綴じ美麗製本 手本は俸書に石版色刷 圖解講義付

正價七拾五錢 小包送料八錢

本帖によりて練習すれば如何なる初學者にても最も容易に最も速に熟達すること間違無し。

東京本郷區森川町(振替六八參壹番)

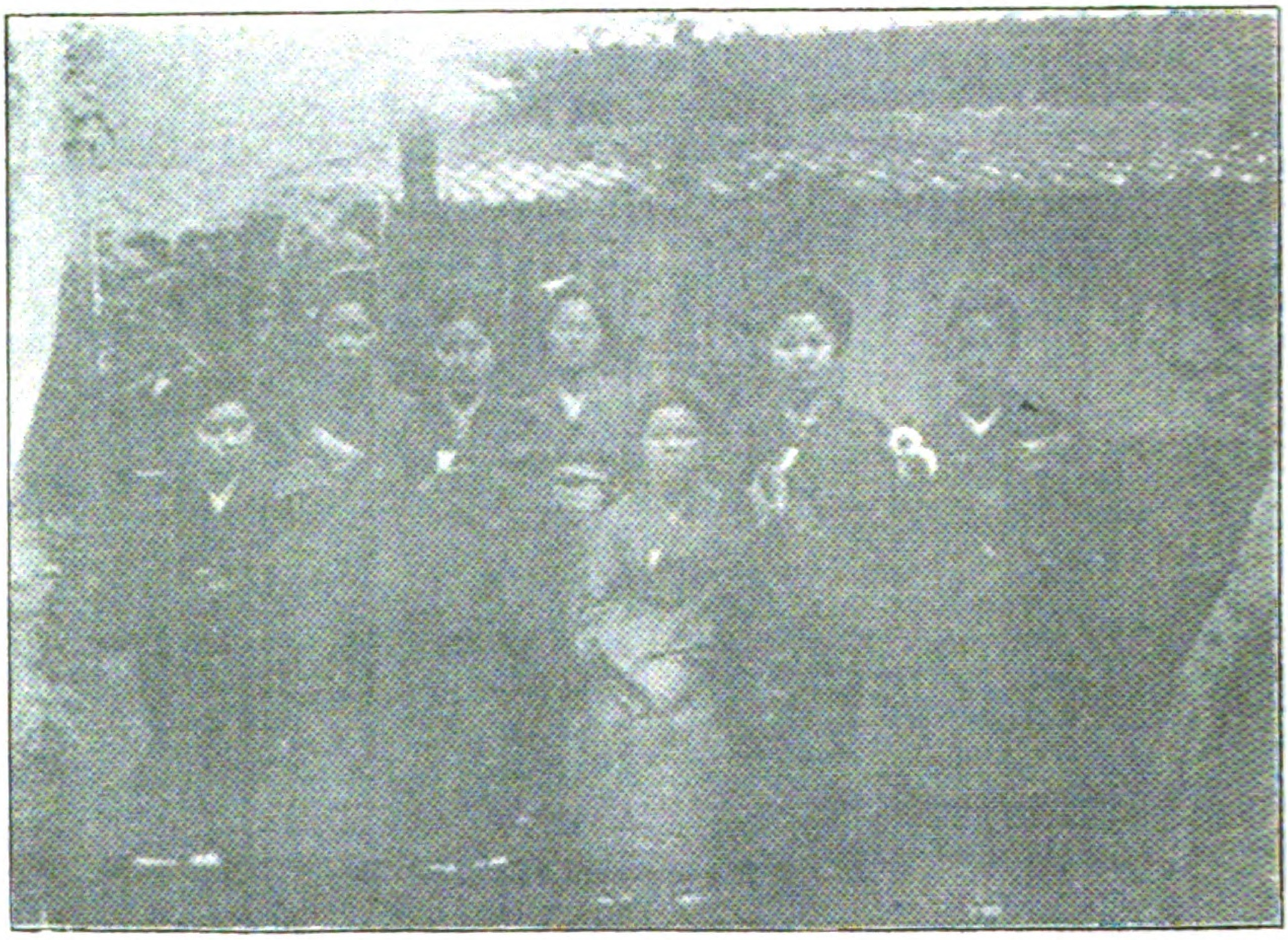
帝國習字學會繪畫部

野州誌友



（向て右より）岡波とも子、小宮ゆき子、手塚たけ子、大内たけ子、手塚はる子

西遠誌友



（向て右より）中谷綾子、齋藤みどり、河口桃花、波多野すみれ、足立露萩、伊藤白菊、平松みゆき

わが寫眞帖



（濱松）杉浦登美子



（鹿兒島縣）逆瀬川俊子



（東京）石平時枝子



（高知）竹内きよ子

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

五月十五日增刊

大好評

近來著しく進歩したるは若き女子の文章なり就中わが『女子文壇』は若き女子の文章を發表する機關として天下に獨歩す今回新に發行する、第二增刊『新作家』は實に理想的の最新式編輯法に依り妙齡婦人の新作物を滿載し忽ちにして美文あり忽ちにして小說あり詩歌あり俳句あり日記あり千様萬態の文字は讀者をして或は歡ばしめ或は驚かしむ事實を曝露して忌憚なく身の上を語るものあり煩悶を訴へて情緒の動搖を歌うものあり無邪氣なる家庭生活を直寫するものあり神秘的暗愁を幽玄なる文字に托するものあり若し夫れ日課表に到りては作物を登載したる各人毎に其住所、年齡、家庭、日課を明記せるものにして作物をも對照して其人物を一目瞭然たらしむ現代に於ける女子の思想を窺はんとするに此の如き好代表者は他になかるべきを信ず乞ふ直に一册を繙け



女子文壇

第二增刊

新作家

全美裝大判
二百三十頁
入賞作家十七人
肖像光澤紙密刷

附錄

新進閨秀作家短篇小說

○闇の夜……服部貞子
○敗者……加藤菊子
○火事……永代美千代
○氣まぐれ者……太田樂子
○新粧……尾島菊子
○六月……山田くにえ
○姉……故田中久子

定價金貳拾錢
郵稅一錢五厘

發行所 東京市京橋區大鋸町十二番 女子文壇社 （賣捌 全國雜誌書店）

女子文壇第一增刊……大好評（定價二十錢 郵稅一錢五厘）

新美文

現代の若き女子は如何なる感情を抱きつゝありや又如何なる趣味を持ちつゝありや之を窺んとする者は本書を見よ或は家庭を材とし或は自然を描き或は人事を歌ひ或は都會を寫す百人百様の觀察は讀者をして送迎に遑なからしめむ、選擇の嚴正にして批評の痛切なる蓋し最新式の文章を學はんとする者には無双の寶典たるべし附錄としては當代名流作家の美文數篇を收む

内容要目

全一册二百卅頁美裝

口繪 入選作家十二人寫眞肖像挿入
▲樂聲……三隅氏密書

▲大懸賞女子傑作

◉美文

◉論文 ◉俳句 ◉スケッチ ◉短文
◉小說…◉新體詩
◉和歌…◉書簡文

▲附錄 名家新作

◉小寒日記……薄田泣菫
◉裏の家……吉江孤雁
◉憧憬……小川未明
◉一轉機……高須梅溪
◉女床屋……兒玉花外
◉拾て犬……岡田八千代
◉火葉……澤村胡夷

東京京橋大鋸町 女子文壇社 賣捌全國雜誌書店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

最廉無比

女子文壇社編輯局選

懸賞文集 **文壇の花**

大判二百五十頁 賣價金拾錢 郵税一錢五厘

女子懸賞文集 第二

中判五百頁 賣價金貳拾錢 郵税六錢

懸賞文集 **文壇の光**

大判二百四十頁 賣價金拾錢 郵税一錢五厘

世に作文書多しと雖も、妙齢花の如き少女の手に成りし生きたる作文作歌の良書は此等を推して其優なるものとす、女子平生の心掛として優しき文章を學ばんと欲する者は來りて本書に親しめ、新時代の新文藝に接觸せんと欲するものも亦本書を繙け、此の如く廉價に此の如く容易に、作文作歌の道に入るの法は殆んど他になし、敢て之を提供す

東京市京橋大鋸町十二番地 女子文壇社出版 (振替口座東京第壹七貳八番) 賣捌全國書店

例の如く豫定したる懸賞は正確に勵行す

女子文壇（第三増刊）大懸賞募集

本誌第三増刊として茲に懸賞大募集を行はんとする「短篇小説」は其名の示す如く、短篇小説を主とし、併せて詩歌美文の各種文藝を含有するものなり、今回は文學中の文學、創作中の創作とも云ふべき小説を主位に置き、隱れたる天才を世に紹介せんとす。今や文運天下に普く、多少文學に志あれば小説を讀まざるものなし、讀んで之を作らんと思ふ才人また雲の如く多し。是等の諸君は本社の企に賛同し、平素の修養を傾倒して寄稿せらるべきを信ず。選抜は公平にして且嚴正、批評は親切にして且忌憚なし、寄稿雜誌中の模範たる本誌が最上の努力を此處に注ぐべき證據は、其發表の曉に到りて明かなるべし、多言は要せず、直ちに傑作に着手あれ。

投稿締切六月三十日▲發表八月十五日

短篇小説

懸賞方法

小説 一等 金貳拾圓。 二等 金拾五圓。 三等 金七圓 四等 金五圓 五等 金參圓（凡て正金を贈呈す。原稿は振假名付廿四字詰二百行限）

美文 天賞 金七圓。 地賞 金四圓。 人賞金貳圓（凡て物品を贈呈す）（原稿は廿四字詰七十行限）

書簡文◎日記文◎新論文◎新體詩◎和歌◎俳句 各天賞 金五圓。地賞金貳圓。人賞金壹圓（凡て物品を贈呈す。原稿は書簡日記論文は廿四字詰四十行限り、新體詩は振假名付三十行限り、和歌俳句は一人十首限り）

圖畫（三寸に二寸五分の大きさにて薄き用紙に描く）別賞十等迄端書切符にて贈呈す

投稿心得

◎投稿の封筒には東京京橋區大鋸町女子文壇社編輯局御中と書き傍らに「短篇小説原稿」と書くのです◎開封にすれば三十匁まで郵税二錢で參ります但し手紙の文句を入れることは一切無用◎種類を異にする毎に必ず別の用紙を使ふて下さい◎一人で同種の作物を幾篇も出すことは許しません◎用紙は半紙又は原稿用紙が最もよろしい◎字は下手でもよろしいから必ずきれいに分るやうに書いて下さい◎句切り（句讀）は正しく切って下さい◎投稿には一々住所姓名を詳しく書いて下さい、紙上に用ゆる名が別にあれば題の下へ書くこと◎入賞者には通知いたしますから寫眞を送って下さい◎投稿は凡て女子に限るのです◎一旦受附けた原稿はお返し致しません◎當選賞品は發表翌月末に贈呈す

投稿所 發行所 女子文壇社 東京京橋區大鋸町



第五年第八號

明治四十二年六月一日發行

靜かなるは麥刈濟む頃の田舍の夕暮なりけり。

神武寺に遊び、夕に及びて獨り田間の路を辿りて歸る。日は蒼然たる暮雲に包まれて落ち、雲のきれ目に一抹朱をぼかせし殘照も消えぬ。此處其處の畑より、村より、山側より、麥藁燒く煙縷々として立上り、蓬々として廣がり、果ては山も村も茫々となりぬ。

靜かに立ちて眺むれば、暮雲暮山の影落ちて水闊らき田の面に、白きもの湧き出て、見る〳〵田より田に蔓延り行く。麥藁燒く煙の影の田を渡るなりけり。其底に蛙聲あり。

日落ち、煙滿ち、物は物と互に融け、恍として無我の境に入る。人語なく、物音なく、燈影なし。唯蒼々たり、茫々たり。

靜かなる夕や。

獨り黄昏の底に立ちて、耳傾くれば、蛙聲獨り閣々、また蝍々。

是れ實に「夕」の聲なり。

德富芦花氏『蒼々茫々の夕』

古翁しま國の
野にまじり苺摘み
門に來て生鈴の
百曆を驕り呼ぶ

白晶の皿なうけ
鮮けき乳を灑ぐ
六月の飮食に
けたゝまし虹走る

清凉の里いてゝ
松に行き松に去る
大海のすなどりは
とぎれたり繪卷物

鳴門の子海の幸
魚の腹を胸肉に
おしあてゝ見よ十人
同音にのぼり來る

伊良子清白氏『淡路にて』



若き婦人の根本修養

羽仁もと子

第六　よき頭腦は如何にしてつくらるゝ乎(下)

前號にはよき頭腦をつくるための養ひになるものは、活ける智識であつて、その智識はわが心自らの注意と、活動とによりて、心に映る様々の事物より、吸收するものであるといふことを記しました。今回はそれに續いて、心に映る様々の事物より、智識の種を吸收し消化して、わが心の養ひとなるべき活ける智識をつくるために、何よりも大切な、心自らの注意と活動の力とは、どうして養はるべきもの乎、及び私共の心に吸收せらるべき智識のたねは、最も多く如何なる所に存するものであるかなどゝいふ様な事よりお話したいと思ひます。

心の訓練

目に見耳に聞く様々の事柄がありましても、私共の

内なる心が常にボンヤリとして居りましては、すべての感覺が、心の外側をかすめて、行き過ぎて仕舞ふ丈けて、何一つ私共の智識となつて、心に殘るものはありませぬゆゑ、常に見る物聞く物に對して、充分に注意する習慣と、心にとまつた事柄に對して、深く考へて見る習慣を養ふ樣にしなければならぬといふ事は、前號にも一寸記して置きましたが、かくの如く、常に自分の意志をもつて、まづわが心を注意深くし、考へ深くすることが、よく活動するものに、私共の心を訓鍊する最初の方法てしかも最も大切なことて御座います。けれ共唯これ丈ては、本當に完全な活動の出來る樣に私共の心を訓鍊する事が出來ません。

學問の必要はこゝにあり

即ち私共の學問を修めねばならぬ理由の一つはこゝにあるので御座います。まづ學校て習ふ學科が、どういう風に、私共の心の働きをよくするかといふことを、最も分り安き數學に就て云つて見ますなら、こゝに一つの算術の問題があります。私共は一生懸命考へて、自分てはこれて落度がないと思つても、若しも何所かに少しの考へ違ひか、又は考へ洩した所、或は一寸した不注意のために、運算の一ヶ所ても違へましたなら、どうしても正確な答を得る事が出來ません。そのために又若し一度自分の思ひ違ひが何所にあるか、考へ洩しが何處にあるかと穿鑿して、正確を得るまては、幾度ても考へ直さねばなりません。この樣な事が度重なる間に、知らず〳〵私共の心が追々正確に物を考へることの出來る樣に、又若しも落度があつても、直にそれと氣附く樣に訓鍊されるので御座います。さうして又込み入つた事に對しても、倦まず撓まず、解決のつく迄は物を考へるといふ、根氣を養ふことが出來るのです。數學ばかりてなく、作文にしても習字にしても、すべて樣々の工夫を積んて、それ〳〵の學科に上達する間には、自らその陰に、それ〳〵心の訓鍊が含まれてゐるのです。

かくして私共の日常の生活に、幾何も代數もいらぬ

樣でも、幾何や代數を稽古をすることによつて正確にされた頭腦は、日に〳〵起り來る種々の問題の上に働いて、誤り少き判斷を下すことが出來、どんなにか身の爲になつて居ります。女に學問などは不必要だ、料理に裁縫でも出來て手紙位書ければよいなどといふことの、如何に淺薄な考へであるかゞ、この一事でも知れませう。皆樣も日々學校に通ふのは、試驗々々の關門を通りこし、何々學校の卒業といふ看板を得るためてはなく、すべての學科を最も眞面目に勉强して、わが生涯の幸福のためによき頭腦の基礎を据えるのてあると思ひ、充分熱心につとめねばなりません。

考へるすべを知らぬ人々

女中を遣つて見ましても、小學校へも三四年しか行かないといふ樣な娘には、殆ど物を考へるといふ樣なこと、順序正しく物事を心にとめるといふ樣な習慣は少しも出來て居りませぬゆゑ、料理の仕方を敎へても、使ひの口上をいひつけても、始終ぬかる事ばかりて御座いますが、兎に角小學校でも成蹟よく卒業したといふ娘でも御座いますと、餘程物事を呑み込むすべを知つてゐますので、大層役にたちます。

又私共は此頃鎌倉に住んで居りますので、土地の農家の人々などにも、少しづゝ知合ひが出來ました。彼の人たちは晴れたる日には野に働き、雨降る日には戸内の勞役に鞅掌して、なか〳〵に幸福な生活を致して居ります。しかも一度その人々の家庭に、一寸でも込み入つた問題が起つて來ると、殆ど何處から考へて行つてよいのか、その見當すらもつかぬと見えて、唯茫然として、手も足も出ぬといふ樣な有樣に陷つて仕舞ひます。物を考へるすべを知らない人といふものは、實に氣の毒なものだと、つく〲思ふ事が御座います。

數學に就いて

數學などといふ學科は、殊に種々なる場合に當りて、込み入るれ中より、まづ考への正當なる緒を見出し、次々と洩れなく順序正しく、かつ正確に物を考へる習

慣を養ふために、何よりも適當な學科でありますゆゑ、例の女に幾何や代數はいらないなどといふ、分らぬ考を持つことなしに、熱心に學ばねばならぬもので御座います。數學に不同だとか、數學ぎらひとかいふ人は、何れも規則正しく、かつ忍耐深く物を推究することの出來ない性質の人であります。この樣な人は、自分の頭腦の藥だといふ氣になつて、つとめて數學に、その弱き頭腦を鍊らなければなりません。

かくの如くにして兎に角、正則に働き得る頭腦の基礎が据えられるのであります。活ける人生のことは、數學の問題のやうに、ジッとしては居りません。從つて教場で出來た頭腦は、いま一際の修鍊を經なければ、直に充分の役に立つ譯には參りませぬけれど、楷書から習つて行かなければ、本當の草書は出來ない樣に、まわり遠い樣でも、正式に拵へ上げたのでなければ、本當のよい頭腦にはならないと思ひます。

智惠のたねは何所にあるか

以上は心の働きを訓鍊するための方法でありますが、次に考ふべきことは我々の心の本體を養ひて、善良にして聰明なるものにする所の智識のたねは何所にあるかといふことで御座います。

智惠の種は何所にあるかと一概にいひますならば、人間世界到る所として、智惠の種の隱れて居らぬ所はありません。しかし私共の智惠を吸收する力には大凡の限あり、又人々の性質、境遇並に年齢等によりて、割合に不必要なる智識、又は危險なる智識、或は多くの解し得べからざる智識もありますゆゑ、私共は心して危險なる智識に遠かり、又割合に不必要なる智識を避けて、出來る限り各々のために、價値ある貴き智識を得る樣につとめねばなりません。即ち廣き意味に於ていへば、何所にても智惠のたねのない所はありませぬ。けれど以上の如き私共の事情のもとに、出來るだけよき智識を吸收し樣といふのには、自ら何處に最も澤山に、その智識のたねがあるかといふ樣に考へて見なければなりますまい。

まづ己れの周圍を知るべし

誰れにしても、自分に直接に最も入用な智識は、己が身ほとり近き所にあります。農家の娘と生れたならば、まづ農家といふものをよく知らなければなりません。田舍に生れたならば、まづ田舍を知らなければなりません。惣菜料理を研究しないで、金團だの蒸し物だのと縁遠いものに一生懸命になる樣に、自分の身のまわりのことを眞面目に頭に入れ樣とはせず、先ばかり見てゐる樣なものて、何の役にも立たない丈ならばまだしもてありますが、遂に身を誤つて仕舞ひます。どんな境遇にある人ても、決して自分の境遇をつまらぬなどゝ思ひ捨てゝ仕舞はずに、眞面目にその境遇に對する義務を果しつゝ、進歩して行かなければなりません。わが境遇に對する義務に忠實てあるのは、やがて現在の自分として、己れ自らの身のまわりに就て、知らねばならぬ智識を得る所以なのてあります。

若き人々の中にはやゝもすれば、現在の自分の境遇などには知るべきことも學ぶべきこともないとして、わが眼のあたりの立場に對する義務を怠り、只管空想にのみ走る樣なこともありますけれど、手元の一針を運ばずして、一枚の着物の縫ひ上る譯のないのと同じこと、己が身のまわりにある智識よりして、集めてかゝるのてなければ、本當の役に立つ頭腦は出來ません。現在を輕んじ、わが境遇をつまらぬとのみ思ふ人は、深く省ねばならぬ事と思ひます。

高き思想に觸れよ

現在のわが境遇に對する義務を眞面目に忠實に果しつゝ、自らわが身のまわりの事を知るのは、以上の如くまづ、第一に役に立つよき頭腦をつくるために、大切なことて御座います。しかもわが身のまわりのことさへしてゐれば、さうしてそれが分つてゐれば、其外には何のなすべき事、知るべき事もないのかといゝますと、勿論さうてはありません。

すべて私共の現在に於て接觸しつゝある社會、人事

より得る智識は、多く餘りに眼前的に、又卑俗に偏し
て高尚にして遠大なる教訓に全じきもので御座いま
す。例は常に誠實なる心を以て、世のために働く人に
して、却て社會より歡迎せられず、寧ろ名利のために、
巧に事をはかる人の却て世間にもて囃やさるゝ如き、
實例は、いづれの世に於ても、甚だ澤山にあることで
御座います。かゝる眼前の事實ばかりを見て居ります
と、自ら正直を守るのが、愚しいとやうな氣にもなり、
また世間には己の如く隣を愛したいものだと心掛ける
人よりも、樣々の手段によつて、少しでも多く得手勝
手を通さうとする人の方が多いので、その中に交つて
居る自分も、知らず〳〵その樣な氣になつて、人とい
ふものはこの樣なものだと思つてしまふ樣なことにな
ります。正しき道理を覺り、高尙なる智識に照されて、
眞に入たる甲斐のある、榮えある生涯を送らうとする
のには、是非共すぐれたる人々の淸らかなる思想にふ
れ、或はその奧深き智識を味ひて、眞實に立派なる己
が心の養ひとなさねばなりません。さうしてこの樣な
ことは何によつて出來るかといひますならば、矢張り
學問の力によるより外はないので御座います。學問と
いへば、大層むづかしく聞えますが、次號には「誰に
ても出來るよき學問のしかた」と題する御話を掲げ、
このよき頭腦をつくる工夫といふむづかしき問題の說
き明かしを終りたいと思ひます。

うめくさ

▲女子といふものを抽象して冥想する時は深く神秘的の意味に接觸す。眼前に現れたる女子を見る時は、萬事平凡に歸す、玆に於てか女子は男子の好奇心の犧牲となる時に於てのみ神秘にして、每には第二流の者たることを知る、少くとも男子に比較して、第一流の人間が女子に稀なることは確かなる事實なり。

▲女子には考へちがひ、感じちがひする者甚だ多し、其はきちがひをはきちがひのまゝに行ひ、且語るが故に、女子の信用を失ふなり。女子が一人前として世の中に立つべき第一條件として、先づ言責の重んずべきことを警告す、今の女子は言語を使ふ方法すら未だ男子に及ばざるなり。

▲甘んじて一家の犧牲となる女はあれど、甘んじて一世の犧牲となる女は少し。一世の犧牲となる覺悟ならば女子も亦藝術家たるを得べし、前後左右を顧みて進まんとすれば、女子は到底事業を爲すべくもあらず、初めより爲さゞるは可なり、爲さんと欲して躊躇疑滞悶々にして靑春の血を涸らす者は遂に救ふべからざるなり

（K）

最初の接吻

永井荷風

嵐が出窓の上に置いた薔薇の木を揉んで、ゆすり上げて、吹倒してしまつた。美しい女の口のやうに其の花の昨日は色濃くも咲き誇つて居たに、今日は恰も、衰へた女優が唇のやう、貧血質の青味を帶びた紅の色を示してゐる。と見れば、悲愁の風は忽ち吾が魂をゆすつて胸の底に吹き通ひ、色は褪せて萎れたまゝに殘つてゐる吾が思出の夢をも吹き拂はうとする。私が今突然遠く遠く、過去を隔て空間に遮られて、美しい墓場の日當りのよい柳の下に眠つてゐるあの小さな墳墓を忘れまいとしたのも此の爲めであつた。かの若い娘の墳墓は、いつも私が愁に沈む時、私の心が巣を喰ふ汚れのない柔かな古巣と云つてもよい。眠れ、少女よ。狭くして美しい柩の中に其の身を少し片寄せて、わが爲めに吾が横はる空間を作れ。私はおん身が永久の眠を辱しめる恐しい腐敗を思ふ事が出來ない。蒼白い、年紀も行かぬおん身の身躰、雪と夢とでつくられた天使のやうな其の肉は、醜惡不淨が生ずるには、あまりに麗しく、あまりに無垢ではないか。おん身は思ふに少しは衰へやつれたであらうが、然し、そは聖典の頁の間に、枯れ萎れても留むる薫りに、猶一層ゆかしさを添へる其の花に等しい。もし、柩の板を隔てゝ、おん身が身のまはり、おん身が身の上に、何物かゞ湧き出るとするならば、其れは世の常の墓場に湧く厭はしい虫ではなくて、緑に、紅に、白く或は青く、翼打ち顫はす新しい蝶であらう。其の蝶は永遠汚されざるおん身の死したる美から發生したものではなく、おん身が魂と見るべき Psyché（愛の女神）が飛びつゝ散らす不思議なる黄金の花粉の、其の一粒一粒から生れたも

のであらう。

忘れはせまい。おん身は今眠つてゐるけれど、死んだのでない、唯だ夢みてゐるのであれば、覺えてゐやう、忘れはせまい。

私とおん身、二人は或朝非常に早く起きた事があつた。夜はまだ明けず、東雲は灰色に、薔薇色付いてゐた。次第に明くなつて行く弱い光のやうに、私達二人はまだ年も若い時分の事なので、模糊たる二人の心の中には、丁度人生の夜明けの微光に例ふべく、薄絹で作られたやうな、纖弱い、優しい、物に怯ぢ易い、亂れがちな幽愁が宿つてゐた。即ち初戀の思ひである。二人はまだ窓の扉も入口の戸も閉したまゝの低い人家の間をば、コートパヴェーの坂道を昇つて行き、彼方此方に白楊樹の立つてゐる平野の面に出ると、太陽は黄金の火と紅の血で地平線を色取つてゐた。生活は今やゆらめく光と共に目覺める處で、見渡すかぎりの廣い眺めは愉快なものであつた。夜は靜に明ける、風は霧を拂ふ、熟した玉蜀黍が響をたてゝ戰ぐ、中空高く劍の閃く如く輝いて、駒鳥が鋭く澄んだ羽音と共に飛立つ。私の心もそれと同じやう亦愉快であつた。おん身が私に約束した接吻を思うて。

おん身はその前夜、細目にあけた戸のすきから、「今夜あなたは眞個におとなしくッて、お母さんの居る前でぢろ〳〵私の顏を見なかつたし、其れに又、惡戲をして私の髮のリボンを取らうともせず、私がフィールトの小夜曲を彈かうとて手から脫いだ手袋を隱さうともしなかつた。其れ故、私もおとなしくして、あなたが先から望んで居た接吻を上げませう。然し坐敷の引幕の後や、庭の隅ではいけない。誰も人の見ない淋しい淋しい處でなければ、私はもし接吻してゐる處を見られてもしたら、もう恥しくつて生きては居られませんから。」と云つた。

さてこそ、私達二人は夜明けの光の中に何處ぞ淋しい處をと搜しながら行くのである。年若い私の望みは次第に激して、まだ味つた事はないけれど、おん身の

脣とおん身の頰といづれが味深いであらうと、そんな事を考へながら、おん身の顏を打目戍つた。その選ぶべき瞬間は迫つてゐる。あゝ、おん身が脣か、おん身の頰か。

もう此處でよい。そう遠くまで行く事もあるまい。見渡す一筋道には人の影もない。鶴嘴を肩にして野の中を溝に添うて歩いて行く日雇人の麥藁帽も見えない。畠の畦にかゞんで小石を拾つて捨る農婦の白い髮かざりも見えない。「よござんすか。」と私は顫へながら訊くと、おん身は猶更烈しく顫へて、「こんな明い、こんな廣い處では、空一面が見てゐるぢやありませんか。」と答へた。無理にとは强ひられぬ。亂れる心の私も、わが最初の接吻を試みるには、沈んで、隱れて、包まれて、自然と接吻したくなるやうな、何處ぞ木の葉の繁つた靜かな薄暗い片隅を望んだのであつた。野の眞中の、非常に低く凹んだ底に、ペアルネーズと呼ぶ泉が、姿やさしく傾いた柳の陰に小い湖をなしてゐる。この澄んだ水のほとり、木の葉潤ふ穴の中こそ、誰一人わたし達を見るものはあるまい。「ペアルネーズの泉に行かう。」すると、おん身は吐息を漏し顏を眞赤にして、「えゝ、それぢや……。」と答へた。あゝ、われに許す接吻の、おん身に取つては如何に耻しかつたのであらう！　二人して水のほとりに行つた時、私はおん身の手を握つて、ぢつと近く、いつまでもおん身の顏を見詰めてゐた。紅の脣に眞白な花のやう、鮮なおん身の面は、珊瑚の心をもつてゐる野菊の花にも例へたかつた。あゝ、一ツの口、兩の頰、兩の眼をもつてゐながらに、おん身は何とて二度三度、四度も五度も、接吻の數をば約束しなかつたのか。猶もぢつと打眺め、私はだん〲顏を近づけると、おん身は顏を外向けやうとする。約束を守らぬのか、あんまり情ないぢやないか——已に私はおん身の脣より漏れる呼吸を吸ひ込んだが、その時元氣よく野飼ひの歌うたふ若い女達の騷しい聲が聞えた。物洗ふ町外の女供がどや〲と、柳の木陰に白布を洗ひにやつて來た。おん身は早くも逃れ去つて、湖からは遠く〲、ドミニカン派の尼寺

の裏手、檞の樹と欝金香の樹の交つて生えてゐる森中の空地て、私はやつとの事、呼吸もせはしく、髮も亂れて、眞赤になつてゐるおん身に追付き得たのてあつた、この度こそはもう逃すまい。恐ろしさのあまり厭がるのを、無理に引寄せて、唇を近付けて、あゝ吾が接吻の初花、私はそれをば手折らうとすると、又しても、眞白な着物を着た髯の長い僧侶が一人、



そろ〳〵と森の空地を通つて行つた。

然し、私達二人は遂に人のゐない適當な場所を搜し當てた。夏中はわづかな水の流れに過ぎぬが、冬には急流に變ずる綠色なす小川のほとり、木の枝、木の皮のアーチをなした掛橋の傍に、松の繁りと綠の木の葉に蔽はれて、何處からも見られる恐れなく、荒い鳥の巢にも等しく、青苔の上に腰さへかけられる凹

んだ岩がある。私はもう聞く耳を持たなかつた。おん身は徒に、「橋の方から誰れか下りて來るかも知れないから。」と云ふのを、私は最初の接吻の望みの、今遂げられる嬉しさに狂氣して、ひしとおん身を抱き、勝ち誇つて其の唇をひたと合す。

おん身は突然あれと叫んだ。

橋の上に佇んで、一人の男がこなたを見遣つたゐたのである。確かに二人が接吻した處を見たに違ひない。男は嘲けるやうな樣子て、猶もぢつと私達の方を見詰めてゐる。私達の顏も見知つて居り、其の名をも知つてゐる此の土地のものであらう。あゝ、どうしやう。世間の人は私達の接吻した事を聞知つて大笑ひするてあらう。おん身の母上は何と云はれるてあらう。然し、其の辛さより猶辛いのは、橋を渡つて家へ歸るには、一本道の止むを得ず、いやでも彼の男の前を通らねばならぬ事てあつた。男は依然として、猶更ぢッと此方を目成り、更に立去る樣子もない。おん身は兩手に顏を蔽うて、咽びつゝ泣き沈むので、私は胸も張り裂けるばかり、どうする事も、何と云出す言葉も知らない。おん身も早や云ひ慰められやうとはせず、すつかり、私を嫌つてしまつた。無理はない、何も彼も私の罪てある。强ひて接吻なぞしやうと思はなかつたら、こんな事にはならなかつたのだ。私はもう二度と再び、今日も明日も永久に、おん身に接吻する事は出來まい。おん身はもう私を愛せず、私には口もきくまい。おん身が家の窓下を通つても、其の扉の半ば私に開くものは、最早やおん身が室の窓てはなからう。おん身は猶泣き止まぬ。其の心根を思ひやつて私は悲しく、一層川の中に身を投げやうかと思つた。

其の時、おん身は重々しい調子て、「歸りませう。何と云つたつてもう仕樣がありません。あの男の前を通つて行きませう。」と云ふ。

絶望の首を垂れて、私はおん身の後に從つて行つた。

やがて二人して、猶もぢつと動かずに立つてゐる男の傍まて歩いて來ると、おん身は突然笑出して、私にもたれて、私が心の行くかぎり盛に接吻させて呉れた。

私達の足音を聞きつけて、其の男は物乞ひするブリキ製の小箱を振り動して、がら〳〵銅貨の音をさせながら、老ひたる顫聲で「どうぞ施んでやつて下さい。かわいさうな盲目で御在ます。」

こんな無邪氣な昔語りをする中に、暴風の雲は消去つて、日の光かゞやく明い出窓に、木の葉は綠色に又黄金色になると、伸び上つた薔薇の枝先に、一輪の花がまだ消えぬ水玉を一ぱいに含んで、美しい唇のやうに開く。私の心も亦うれしく浮き立つた。あゝ、蘇生る花のほとりに、雨の一滴を吸はうとする空飛ぶ小鳥の心はどんなであらう。

（カチユール、マンデス原作）

文字に傳へがたき東京の空氣

河井醉茗

空氣が異ふ

東京は一國の首都です、地域の廣いことや、人間の多いことは言ふまでもない、此の活動せる東京の樣子を地方の人は何うして知るかと云ふに、東京で發行される新聞雜誌乃至新刊もの、東京で催ふされる集會或は演說、是等が迅速なる交通機關に依りて、全國に傳播され、瞬く間に東京の樣子が分ると云ふことになつてゐます。處が實際、地方の人は居ながらにして東京の樣子を知悉すかと云ふに決して然うでない、それは流行の結髮の形とか、言語とか云ふやうなものは早く東京の模倣が出來るに相違ない、斯う云ふ物質上の東京化は早いけれど、精神上のことになると、何うしても地方の方が後れてゐます。早い話が文學家で成功したいと思ふ人でも、地方に居たのでは何うしても成功が出來ません、地方で修養して、文學の大家になつた人は未だ一人もありません、眞に文學をやらうと云ふには何うしても、斯うしても東京に出ねばならぬと斷言してもよろしい。東京の新聞も見る、東京の雜誌も見る、作物も見る、講義錄も

見る、それて何うして地方に居て眞に成功が出來ないかと疑はしくなりますが、其處が私の言ひたい主眼てありまして、畢竟、地方と東京との空氣が違ふのてす。

空氣と言ひましても、科學上に謂ふ空氣ばかりてはありません、成程天然の空氣も、地方と東京とは違つて居るてせう。けれども、もつと意味のある空氣、都會の精神とても云ひませうか、文字や、動作ばかりては表はすことのてきない復雜した、混沌たる雰圍氣、形に表はせない光線のやうなものが東京を包んてゐます、それは結構なものてあるか、それとも有害なものてあるか、或は甘いものてあるか、或は色のついたものてあるか、其等は到底一々言明し、解剖することは出來ませんけれど、其色彩の一つ、其光波の一筋ても諸嬢に分ることが出來たら可いと思ひまして、此處に一言を述べるのてす。

和光同塵

光を和し塵に同ずと云ふ語が佛教の方にありますが、都會に住むには斯う云ふ心持もするやうてす、淸濁併呑と云つたやうな理由て、恰當是が都會の空氣と同じことてす、田舍の淸新な空氣を吸ふてゐるものは、都會の空氣の濁つてゐるのに驚くだらうと思ひます。

嘗て常陸の詩人、橫瀨夜雨君が東京に參りました時、車に乘つて市街を廻りましたが、君は何を感じたかと聞きましたら、食物屋の臭い、殊に天麩羅や、蒲燒の臭ひが鼻について堪らなく嫌な氣持がすると云ひました。成程常陸平のひろ〳〵とした野の香に活きて居る人は、動物の脂肪の臭ひや、果實の腐りかゝつた臭ひなどは嫌に感じるだらうと思ひました。併し我等は其天麩羅屋の臭ひも、鰻屋の臭ひも、一向嫌なものに感じない許りか、平然て食に行きます。

二百萬の人間が吐く呼吸だけても東京の空氣は濁るべき筈てす、病人もあらうし、醉漢もあらうし、男も女も種々雜多の人間が東京の空氣に呼吸して居ますから、混濁してゐるに相違ありません。そればかりてなく烟筒から吐出す石炭の烟、汽車の烟、風に舞ふ砂烟、物の粉碎、黴菌、塵埃、カンテラの炎など幾百種あるか殆んど數へ切れないばかりの汚れた、毒々しい、恐るべき分子が飛散してゐるのてす、之が嫌だと云へば我等は東京に住むことは出來ないのてす。然るに我等は面白いことがあれば大群集の中ても關はず出掛けてゆきます、何十人と混雜つた電車の中にも割込まうと

します、或る意味に於ては東京生活は大冒險を行つてゐるのてす。

肉體の上だけても以上のやうな混濁に浴してゐますが、更に精神上に於ても之に異らぬ混濁に交つてゐるのてす、それて逃出さないと云ふのは何う云ふ理由てせうか。

統一されたる都會思想

玆に平凡な都會に於ける誘惑説や罪惡論を避けやうと思ひます、多數の劣等なる人間が、自信のない爲に忽ち都會の犧牲となり、飼食となり、其血を吸收されて了うのは餘儀ないことて、成程其人達の爲には都會へ足ぶみしない方が安全てせう、只飽までも人生の爲に、或は自分の爲に、價値ある世界を見出して、意義ある生活、生甲斐ある段階に上らうとする少數の人達の爲に、都會の眞相を傳へたいと思ひます。

新聞雜誌の上に現れてゐる東京の言論は甚だ不統一てす、作物の批評にしても甲者の褒める點と、乙者の褒める點とは、甚しき相違があります、主義を標榜するにしても、甲者の云ふ處が是か、乙者の云ふ處が非か、一寸迷はれるのてす、輿論の上ては甲者が是となり、乙者が非と云はれて居るやうても、眞相は果して然うてあるか、何うか、之を判斷することがむつかしい。女子問題にしても然うてす、人に由りて見解を異にしてゐる、此異にした見解を其まゝ新聞雜誌に於て傳へるから勢ひ不統一になる、不統一は當然てすが、偖て之を統一した確信が根抵にないと、不統一の意見に動かされます、東京に居れば先づ動かされることなく、此は彼の人の意見、彼は此の人の意見と、比較することが出來、其上に統一したる時代思想をのみこんて居ますから、自己の確信を動かすやうなことがないのてす。

地方に居ると此統一され、沈澱された時代の思潮を識ることは甚だ困難てす、能く知つて居るやうても、文字の上の知識に止まつて、株守することが深いだけ頑固になり易く、時勢に後れやすいのてす。統一されないと云ふのは、或る意味に於て比較判斷の知識に乏しいことゝなる。輪廓だけが分つても距離が分らないとか、距離が分つても、色相が分らないとか、要するに根本の知識に缺乏、空隙があるから、正當なる解釋が出來なくなるのてす。

刻々に起つて來る事實、事實に對する諸家の評論が

如何に多く文字に上つても、一々に是に正當なる判斷を下すと云ふことは、甚だ煩しい仕事で、多くは解決がつかずに了う、東京の人は各個人が對話の上でも簡易に解決はついてゆくが、地方の人はさう〳〵達識ばかり集つてゐないから、何うしても獨斷な解釋に終るのです。

事前の動搖

獨斷に伴ふものは空想です、空想の實現と云ふことも地方の人に盛んなやうで、東京に憧憬を持つてゐる多數の青年男女は、單に其結果ばかりを見て、直覺的に成功を夢み、誤られたる自信の結果、其人、其事を直ちに自分に比較して、餘り遠くも距つて居ないやうに思ふ。

これも一例ですが、或る遠い地方の一青年が私に手紙を寄送して、自分は東京に出たい、出たいけれど學資がないから何とか方法を講じて自活してみやうと思ふ、自分は不才だけれど、見た處ではT――雜誌の編輯位なら自分にも出來やうと思ふから一つ先生の御周旋を願ふと云ふやうな文句でした。此のT――雜誌と云ふのは有名な書肆から發行されて居る中學程度の雜誌で、私等が見ても人知れぬ骨折があらうと思はれるのです、地方に居て未だ二十歲内外の靑年が、自分でも編輯が出來るとは其自信……と云ふより寧ろ虛傲に呆れたのでした。

いつも結果ばかり見てゐるから、一つの雜誌が出來上るまでには、何れ位の骨折が要ると云ふことは想像がつかないのでせう。創作などでも之と同じことで、ナニ此れ位の作物なら自分にだつて出來ると思つて了う、然う云ふ人に限つて摸倣をやる、始終摸倣ばかりで自分の立脚地と云ふものをよう造らない。一つの作品を成遂げるまでには、皆相當に苦勞をしてゐるので、其準備が如何にして整へられつゝあるかと云ふことは必ずしも文字に現れないから、地方の人の氣附かないのも當然です。

なほ異つた例で云へば、自然主義の運動だつて然うです、花袋君の『蒲團』が現れ、『早稻田文學』の評論が盛んになつてから初めて自然主義と云ふことも世の中に知られたやうです。實際は其等の作物や、其等の評論が世の中に出るずッと以前から、自然主義と謂ふ語もあり、又自然主義は何う云ふ形式で日本の文壇に打て出るだらうかと云ふことも唱へられてゐたので

す、只文字の上に現れた場合が極く少かつたので一般に心づかなかつたのですけれど、文壇の一部では少くも運動の起る四五年前から問題になつてゐたのです。

又、例の口語詩ですが、あれも詩壇の問題となり、傾向となつたのは一兩年のことですけれど、言文一致の詩の起らなければならぬと云ふことは、斯道にたづさはるものが皆注意して居たので、より〳〵其話をしてゐたのです、口語詩となつて現れる前二三年



間の宿題でした、恐らく地方の青年詩人は豫知しなかつたと云つても差支はありますまい。斯う云ふ風に一つの大いなる運動の起る前に、先づ東京の空氣は一種暗默の裡に動搖を來すのです。

創作を見よ

新舊思想の衝突などは却つて地方に多からうと思ひます、東京では舊思想が新思想に壓倒されて居るので、殊に青年中心に見る時は新思想の大旋渦です、自由を叫び、破壞を喜び、

解放を讃ふる間には危險な分子、突飛な分子もありて、甚だ不健全、不穩當のやうに見えますけれど、人類の向上、理想の生活は是等の元氣の間から生れるのです。抑へやうとして、抑へることの出來ない元氣です、此意氣ある青年の中の眞面目な分子が、常に何事か新しい企てを試みてゐるので、彼等の行動は文字に現すべき舞臺がない、只口より口に傳へられてゐるので、確に傾聽に値すべきものであるけれど、社會は毎に其水平を保つが爲に過激な言論は埋伏されてゐます、過激てないまでも青年の言論には、意氣ばかりあつて、條理が立たぬから人の前で公に言ふことが出來ない。併し、條理は立たなくても、此意氣は愛せずに居られないのです。

　地方から眺めると、東京の男女學生と稱ふものが、甚しく墮落してゐるやうに見えます、事實の眞相は却つて地方に墮落者が多いかと私は考へます、日に二人や三人の墮落者の名が新聞に上つたとて、直ちに東京全體の學生を律することは出來ませぬ。

　東京の學生は男でも女でも墮落のつまらないことを位は知つてゐます、私は寧ろ着實を粧ひ、眞面目を衒ひ、生活の苦痛を唱へる僞健實者の怜悧を恐れて居る位です。甘つたるい戀に醉ふやうな女も男も段々少くなつてゆくやうで、理性の發達が進んでゆくだけ、皆相當の自覺と自信を持つてゐるので、田舍の少女が一寸男子に握手されて、顏を潮紅するやうなのとは同日に語れません。多少自信のある女子なら、男子は如何にして誘惑するか位は直ちに看破し得るので、迂かり其手には乘ないよと澄し込んで居ると云ふ態度が見えます、無教育なる下等社會の女こそ彼等の犠牲になるので、其反對に覺めたる女の增加しつゝあるのは事實です。此等の眞面目なる女學生の生活狀態は比較的傳へられず、矢張二三の犠牲者の行動が事細かに社會に發表されて、地方の好奇心あるものを動かすものですから、東京が墮落の府のやうに見えるのです。

　偖て餘り話が永くなるやうですから一先づ此位に止めて置いて、此文字に傳へがたき東京の空氣と云ふのは何んなものか、抽象的の議論でなく、具體的に知りたいと思ふ方々の爲に參考に申ますが、それは詩歌又は小說などの創作に氣をつけて居れば、自然に會得する場合が多いのです、此頃の創作には地方色の出てゐるものもありますけれど、多くは都會中心の思想ですから、それこそ議論も何もなしに、有りの儘の都會

の色とか光とかゞ表はされてゐます。之を心讀すれば新思想に觸れることが多い、創作は毎に新しい途を拓いて行かうとするものです。文藝の權威が至上であると云ふのも其處から出發してゐるので、勿論くだらぬ似而非なる創作もありますけれど、有力なる、根抵ある創作は是非氣を附けて讀まねばなりません。

小說を讀むには批評眼を養へ

成女高等女學校長　宮田修

青年男女に小說を讀ませては惡いと云ふのは、まづ一般敎育者の口にする處であるが、私は是れと聊か看方を異にするので、敎育の上から云つても、小說を讀ませる事は惡くないと云ふ考へを持て居ます。學校で敎へる事は、判て押した樣な事で、もとより是れは有益であつても害の有る筈は無いのでありますが、生活が復雜になるにつけ、敎育も亦複雜になる、其處で時の勢ひは敎科書丈けでは間に合はない事にならしめる、若し敎科書丈けが極めた世の中なら兎も角ながら、實際人間の生活の模樣が、どんなものかと云ふ事を知る必要は十分にある。

又生徒に於いても、既に讀書趣味を有する限りは、蠟を咬むやうなものよりも、其脚色に委曲のある、美しい文辭に依て綴られた書を要求するは、實に壓する事の出來ない要求であります、故に敎師が幾ら讀んでは惡るいと云つても駄目なんで、表面ではそれが綺麗に出來ても、却て隱れて讀むと云ふやうな、犯罪者を裏面に生ずる事になるので、それよりも犯罪者を出さなくする方法を採らねばならぬ事と思ひます。

加之、小說を以て敎育すると云ふ方針は、歐洲に於いても既に執て居るところで、或はロビンソンの漂流記を讀むとかガルバリーの紀行を讀むとか、アンク

ルトムのケビンを讀むとか云ふ事は、父兄たるものも許るし學校でも許るして居る、日本でも新井白石の如き博覧强記の學者とならしめたと云ふ、其勉强はどうかと云ふに、其父が四書五經ばかりで無く、其の他自分の力で讀めるもの、即ち太平記とか源平盛衰記とか假名交りのものを隨意に讀ませた、其うちに趣味を感じる、隨つて慾も付く、其結果は八宗兼學と云ふ大學者になつたのであつた、斯の如き例を引いて見るも、小説を讀むことは惡くない。

しかし次に起るのは、如何にして讀ませる乎、如何にして讀む乎と云ふ、これが問題なんで、讀み方さへ適當ならば決して有害なものでは無くむしろ奬めて可なるものだらうと思ふ、何分思想の未だ定まらざるものに刺戟の强きものを讀ませるならば、兎に角其影響するところは甚しい、かのシルレルのヂイ、ロイベル(群盗)がライプチッヒで出た時、間も無く其の邊の少年が居なくなつた、何處へ行つたかと思うて見ると、或る片ほとりの森に行て、手近く云へば東京などの惡書生の、バクリとか云ふ不良少年組の黨を結んで居たことが分つた、それでヂー、ロイベルは發賣禁止になつた事がある。近くは自然主義の小説の爲め、學校の成蹟が惡くなつたと云ふ樣な事も聞いたが、素より耽つたからではあるが、要は其讀み方如何にあるのです。

此讀み方には種々の相違があつて、或る者は唯脚色を見る、文章などは兎も角、死んだとか生きたとかの筋に氣を揉む、次に筋の變遷よりも文章の上を味ふ、も一つ進むだものは作中の人物を悦んで見る、と云ふのは、其人物の性によく叶つて居るとか云ふ事の爲め、外の事は其方除けにして其れに興味を求める。

以上の三つが弊を生ずるので、筋を讀むと、ライプチッヒに於けるロイベルの如き弊を生ずる、文章の事も惡くは無いが、是れが爲め耽て大事な業を怠る危險は此處にある、此頃或る婦人が若い間に肺病になりたいと、眞面目に考へて居ると云ふ樣な事を話した、何かと云へば「不如歸」の浪子にかぶれて居るので、巻中の人物に對する同情も爰に於いて極まつた、恁かる事

になると、教師なり保護者なりから云へば實に困るので、學校でも小說を遠ざけねばならぬ事になるのであります。

されば如何なる態度で讀めば宜いかと云ふに、小說に現はれた處の事件なるものは、複雜なる此人生を寫したもので、廣い世の中、多い人のうちには、恁う云つた人もあるのだと云ふ批評眼を以て見る事で、さうならば「金色夜叉」にしろ、悉く貫一お宮が居るわけぢや無い、唯廣き世の中には這麼ものも居る、それが日常生活において、どんなに變遷するものかと云ふ經過を鑑賞する意味合で、初めには唯貫一の親切に喜んで何等餘念なかつた處の宮が、黄金の前に其の志を奪はれ、其れが又移つて悔悟の念を起すと云ふ事を、自分を外にして客觀的に見る、是れが出來たならばまづ大丈夫だらうと思ふ。斯の如き態度を以て行くならば、決して小說が誤まると云ふ事はなく、立派な小說を廣く讀み、高尚なる趣味を發達させる者となつて益を受くるものだと云つて差支ない。しかし恁う云ふ事は、その頭腦を作るまでの準備に指導を要するのである、恐るゝ所は堅實なる思想のものが刺戟も多い、故に其年輩とか、身體の狀態とかを斟酌し、精神上に欠陷ある時なぞ注意して遠ざけねばならぬ。

今日の自然派の小說にしろ、はた理想派のにしろ、與へる刺戟は甚しい、指導者は文學的の頭を持つものの任である、私は小說が必らず勸善懲惡でなければならぬと云ふ樣な事は云はぬが、又たゞ大座敷で話しをする樣な生活を、面白半分に挑發される事も困る、つまり眞面目な考へで以て書て貰いたいものである。

（談話）

一風變つた清國の結婚式

東洋婦人協會幹事　清藤秋子

清國の結婚式は一寸變つたところがあつて、いかに其國が儀式を重んずるかと云ふことが覗はれます。先づ婚約が成立つた時は筥の中に玉二個を容れ臺の

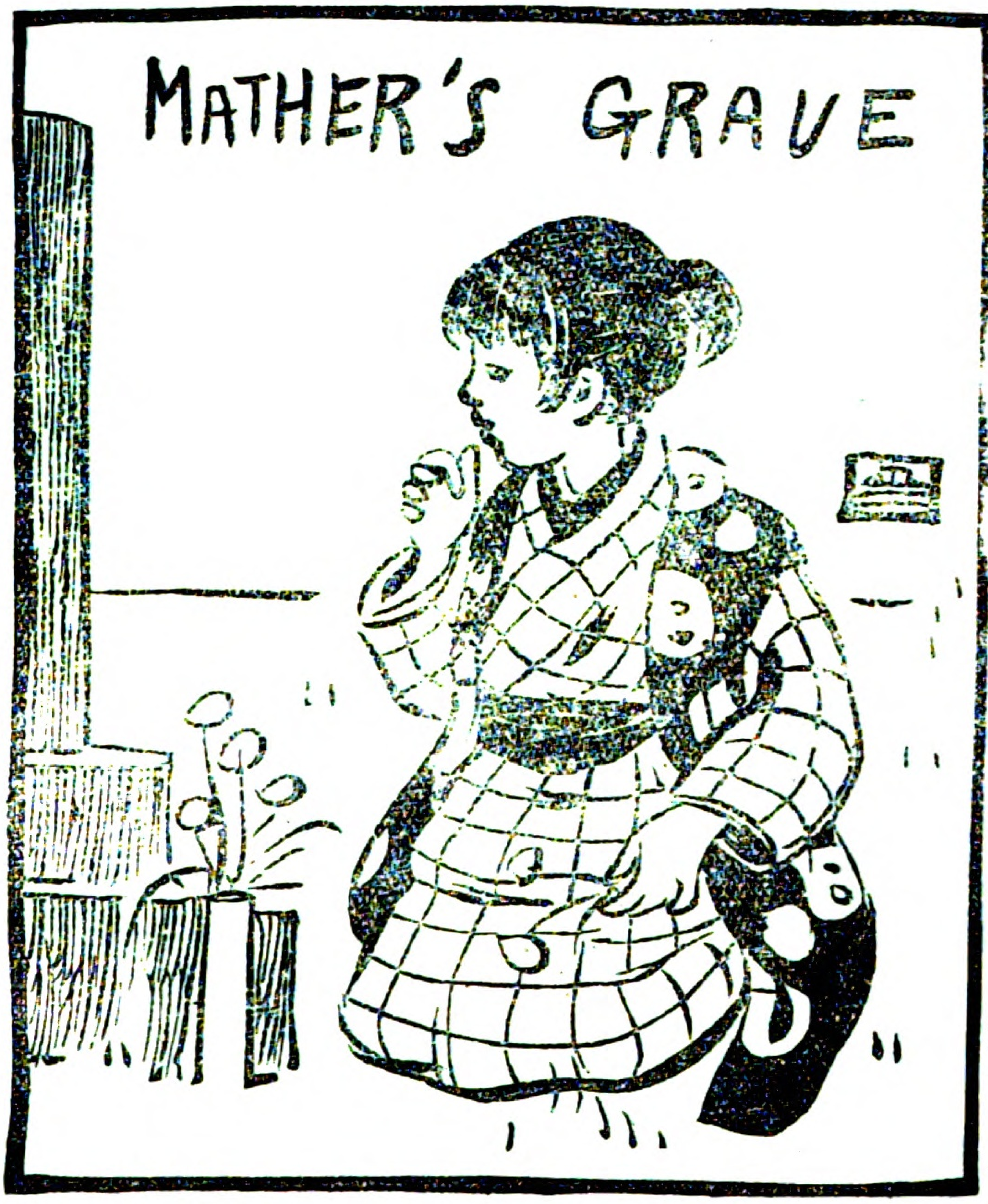
上に載せて贈ります、之に添えて腕輪或は指輪が行きますが、これは身分に依て略されることもある、しかし玉丈けは什麼低い生活の者でも贈るので、云はゞ是れが結納の様なもので媒介者が持參致します。之の返しとしては夜具の切帛と枕いづれも夫婦分參ります、外に添えて豚、羊が生きた儘で四匹づゝ、鵞鳥が四羽、それからお酒が附いて參るのです、尤も是れも添うて行く分は羊や鵞鳥が略されることもあります。

扨て式の前日になると新家一戶分の世帶道具を新婦の方から送ります、又お土產としては菓子と水菓子とを持參してゆくのです。結婚には必らず其爲めに新らしく室を建てることになつて居るのです、私は北京の或る貴族の宅で招待されたことがありますが、その新室なぞは屋根も戶も五色の硝子を嵌めた實に麗しい贅澤なものでした。愈々當日となると、新郎の宅から新郞と媒介人とが轎子を持て迎ひに行く、新郎さんは馬に乘つて行くのです。轎子は緋の鈍子で蔽うた美しい輿で、連れて歸る時は其れを紅白の紐をかけて縛つて來るのです、それから着くと初めて紐を解いて新婦を室に通し、其處で所謂三々九度の盃をする、其場には矢張り新郎新婦と媒介人が居る丈けです、盃が濟むと起て孔子と先祖とを祭つてある齋場に行て、其前で紅白の紐を結ぶのです、これが即ち赤繩を結ぶと云ふわけになるのです、それから叩頭の禮をして式が濟む、次に兩親に會つて挨拶をすると云ふ次第でご座います。

結婚の御披露は翌日から開かれますが、上流の交際の多い方では十日或は七日も續きます、大抵な家でも少くとも三日位は續くでせう、客は新陳代謝で招かれ行く、其披露の御案內の時に、鷄卵の茹てたのや蜜柑銀杏落花生棗、まだ何かありましたが一寸忘れました、そんなものを紙に包むで送るのです、招かれた賓客は行く時に其れを持參するのです、それから前云つた新らしく建てられた家で披露があつてなか〳〵大した御馳走がありますが其席で新婦の紹介と云ふよりも寧ろ夫人の試驗を來賓がするので、新夫人を中央に立てらせて置いて、來賓は八方から或は揶揄たり冷やかした

り、笑はさうとして挑發したりさま〴〵試みるのです、それて招かれた時に持參した銀杏や棗や金柑を口々に囃やし立てると共に花嫁を目掛けて八方から投げかけるのです、其れに對して少しも笑はず顔色も變へず泰然自若として居たものは、實に賢夫人と云ふ名譽を荷ふのですが、若し怺へ切れずして笑ふとか、泣くとか、或は顔を反けたり取亂した風を見せたりする時は、辛抱の無い者だとなつて輕蔑を受ける、それが爲めに甚しきは離縁となるものがある、離縁にならないまでも怺まれるのてあります。恁う云ふ事が習慣になつて居るから、嫁さんも辛抱すべきもんだとして居ますし、新郎も兩親も亦その試驗の好成績を希ふ以外に何も怪しむところもないやうです。

同國は一夫多妻の習慣はありますが、から云ふ四角張つた儀式は最初の正妻の時丈けて、あとは金錢で買つた妾てあります、尤も本妻が死んでから三人までは妾を正妻に直すことが出來ますけれども、第三のが死ぬと最う本妻に直すことは出來ないことになつて居ります。婦の嫁ぐ年齡は大抵十代で、ま



づ十八九が普通の樣です、清國は男尊女卑とか云ひますが必らずしもさうでは無いのです、――尤も男女同權とか女尊男卑とか云ふことになつても其意味の取り樣では如何と一概にも云へない樣なもので――一人の夫に多くの妻があると何か諍ひも出來る、それらの間に立て男子は又苦勞もする樣で、女が打つても引搔いても男子は決して手を下してはならぬ、若し怒つて打つやうな事でもするとその男は卑怯者として威信を落すと云ふことで、家庭では女の權力が隨分强いらしいのです。

一躰支那と云ふ國は妙な國で、東洋であつて西洋に通ふたところがある、西洋人が日本に來て生活するのに不自由がりますが、支那では一向そんな事もないやうです、國の習慣なぞはどれが宜いか惡いかは一寸言ふことも出來ません。（談話）

婦人に確信を持たせたい

興風女塾長
米國文學士　田添幸枝

私は九年間米國に居りまして、歸朝後十年程長崎で働いて居ました、東京へ出てから女子大學校に僅かの間勤めたこともありましたが、後神田猿樂町にあつた帝國女學校と云ふ學校に關係を致す事になりました處、其學校はもと大變經營に困難して居たので、私は性質も知らず只熱心に盡して敎育の實を揚げやうと勤めましたが、どうも一躰の傾向が營利に走つて、敎育家として感心しない點が尠くない、さう云ふ處から從つて敎育の方針が合はないと云ふ事になりました。其處で是は一つ變つた新敎育を施して現代女子を導きたいと云ふ考へから、婦人興風會と云ふものを起し、其事業の第一歩として、一般女學生の監督をして暗々裡に其人格を薫育敎化したいと思ふので此女塾を開いたやうな次第でご座います。

私の見る處では如何も日本の女學生には親友が少ない、眞個に何事でも打ち明けることが出來ないから、親切を盡くしたり便宜を與へたりする事がない、凡べ

て云ふことも云ひ得られない秘密の間に行はれるが故に腐敗したり墮落したりするのだらうと思ひます、で、私の女子敎育の方針から申すと高等女學校の必要有無が既に疑問でご座いますが、其れは智育の上に於いて存在せしむるに致しましても、女子に對し男子同樣唯一樣に學課を授ける丈けて敎育の事足れりとするのは如何でせうか、其れよりも個人々々に就いて其性格だの特長だのを査察して、各自有する其特長性格を發揮すると云ふ事が何よりも必要かと考へるのでご座います、それで其れに適した技術的の練習だの知識的の學問だのを學校以外に在ても敎へ得らるゝ事を期するので、外國語に致してもリーダーの三位まで學れば其程度に於いて自由に會話も出來手紙も書けるやうにしたい、決して難かしい書物ばかりに就き英文學者になる樣なことをさせないつもりてす、又造花だの裁縫だのを授けて綿密な注意とか淡泊な好尙とかを持たせたいのてあります。

私は敎育に別段宗敎と云ふやうなものは用ひない心算て御座います、私は永らく米國に居ましたから其間に自然必要も有つて基督敎のことも隨分調べました、勿論宗敎は宜い筈のものてすが宗敎を彩る國家とか習慣とかて又どうにもなります、其れを唯西洋の形式ばかり用ひてやると云ふことが果して直ちに精神修養になるかどうか考へものて、それよりも父母を敬ひ家を愛し國を愛すると云ふ上に神佛を崇むると云ふ事に致したいのて宗敎に就いては强ひも拒みも致さないのです、唯其の品性を養ひ、どうしてももつと婦人に確信を持たせたいものです、確信さへ有して居れば如何しても腐つた考へを持つことが出來なくなります、女子さへ確かならば又男子の墮落も防がれるので、女子の墮落に就いては一つに罪を男子に歸し其誘惑が惡いとして庇つて來たのですが、時の勢ひは何時までも爾う云ふ考へを持つことを許しません。

個人の特長や性格を見ると云ふ事は近親の者ては却て分らないものです、勿論誰れにしても看別は困難てすが、まづ凡そ六ヶ月もすれば大抵は見當がつくものてす、て、私は其れら若い女學生の母となると云ふ考へて不平も聽き懊惱も聽きして慰藉することは素よりてすが、唯一時の家族的關係に止まらず其人生涯までも面倒を見たいと云ふ位の覺悟てあります。どうも敎育のやり方が覺える人には親切て覺えない人を疏外し易い、其の他其の人の美醜貧富等の階級に依て愛した

りする事が現に行はれて居ますが其れては不可ませんが私は不肖ながらどうか可愛くない者に一層懇くし友無き人の爲めに友となりたいと期して居ります、其親となれば片輪の子が一層可愛いと云ふ通り、眞面目に考へれば覺えの惡るい人の爲めに盡くせないことは無いのであります。（談話）

故山川登美子女史の歌

與謝野寛

新派歌壇の才媛山川登美子女史が本年四月十五日に歿した。昨年の一月に玉野花子女史が二十六歲を以て歿し、今また女史が三十一歲を以て歿したのは、新派の歌の創業期以來の閨秀作家を二人迄失つたのであるから、自分等が二女史の早世を悲むの感は殊に痛切なのである。登美子女史は若狹國小濱の人で、父君は酒井家の舊臣であつた。女史は早く大坂の梅花女學校を卒業し、後に女子大學の英文科に學んだが、病を得て中途に退學し、此の三四年は京都や鄕里に於て病を養つて居た。明治三十三年の春自分が新詩社の雜誌「明星」の初號を發行した時、眞先に社友に加はり歌の新作を寄せて來た女性が六七人あつたが、中で今日まで製作を廢めずに益々著しい進境を示し名を詩壇に知られて居るのは、登美子花子晶子雅子の四人である。その中の二人が不幸にも若くして世を去つたのは甚だ歎はしい。

登美子女史の歌は其の病氣に罹る以前に於て奔放熱烈なる感情を出だすを特色とし、啻に戀愛に關してのみならず、世のすべてに對し目覺めたる若き女性の反抗的態度が著しく見えた。其等の作は三十八年の一月に出た歌集『戀ごろも』に載つて居る。不治の病を得て以後の歌は一轉して沈痛哀婉の調を帶び、內心の苦悶を掩はむとして掩ひ得ざる所に讀む者の目をうるましめた。女史の歌の數は短き生涯に比例して甚だ少いが、每首皆女史が心血の迸りてあつて秀でた歌を遺して居るのは偉なりと云はねば成らぬ。想ふに短歌革新期の女詩人として女史の名は必ず不朽であらう。茲に女史が晩年の歌の一端を紹介し簡單に評釋を加へて讀者と共に女史の詩才を追想しようと思ふ。

　　歌や命涙やいのち力あるいたみを胸は秘めて悶えぬ

わが一生は歌ひて終るべきか、又泣きて涙の中に終る

べきか。ともすれば堪へかねて歌に歔かれ、又はらはらと涙がこぼれる。何とも知れず全心を動かす强い力の苦痛を胸に秘めて日夜に悶えて居るのである。

をみなにて又も來む世ぞ生れまし花もなつかし月もなつかし

女性より觀たる此世は美くしい懷しい。來世にも亦女人の身を受けて人の世に生れ度い。と飽くまて現世に執着する感情が面白い。併し若い女史をして如此く來世を口にせしむるに到つた運命を思へば傷ましいて無いか。

わかき身の幸うすき世を歎きしか物こそ無けれ死の大前に

わかき我身に降りかかる種々の不幸を悲みもし苦悶もした。病も其の不幸の一つてある。けれども絶對の權威ある「死」の前には何物も抵抗すべき力を持たぬ。全く虛無てある。絶望の極ての歌を成した。

窓にさすこがねの色の夕映もえも見ず額に氷するかな

窓には華やかな夕日の光が射す。併し自分は其れを仰ぎ見る氣力も無い。自分の額は冷い、自分の心は死てある。氷てある。もはや此の榮譽富貴と自分とは何の關係も無くなつた。

加茂川のみぎはに泣けり誰れ知らむ眞白き石をわが涙とも

われは空しく泣きながら朽ちて行く。わが亡き後を誰が想ひ出さう。加茂川のみぎはに濡れたる眞白き石はすべて自分の涙が凝つて出來たとも知る者は無からう。と誇張した感情があはれてある。

くれなゐの蝶のにほひに猶も似ぬ有りて年經るわが戀ごころも

わが昔の戀ごころもは昔の儘に蝶の羽の紅いやうに美しい。戀ごころもとは云ふが、まことは人戀ふるなさけが昔の儘に猶燃えて居るのてある。と下に燃えて躍る若き情熱を紅き蝶に譬へたのは感じが佳い。

幕のひま少し伏目に紅さして襟つくろひぬよしと見るかな

芝居の幕あひに棧敷に居る舞姫の姿を眺めたのてある。女史は斯う云ふ客觀的の歌をも稀に詠んだ。

空に立つ虹とうるはしわが知らぬ不思議と云ひきされば消えにき

わが戀の果敢なく消え去つたことを、わざと冷靜な態度て歌つて居る。わが戀は虹の如くに美しい、まだ曾

て自分の知らぬ不思議だと云つて、心を跳らして見上げた。併し虹の如しと見た丈あつて直ぐに消えて了つた。と其の美しく樂しく而も瞬間の夢であつたことを悲むのである。

われ無しや有りや母よぶ小雀女の二尺の空を飛ぶ誇りだに

自分には、あの小雀の雛が母を喚んで低い二尺ばかりの處を漸つと飛ぶ丈の誇らしさもあるか。自分の前途には最早何等の望も理想も無く成つたのでは無いか。

遠く行き安き心をはぐくまむ人賣るこゑも聞かぬあなたに

心ならぬ結婚を勸める人などのあつた時に、それを煩さく思つた作者の實感であらう。人の心を賣物のやうに輙くもてあつかふ人々の聲を聽かぬ遠き世界へ往つて、靜かに安き心を養ひ度い。これは今の敎養ある若い婦人の多くが感ずる所である。

わが死なむ日にも斯く降れ京の山しら雪たかし黑谷の塔

京都に住みて、今日の如く雪の降る日、黑谷の塔の白く見える日に死なう。と云ふのは女史の高い性格が窺はれて氣持のよい歌であるが、若い人が死ぬる日を歌ふに到つては悲しい限である。

御救ひの御船のぞみて海に落つ汗しづくして目ざめぬるかな

病床で斯う云ふ悲しい夢を見られた時の記實であらう。又病と云ふ實際に迫つた運命の苦悶に出逢つて己が理想を破壞されたのを譬喩體に詠まれたものでもあらう。

衰へを早とむらふとすきま洩る闇の夜風ぞ髮に來て泣く

病室の隙間から我髮を吹く夜風も、既にわが衰へたる運命を知つて、其れを弔うて泣きに來るやうに感ぜられる。

おぼろかに黑き影ひき枕邊に來居る使や熱き息ふく

病んで居る自分が熱に苦しんで息づかひをするのか。いや／＼、朧ろなる影を曳いて枕邊に來て居る死の使―鬼が吐く熱い息であらう。

石に見よ花さくまして身は病めど世に限なしわが思ふこと

非情の石の上にも花が咲くのを見るでは無いか。まして自分は人である。病の床にありながらも心を枯木や灰のやうには成し難い。彼や此やと世の人としての煩

悶や欲望は限なく起つて來る。あはれ此の苦悶を何として慰めやう。

　石を負ひて山ゆく惱みしとしと寒き汗しぬ夜頃病めれば

夜毎に病める身は冷い汗が身も浮く計りに流れて、重き石を負ひて山路を行くが如き苦痛の中に呻いて居る。

　灰色の暗き空より雪ふりぬわが焚く細き野火を消さむと

黒き運命の空から降る雪は、果敢ない自分の現實の火を消し



去らうとする。自分は消えて行くより外に逃るるすべも無い。

　わが胸も白木にひとし釘づけよ御柩閉づる眞夜中の音

以下の五首は女史が病中にあつて昨年の一月父君を亡くせられた時の作である。既にわが心は死を覺悟して、世俗に引かさるること無く、白木の板の如くに淸らかである。今父君の御柩の蓋を釘づける音が聞える。自分をも釘づけて共に葬つて欲しい。と女史が死に對する安心の覺

はれる歌だ。女史は其の時から實際に死を覺悟せられ、臨終には辭世をも長閑に詠まれて甚だ安らかに眠られた。

　御輿舁く白き衣の丁たち藁靴はきぬいかが止めむ

父君の柩の將に家を出でむとする時、輿を舁ぐ人足どもの藁鞋を穿きなどする有様を見て、父君の永き別れの止め難いのを歎かれたのである。

　山うづめ雪ぞ降りくるかがり火を百千とらせて御墓
　まもらむ

父君を山邊の墓に送つて行くと大雪が降つて來た。この寂しい山の雪の中に父君を殘して歸るに忍びない。多くの篝火を焚かせて夜通し守つて居たいと思ふ。

　垂氷する夕の谷に泣きからし喚ばば御聲をふとも聞
　くべき

父君の御墓に詣でて來ると、北國の山の谷には垂氷が下つて居る。この谷を廻りながら聲の限り泣き慕つて父の名を喚ぶならば、ふと懐しい父君の御聲を再び聞くことが出來相な氣がする。

　たのもしき病の熱よまぼろしに父を屢見て喚ばぬ日
　も無し

わが病熱も亦たのもしく懐しいものと成つた。日毎熱が昂ぶる度に亡き父の面影をまぼろしに見て聲を掛ける事が出來る。これは父君の死後、女史の病が俄に重く成つた時の作である。

　ゆらゆらと消えがての灯ぞにほひたるあなうら哀し
　われのたぐひぞ

夜明の灯の消えむとして美しく風に動ける有様を見て、死を待てる我のたぐひなりと哀まずには居られ無かつた。

　胸つつき死ねと苛む嘴太の鉛の鳥ぞ空掩ひ來る

鉛で作られたやうな大鳥の群は空を黒くして胸を啄きに來る。死である。死である。

　おつとせい氷に眠る幸ひを我も今知るおもしろきか
　な

死を覺悟して後の平靜な心は氷に眠る膃肭臍の安らかな心と似て居る。女史は此一首を詠んで後、此度臨終の辭世一首を遺すまでの間一年許一切歌を詠まれ無かつた。病狀の重體に成つて行く爲でもあつたが、最早その平靜な心には歌ふべき煩悶も欲望も無く成つたからであらう。

以上紹介した丈で見ても女史が病苦と鬪はれた内心の苦悶が如何に悲慘酷烈であつたかが知られる。斯かる

苦悶を抱いて居る人は世に少く無いであらうが、之を歌に詠じて斯かる眞率悲痛な佳作を多く遺した女詩人は、我國に於て未曾有である。あゝ此の稀なる才女は既に地上の人で無く成つた。世に登美子女史の詩才を繼ぐ閨秀作家は誰であらう。自分は女史の早世を悲むと共に、女史の如き深刻なる女流歌人の出て來らむ事を切望する者である。

女をチャームする三越呉服店

みやこどり

男の丸善、女の三越……何度でも行きたい所……賣出し場の血眼、三年の戀も何とやら……三越に行た記……朝早くから出掛る……今日の目的は帶……コントラスト織……左に、右に……寫眞……室の疑ひ……食堂……鏡の前の花を見る振……先生に逢ふ……竹の間の御馳走……鑑識力が出來る

男の丸善、女の三越とか何やらに書いてございましたが全く左樣かもしれません、けれど男子の方が丸善に行らつしやりたいよりは女の三越はもつと多方面の人から戀しがられ、もつと深く要求されて居はしないだらうかと思はれます、丸善の有難味を感じない方も隨分少なからず見受けますけれど、三越に心醉しない女はまづ見渡した處有らうとは思はれませんのでございますもの、或る奥樣が朝早く三越へお出掛けの途中、男の方がお茶屋に遊びにゆく時もきつとこんなに嬉しいものなんでせうれ、と眞面目に仰しやつた、これはまた、ちと極端な御話、これでは女自らねうちを下げるといふものでございますが、せんじつめれば女といふものはまあ子供の樣なもの、美しい衣服をきた時ほど嬉しいことはないのでございますから、三越といふ響が何とも云へない可い感じを與へます事は、かくしおほせる事の出來ないことなのでございます。で三越に對してどう感じるかなどゝいふ事を一寸考へますと、纏つた感想はちつとも浮びません、たゞ三越は面白いところ、時間と經濟がゆるせば何度となく行き度いところと思ひます許り、これが却つて三越が女に及ぼす勢力の大きなところで、一方からいへば外見張るの、ぜいたくするのと御叱りをうける種なのでございます、それでも三越は好きでございます。

隨分三越も此頃は種々な人が參りますから人々の行動を見ますだけでも面白うございます、花見時の賣出しなんか地方の人が大勢入り込んで時にはとんだ喜劇も演じられます、さうかと思へば番頭相手に驕慢ぶつた奥樣の御注文、わざ〳〵畫いた繪（雛模樣の）をひねり〳〵、「不可ないよ、此枝が如何も邪魔になるぢやあないか、これを是非なくなしてしまはなくつちやいけない」と可惜畫工の苦心處とおもはれるのを一言の下に排斥遊ばす、番頭が何といつても「いゝえ、是非かき直しておくれ」と御柳眉とやらをキリゝと遊ばす、けれどこんな事に慣れた店員は一向平氣です、それをいゝ事にして「〇〇樣の御紋付が大變可い模樣だつてぢやないの、それひとつ見たいもんだね」と御難題、「まだそめ上つた許りで縫がしてございませんから」と旨く切りぬけ樣としても「いゝよ刺繡なんぞはある無しで大したちがひも無いんだからそれを一つ見せて貰はう、明日廻つて來る時屆けてもらへるかい」他人の注文品を注文主が

見もせぬうちに、わきからこんな事をいふのは全く驚いた事でございますけれど、こんな事位何でもありません、内部はまだ〱あきれる樣な事許り、そんな品性の方でも光淋模樣に糸錦、ちやんと三越づくめに飾り上げれば天晴淑女が出來上るんでございますから、さうして見れば美い衣服も有り難いもの、と隨喜の涙をこぼす人もあるかも知れません。

三越の賣出しに血まなこになつて驅けあるいて小脇に一杯抱えてあるくそれをわきから引つたくる樣にして我勝にいゝ物を、いゝ物をとあせつて人のよつたもの、我撰んだ物、見界なしに引きかき集める女、殊に若い女の有樣を見ると、三年の何とかも……と仰しやつた方があります、そんなところを何も男の方がごらんにならなくともよろしうございます、そんな閑時間があつてとや角仰しやる方ならこちらこそ愛想もこそもと返し矢を奉つて、つい此間參つた時の事をすこし話させて頂きませう。

單衣を見に行き度いから一所してくれと信子さんの御誘ひで何の否がございませう、私も帶のほしいのがありますからと早速御承諾して朝早く二人は日本橋に出掛けました、丁度今し方開いた處と見えます、二人はスッと入つてゆきます、入り口に五六人の店員が並んでゴチャ〱して居ます、中に居た一人が「お早く御出掛け遊ばしました、何卒よろしいのを澤山」と笑爾々々笑つて居ます、信子さんは「見切の掘出物を探さうと思つて早くきたのよ」と笑ひ乍ら云つてらつしやいます、「何方御ゆづくり、今日は演藝もございます」といふのを「ヘア」と受けながら二人は正面の階段をトン〱と上つて行きました、「すこし方々見てからに致しませう」といふ事になつて、彼方此方見てあるきました、懸賞模樣の前に立つて「こういふ模樣は澤山ある中で比べて居れば價値も分るけれども、さて染め上つてみると割合に榮えないね」とお母樣らしい方が令孃との御話は至極御同感でした、小間物、文房具、簪、時計とだんだん見て廻りましたが格別かはつたものも見當りません、信子さんは二丈位の銘仙の切があつたら妹のにほしいと云つて探していらつしやいます、私はちよい〱の帶に羽二重の切を探しましたけれどどちらも氣に入つた柄がなくて止めました、それから帶の處に來ました、今日の目的は帶ですから一生懸命に見ます、ガラス張の中に入つて居るのは主に博多です、コントラスト織といふのは私達は大變面白いと思つてほしがりますけれど如何いふのか、方々のお母樣たちは御喜びにならないといふ事でございます、「○番(賣場)の方に參りませうか」と私達はいつもの○番の××のところに行きました。

「單衣地を見せて頂戴」とそれから山の樣に持つてきた中から一反、一反、いやなのは左に、可いのばかり右に寄せて、その五反の中を撰ぶ事になりました、やつときまつたのは、伊勢崎ですが、扇面散しの奇抜な柄、私の帶も博多だ、厚板だといろ〱出させましたが、じみすぎたり意氣すぎたり「これは如何です珍柄でございます」と揚々と出したのを「長崎あたりの仲居がしめさうね」といつたので番頭も困つて居ました、「そんならこれは御上品でせう」と厚板を出しましたから今度は「ほんとにね、葬式で」といつてしまつたので「そんな事御座いません」と眞面目に云譯する可笑しさつたらございません、何とか、かとか難をつけて、それでも漸くクリーム地博多(芭蕉の模樣)とコントラスト褪紅色の縦のとを合せる事にきめました、「御ゆつくり遊ばせ」と演藝場の切符をくれましたからそれを受取つて其處を去ると二人は一時に吹き出しました、あんまり勝手を云つたのが可笑しくなりましたから。

模樣物賣物では田舍の人らしいのが産衣をあれこれと見て居ました、初孫の産衣を東京から土産に持つて歸らうといふ老夫婦の顏はいかにも

嬉しさうでございます、二人は休憩室に参りました、田舎から見物に來た人と見えて面白さうに窓から諸方を眺めて居ります。

食堂に、と信子さんの發言で私共は休憩室を出て三階に上りました、「まだ十時よ、兒童博覧會でも一廻りしてきませうか」と申しますと「いつも同じ事ぢやございませんか、それより寫眞部で少し遊びませう」と仰しやるのでそれに贊成して寫眞室に入りました。

藝者の寫眞は何時見ても心地がようございます、如何しても撮し慣れて居ますから、あゝ平氣で眞の表情がうつせるんでせう、西洋人が借衣裳してお立矢姿で撮したのは愛嬌がありますが、わざ〳〵三越にきて、模様借りて撮す奥様、お孃様の御氣は知れませむ。

「御撮しになりますか」ときかれましたから「まさかこれぢやおれ」と銘仙ぞろひの二人は笑ひました、〇〇が「珍らしくお洋装なすつたらよろしいでせう」と申しますの、「ヘア鏡と相談して今度きますよ」と信子さんはお取合ひなさらないので〇〇もたゞ笑つて居ました。

出てから「誰が撮すもんですかねえ、あそこで撮ると皆さん變に御疑ぐりになるんですもの、こり〳〵よ」と信子さん、ほんとに左様なんでございます、私は人がお見合向きと惡口いふほど修整するとも思ひませんけれど。

食堂に入つたのは十一時前でした、おすしをあつらへてそれを待つ間二人は鏡の前の花をみる振をして髪をうつして一寸ほつれをかきあげたりなんかして、それでもまだ來ませんから、そこいらの掛寫眞やそれから此室で評判のお給仕女を見て居ますとお壽しが参りました、お茶を注ぎかけていらした信子さんが、「如何しませう?」つて赤い顔なさるので「何故」つて伺うと「木谷先生よ」と小さな聲で、「仕方がない事よ、ほかぢやあないんですもの、私だちぎりてもこゝの食堂ですから何のたべたつて、品格に關する事はないでせう」私は度胸をきめて入つてらつしやる木谷先生の方に寄つて御挨拶をしました。信子さんもいらつしやいますと「やあ」つてジロ〳〵二人を御覧になるのでそこ〳〵に元の席に還りました、折角のおすしも何だか窮屈に頂いてあんまりおいしくありませんでした。

おいしくないと云へば日外竹の間でたべた御晝でした、ふだんはそんな處足ぶみも致せませんけれど、丁度賣出しの一寸前、得意先だけ内所の賣出しがございます、其時はお晝御飯はあちらで出ますがことしは竹の間でございました、竹の間といふのは名の通り、何處もかしこも竹づくめで何だか藪の中にでも入つた樣な氣が致します、かべの中央のストーブは雀のお宿になつて居るのでございます、こゝへズラリと御膳をならべて（一寸したお皿にお吸物かなんかでございました）いたゞくんでございますが、他家の方も御一所でしたし、みんな氣取つてしまつてちつともおいしくはございませんでした。

「まるで竹の間の時みたいに何だかゆつくりしなかつてね」と私は云ひ出して笑ひました、午後まで居るのもいやでございますから演藝場の切符は其處らの人にやつて出口を指しました。

こういふ一日はほんとに私共にとつて樂しい日なので御座います、店員の取扱ひぶりがよろしからうが、無愛想でございませうが、そんな事はあまり關係はありません、きもの、といふものには女は先天的にチヤームされて居るのでございますもの。

見巧者になれど色の配合、模様の撰擇、なか〳〵一個の理想がございまして、あれもこれもと見るもの、ほしくなるものではございません、そうしますれば、世のお父様や旦那様方は奥様、孃様の三越通ひを奨勵なすつてよろしい位のものではございませんか、御いやがり遊ばすのは

わけがわからないと思ふのでございます。

巧妙なる男子の手段を看破したる事實

原の女

十八の春東京に出る……小說家の玄關番……學校のゆきかへり……毎日のやうに逢ふ學生……わざと時間を違へる……令孃ちがひの無名の手紙……赤ん坊に戀の歌……土手傳ひの直接談判……鳥羽玉の御手……七八度て音信不通……一人は狂人になつて行方不明……歸國の前夜……

私は普通高等女學校時代は、さる地方のミッション、スクールの寄宿舍に居ましたが、性來の小說好きて、何うしても然うした學校に滿足しては居られません。とう〳〵十八の春、東京へ出て參りましたが、東京へ出て來た最初から、私は文學修業の目的でもつて、某小說家の玄關に寄食致しました。

其の頃、其の某先生と云ふのは、牛込の早稻田近くに住つて被在いました。私、將來文壇に立たうと云ふには、是非共語學の研究が必要だと云ふので、麴町の某英語專門學校へ通ふ事になりました。

毎日通學のゆき歸りには、男につけられた事もあれば、後からモシモシと聲掛けられて何の氣もなく振り返へり、お袂から落ちましたよなど、艶書を手渡された事もありました。併し普通の女學生と違つて、かりにも文學に志さうとする私、まさか然うした事で誘惑はされません、結局馬鹿々々しくて堪りませんでしたが、毎朝のやうに、河童坂から士官學校の間で、妙に行き逢ふ書生がありました。早稻田の角帽を冠つて、色白の小柄な、如何にも才子々々した男で。最初のうちは別段氣にもとめませんでしたが、毎日の事てはあり、段々顏馴染になるにつれて、お互にそれとなく會釋し合ふやうにもなりました。而して兼々早稻田の文科の秀れて居ることを聞き知つて居ましたので、「若しかして文科の生徒ぢやないかしら」など、そうした事も考へて見るのでした。夕方私が某先生の赤ちやんをだつこして、御門の前に立つて居ますと、屹度、その書生が私の前を二三度行つたり來たりするんてす。毎朝河童坂から士官學校のあたりて出會ふ處て見ると、何うしても市ケ谷か麴町あたりに住つて居ると思はれるのに、學校の歸途にしては餘りに遲く、殊に同じ道を二度も三度も行き來するのは、如何にしても可笑しく、妙な書生だと内々薄氣味惡くなりまして、翌日から毎朝定つて居た時間をことさら變へて、早くしたり遲くしたりして見ました。と好い都合に出合はないで濟むやうになりましたが、一週間ばかりした或る夜の事、お夕食の後を家内中茶の間て話して居りますと、

『奥さん、こんなものが參つてますよ。』と下女が一通の手紙を持つて參りました。見るとそれは無名て以て、表には某家御令孃樣、必ず親展としてありました。

『オヤまあ、貴郞、如何したと云ふんでせうねえ、最う何子へあてて手紙が來ましたよ、本當に不思議ぢやありませんか、赤ん坊に手紙だなんて……』

世間知らずの奥樣は頻りに不思議がつて、暫くじつと見入つて被在いましたが、『ドレ』と開封にお掛りなさる。

中には細い柔い女のやうな字て、恋を歌つた下手な新体詩が散らし書きにしてありました、而して終に自分は早稲田大学の生徒だが、此頃貴嬢は自分に対して変な疑を抱いて被在るやうだ、併しそれては困るから何卒誤解をといて呉れるやう、自分は貴嬢に多大の尊敬こそ払へ、決して悪い心をもつものてはない、其上貴嬢に誤解されては自分は最う如何して好いのか立つ瀬がない、と斯うした事をくどくどと書き添へて、懐しく慕はしき君へ、早稲田、中村紫川と記してありました。

『まあ恋歌ぢやありませんか、何ぼなんても赤ん坊に恋する人があるてせうか、随分面白い人があるもんてすねえ。』

『馬鹿な、解らん奴だナ、……君一体如何したと云ふんだ。』

ニヤニヤ笑ひながら先生がお訊きになりますので、私はこれ迄の事を残らずお話致しました。而して其翌日学校からの帰りを招魂社裏の土手の線に差掛りますと、『モシ』と呼び掛けて、ハツと思ふ間に、私の前に立ち塞つた男があるんてす、見ると例の書生て、驚きと恐れとて青くなつた私の顔を見据えるやうにして、

『昨夜の手紙御覧下さいましたか。』



『……いゝえ、手紙つて?』

私は恐しく恐しくて顫へながら、じつと気を張つてわざとに、空とぼけて見せました。

『……併し届かない筈はありません、俥配達夫が持つて門を入つて行くのを、ちやんと見届けて居たんですもの、そんな事云つたつて承知する事ぢやない、某家御令嬢様と、貴嬢一人て御覧なさるやうに、必ず親展と書いた彼の手紙、見て下すつたんてせう!』

『ア、彼のお手紙て御座いますか、あれなら私拝見しませんてした、だ

つて私は某家の令孃ぢやありませんもの、書生なんてすよ、御令孃は貴君御承知て御座いませう、いつも私がだつこして御門の傍なんぞへおつれ申す、彼の赤ちやんお一人て御座いますの。』

さう云ふうちにも、私は出來る丈け早く歩いて行くのてした。

『……左樣か、……而してその、その手紙は如何なりました。』

『如何て御座ますか、先生が御覧なすつて居たやうて御座ますが……』

『ツ、ツ、ツツ。』

書生は斯う云つて額を撫てましたが、此の時には最う、好い都合に見附のすぐ近く迄きて居て、土手三番町の巡査さんがちやんと起つて居たもんてすから、書生はついと外れて帶坂の方へ上つて參りますし、私はいつもの通り市ケ谷へ出て歸りました。

併しそうした事は別段何でもありませんが、文學に志して、投書など致しますと、雜誌の上て住所が發表されるものてすから、無暗に交際を求めて來て、わけても困るのは男性からの手紙てす。

最初の手紙は大抵、御芳名は兼て諸文學雜誌て見て承知して居ろ、而して蔭ながらお可懐しく存じて居た、けれ共淺學非才の自分風情が手紙を差上るのは失禮だと思つて、わざと差控えて居た、併し今度何々誌上の御花什を拜見して、最う堪らなくなつたから、無禮も何も顧ず、唐突ながら此の手紙を差上ろ、何卒 弟 と思召て幾久しく、淸い文學上の友達に成つて呉れるやうにと、定つてこんな事を書いてあるんてす。

それへ一々返事を出して居た日には中々大變てすし、それに、中には隨分思ひ切つて可笑しい程下手な手紙もありますので、餘り可笑しくて今ても忘れられないのは、或る男から――勿論ついに一度其の男の名前など雜誌の上て見た事もない程の男てはありますが、交際を求めて來た、其の手紙の文句に、

『烏羽玉の御手にて記されし君が千篇一律の御名文を拜見致し、そゞろ御慕しさに堪へず、かくは此の文參らするになん、願くば笑ひ玉はざれ。』

とこんな事を書いて來たのてす。ひやかすのか眞面目なのか、こんなのも別てすが、大抵皆な同じやうなものばかりて、いつそ面倒臭くも感じられるのてす。けれ共、中には諸雜誌の投書欄て、非常な名文家だとか何とか内々尊敬して居て、此方から交際して貰い度いと思ふ男がないてもありません、そうした男から交際を求めて來た時の嬉しさ、返事を出す出さぬに不關、小さな胸は浪打たずには居られません。考へて考へて、幾度も考へて、餘程尊敬するに足ると考へた人に丈け御返事するのてすが、五度六度、七八度も手紙をやりとりすると、大抵は和歌に事よせ新體詩にことよせ、定つて戀を訴へて來るんてす。てすから兄弟と思つて、幾久しく交際して呉れるやうとか何とか、最初の手紙に認められても、戀ゝ訴へて來て、それを斷つてやると、其後一二度失意が如何の、理想の蜃氣樓が如何したのと、然うした事をかいて來て、倘此方て知らん顔して居ると、それつきり音信もしなくなつて了ふのてす。

中にたつた二人丈け、双方も早稻田の生徒て、二年ばかり本當に淸いフレンドシップを繼けて來ましたが、其内の一人は腦を病んで國へ歸つたきり、狂人になつて山の中へ入つたとか何とか、終にわからなくなつて了ひました。而して今一人の友達は、最初交際し來つてから、足掛け三年めの春てしたか、私が神經衰弱を病んて故鄕へ歸らうと云ふ前の晩、夕方から出掛けて其の友達を神田の下宿に訪問しました、其時の事は次の號て一寸お話いたします。



新樹

金子薫園

わが生命死ぬばかりなるおとろへを解せざる如く
皐月は來る

日くれがた机に伏せし困憊の身を起し見る新樹の
そよぎ

ふときけばかなた市路の遠ひゞききてゆばかりの
丘の家をめづ

頭いと重しとたえずつぶやかむころともなりぬ青
葉のくらさ

春夏のゆきかふ空を見てあればうすき緑の流れけ
るかな

しづ〳〵と新樹をわたる風もよし君がこなしのし
なやかもよし

目に泌みし刹那よ、ものゝ白の色好まずおもひ好
まずなりぬ

林間の夜明けに小さき動亂のあととも若葉そよぎ
てやまず

わが心たえず搖きぬ何としもわかぬ歎きを感じけ
るまゝ

ある時はえうなき身とはおもへどもさてしもあら
ずたゞに悶ゆる

椿の葉しと〳〵くれの雨うけて小窓のうちはもの
ゝあやなさ

葉しづくのみどりの色の濃く〳〵も雨ふりそゝぐ
ひと木の椿



靜かに暮るる春の夕

人見東明

靜かに暮るる
春の夕。
緣りにつづく
ひとすぢの
堤のみどり、
花のにほひ。

しづかに暮るる
春の夕。
港の入江、
赤い灯、青い光り、
船のたゆたい、
島の影、
ことなく潮のめぐるさま。

靜かに暮るる
春の夕。
ふるさとの堤、
枝垂り柳の並木立、
仄かに、あたたかい
月光が、
お前のやうな
いと、いと優しい太息。
堤の上、
はるかなる向ふの
ポオロンの
灰色にゆれる
ポオロンの……
枝垂り柳の並木立。
ポオロンのふるへ



音のにほい
あまい悲しみ
おもひでの青ざめた女。
ヰオロンの
「お前はひとり泣いてゐる……」

しづかに暮るる
春の夕。
ひとすぢの
堤の緑り、
ヰオロンの
灰色のふるへ、
敢果ない感じ、
おもひでの、
あはれ、彼の女……
しづかに暮るる春の夕。——

虹

加藤介春

眼もあてられぬ虹を見る、
その虹、
撓める色、やがてまた深く撓みぬ。

何の影か、
その光動く、
わが眼には只一色の濃き色にのみ。

その真下には緑の曠野あざやかに見ゆ。

しづかにしづかに、無言の儘に、
大野を照す虹の光、
虹は今、かすかなる濕りを帯びぬ。

虹動く。
野も動く——
苦しげにかなしげに、その光尚あざやかに。

花言葉

水野葉舟編

さ、ざ

さるをがせ　漂泊。旅。深山に居る仙人。
山櫨　希望。
サフラン　適切な注意。
サフラン、クローカス　快樂。
サフラン——牧場に生へた——　私の一番幸福な日は過ぎてしまつた。
サルドニイ　あてこすり、いやみ。
山梗菜　害心。
櫻草——野生の——　極く若い人。
櫻草——園に作れるもの　都馴れた田舎の女。
櫻草——赤　人の助けをからなかつた幸福。
櫻　善い育ち。
櫻——白——　詐僞。
石榴　愚鈍。
石榴の花　熟した雅致。

仙人掌　熱（日光の熱、熱帶などの聯想より來る熱。）

し、じ、しゅ、

紫蘇　家庭内の德義。
紫蘇——園に造れるもの——　尊敬。
シルケヤ　まじなひ。
失鳩笞　お前の爲めに死ぬんだらう。
辛夷（して）　裝飾。
ジギタリス　不實。
棕櫚　勝利。
シィカモア　好奇心。
ジャスチシャ　申分の無い可愛い樣子（女の）。
シクレメン　疑惑。
羊齒　眩惑。魔法。眞誠。
羊齒——花さける——　昏睡。
シント約翰草　迷信。
シキナス　宗教に熱心な。

花言葉

水野葉舟 編

す、ず

すぐり（あかすぐり）　嫌はれたなら死んでしまふでせう。

すぐり（あかすぐり）の枝　お前は何でも喜ぶれ。

杉　強健。

杉—レバノンの—　朽ちざる……。

杉の葉　私はあなたの爲めに生きてゐます。

忍冬　寛大な獻身的の愛。

忍冬—フランスの—　媚びた美人。

狐尾草（看麥娘）　遊戯。遊獵。

睡蓮　純潔な心。

睡蓮—空色—　子供の瞳。

睡蓮—夜咲く花—　密會。

睡蓮—日本種の—　田舍娘。

西瓜　厚く廣い心。

スターウォルト　回想。

スターウォルト—アメリカの—　老後の快樂。

スチークスフート（蛇の足）　への部を見よ。

スノーボール　跳ね反す。

スノードロップ　希望。

すかんぽ　ひめすひばを見よ。

スリフト　同情。

スロートウォート　捨てられた美人。

スワローウオルト（燕草）　心痛の平癒。

スキートブライヤー—アメリカの—　簡易。

スヰートフライヤー—歐州の—　私は其を治す爲めに傷をした。

スヰートフライヤー—黄色—　愛情の衰へ。

スヰートピー　心こまやかな快樂。

スヰートサルタン　幸福。

スヰートウイリヤム　豪氣。婦人に手厚い人。敏捷。

管（スヰートセッヂ）　放樂。

土馬鬃の花　昔話し。

水仙　尊敬。

B. Don't you remember that I walked to Chujenji from Nikko and back within half a day and surprised you?

乙: 日光から中禪寺往復を半日にして貴女を喫驚かせた事を御忘れになりましたか?

A. That was some years ago. But can you walk so well now?

甲: あれは數年以前の事です．只今は矢張り健脚ですか?

B. I should say so.

乙: 然うですとも。

A. Well, here is my proposal. Let us go next Saturday afternoon to see the peonies at Yotsume, and then to Kameido for the wisteria.

甲: 其ならば一ツ發議があるのです。次の土曜の午後四ツ目の牡丹を觀に御一所に行きましよう．後て又龜井戸の藤も觀て來ましようじやありませんか。

B. That is a capital idea. I am afraid though, the season is too late for the peonies.

乙: 結構な思ひ付きですが，牡丹には晩過ぎると思ひます。

A. It does not matter. Let us go any way. I think the walk will be delightful. If we get too tired, we can take a boat.

甲: 構やしませんさ．兎に角參りましよう散歩自身が面白いですもの。若し疲れたらば，舟に乘りましよう。

B. I passed the Ryogoku bridge yesterday, and when I saw a small row boat crowded with all sorts of people, it did not tempt me much to be in it.

乙: 昨日兩國橋を通つて小な舟が種々雜多の人で一杯な樣子を見た時には舟に乘りたい氣も無くなりましたよ。

A. We shall take a train back then My cousin saw the garden and she declared that there could not be a better peony show than that of Yotsume.

甲: 其ならば滊車で歸りましよう，從妹が四ツ目に行て來て彼麽見事な牡丹展覽會が無いと主張するのです。

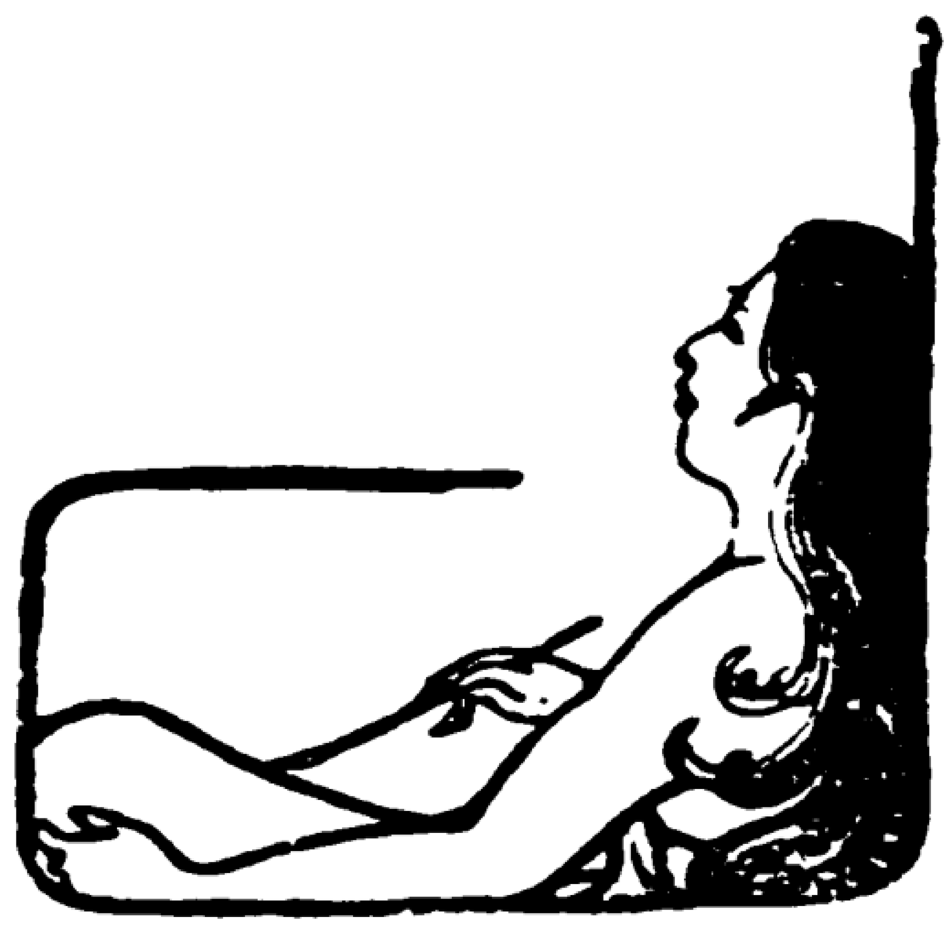
B. And I have been wanting to go to Kameido, and so this will be a good chance to see the wisteria.

乙: 先から龜井戸へ行き度いと思ふて居ましたのですから御一所に藤觀の出來る好機會が參りましたのですね。

英文

(第五年第六回)

女子英學塾講師 河井道子



Maxims to Remember

記臆すべき格言

If you intend to do a mean thing,
Wait till tomorrow;
If you are to do a noble thing,
Do it now, now.

汝若し鄙陋なる事を成さんと欲せば
明日まで延ばし,
若し高潔なる業をせんには
今只今之を成すべし。

Never trouble another what you can do yourself.

汝の成し得る處は他を煩はす勿れ。

Weak men wait for offsortunities, strong men make them.

弱者は機會の來るを待ち強者は之を造る。

Do the duty lies nearest thee; the next is already clearer.

汝に手近き責任を果せ，然らば次のものは明了なり。

It matters not what you are thought to be but what you are.

眞個の價値は汝の汝たる處にして他人の批評に非ず。

Diligence is the mother of good luck.

勤勉は幸運の母なり。

Trifles. make perfection, but perfection is no trifles.

瑣事は完全を來たす者，然ども完全は瑣事に非ず。

Recompense to no man evil for evil.

惡を以て惡に報ゆる勿れ.

Going to Yotsume

四ッ目行き

A. Are you a good pedestrian?

甲: 貴女は健脚てすか?

地方處女の生活狀態

（一）横濱

横濱市の處女一般氣風は、先づ市の風俗を三區に分けまして、山手方面、關內、關外とします、第一に山手方面は主に外人の居留地ですから一般に洋裝を模し、洋妾の風俗に感染するものが多いのです氣風も徒らに華美を欣び、情操を輕んじます。第二に關內は一般に風俗も高尚で、日本風を貴ぶやうです。第三に關外は和洋折衷です、實利一方に狂奔する土地柄とて輕薄に流れるのは已むを得ません。市全躰を通じて遊戯は茶と生花が最も盛んて、琴のお稽古が其次、三味線を習ふ者は極めて少いやうてす女學校はフエリス女學校、捜眞女學校（一名英和女學校）紅蘭女學校（一名佛英女學校）等は外人の經營て、基督敎中心の敎育てすから操行も正しいやうです、良家の女子が多いだけに服粧は派手な方です。横濱高等女學校は雜多の種類を含んて居ますけれど、先づ一樣に風俗華美にして輕薄に流れ易いやうです。髮の形ですがフエリス女學校はマーガレットにしてリボンを二段に結びます、紅蘭女學校の生徒は庇を低くつよして出すたぼへアンコを入れる、たぼの高さは庇より高く、鬢を眞直ぐに上げるのです。英語は何の學校も進歩してゐます、流石に土地柄だけあつて——。基督敎中心の三女學は何れも嚴格らしく、曾て惡聲を聞きません、卒業生も社交に長けて居ますから、なか〱評判が好いやうです。

地方處女生活狀態に就いて　記者

本號から右の通り地方少女の生活狀態と云ふのを掲げます、本誌地方通信部の活動の第一着として、普く各地方現在の處女の風俗、女學生の評判、趣味、好尙などを掲げやうと思ひます、參考になる記事を寄送して下さればありがたいわけです。

次は　**大阪**

短篇小説

小栗風葉選



○規定　題材凡て自由なり一人一篇な限り半紙又は罫紙に振假名をつけて明瞭なる楷書にて認むべし長さは二十四字詰八十行以内とす賞は甲種に據りて送呈す▲本欄以下本誌の投稿は凡て女子に限るものとす

○部屋（天賞）

麹町　白菊女

頭が痛いといつて、三千子は今朝は八時過ぎてから床を離れた、面倒臭さうに鏡の前に座つて髪をとき出したがふと油をつけ様として御園香油の入物を出したらもう無かつた、「君！君！」少し當り散らした樣な云ひ方だ「油が無いぢやないか」といふと「それは空の方でございますそちらの御箱にまだ半分あまり入つたのがございます筈ですが」といはれて云つた處を探すとちやんと御園の箱がある、「あつたよ」投げ出す樣にこう一言いつてまた髪結いにと掛る、三千子は近頃あんまり油もつけた事は無かつたのだ、珍らしく思ひたつて油をつけて念入に結つて見やうとして居る、手で握つたところが何だか去年あたりよりは目立つて細くなつた樣な氣がする、二十一だといふ感じが染みじみ胸におぼえる、だつてお光さんなんか四だけれど銀杏返しに入毛なしてあの濃いはえぎは、大きな髷だと思つて何も二十越したから減つたの如何のといふわけではあるまいと思ひ返す、生れつきなのだ、と寂しく笑つて鏡にうつつた自分の笑顔のあまり勢のなかつたのでハッとしても一度笑つてうつして見た、今度は寂しくなかつた、この通りの顏で寫眞を撮したら、など丶思ふ、左樣だ去年の小紋の寫眞より無いのだから、模樣でひとつ撮して置かう、それなら縫ひかけの長襦袢を早く仕上げた方が可い、こんな事を思ひながら、何時か髪は結つてしまつた、クリームシモンを顏から首にかけて塗り込んで、革ですつかり拭き取つてしまひ練白粉の瓶を一寸取りあげて見たが、濃化粧をするでも無いとポッドに粉白粉を一寸つけて輕くはたいて頰紅をさ

して鏡に蓋をした、茶の間に出て一寸新聞をよむ、あんまり氣乗りもしないのでまた自分の部屋に歸つて机の上の花をボンヤリ眺めて居ると小間使の君が三越が參りました、と云つて來る、三千子はいつも三越きちがひなのだけれど今日は嬉しさうな顏もせず「今行くよ」と云つて思ひ返して今日は私は用は無かつたのだつたわ、お母樣に羽織の催促をして下さいつて申上げておいておくれ」と君を追ひやつてしまふ、さてそれて仕事をするでもなく、何をするのも面倒なので手近な婦人雜誌をとりあげて讀み出した、令孃の見たる何々とかかゝる妻は一家を整理し得ずとかいつも〳〵同じ樣な題



目だと思つてそれも側へやつてしまつた、そんなで午前は過してしまつた、二時頃「近藤樣がいらつしやいました」と君が知らせにきた「左樣？」こんな時には友達と話でもする方がまぎれて面白いと喜んですぐ部屋に通してといふと、いつも〳〵愉快氣な友の姿は現れたいろ〳〵久濶逢はなかつたなつかしさに何かいつて、それより一人二人友達の消息なども語りあつてから近藤といふのは「私如何しやうかと思つて御相談にきたのよ」といひ出す、三千子の胸は妙におどつた「伺はして頂戴な御目出度いお緣談なのね」と何氣なく云ふと近藤は顏を赫めて、「あゝまだ左樣ぢやないのよ、だから御相談つ

て申上げてるぢやありませんか、實際はね―と語り出したのは、左る工學士との緣談、妹一人と母とあるばかり氣樂は氣樂―尤鬼は何千疋にも當るのだけれど―と笑つて、權門といふてはなし、たゞ其當人の腕一本でやつて居るところだから却て親類や何の氣苦勞の多いところより善からうといふ兩親の意向て自分さへ承知したらいよ〳〵話も進行しやうといふこと「いゝわ、御嫁て遊ばせよ、ほんとに丁度いゝ御緣談ぢやありませんか、御考へも何も要る事ぢやございませんわ、」と無性にすゝめて「よくそれても私に前から御知らせ下すつて御相談なんかして下さいましたわね、何々とし子と書いてお手紙下すつても仕方がないのに」こういつて莞爾笑つたが三千子の顏には活氣がなかつた、暫くしてとし子は歸つた、三千子は客火鉢に手をかざし作らいろ〳〵な想にふけつて居る、學校に居た時は姉妹といつて友達間に羨まれたものだつた、「おとしさんは九だつたつけ」と思つて何だか急に寒い樣な心地がした、去年の暮から話がありかけて居るあの理學士とかは、如何成つただらう、お正月にもういよ〳〵纏りさうになつて理學士なんか厭だと泣き度くなつて朝も晩も氣を腐らせて居た時が却つて戀しいと思ふ、何となしに文庫を明けて自分の寫眞を出してみた、事に其理學士一件のとき撮したのを染み〳〵眺めて、いやに老けて撮れて居ると思つた、是非一枚滿足なのを撮つて置かなければと決心つて長襦袢を縫ひ出して居ると三千子の母が入つて來て「大變御精が出る事ね」と莞爾する、「でもこれ縫つておかないと紋付に合ひませんから」と何故か辨解がましく云つたが寫眞を撮さうと思ふといふ事は云ひ得なかつた、「今電話てね、大澤さんから今度の日曜本鄕座に御いてになりませんかつて御誘ひ受けたのだがね、如何します？」といはれて「本鄕座？、私こんどは失禮しておきませう」と氣が無ささうに云つて母の顏色を一寸氣づかつて「お母樣御いて遊ばせな」とニッコリして見せる「私も多忙しいからあまり行き度くもなけれど、……ぢやあ御斷りしておかうよ」といつて出てゆく緣側を歩いてゆく後姿を見送つて居たが緣側ていつも隣の愛ちやんが來て大きな聲て唱つて鞠をついて居る時の事を思ひ浮べた、よく愛ちやんが「帶にや短したすきにや長し江戶で何とか」とうたつて居るけれど、長し短かして緣が得られぬものならば、私のは、短かい短かいと我から捨てゝ居るのぢやあ無からうか、ビンを拔いて頭をかき

ながらぼんやり雲の足を眺めて居たのが稍半時、「お孃樣御飯でございます、オヤ電氣もおつけ遊ばさないて、」と君は不思議相な顔をして部屋の中を見て居た。

趣向は餘り珍らしい者では無い。結婚前の女が友人の結婚に對して嫉妬するといふやうなのは、特に本誌の應募小説には多いのだが、本篇は或種の階級に屬ける年頃の娘の四圍が如何にも精密に描かれてゐる。「部屋」といふ一小區畫に有り餘る情趣が出てゐる。（評）

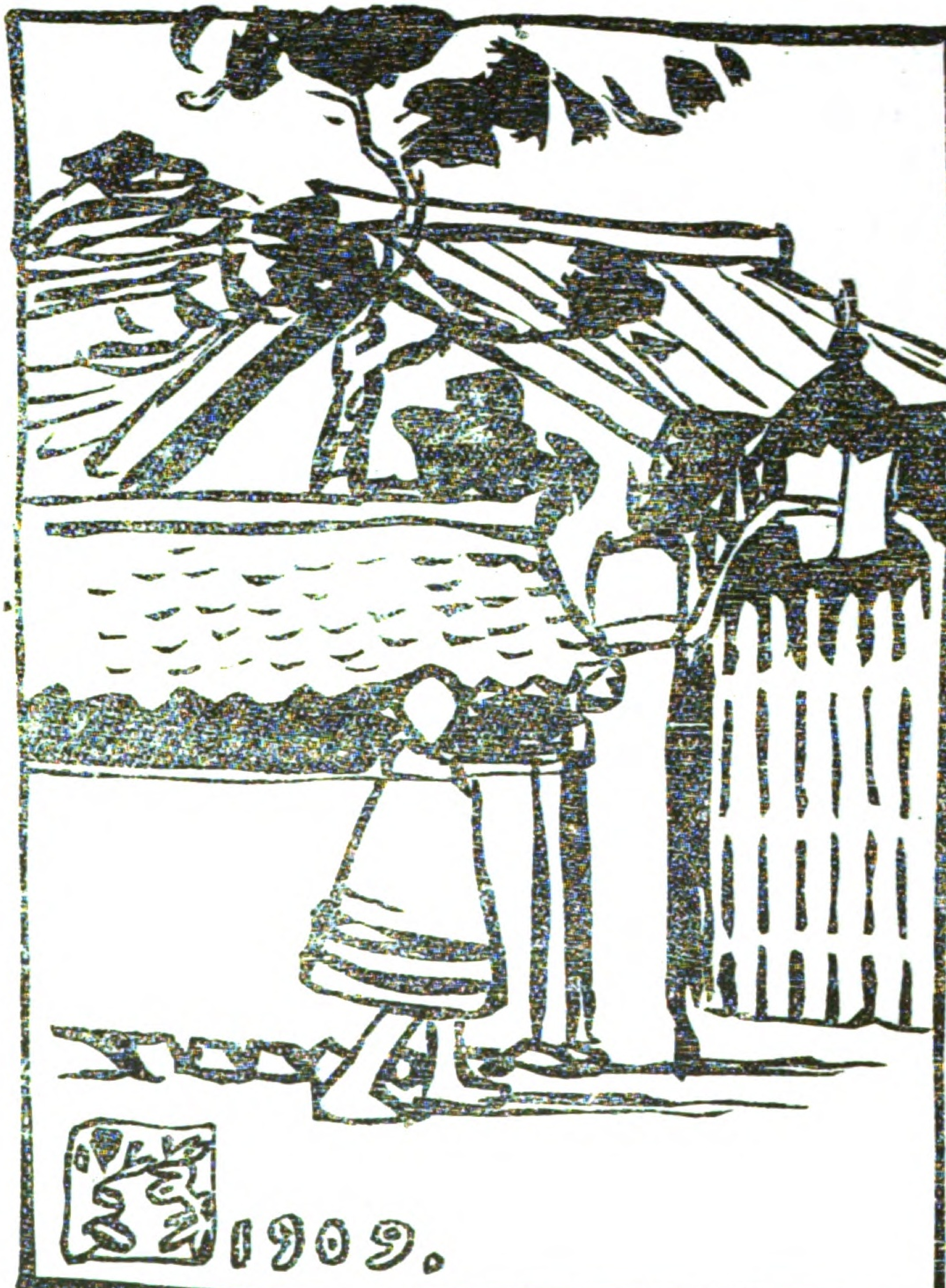
○返禮（選賞）

福島　木下露草

如何しようと私の知つてる事ぢやないわ勝手になすつたら好いぢやありませんか、どうせ好きな御方なんてすもの」と勉めて冷淡に始めて口を切つた、變つた樣子に驚いておろ／＼して居た美智さんは、此時遂に泣き伏して終つたのである、私は冷たい眼でそれを見守つた。瀧島の京御召に紫繻子になんとやらの晝夜帶、夕化粧さへしてある襟足にほつれかゝつたびんの毛がかすかにふるへて居る。美智樣が來てからもう小一時間許りになる、けれども私は一言も話しゝない、薄暗い夕暮れの室に只二人きり、何ともいはれぬいゝ花の香がかをつて來る。美智樣は喜んで同情して貰はうと思つて來たらしい、しかしもう私はいつもの靜ぢやない、昨夜一夜泣きあかして、血も涙もかれた靜なのだ、姉妹とまでちかつた仲なれど、もう今は姉妹でも親友でもなんでもない、我戀の敵……眉の邊の筋肉がピリ／＼と動く。冷淡に／＼と。美智さんを苦しませて居る私は、いさゝか愉快だ、しかし、もがいて／＼なほだつすることの出來ぬやうななんとはなしの苦しみが心の中にひそんで居る。泣き伏して居る美智子の姿を見ると其念が浮んで來る、自分にはまだ良心は存在して居る。おぼろにかすんだ月が窓から流れて室の中が青白く遲咲の山櫻がうつすりと浮いて見える、時折吹く風にはら／＼と散つて、室にまで舞ひこむで來る、私はマッチをすつてランプに火を點じた、床の間の軸も、油繪もはつきりと見える、美智樣はと見ればまだ泣いて居る、机のひきだしをあけた、そして晶子の常夏を小聲で讀み出した、風がひや／＼する、にはかに涙がこぼれた、しかし熱い涙ではない。本を下に置こうとすると、ばつたり落た一葉の寫眞、勇さんのだ―正服正帽の遠山勇樣のだ……あゝ私も此人に愛されたことゝあつたに！否、昨日まで愛されてると思つてたのだ、自分も愛して居つた……それてあるに姉妹とまでちかつた美智樣はつまり私と競爭者、しかし私も色に出さなかつた、美智樣も出さなかつた、そして勇樣

は先日美智樣の御家に申でんて遂に美智さんは嫁く樣になつたのだ、戀の勝利者……私は落膽した、私の心は弱い、自分の心の秘密を永久に守ることが出來ない、そしてあたり散らした、もう昔の靜は死んだ、今は美智さんの苦痛を見て喜ぶ靜なのだ……「美智さん」と靜かに呼んだ返事がない——「美智さん」と此度はも少し高聲に呼んで勇さんの寫眞を膝元にはふりなげた、

「これをあげませう、私には用のない物ですからね」といつた、美智樣は一寸見たが、



(天賞)　田舍町　小樽　鈴木とみ子

「姉さん……あなたは……それが眞實の御心ですか……」とはらはらと涙をながした、

「眞實ですとも……」といつて私はランプの火を見つめた、

「姉さんそんなら……さよなら御邪魔致しました」とのみ立ちあがつた美智さんの聲は意外にさへてをつた、私は默してうなづいた、

勝手知つたる家のやがて足おと遠のいて聞えなくなつた、見送りもせぬ私は机の前に座したまゝ少さな箱を出した、そこから勇さんの手紙を引き出して、さき、さいては捨て、十本許りをきれ〴〵にして終つた、最後に寫眞の處分だ！いつか美智さんからいたゞいた寫眞と一所に狀袋に入れて、墨、黒々と、遠山勇樣、美智樣とのみ、かいた、今まていろ〴〵と御世話になつた返禮に今夜ポストに入れる爲てある。

是は先月號に入れる作てあつたのを、選者が取落したから今月號に入れたのてある。是も前の「天」のと同じ材料だが、唯其の女主人公の激しい近代的の性格が面白い。文章も確なものだ。（評）

○素人下宿（入賞）

山形　きみ子

一昨年の秋父樣が御病氣間もなく、小遣取りにもとの母樣の仰せから、素人下宿を始めてからといふものは、毎日ごた〴〵して臺所て暮して終ひます。今日も終日例の通り、どうせ私は運命のとらはれ子と平かならぬ胸をじつと抑へながら夕飯の後じまひが終へたので、戸棚の前に座つて明朝の御菜にするおいもの皮をする〳〵とむき始めました。伏せた桶の上に載つてる二分心の洋燈が閃いてむかふの流しの邊は、貉小僧が火の玉ても投げ出しはしないか。

私と仲のいゝ黒猫はいつの間にか傍へ來てゴロゴロいつて居る、私は何かなし淋しい思ひがするので黒猫を膝の上にあげてなでゝやつてると、奥の方からヴワイオリンの音、十七の花の姿で弄んてる雪さんの樣がありありと見えるやう、雪さんなんか幸福だわ、私なんぞ、あゝ又こんな考を起す、私の心が僻んでるのだわ、雪さんのやうな妹を持つた私、私がこんなに淋しい思ひをしてる時にきかして呉れるのですもの、あゝさう、死んだ否私を生んて下すた母樣が雪さんに彈かして聞かして下さるんだわ、おゝ懐かしいこと、そして今のは想起にまあなんと懐かしいのてせう、私の胸は聖う拭はれ其聖い胸の底から涙が、それは美しい尊い追想と感謝との涙が湧き出ました。

ヴワイオリンの音はたとやみました、私はふいと氣がついて、せつせとおいもをむいてばかし、茶の間に新聞をとりに行きましたら母樣は下宿人の水野樣大橋樣や雪さんと樂しさうに御話をしてらつしやるました。私が、そこらに新聞がありませんかつてきくとこゝにありますつて今日のを二三枚よこして下すつて「六疊になんかいつ迄も居ないて、お前も此處へ來て

話でもなさい、病人は、殊に脳や神經の方なんかは眠らしておいた方が一等いゝのだからねと平氣で、私口にばかりはハイつて答へましたが、何となく母様はなぜそんな事をつて泣きつきたいやうでしたわ。

私は新聞を持つて一番奥の室六疊の前に立つて靜かに障子を明けると、むかふ向になつてらした父様はくるりと頸を此方へむけなすつて『ア、園だつたかと溜息と一處に被仰れる。まあどんなにお待ち兼ねてしたろうに下らない事に暇を取てと思ひながら入ると淋しい御顔に満足げな笑み——飢ゑたる人が僅の飯を得た時のやうな——を浮べてらつしやるので私遂涙ぐみましたわ。東京でも名のある某銀行の重役迄なすつた父様が昨今の御有様、火ぜめ水ぜめよりも苦しき御心の内御年とても五十には一つ足らぬ働き盛りをかうして御過しなさるとは……、あゝそれに此頃の衰へなすつたこと——、あゝほんとうにもとの母様が御たつしやなら、私今の母様を勿躰ないけど飽きたらない氣がしますもの。

一躰女はこの男と一處に暮せば一生安樂に送れるだろうといふことを主にして結婚するものが多いのです、そしてそれらの安樂——金とか夫の親切とか——に満足するやうになると我が心に熱烈な愛のゆらめきがない爲めに却つてこの満足は促して他のあるものを思はせる、即ち心の飢を覺えるのです。

うちの母様も必然そんな事てせう、そして十數年を不滿て通してゐらした事は私の幼い頃の記憶にも殘つてます、然かも離縁をなさらないのは外部の満足によつてせう、母様は今年三十五の美しい人て、此頃は髷はすつかり止して束髪ばかり、其の爲か二十八九にしか見えません、そして多くの人に對して優しい唯父様だけには冷酷な女なのです、私だつて母様の御言葉の通り父様を見奉らなければ、雪さんと同じやうに可愛がつて下さるてせうけど、私は臺所を自分から唯一のよい所として時々は母様の御心に反いても父様を御不自由をさせたくありませんもの。

私は父様の御傍に座つて『父様何か御用はございませんか』つてたづねましたら『何もない、今日は少し晩いやうだから又何かいはれてるのかと思うてたよ』とあゝ御眼には露の玉、私は遂にかくし切れずに顔をおほふて泣きました。父様は靜かに御手さしのべて私の髮の毛をかきあげて下さりながら『お園、父様はお前の血を絞る蛇だ、それにお前は二十一の此春迄嫁にも

行かず婿もとらず、この父ゆゑに泣いて呉れるとはと却つて忝けない御言葉、私は唯もう泣いてました。がこうして丶は御病氣に不可と思つて吾と吾を勵まして涙をすつかりとふいて『父樣そんな事いつて下さいますな、まあ新聞てもよみませうつて新聞を披いて二面の記事を讀まうとすると、おその――と母樣の御聲!!!父樣はホーッと歎息をもらしてあふむけ樣になつて、天井を見凝めてらつしやる。私が何用かしらつて獨言のやうにいふと『行けと被仰られる、ハイつて立たうとする時、父樣は何かいはうとして口を噤んで終はれました、私も如何にも物足らないやうな氣がしましたので御顏を見ると、無限の悲哀と名殘とを御眼に語られました、私も口にいへない何事かを眼で語つてつと六疊を出て、茶の間の緣先迄來るとドット崩れるやうな笑聲、母樣はあ丶母樣は又下宿人を相手に笑つてらつしやる――あ丶こんな失禮な事考へてはいけない、ても母樣は、――。素人下宿て小遣取りなんかはとてもとても――――、素人下宿なんかしないでも暮されるのに、

兩親、及び妹と女主人公自身との間に於ける複雜な關係は、仍是以上に面白く書けさうに思はれる。兎に角空想的の作品ては無い、何所にか活きたる實生活の色がある。（評）

【秀逸】

○浮世

大阪　伊藤淺子

「あら伯母さんが居らしてよ。」今臺所の晩飯の食器を洗ひ明朝の釜を仕掛けて、精々と板敷に雜布がけをしてたお靜は、突拍子に悸う叫んだ。お靜は今茲が十六年の割に苦勞さした故か大人びて見えるが、色こそ黑けれ目のパッチリした、鼻筋の通つた薄皮出の瘦ぎすな、何處かきりつとした女て、双子の袷に、牡丹色友染の新モスと、紅色綿博多の腹合の絢え憊れたのを締て襷掛の甲斐々々しい打扮てある。伯母といはれたのは此家にも似つかぬ縞セルコートを着た、四十六にしては肉づきの豐な、何となく優みの有る目の品の好人てある。伯母のお高の突立つたのは臺所の水口てある、家賃にして三圓、二疊に三疊に猫の額の樣な庭が有きりてあるが、お靜の丹精て隅から隅まて雜布光がして居る。「さあお上りなさいよ、今お飯が濟んだばかりよ」とお靜は愛想好言つて紊かゝつた目角の髮を、指頭て拂ふのて有つた。「ぢや御免よ」とお高はコートを脫さながら上つた。と見ると其處に薄汚い布團を着て、黃昏の薄暗い中に臥つて居るのは、お靜の母お高の實の

姉のお民、四ッ違ひの今年五十と言ふ老婦て有る。お民は氣勢に起上つてお高を見迎へ居たが、お高は其狹い緣側際の、其枕頭に坐つて、「姉さん御病氣てすつてね、如何てすの。」と顏を差覗く樣にする「何有ね、病氣と云ふ程ぢや無いけれど……誰れにお聞き、だつたの、」「イエね昨日玉江橋の處で靜ちやんに逢つたら、お母さんが斯々だつて聞いたのて、用達に出たついてに來たのてすよ、そして矢張リウマチてすか。」「リウマチは其樣てもないんだがね、四五日風を冒いて、何しても熱が取れないてね、食物は薩張味が無し、何だか妄に頭が重くつて、昨日から靜も工場を休むてゐるんだよ」「其は可けませんね。」「はあ早く熱が取れて了へば快活するだらうと思つてるんだけれど……そしてお宅ては皆樣お變もないかい」「はあ、皆お蔭てね、姉さん橫にお成りなさいよ、苦しいてせう」「いやもう少し斯うしてゐましようよ」と寢衣の衿を合して、「ね、お高さん年の故か病度に弱つて行く樣てね、此度又大病ごもすればもう


（地賞）店頭　紀伊　祢田みつ子

とても……と思ふと、靜の事が氣に成つてね……」と瘦せた肩てほつと息する。「まア姉さん未だ其樣事云ふ年じや御座んせんよ。其樣事今から言つちや靜ちやんが可愛想てすよ」「本當にねえ、十六にも成つてお裁縫一つ敎へないて、……：朝から晩まで働かして、と思ふと此胸がね……」と細い骨立つた手て、乳の邊りをおさへてお民はハラ〳〵と淚を流す。あゝ姉さんは何と不幸なお方だらう。然うだ姉さんも初めから此樣身じやない、私と同樣に五荷の荷をして、此家へお嫁き成すつたん

だけれども、五年立ゝづけのあの丸焼、續いて養兄様は亡く成る、家は衰へる、一方たつた一人の娘に工場通ひをさす様に成るとはあゝ何てお氣の毒な身の上だらう。遂ひホロリと成つて今更の様に寂しい部屋を見廻した。何時の間にかとつぷり暮れてしまつて、お民の顔のみ青白く見える。「オヤ暗く成つたじやありませんか、靜ちやんランプは」と、立上るともうお靜がちやんとランプヲを持つて來て、「エ、今點けてよ、」と云ひながら、パッとマッチを摺つて釣して居る。ふと見ると汚れた紺絣の前垂の紐が千切かけて居るのが、目につく「靜ちやん前垂の紐がおつつけ取れさうよ、後で一寸縫附けてお置よ、ね。」とお高が言ふ。「あら然う」と言つたまゝつと狹むて、「ねえ伯母さん、此間お清さんと道頓堀へ行つたのよ。」「そう可かつたね」と不憫さうに淋しい笑ひ方をする。「八十代座の立見の可かつた事」「まア靜ちやん立見何かしたの」と較顔を蹙めて「靜ちやん芝居の立見何かは、若い女がするものじやないよ、今度伯母さんが行く時キッと誘つて上るから、もう決して立見何ぞおしてないよ」と心配さうに言ふお靜は萎げ氣味て「でも伯母さんと一諸じやこんな姿して行けないわ……」とお高の風をぢつと見る。お高はハッと成つて指輪の光る右の手を着物の合し目へ思ずかくして、もう此家へ來る時は常着のまゝ來よう、と思ふので有つた。

「靜や又お粥をぽつちり拵へておくれ。」と母親が口を利いたので二人の話はそれ限りに成つた。「あゝ然う今食べたくつて」とお靜は土鍋を仕かける。お高はお靜の様子を見て、不安の念が胸をついて來る。衰へた姉の姿！たつた一人の姪！風氣の惡い工場へ通はすのは危い！と斯う思ふとどうかして助けたいと思ふ念がむら〳〵と湧いて來て。突然、「姉さん」と大きく呼んで「姉さんもう靜ちやん工場をよしちや如何、私二人位いどうにかしますから」と譯もなく言ふ。お高の頭にはあの姑の恐い顔も見えないのであらう「あッ忘れていたつけ、これ切つてお上げよ」と白いハンカチに包むだ玉子焼を取り出して、お靜に手渡した。

お高は姉の悦ばしげに食事するのを見て一時間ばかり雜談の後辭して表へ出た時ほつとして乾菜の哀れに垂れた低い屋根を見上げると、「あゝ厭やな浮世だ」と小さく叫むで歩を運ばした。

文案の自然と、會話の洗煉とは、讀に描かんと努めた丈の功果を收めてゐる。が、只それだけである。文章の句點に注意あれ。（評）

○追懐

横須賀　君枝

忘れもしない正月の五日の晩だ昨日の雨が漸く上つた許りなので横須賀名物の一に數へられる道の惡さは又一入朧氣な月に處々光つて見える。

今下車たのは海軍の水兵が十二三人と商人風の男や、他の女客と、自分とてほんの七八人しか無かつたが其れても客待の俥が三四挺驅け出した。後は逸見の方にても下宿して居るのだらう、水兵の群は自分と反對の方へ行つてしまふ。

御安く參りやせうといふ車夫の聲に、ふと我に返つて四邊を見ると、もう停車塲から六七軒離れた練習所の傍の黒い塀の脇を歩いて居る。

ヒユーと、右手の子の神山から吹き下す夜風は、身を刺す樣「オ、寒い」と、覺えず自分はつぶやいた。正月と云つても屠蘇機嫌處か、人つ子一人、通らないのだもの淋しさつたらない此處だ此の邊だつたらうもう七八年前になるが吉倉の銘酒屋の女が、水兵に殺されたのは、今迄一度も思ひ出した事の無い、斯奈ことが、ヒヨツクリ、頭に浮んで來て、ぶるつとした。寒さは愈々身に泌みる、一足毎にぐちやつ〳〵と、薄氣味惡い音を立て乍ら、もの〳〵半町も、暗い淋しい町を通るとや〳〵廣い、明るい町に出た、何だか斯う、三年も見ない、故郷に歸つた樣て併し何となく不安な氣がする。



（賞人）郊外　長野關つく子

太平堂の角を右へ、眞直に汚い溝に沿うて行くと、だら〳〵坂、今にも崩れ懸つて來そうな崖を、前に控へた家の潜りの前に立つた私は、慌しく手を掛け樣として、

また力なく躊躇するのであつた。歌留多でもして居るのだらう堤下の二階家から、ドッと若々しい笑ひ聲が聞える。

思ひ切つて内に入り、格子戸の前で中の樣子を覗ふと、寂り返つて、話し聲一つ爲ない、ガラッと格子を開けたが、まだ何とも云ふ者が無い、オ母さんッ「オヤッ君枝ぢやないかい「アラネーサン」と云ひさま姪が障子を開けたので、茶の室のランプがパッと涙ぐんだ私の面を眞面に照す。

「如何したのだへこんなに遲くマア御上りな」

「君枝如何したのだ今頃ッ」

と、氣遣はしげに問ふ、父母の顏には、心配の色が、有々見える。

「アノ叔母さんの恩給を取りに、わたし、明日同窓會だものですから」「ム、そうか」「アそうかいオ母さんは又川田が厭で默つてても來たのぢやないかと思つて、胸がドッキリしたよ」「如何だい彼方は……どうせ氣は合ふまいけれど嫁つたものだからお前も辛抱してね」

私の顏色で、それと察したのだらう、母は慰め顏に斯うい ふのであつた。

「ねー母樣今更斯樣なこと云つては不孝ですけれど妾何の爲めに彼那に勉强して女學校なんか卒業したのだか考へると情なくつて——」

「眞實ねー今々能く考へれば馬鹿な事をしたとつくづく思ふけれど」

「今其那こと云つても仕方がない」

「到底居られそうもないのか」と日頃けんどんな父にから優しく問はれたので頰には言葉も出ず熱い涙が膝の上に重ねた凍たい手の甲にハラ〳〵と落ちる。

「居て居られない事は有りませんけれど、——何と云つても仕立屋の職人ですからね、全然合はないのですもの、不滿らなくつて——」

「眞實に許嫁とは云ひ條彼那紛擾が有つたんだからどうせ仲違ひになるならいつそ遣らない方が宜かつたけれど——矢張り運が惡いのさ」

「其れて今夜は默つて來たのじや有るまいな」

えゝこの七日に恩給が下るからそれを取りながら二三日遊んで來いと云つて——」

「そうか」

「アッお前今朝内田さんから手紙が來たよ」

「えつ内田さんからッ聞くと等しく全身の血が一時に

昇り詰めた樣に忘然として封書を取つた手は怪しくおのゝく。

ともすればポタリ〳〵と紫インクの字をにじませるのを、堪えて居たが、最後の、

「何卒外表の絶交を悲しんで居る親友の在ることを永久に御記憶下さい噫！」迄來ると堪え切れず、手紙犇と抱いた儘眞暗な納戸に飛込んで、泣いて〳〵心行く迄泣き明した。

肌を裂く樣な、雪風が變つて、庭の白梅の香を、送る頃、或る夜、遂ぞ大きい聲一つ出した事の無い私の宅で甲走つた女の聲て實に聞くに忍びない樣な、嘲りやら、厭味やらを、辨り立てたので、嘸垣根越しに、耳をそばだてた黒い影の、三つや四つは必と有つたらうに、私の父母は、無念を忍んで一言半句の言葉もなく、只管我が子の不埒を、詫びるのを人は如何思ふたてあらう二十七から四十の今日まで家後を通して二人の男子を一人前に育て上げた彼の強い義理ある叔母の云ふ事半分僻みと人は知るまい其後内田樣とは一日置位に手紙の往復した、而して内田樣は態々東京から遊びに二度も來た。

が、内田樣は私より一歲上の廿才今年高等學校に入る、未だ修業の最中、かつ、内田樣は、國元の叔父さんの家を、相續するので、既に十五に成る許嫁の方さへある身、遂に絶交を止むなくさせられた今日此頃の、私の胸には云ひ知れぬ悲しさが漲つて居る。

同級だつた友達は大方嫁いた。

川田の家では粹な御嫁樣が來て、もう子供が出來たそうな。

或ひは作者の實歴ではあるまいか。非常に人を動かす力はあるが、而し作者の獨合點に終つて、讀者に事件の順序を明瞭に解し得さしめざる點がある。（評）

○若き女

大阪　西戸政江子

お俊は母のお里に連れられて京都へ行つた歸り汽車の中てフト自分の家の向ひに住んで居る＝坂野と云ふて某銀行の支配人をして居る人の夫人と令嬢＝人に出遇つた。

「ほんとに向側の娘はいけすかない娘だね」といつも下女と話して居るお俊は一目見て「えらそうにいやに澄まして居るわ」と平常顏見合す度に湧く何とも云へぬ嫌な思ひがむら〳〵と胸に湧いてヂーと顏を白眼んでやつた。

＝派手な縮緬の羽織＝肩から胸へ輝る金鎖＝新流行の

ゴブラン織の帶、などたゞ一寸一目見たゞけだけれど若いお俊の眼にはチラ／＼と電のやうに影が走る。

「お母樣、あちらが空いてゝよ」ツンとして向ふの隅を指して母親をうながしたが、母はやつと氣付いたやう。

「でもお前お向ひの奧樣が」と傍へよつて「まあ奧樣でしたねチつとも知りませんで誠に失禮致しましたと丁寧な挨拶振り、お俊はまたと顏をしかめて、立つたまゝ

「お母樣あちらが空いてますよ」と大きな聲で呼ぶ。

「まあお前一寸來て挨拶をしないかい、そして奧樣今日はどちらまで居らつしやつたんですのホヽヽヽ」と嫌やなお世辭笑ひをする。

「えゝ一寸京都まで行きましたのや、貴女も娘さん連れてか」應揚な夫人の言葉「まあこちらへお掛けなされ」と一寸席を讓つた。

「まあ一寸奧樣御免遊ばせ」と母の恐る／＼腰かける樣を見たお俊は思はず顏を赤くした、なぜお母樣はあんなに見惡ない事をするんだらう何にも無理にあんな人達の處へ行かなくたつてこちに空いた席があるじやないか、それにあの人もそうじやないか、自分の召使か何んぞのやうに、人を見下してまあのいけすかない眼つてありやしない、何んだか自分の權利を犯されたやうな氣がして胸ばかりワク／＼する。

「お俊こちらへ掛けさしてお貰ひよ」淚が出る程口惜しい。

「こゝでよう御座んすわ」とあらぬ窓の方を向く、

「まあ奧樣あゝ云ふ子供で御座いますもの、眞實に仕樣がありませんです」

「幾歲ですのや」どこまでも應揚な口振である、

「まだ十八で御座いますがあの御覽の通り眞實に子供ですからなか／＼お孃樣などゝ比較になりませんわあのお孃樣も汚ない家で御座いますけれど、ちとお遊びにお出て下さいませ、」

「お母樣此度の停車塲は何處？」退屈氣な令孃、後れ毛をかき上げた手からキラリと紅珠が輝る。

さつきからの言葉を無理に聞くまいとわざと向ふ向きになつて、女學世界讀んで居たがお俊は「おや／＼あの甘えた口は何んだい、えらそうに女學校にも行つて居る癖に山崎の次の驛がわからないんだらうか、次は茨木だよと敎えてやりたいやうな、何んだか無性に可笑しいやうな氣がする。

あんなにえらそうに威張らなくたつて、ホヽヽヽ、あの娘は丁度女學世界に書いてある我儘な令嬢によく似て居るよ」と思ふた。フト顔を見て思ひ切り大きな聲て笑つてやりたいやうな氣になつて、そつと顔を上げかけたがフト白い絹足袋がチラと眼に入るとまたむら〳〵とまけぬ氣が出て來て上げかけた目をまた雜誌に落した。

梅田に下車りると二人は自用車が出迎へに來ておつた。お俊は母と二人て電車に乘つた。

「ね、お前親切な方達てすよ、お前にも遊びに來いと云つて居らしつたよ、あんなお嬢樣達とお近づきになつて御覽、どんなに德だか知れない、それにいつも旦那樣は銀行へ居らつしやるので家は女子樣達ばかりて氣樂な家てすと、一度伺つて御覽」くど〳〵言はれたがお俊は何とも返事しなかつた。

「ほんとに昔の人は汚ない根性て仕方がないわとつく〳〵思ふと現在の母親てもなんだか嫌な思ひがした。

電車から下車りて歩るいて歸る途フト、今は交換手になつて居るとか聞いた學校時代の友達に出遇つた。「アラ竹中さんじやないの」と呼び留めた。

汚ない汚れた木綿結城の着物にすそのすり切れた袴をはいて居る。

「まあお久し振り此の頃はどうして居らつしやるの、あの妾の家はついそこなのよ、お寄りなさいな、ね一寸位ゐ可いてせう」



柴刈る女　紀伊　稗田みつ子

「ハア有難ふ」と淋しい笑ひを洩して、
「あの一寸今日は急ぎますからいづれその內きつとお伺ひ致しますわ」
「マアそうですか、では是非居らつしやいね」とくわしく町名と番地を敎えた。
「是非ですよ」「左樣なら」と駄目押しく二人は別れた。
二三間前に待つて居た母は、
「何んぼお友達だか知らないけれどあんな汚ない姿の娘に聲かけるなんて、お前も餘程どうかして居るよ、どこの娘だえ」と恐い顏して聞いた。

女の虛榮心は、他の虛榮に對する反抗心を書いたもので、女の特點は一應讀者を頷かしめる。而し此作者のいつもの作品に伴ふ隱みは、どうも上滑りといふて點ある。（評）

閨秀作家に就いて

閨秀作家に就ては彼此議論をする人がある。中にもメーテルリンク等は女性は精神生活を全然有つて居ないといふやうなことを言つて居るが併し近代佛蘭西の小說を見渡すと女性の勢力が段々擴張せられて來るやうである。殊にノアイユ伯夫人、ナエラール、ドゥーヴイル女史フエミナ女史マルセルチネール、女史の如き連中が出て來て大に斯壇に重きを爲すやうになつて來た。

斯樣に勢力を增して來た理由は解釋するに困難である。尤も是等女性が忍耐大に努めるところからでもあらうが、また近頃女性敎育の大に進むだといふことも確かに其一理由であらう。高踏派の文藝に隆盛だつた時分の文藝としてはルコント、ド、リイル、アナトール、フランス。ヘレヂア。マラルメ等の人々があるが、之等男の作家があるが、此人々から降つて、現今男性作家の立派人々を通して觀察すると、何物か是等に缺けたものがあるやうに思はれる。此一種の「何物か」を女性作家が有つて居るのである。

マルセル、チネール女史は拉丁語を研究した。ノアイユ女史はロンサールを讀むだ。レニエ夫人は其父から嚴格な敎育を受けた。斯樣な素養があるので閨秀作家が現今小說壇で優秀なる地歩を占めるやうになつたのではあるまいか。加之今一つ大なる理由がある。少くともレニエ夫人及びノアイユ女史は男で無く「女」といふ立脚地から人生を觀察したといふことである。從來のみならず現今日本の閨秀作家等は男子の作家を摸倣して居る。（昔の日本の閨秀作家は左樣で無かつた）例へば佛國文學史上で重きを成して居るヂョルヂ、サンドの如きは男子模倣の著しい作家である。之に反してノアイユ女史の「新しき希望」等は全然女性の立場から筆を執つたものである。此事が閨秀文學史上佛國の革命と謂つて宜いのである。

マルセルチネール夫人の作を今一々列擧して批評する餘裕は無いが兎も角女史の作は現代滔々たる婦人作家の上に秀でたものであるといふことを言つて置く。滋味があり詩的要素をも含んでしんみりした悲哀の分子もあつて而かも其を盛るに變化の多い文體を以てしたのであり且又思想の貧しく無いところが珍貴の價のあるところであらう。

けれども全體から見ると閨秀作家の作品には見遁すことの出來ない缺點がある。男子に反抗して女子の權威を示さうとしてか何うかすると戀愛問題其他感情問題を女子に都合の宜いやうにジヤスチフアイしやうとしたところが屢々認められる。若しさうで無ければ餘りに自己を露くして只青年子女の娛樂にしか成らない作品を示したに過ぎないものとなつて居ることである。唯有の僅か描いて面白いのはといへばかの有名なヂイプ女史の作品であらう。『學鐙より』

新體詩

横瀬夜雨選



○規定　題意も材料も韻格も凡て自由なり要するに眞情を歌へば可なり三十行を越ゆるべからず一行には一句以上を書くべからず凡て振假名をつけることと字體は明瞭を要す乙種の賞を送呈す

○かいくゞり（推賞）

信濃　太田喜志子

…其哄笑……、
突然の物の言ひぶり、
胸開く……さあれど迫るる悲しみよ
ああ、平生はゑまひ、かずなきわが
兄の——。

放浪を、いのちの人に、
よりどころなき白晝の巷、
すがらんはたゞ君に、と
たゞ君に……。

暗がりにいよ〳〵拗けりゆく君の、
胸に同情きける日、
「骨肉といふ名尊とし」と
泪ぐみし瞳の——深く印象りて。

（灰白の雲を破りて、靑の空くゞり
來し如
鳥よ鳥よ、すが〳〵し木の間に唄へ
せゝらぎよ——木の芽の香よ——
「明日散らむ花は好まず」
石くゞり、額ふるる小草、
あゝ新生らしきよろこびの、
しみ〳〵と胸にひゞくよ）

「骨肉といふ名尊とし」
みぶるふはたゞ二人、
ああ白日にして、
人生の辻に迷ひ泣く影二つ、
すがりつゝいだきつゝ。

すぎ來し方もゆく方も——
（日にてらされてかわきける手拭）
とたゞ束の間を、
天地自然のよき音に目ざめ、
低ら〳〵誦するこのうた、
哀愁のこゝろのひまを、
かいくゞる、
ああなどらひの、このこゝろ。

心狂へる兄の年少き妹にすかさるれば、雲なくゞり草なくゞる鳥のごとく、たまゆらは怒りのたこむともあるな歌へるもの。嗚呼されどこの涙いつまでか悲しき人にともなはむ、

○窶れ（入賞）

熊本　夢みる人

妻じやもの母じやもの

物影にひそみ泣きする
世の憂さは折々あらめ。
夫おもひ子おもひて
ちさき胸しどろもどろに
亂るゝは折々あらめ。
昨日なり里の伯母樣
久し振り妾たづねて
變れしよと涙ぐまれぬ。
有難さの身には染めども
さりとてもこの變れやう
さな心配り給ひそ。
妾とて今はしも早や
一つ家の母なれば
妻なれば物も案ずる。
あゝ伯母樣かゝる變れの
影にしも樂し世帶の
うまし味はこもると覺せ。

新人嘆、

【秀逸】

○千疋すずめ

阿波　長曾我部菊子

ふりさけ見る――日はきらきらと白く光つて草の實と木の實が小さく地にこぼれて、――こぼれた、其上を白く光してゐる。人影たえて……、ああ！などかくも靜に平和げる白日ぞ。

眞紺色の新らしの仕事着を緋色のくてもて、ひきしめて、
畑へ降りれば。
（弟の我をいたはる優しさに）
鍬を置いて、手甲、きゆとしめ
弟が來ぬ間に。
來ぬ間に、――。
あしこまて、しよと立ちあがれば、
ばつぱばッととひ立つすずめ――
――二十……四十……千匹雀！
千疋すずめ、一列は桑をこえ、――
丘をこえ藪をめざしてはたはたと――

三味線の調子に乘つて舞臺て踊りを踊つてゐるような氣がしてならない、駄目だ。

○哀れなる百合

和泉　金田香雲子

日は未だ出てぬ夏の朝
紅に染む雲の下にて
綠の草を苅らんとして
目に入りぬ――
足もとの野いばらの繁みの中に
狹く咲く百合――。
花破れ、莖ゆがみ、
病めるが如き葉に浮ぶ
白露は涙に似たり
魔の如きのいばら恨む――。
（星の消えざる朝より
月の輝く夕まで
主につかはれて苦しめる
十七の妾にも似たり
野茨に苦しむ白百合）

廣き平野に咲きませば
蝶は戀ひ、鳥も慕ひ。
美し姿に人も愛で
暖き愛の御光うくべきに、
やよ白百合
愛らし。

○青ざめ心

熊本市　峽よし子

東の天の一方
黄色の雲ぞ流るゝ、
薄暮を悲しき彩に、
斯くて日は今沈みゆく。
打ち顫ふ落陽の吐息、
悲しみの樂の一すぢ――
靜寂に沈默せる杜の、
老榛に泌みてぞ入りぬ。
ふと怪しかすかに響く、
我胸の空虛の底に、――
現實の悲哀か非ず、
懷かしき過去の追憶、――
あな懈し――青ざめ心。

非常にまづい詩をよこす時と、これはと思ふ詩を下さる時とある、どういふもんですとかう詰問されてはたまるまいが、も一足さきへ出て下さい。



ゆふぐれ　青森　てる子

○森

日暮里　細谷鏡子

はら〳〵と葉ずれの音す森の奥、
たどりゆくかな世をすねて、
身にまとひたる黒衣の、
天地に一人居殘る心地して、
現世を呪ふ人の子の、
足にからめる蔦かつら、
あゝ現世は闇なれば、
丈なす黒髪結ばんと、
一度梳りしくし折れて、
散りしは何ぞ、
黒髮かむつる木の葉か、
我れ十八の
年をむかへしあしたより
暗黒のまくは世をおほひ
我をも暗にはうむりぬ、
おゝ森のおく、
胸に燃立つ青春き炎の
天地にひろがりて萬象を
灰と化す時あらば、
我も灰となり殘す思もな
からんを、
そは胸の野走る駒の夢、
熱せる血潮あふるゝ涙泉に、
沈むが我れの運命なる。

丶凄殺なる森のおく。

青春、何の悲みありてかくはうたひ給ふ、飛鳥の山にのぼりて花に遊び花に酔ふも亦可ならずや。

○落椿

越後　文枝

鳥の甘音にきゝほけて摘みたる花を
口にあて、
笛にかへつゝふと吹きぬ椿の花——
束の間の生命に匂ふ微笑よもろく碎
けし椿の花。
熱乎/\と視つめておぼゆ冷心
花は地にとかへすとき戀に觸るるを
厭ひしか心臓に根ざす花ならば
生の息吹に咲出でむ、
花よ、椿の花よ、地に落ちて、
鹽の苦汁にさはりけむ、
強ひてたゞ誇るとすれど、
そののく花と我は見るなり。

この君また『鏡に向けばしら/\と、涙ぞつたふ。萬人の瞳あつむる髮ながら、重き鉛に目ぞくらむ』と歌ふ、ああ信濃川浪わきかへれ今ぞ越す君がとつぎの車めぐりて。心鏡ひとたび曇る、巨萬の富も何かせむ、悲しきかな。

○好かない人

稲岡　田中とよ子

好かない人が又も來た、うるさい、私
は居室へ逃げて來た、捕つたら何と
せう、熟視められたら何とせう、も
がいてあせつて誰を呼ぶ、母樣と姉
樣と、けど女だものそしてあの人の
味方だもの、お丶嫌、嫌、誰か剛い、
私を抱いて逃げ得る人てなきや、誰
ぞ賴んで置う、此頃は母も姉も始終
あの人を賞めちぎつて、はしやいで。
松婆まてが何に彼と優しゆうて坊樣
らしくて好いた方、なんてほんと腹
が立つ。
額にや青筋出して。髮はてかてか光
らして、つる/\衣服、彼着此着、
ほんに嫌らしい、此度見たら必と
/\と懸命に睨めてやるわ、出て居
てやらうか如何しやうか。

それよりかいゝ事がある、第一かぐや姫の故智に倣つてそこらに遊びずり廻つてるげじ/\をお吸物にして喰べさせると、お皿へは丁度今葉櫻の葉を喰ふ虫があるからあれを豆腐和にして附けると。それて利かなかつたらあきらめてお嫁に行く事。

○浪

直江津　木島しのぶ

私はジツと向うを見て居る——
と白い浪がひどい音して板金に
ぶつかつて汐を散らした……
次のも同じこと
彼方の岸の——彼板金
あれは私が六ッ位のころ
玉姫丸といふて、姫樣の舟だつたが
此の港で沈んで、
いたがね丈殘つて——後は浪にさら
はれてしまつたのだといふ。
姫さまは、自分の船が知らぬ他國で
沈んだと知つた時
どんなにがつかりされたらう
「寒いに何してるの——」

と弟が――手にすがつた
私は運命〱とくり返した
大浪が幾ツとなく瀬折り來る
やがて――また――
玉姫丸のなきがらに……
ぶつかつて青くうづまくだらう。

破れたる舟、娘の舟、何といふゆたかな詩趣てせう。「海の墓」ととなへらるゝサルガッソー海にはこんなおもむきは見られまい。

○月の下

丹波　藤田靜枝

萩垣の長うつゞけるあたり、
朧月夜の門に凭る、亂髪の狂女、
あな影とし見れば影なり、されど、
其影の蔭ありほのながら。
我見ると知るや頓に、
何物かうかゞふ氣配。
夜は更けぬ月は今一しほ映えぬ、
折りしも戸にうつる影ゆらめきて、
女は此方をふりかへる、
髪の中よりあらはれし、
顔蒼白うて渡りて、
夜の氣は動くともなし。
「か弱きこの萩垣なり破るはやすし」
かく云ひて女は猶もうつ伏しに、
顔すりつけぬ、
悲しみに堪へ得ぬとしも。
されど、身じろぎに、
白き手は蔭より出てゝ、
頸毛かすかにうちふるふ。

「この垣一重がくろがねの」と泣いた袖萩はめくらだが、この女は化物のやうである、蔭の中から白い手が出て。

○教會堂

門司　臼井幸子

やわらかき春の光は
教會堂の壁を照しぬ
塔は立つ
靜かなる雲のゆきかひ
青柳は緑りくゆりて
ふとみるは
五彩のほのほ眩しげに窓よりもれく
はた聽きぬ
「聖マリヤ、イエスのみ母、」――
人あまた祈禱をさゝげ
天國の光明をあそぐ
きよきよろこび
賛美歌は一齊に室にふるふ
あかあかと燃えてたゞれし
入日の光
消えのこる塔のいたゞき
横しまに影はうつりて
新星の光りきらめく。

聖。

○花束

出雲　岸ため子

からびぬ、花束、色は消えて
臨終の息吐か、ほのにかをる、――
燈の火影はゆるく流れ、
「愛」その屍を青く照らす。
渡島にありと豫て聞きし、
湯の川、仙境、そこに一人、
こゝろよ優しき未だ見ざる、

友こそ在して花をおくれ。
ふとまた偲びぬ、君影草、
霧島つゝじや舊き戀の、
盃、手に取り黄金光る
「追懷」の甘酒つぎて飲まむと。
あくがれ心に花と見れば、
「愛」その屍よ我の魂。

今どきへ六の調子に擬ってどうする、先づ走れ、飛べ、詩は自由なり。

○默だせる島

神戸市　田中ますゑ

魔の神が墨染の大袖に抱かれて
荒波のたけりの中に
さりげなく今し眠るは
あゝそれよ、淡路島
幸薄き我を産みにし——
いと安う汝は眠れるか
あなどてかくは默せる
潮も狂ひ我も狂ふひて
聲あげて叫ぶをも
なほきかざるか
などてさは答せざるぞ

ちつとも淡路島らしくない、どこへ持つて行つても同に合ふように調法な名ではだめだ。

○思ひあぐみて

丹波　鹽見喜代子

思ひあぐみて柱によりつ、
涙涸れし眼開けば、
見ゆるは唯素黒う佗びし壁の面、
夕暮時のごともさびしき。
あはれ見よ其面を、
いと小さき裸形の人ぞ過がひ行く。
男女と別ちえぬ妖の影のいくつ、
そが中を雄々しの君もはた吾も、
共にこそ行け戀もなく涙もあらず、
冷やかに見返りもせで、
自がじし終局にぞ急ぐ。

ねがはくば君にすゝむ他の糟粕を甞むる勿れ。君には君のうたあらむ、われをしてまことある聲を聞くを得せしめよ。

○朝にして

滋賀　中川つる子

秋なかば
庭の木犀
うつらうつら薫りて明けぬ
靜かなりひとりし立てば
靜かなりひとりし立てば
今こそあかめ
　君がほそ戸も、
君はいま
香をたきこめし
黄八丈の袷着まして
ふみをこそひもとけ今し
書をこそひもとけ今し
霧わくまどに——
　かくも思ひぬ。
つくねんと
たゞずむわれに
うすあかる星の情も
馴寄りくる鳥のしらべも
馴寄りくる鳥のしらべも
さとり得し今
　君がこゝろと。

何故に同じ詩の句を三たびくりかへししか巧いとふべし。

○かりそめのなやみ

あや子

かりそめのなやみ心地に少女子は
ふせりぬあはれ何とい
ふ事もなくして
衰ふるうなじの細りさ
びしげに
澄める眸に立つ秋のう
れひ宿しぬ

黒髪の縺れも知らず柔
かう
素直にこそは生ひ立て
れ何處を知らに
あこがるゝやさしみ心
秘めつゝを
口紅深くつゝましう許
さぬキッス

母父は枕べ近つめ寄て
眉沈ますその一夜あるゝ野分に
亂れたるサフランの花芙蓉萩

秋海棠も摧けたり芭蕉の破れ
しなやかに弱手を母にあづけつる
少女子はたのみ少くなりゆきぬ

あゝその夕小雨する花の濕らひ
あるか無きかに聲細う人の名呼びぬ

少女と誇る色も香も
やがて凋まん我が身なる

死、かくの如くして來るとせば願はくば明日といはずわれも亦母の手に凭りて眠せんかな。



彈琴　青森　江波けい子

○おもひ出

麻布　花子

夢と送りし一年を
また逢ふ春となりにけり
プライドおほき春の日よ
強くさゝやくいまの日に
ふと反省春の憂き日よ
眞晴なる中に葬れる
過去のいく日よ、あゝされど
女と云ふ弱き血に燃ゆ
心をもつ、故に
春しつかなる今の日も

若葉若草かるゝ日も
胸の秘こどかれもせず
おもひて泣ける春の日よ
過せし方を反省り
長しと笑める我が袖を
重ねて胸の底深く
破れし胸をおほひても
我が身の衣は變らねど
あゝ、破れたる苦さおもひ出

もちつと新らしく。

○停學

美濃　條田　欣子

あな暗し、離房の一間、
人も見ず、わびしき思ひ、
たゞ乳母の、人目忍びて、
君のこと〳〵、耳に呼やく。
思ふ人、思わるゝ人、
あゝ今は、帳の裡に、
小さき胸の、たぎるがごと
もゆる思ひを、壓へおさへて。

これは？

○朝の色

下關　山本　芳子

遠き昔にあめ地の、分れしさまは白雲の、白むと見ればほの〳〵と、山の端近くあらはれて、遠く茶色は流れけり。

こゝにかしこに雞の、明けぬと告げし鳴聲に、有明月も影うすれ、空にひろごる雲の彩、うす紅筆にそめなせり。

うすべに色のその中に、わざの妙へなる藝匠が、紅一點をうつと見て、まもれば細き幾條の、もゆる炎はうごきゆく。

みなみに走り北にちり、燃えては消えて搖めきて、ただ時のまに綾錦、あやしき幕をおしわけて、あしたの神はいてませり。

古し。この才惜むべし。

○闇のまぼろし

岡山　高木　清子

ふと思ふ闇のまぼろし、
白きはた赤き魔のかげ、
つと顯れてつと消ゆる、
空華の花瞬間の彩。
淡き影、にほひもあらぬ、
赤と白、闇をあやどる、
其影のみだれきらめき、
あざ笑ふ白き齒の並赤き顔、
白き顔赤き頰、あな、
赤と白何事かさゝやく如し、
聞け、そは遠世の人の、
華やかの笑ひさゞめき。
冷かなりや白き顔、
力なくひゝと笑ひぬ、
されどまぼろし。

闇とか幻とか空華とかいつまでもおなじ事をくりかへすよりか御自分の詩を作って下さい。

鄕居　水戸　横瀨生

美文



○規定 抒情、叙事、叙景等凡て他欄になき文章一切を含む字體は明瞭に認め必ず句讀を切るべし一人一章に限り半紙又は罫紙に認むること匿名を要する者は本名を別記せよ二十四字詰三十行限甲種の賞を送呈す

○何となく（天賞）

阿波 長曾我部菊子

一

（あはれなる女よ、泣け。涙は君の友なるべし）受けたる此は絶えて久しき遠野の人が我慰めんの只一言の辭。

「猶父母のいまそかりせばと慈愛の昔も悲しく思ふ事のみあまたありて。古里や臍の緒に泣く年の暮（芭蕉）」

かかる悲痛は今こそ胸をさし貫きぬべう迫り來て、—孝行といふ事を眞實に知つた甲斐もなく思ふたことの露いささかも出來ないうちに口惜しいおんみまかり。其後は悲しいのぢや足らぬ。辛いともいひにくい。むしろ「驚き」に腦を打撃して、夢幻の境に彷徨して泣く術もなかつた私、かくて今、（泣け）舊の人が昔の如く命ずる言の（泣け）といふのにはじめて忘れてゐた双眼の泪。

（傷心の友に、三月十九日）ああ君も亦傷心の詩人!!……はりさけるやうな胸をかかえ机に伏し沈んで私は泫然として泣いた。

二

何となく通りすがらの道から南の方に間近う見ゆる木槿垣、瓦葺の中門、平家造りの一かたまりを眺めやつた時、一人の女があちらをむいて立つてゐる。ぢつとイつてゐるかと見るにさうぢやないので、——立ちどまるといふ程ではなうて歩をゆるうしながら私が見てゐると、女は頭をつと仰向にして、白い纖い手をのばした。

のばした片手のとゞいたのは彼の木槿垣、その中ほどから少し上であつた、そこには二輪の白い花!!。木槿は今花の盛りであつて垣の右にも左にも咲いてる數は多いけれども何のゆかりか目にしみ入つて取らうとまでに魅したる二輪の白木槿、見てゐると——見るほど

に、葉が忙しく動いてもぎとつた手が下りる。花が降りる。女はうつむいて、なにかごそ〱してゐたが、やがて左の手を廻して、S卷のあとを探してピンを拔いた。つゞいて一輪の花、ぴつたり黑い髮に咲いてしまつた。白い色が床しく榮えて。

（ああ、女、こちへ、こちへ、——）向けかしに念じて居つた念願て、果然ふりむいた眉、眼、口！。

私は歩くのを忘れてゐる。

「一」も好いが只、取りとめぬ惑情に過ぎません、「二」は更に好い、如何にも何となく心をひきつけるやうてす、斯う云ふ觀察がうまく出來るやうにならねばなりませぬ、いつまでも自分の身の上の情緒を繰返してゐた處が初まらぬ、藝術家は世の中を對象にしなければならぬ（評）

○池の花（地賞）

金澤　むらさき女

池の中に、美くしい花が、咲いてる。何といふ名かしらぬ。柔かく吹く風は池に、小さな波を立たして、無名の美くしい花を、ゆら〱と動かす。美くしい花は根がないのかしら其度に、右へ左へ浪のまに〱動く、私は岸に、其花をじつと見てゐる。向の岸にも私程の年頃の女か、見てゐる。私は花が私の方へ來ればよいと思つてゐると、絲か何かて引つけられる樣に、向岸に近づいて行く。あらどうしてだらうと思つて、私の心も花に連れ立つて、向岸に近づく。……と女は無意識に二足三足進んだ。そして熱心に見てゐる。又花は近づいて、手を延したなら、つかめる位になつた。私の魂は皆な花にいつた。——女はつくばつて膝をつき、細い青い手を出して、つかもうとした。——私の心は、取らしたくないッ——。すつと花は横へずつた。女の躰は横にもじつて袂の先が水にふれる。それを知らぬ。私の心も横に行く。風はちつとも吹かない。女は出來るだけ、躰や手を延して花にふれやうとした。あらつ——と思ふと風もないのに、浪が立つて、今度は花が少し遠のいた。女は氣拔のしたやうに、うらめし相に花を見る。……私の心もどうしてかもう、拔けてしまつた。そして安心したやうに、ほつと息をついた。女は立上つた。そして思ひ切りよく、走り去つた。私は驚いて周章た。心が不安になつて、あの花がいやになつた。——あの女が日のくれるまで美くしい花を得やうとしたら、私も暗くなる迄こゝにゐやうに——私はあの花を欲しいとも思はぬ。……に花はゆら〱と此方へ來かゝつた。何とも云はれぬ——何かこう罪でも犯した樣に——厭な氣持になつて、怖ろしさに耳を蔽ふて家へ走り歸つた。今でもあの池に其時の樣な美く

しさて、花は咲いてるかしら。

女が持つ或る心の動くやうに動いてゐる好文字、讀んで行くと恍惚として池に漂ふ花のやうに心が動いてゆく(評)

○悲しき花束（入賞）

布哇　上土井定子

マンコーの葉の密なる茂みの間から朝の日影が青地の綴錦を織つてゐる、姉さんはサンデースクールに行くとて白のリボンを赤い髪に太う結んで、姿見鏡の前で胸のバタンをはめてゐらつしやる、妾と妹はベランダーのチヤーに腰掛けて唱歌を謠ふてガーデンの方を眺めて居ると、朝鮮人の花賣男が藤で編んだ支那製の籠を提げて花召せと入つて來た。白、赤、紫を混ぜて束にしたアスターの花を示す。あまりに美しいので母様の御枕邊に持つて行き買つて頂戴と乞ふ、母様はいたつきの重い枕をもたげ給ひ、見事な花ではあるが今日はお金がないから返してお出と仰つた。そして涙ぐまれた、欲しき心は燃れどもそのお顔を見た妾は悲しい思ひが胸に起つたので花を返して、再び御枕邊へ行つて見れば、妹のメーリーは泣いてゐるたつて買ふてくれと願つたのであらう、神經過敏になつてゐらつしやる母様も泣いてサダーと妾の顔を泌々と見て、お前は早十三にもなるから、母がこのやうに病んで居る事を辨へて、妹や弟をおとなしう遊ばせねばなりませぬ、よう考へて見なさい、お前方六人の同胞をお父さん一人で働いて母が一人で育てゝゆかねばなりませぬに、母が這麽に病んでお藥代も澤山いりますから一仙でも空しう遣ふてはなりませぬ、昨夜ドクターは何と仰つた……母が死んだらどうなさる……だからよく言ふ事を聞き分けて下さい



風呂上り　伊勢　菊地しも子

よ、母が癒つたら奇麗な花を澤山買つてあげるからガーデンにても出てお遊び、鉢植のロースも咲いて居らうからと、母樣はせつなき胸を押へて仰つた。妾は悲しうて〳〵腹一杯泣いて見たかつた、妹を連れてガーテンに出れば、マンコーの老葉が一つ二つとほろ〳〵と落るにつけて若しや母樣もこのやうにと思ふて泣いた。それが三年前の今日てあつた……ア、思へばあの時の母樣のお言葉が最後の敎訓てあつた、ア、今日は母樣の墓前に、この花を奉る身とはなつた、せめてもう一度ォ、美しい花とおつしやつて下さい。

事柄と云ひ、周圍と云ひ、全く西洋のリーダーても讀んてゐるやうて、文章はさほど熟達したものてもありませんが、我等は文章以上の味ひを讀んて快感を覺えるのてす(評)

【秀　逸】

○電車の中

京橋　花　子

風が烈しく吹いて、ほこりがひどくたつ日だ。

私は何の氣なしに一寸外へ出たが、急に御友達が尋ねたくなつて京橋から電車に乘つた。

私は一方の隅があいて居たから、そこへ腰をかけた。

日本橋て一人の女の人がのつて、私の隣りへ腰かけた、蒼白い顔をして、うつむきがちて、何か心配をして居る樣だ。

私は何處かてあつた事のある顔だと思つて、考へてみたけれど、何處だか思ひ出せない。

電車は須田町に來た。大方の人は降りた、私の隣りの、靑白い顔の女も降りた。

萬世橋で、また一人の女が乘つた。

髮を廂に結つた二十位のハイカラて、ふところから回數切符を出してきつた。指には三つも指輪をはめて居る、私は何だか頭からをさへつけられる樣な氣がした。そして、フンあの位私にだつて……と思つたが、又不安な樣な、をさへつけられる樣な、いやな氣持ちがした。

女は上野へきてをりた。私は、ホッとした。

女が女を見て壓迫を感ずるのは如何にもあることてせう(評)

○物に觸れて

遠江　月　螢　子

○

私が裁縫塾へ通ふ途中にちよいとした坂がある。兩側は汚ない溝で其の溝の緣から一尺ばかり距れて五寸をき位に石が立ててある。私はどうかすると此の石の内側の溝の緣を歩く。それは面白い程輕くサッサと歩く。態してをつこちない樣に標まて立てて置くものを、他の目から見たらどんなにか可笑しい事だらう。けれど私は態うい ふ處を步くのが好だ。ちよい〳〵步いてみ

たい。をつこちないから面白い——。

○三時が鳴ると何時も縫ひ物を片づけて歸り支度にかかる。其際針を調べて先生にお目にかける。調べる時友の誰彼は針を一本々々ぬいて、恐る々々針山を採むけれど私は目に見えるだけの針をとつて了ふと、イキナリ針山をグッと握るのが例だ。私は恁うして幾度も手に深く針をさした。其都度何だか珍らしいやうな氣がする。受けた傷は痛いのに——。

○いつか友と二人て街を歩いてゐた。すると或家の門口に巨木の引割つたのがあつた。友はいつた『まあ！、この木を恁那に引くには大變だつたでせうね』。恰も私はこの木がどの位の大きさに枝葉を伸して幾百年を森の神秘に囁やかれてゐたものだらうかなどと考へてゐたので一寸相槌を打つのに見當がわからなかつた。この友のやうな爭そはれない刹那の優しい、人らしい、眞面目な感じが浮ばないうちは、まだ／＼私といふ人は、僅かにどつかに傾むいてゐる！。かたよつてゐる！。さうだと思つてみたら單純な事物に對してすら起る他人と自分との感じの相違の大さいのに今更らしく吃驚した。私のやうな人が少なくはないと思つてはゐるけれど——。



春の夕　仙臺　佐藤たすく

三つとも意味があります、さう大して人にほこるほどの事もないが、それでも平凡てはない、わざと奇を衒ふやうな口吻のあるのはいけま

せん(評)

○わかれし人を

横濱　さゝ川

あ、あ、とう〱別れてきたのだ。と思ふと滿身の血がにえかへるやうにおぼえた。

知らなかつた昔に返りませうと、云ひきつて涙一滴もなかつた私が、歸るみちあのいつか、あなたを待つて居た櫻の木かげで泣いたとは、思ひもなさらないでせう。わかれてつく〲とあなたが戀しくなつた。

いまかうして獨り夕闇のうちに座つて居ると、あのうす暗い壁の面に、あなたの姿が浮き出るやうにおもはれてなつかしさに、幾度かあなたの名を呼んだ。けれど響きのない悲しいいまだもの。

宥して下さい。惡うございました、悔ひて居ます。あなたが眞の愛情といふのはそんなものぢやないとおつしやつた言葉が針のやうに鋭く胸をさして、こゝが痛んでたまらないの、今ははげしい悔恨に胸が燒かれるやうで、けれどもうおそい、悔いたつてだめだ私はなぜあんなことを云つたらう、何故云つたのだらう。わるかつたんです、宥して下さい。たゞひとこと謝りたい、けれどふたゝび文を上げることも出來ない今の私、ゆるして下さい、あゝこんなに悔ひの涙は、とめ度なく流れるけれど‥‥、宥すと一言あなたの聲をきくことが出來たら、此まゝ永久に逢ふことが無くとも少しも憾みはありません。

失つたかたちは求めやうとは思はない。戀といふ觀念は斷たうと誓た私、ふたゝびあなたを戀人とは呼ぶまい、戀人としてのあなたは忘れませう。けれどね、私は愛する女よと此胸の思ひを愛てた人の面影は、永劫忘られぬ。慕ふ心は止まないが、それはあなたぢやない影なのだ、はかないがとこしえに消えぬ影を慕ふのだ。此黑髮もいのちも影に捧げて、私は決して人妻とは呼ばれまい、暖い家庭の人となれとおつしやつたあなたの御聲は、闇に響いてくるけど‥‥いえいえ云つて下さいますな。

あゝあゝも一度あなたを戀人と呼びたいけれどいゝえ再び戀しいとは云ふまい、戀人は影なのだもの、たゞあなたが、友達にならうとおつしやつた言葉だけ、一生私に命のあるかぎり記憶さして下さいせめてそれに滿足して、あなたの御幸を祈りたい。もう歎くまいよ、運命のまに〱微笑んで生きやう。ぬれた頰に强ひて笑みを浮べやうとしたが出ない。それにかう落ちるなみだは。

悲しみはないのだけど、さびしいからあゝこんなに、涙が流れまする。

痛切(評)

○小女氣

羽後　菊池りう子

人間の心程解らない物はございませぬ、私は、自分で自分の心の甚しい動搖に此頃は只驚き呆れる許りでございます。私と操樣とは遠緣の親類、小母樣も小父樣も、父樣も母樣も末には操樣に、露樣を……と互に不言不語の間にお心組が成立つて、もうちやんと結納迄もすんだ仲の樣に、幼い時から小母樣等は、露樣が宅にゐらしつたつて今の方々の樣な束髮は厭ですよ、なんて。反物抔買ふ時でも來合はして居らつしやれば、私は華美なのが嫌だから露樣其はおよしなさい抔と殆ど姑樣になりすました樣に仰有つた物です。多くの男子の間に只獨り我儘な末娘で育つた私は、十四五迄は、小母樣の親族以上の其そぶりにも何とも思はず、他の孃樣方の樣に不安……其樣な事は夢にも感ぜず、孃ちやま一點張りで飽迄我儘な小女氣を募らせ〳〵して十六といふ年を迎へました。十六も秋に入つてから、私は何故かひつちり出嫌ひになりまして、よく兄樣達に交つてはやつた球投、男の樣な遊び許りを致してた私は、自分でも解らぬ位、陰氣になりまして、室に籠つては本抔よむ樣になりました、其頃中の兄樣も丁度其樣で――。私は兄樣の本箱の中から手當り次第に出して讀みましたのが、噫彼てございました、一葉樣の文くらべ――。美登利の幼心の變りゆく樣！私は全く作中のみどりにかぶれて了つたのでした。操樣は其頃中學の特たい生で其上ボート。ベース抔のチャンピオン。中學の華と迄唄はれて居ました。或日ふと操樣と私の末の事……を他人から聞きました。其頃の私は既にセンチメンタルな惱になつて居まして――。そう、沈む日輪を見て譯もなく泣いたのも彼頃でございました何故でせう、私は特たい生の標をつけて、陽々として露ちやん抔と元氣よく來られる操樣が厭で〳〵堪らなくなりました、日曜抔はよく宅に隱れてると、操樣はずん〳〵入つて來られて何か仰有るので、私は厭で、厭て泣いて了つた時も一度二度ては有ません。そうなると小母樣の何かと世話やかれるのでも、烈しい壓迫を感じまして、こんな家に嫁ぐのなら死んだ方が……と眞から思つては、小說許りよんで泣いて居ました、原因？さあ、ない事もございますまい、中の兄の親友――操樣は常に肺病詩人――と呼んで居ました……まあ其は申ますまい。そんな風て一年二年は過ぎて了ひましたが、父母は私の小母樣操樣を烈しい嫌ひ樣をみてとり子に甘い親は、そんなに何なのなら――しかと約束した譯でもなし、只一人の娘だ物――と終其となく心の誓を破つて了ひました、噫彼時の小母樣のお怒り樣たら……。兄の友はまもなく肺て亡くなりました。今私

は十八、元より小女心に眞の夢より淡いきざし……いつか其友の姿はかき消されて・・難なく學校も卒業した三月、私は某豪家から望まれて、五月の櫻頃、日取も定りましたが……。何てございませう、又私の胸には雲が……。其は嫌な操樣！秀才て元氣な操樣が一變した、操樣は師からも望を托されて受けた一高の試驗にも落ちた、操樣は陰氣な泣蟲になつて了ひました。私にさへ他々しく……。人間つて妙な物ですね、さうなると私はぐつと操樣が戀しくなり出してさあ前非を悔ひて〳〵焦り出しましたが、旣に結納もすんで居ましたし又いくら何でも此度は父母にも申されませむ、せめては操樣に一言と接近し樣としても其の出來ぬはめになりました……。目前に散ばつてる緋綾、糸錦！私の心は其纖糸でぐる〳〵縛られて只々前非を悔ひて悶えて居ます、日は一日と暖くなつて櫻の蕾は刻々に含らんで來ます。私の頰はやせました——。

動搖して行く或る心持と、事柄とは然もあらんと點頭かれます、但し情緒の動搖と云ふことに就いて、引きつける感じは與へない、小說の筋を辿つてゐるやうにも聞かれる、恐らく女性としての通有性だけしか現れてゐないからでせう、個人の人格が認められないからでせう、奈何（評）

○死顏（外一篇）　大阪　今西春江

密つと蒲團をまくつた。——

無雜作に紫のリボンて結ばれた色の褪せた黑髮は、紅い朱塗の枕に亂れかゝつて居る。

炭火が灰に化して未だ赤黑くならない前のやうな、妙に白い色をした頰には、薄く紅が殘つて居る。

唇には無數の皺が寄つて、其處にも紅は殘つて居るが、頰の色よりはやゝ薄い。

枕許に置かれた湯吞茶碗の水を狸毛の筆に十分ふくませて、私は輕く死人の唇を濕めした。濕めし終つて靜乎と見ると、前よりは餘計くれなゐが褪せたやうに思ふ。——

「お美代さん……お美代さん……」

私は小聲て呼んて見て、靜かに眼を瞑つた——。

○

若葉した岡にたどりついた。四邊には蝦夷菊が亂れ咲いて居る。私は其中えつくばつて、ぢいつと眼を瞑つた。すると今迄氣が付かなかつた潮の遠音が、ドッヲッ……ドッヲッ……ドッヲッ……ドッヲッ……と幽かに〳〵響いて來る——。慄う胸をそゝくらるゝやうだ。頭がフラ〳〵として身躰を左右に搖られてゐる樣な氣がする。岡も我れも共々に、遠い國え運び去らるゝ樣な氣持ちがする。今現に靜かに〳〵、中空を驅けつて居るやうな心地がする——。

不圖眼を開いた。遠く水平線上より築き上つた峨々た

る雲の峰が、強い眞晝の日光を受けてギラッ〱と輝いて居るのが眼に入つた。刹那!!!——。私は愕然として立ち上つた。幾重にも築き上つた、眩ぶしいばかり白く輝いた雲の峯は、今にも頽れ落ちさうてある。そうして岡も私も微塵にしさうてある——。

私は再びぎよつとして、倚も飛び退さつた。

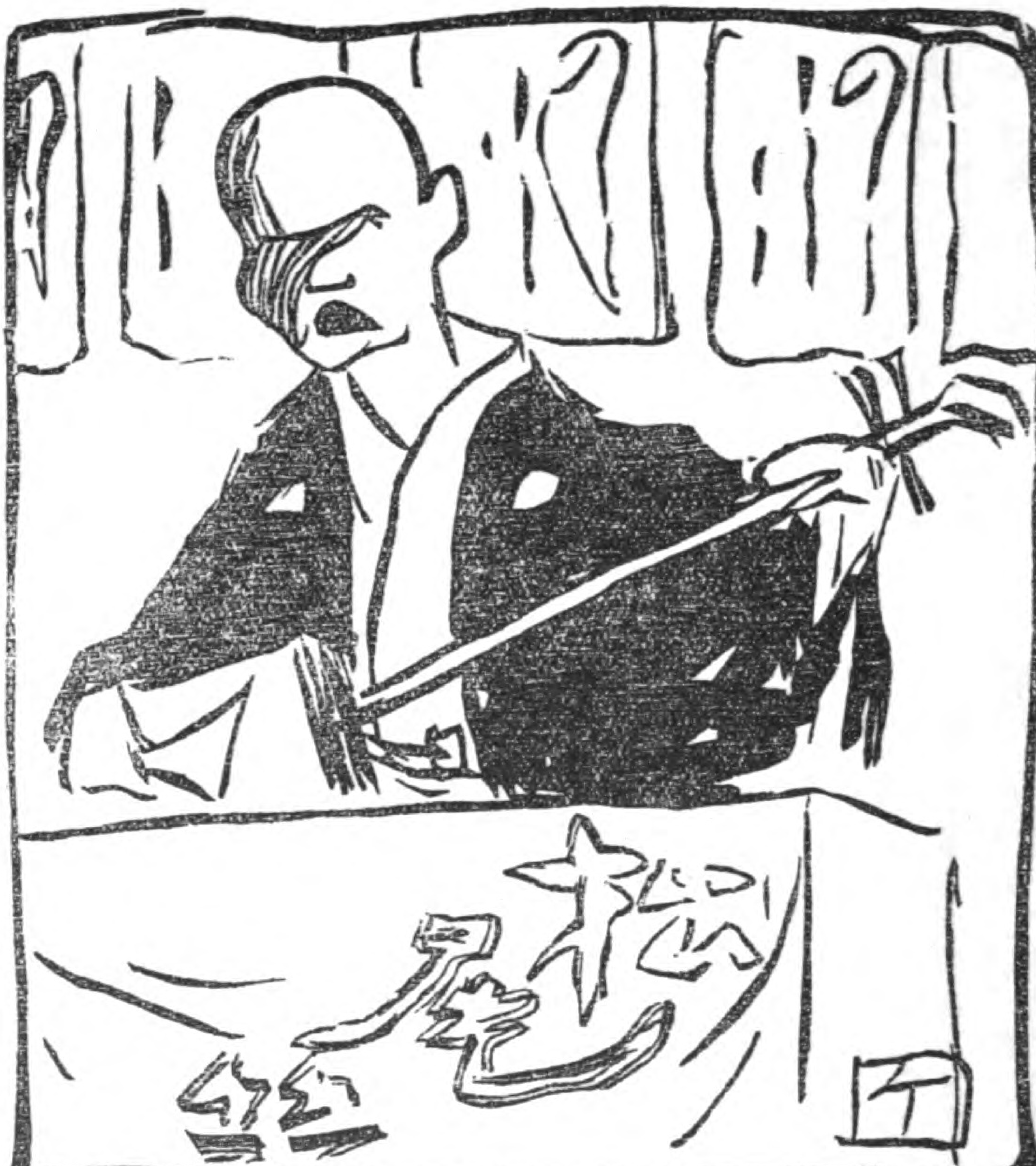
風が吹く——。

いつもあなたは斯う云ふ短いもので、氣の利いてゐるものを書くことが上手てす、特色あつて頼母しく思はれます(評)

○侮辱

臺北　稗貫光子

夏のあした、朝顔の花のまだ露にうなだれて居る頃てした、明日三番の發車て別莊の方へ行き、それから方々へ避暑かた〲修學旅行に出かけますから、當分お別れしなければなりませんので一寸御挨拶にとていつにない永井樣がいらつしやいました「まあ今度は大變お急ぎぢやありませんか」と申しますと「えゝ彼方此方へ旅行しなけりやなりませんから」と得意げに、つと私を御覧なすつて「貴女今年はどこへもいらつしやらなくつて」とおつしやいます、何となく私は永井樣に侮辱された樣て不快て不快てたまりません、つと目を庭の方にそむけますと、さは〱と朝風の吹く毎に草木の葉末にきらめく露の玉がほろ〱とこぼれて、雀一羽羽重げな美しい蝶々を追つて池邊の葉櫻の陰にかくれてしまひました「何處へもいらつしやらぬなら家の別莊へいら



松尾節　　青森　江渡けい子

つしやいな、それは宜い事よほ……」と私は避暑に行くとも行かぬとも云はぬ中に斯う云はれます、私は口惜しさ腹立しさ入り交つて赫と胸にせき込むで參りましたが、辛うじてそれを押へると同時に「御儲……復讐を……」といふ叫びが心の中に起りました「ほ……私なんぞが行つたらそれこそ宜い邪魔物だわ」と自分ながらその詞の冷やかなのに驚いた位です、「あらどうして？」と永井樣はわざとらしく怪訝な顏をなさる「ほ……かくしたつてだめよ」と私はじつと永井樣を見ますと「宜いでせう、いらしても……」と稍言葉は濁つて參りました「折角のお樂しみへ私が入つたら邪魔ぢやありませんか、ほ……」と嘲笑致しますと「何おつしやるか、ちつとも分らんわ」と小首かしげて考へる樣子をするのが尙ほ憎らしいやうなので「ほ…かくさなくとも宜いでせう、よく知つてますよ、彼の小島の一雄樣もいらつしやるんぢやありませんか、貴女といつしよに」と云つてしまふと永井樣は「そ…そんな事」と云つて、はつと顏を紅ゐにうつむいてしまはれました、私は何となく胸がすいた樣で、かすかにふるふ彼女の髮の毛を見て思はずもほゝゑんだのです。

男なら戯談でも濟む處を、流石は女と云ふものは、此んなに一生懸命になるのですもの、恐ろしいわけです（評）

○行く春の空

本郷　笙子

若き心は落著かぬ春の夜に、老ひたる母の影を見ては、え堪えず淚がさしぐまれる、昔から隨分活動的に、世を渡つて來たものが、此頃は腰が痛いの眼がかすむのと、藥のやうにして呑む晩酌の醉ひ心地に、他愛なく眠つて了ふ。私もやがてこの衰の期を見るのだ。花が開くと思ひ出す、咲いたのが散ると猶思ひ出す、山王臺のわたり椢の小路を、ひら〳〵と袖にも洋傘の上にも寒からぬ雪を受けて逍遙した、其人はもう亡き人だ、忘られぬ小造な姿、活々とした瞳、と幻の影が吾が眼に浮んだ、十七にして錯雜なる世を厭つた此友は、自ら函嶺の谷に命を捨てた。

噫、一盛りの春を散る櫻、失せにし人、老ひたる母、「年々歲々花相似、歲々年々人不同」の句を繰り返して、私は黯然として頭を垂れた。古不老不死の藥を尋ねた人もある相だが、私も恐らく、當てなき逢萊を夢見るのかも知れない。無爲を友として只獨、夕日かげろふ細道を、とぼ〳〵と行く此の運命のまゝて、刻々と老の影に包まれるのかと思ふと、凝としては居られない、と云つて私の細腕て、運命に刃向ふ事が出來樣か。鏡に映る黑髮も須臾にして白髮と變るのかと、染々今の時代がなつかしく、惜しくつてならない。風の一吹き雨の一降り、紛々たる落花の前に、老と死と二つの影が胸裏を馳せて、徒らに私を一人、行く春の空を仰い

で見た。

感じが充分に出て居ない、筆が老成すぎて、上すべりがしさうに思はれる（評）

○書けぬ恨み　韓國　原登里子

さつきから、見たくて見たくて堪らないのを、やつとがまんして、勝手元の用をしてしまつて、まづこれでいゝと、八疊の間の炬燵にはいつて、女子文壇を開いて見た。一番好きな美文と新體詩とを幾度となくくり返して見る幾度見ても見れば見る程何だか懐かしいやうな思ひがして、自然に引つけられる様——あゝ羨やましい、皆様はどうしてこんなにお上手な文を、やすく〳〵とお作りなさる事が出來るのでせう。こうして拜見して居る私の胸にも矢張りこんな想ひはいつぱいに滿ちて居るのだけれども悲しい事にはそれを書きあらはす力がない、せめてもの慰みにもと皆様のお作を拜見してはこの小さな胸ををどらして見たり泣いて見たり——でも、これが私にはどんなにか樂しみになりませう。例も夕方お縁に立つて、あの、人一人通らない枯野や、静かに〳〵暮れてゆく夕べの雲を見て居ると、もう何とも云へない様なものはかない心持ちがして堪らない、こんな時には思ひきり泣いて見たらばいゝかも知れないけれども——と云つて涙の出ない悲しみなのですもの。こう云ふ想ひは度々起る。この何とも云ひえない寂しみの心を、筆にあらはす事が出來たなら、どんなに胸がかるくなるでせうか、あ



糸つぎ　和歌山　木下かず子

ゝ私にはその力がない……と思ふと堪らなく悲しくなつて女子文壇を胸に當てたまゝ炬燵につッぷしてしばらく泣きました。

書けぬ恨みを書いて、此れだけ書けるのですもの、何だつて書けないと云ふことはありません、自分の頭腦を働まして御覽なさい（評）

○夜の人

釧路　黄瀨女

夕やけの空の波に映じた景色を海に面した西小路から一寸ながめて通り越し、家路をさして行くのである、何處の店先にも電燈が點いて、燈が霧に映じてボーッとぼかした樣だ、華やかな夜の町だ。暗くなるに從つて霧が深くなつて來る、人々は雲の中でも歩む樣に暗からバッとあらはれて、又もやの中へつーと消えてしまふ、なんだか夢ても見てる樣に、私は東へ東へとたどるのだ、ふとそこの横小路からバタ〱と足音がしたと思たら、もやの中からスーとあらはれて來て、私の二三間も前になつて歩いて居る七八つの子供は、ちんばを引き〱、身には破れ衣を着、わらぞうりをはいて、とぼ〱と走る樣に、

私はなんだか其子の後をつけて見たくなつたので、早足になつてついて行くが、チヨロ〱と歩む子供の體が、やゝともすれば霧の中へ消え失せそうなので、子供の頭をばかり見てついて行くと、子供は又早足に走り出して、左側の小路の方へかけて行くから、私も其方へ向つて歩み出したら、其處の角の駄菓子と筆太に書いたあんどんをつるしてある家に入つた、あの子供の家かと思ふて見ると、子供はすぐ前にざるにつんである煎豆を、其小さい手でわしづかみにした。

はつと思つて家の中をのぞくとたれも氣がつかないらしいか何の音もない。

子供は、と見ると、其ちんばの足を今にもころびそうにして、一目散にかけて霧の中へ消えてしまつた、私は何處とも知らず、あの子供があの煎豆を食べ終るまて、何事もなくたれにも見つからない樣にと祈るのであつた。

霧の降る町の樣子が、正直に書けてある、事柄は無解決の人生の斷面、意味をつけてない處が却つて好いかも知れぬ（評）

○苗床

姬路市　富岡綾子

美くしい愛らしい草花のまつ盛りはどんなに嬉しからうと思ひ、さて今空地になつてゐる裏庭を耕すことを弟に頼むと「郊外散歩すればよろしいてせう、自然の何の方がいくらかよいか知れない」つて。それはさうだけれど、毎日々々行くことも出來ないし自分の育て上げた花を見るのは――と隣家でとんが（鍬の幅の狹いもの）を借つて來て裾をからげて塀圍みの裏庭に立つた。

輪廓の明かでない白い雲は溶けて流れるやうに行く：：東南に――私の前にゐた大坂の方に――大坂にははや子さんものぶ子さんもゐらつしやる、今もし襷がけのこうしてゐる姿を御覧になつたら：：どのやうにお笑ひになるだらう、といらぬことを思ふといつしかとんがを持つてゐる手がゆるんでゐる。

が、身體も幾分か健康になるだらうと、踏まれて固くなつた地をとんとん掘つた。中々堅い續いて二三度掘つた、とんがの先がこちんと音するからよく見ると石だ、それを取り除けてする、瓦が出る、石が出る、砕れた土瓶が出る、硝子瓶が出る、土よりもそんなものゝ方が多い位で、私も、まあ！と一寸手を休めると、動いてゐるうちは何ともなかつたのに、胸がどきどきして掌がわくわくする。投り出された石などは「私等の友達はまだまだありますよ」と云つてゐるやうに見える。

それでももう一うねりの半分ほど出來た、と急いてする。掌のよく働く部分が痛いので見ると、一寸色が變つてゐる。「あはゝゝゝ」誰が笑つてるか、と見ると垣越しに弟が此方向いてゐる「姉さん、疲れますよ、あとは僕がしますよ」そのまゝ何處へやら行つた。

髮がはらはらと落ちる、掌も痛む、胸もどきどきするが、心の奥に愉快といふものがひそんでゐる。ちやんと種子を蒔くやうに掘つた土をならした。殘りの空地は弟がするから、みなりを正して私の室に入つて叔父さんから貰つた虞美人草バービナ三色すみれ白色すみれコスモスなどの種子をとり出した。今から蒔かう。廣くない裏庭に紅白紫黄咲き亂れる！何となく蒔かぬ前から愉快だ。見事なのをはや子さんやのぶ子さんにお送りしやう。

男でも一仕事、女子には然もあるべき筈です、此文はうまく書いてあります（評）

○妾の髮

名古屋　胡てふ

八ツ頃は肩までたらしたそろへ髮の眞中を鳥渡取つて結ふてあつたよこ障子に慈姑の取手を寫したもの、九ツ頃はお煙草盆に赤い鹿の子の切れを付けてもらつたのが嬉しくて〱隣り近所まで見せてあるいて喜こんだもの、此樣な事思ふと今でも一人でお可笑しくて、此時分にはまだ大きな〱廣袖の着物を着て居たもの、ぐるりを下げて鬢髮を殊に長う肩のあたりまでたらして、シヤゴヤ、の入髮をして緋縮緬の太い横紐をかけて桃割に結ふて居たのが十一二の頃、十三四の頃にはすつかり髮を上げて大きな〱稚兒輪に結ふてゐた、それから十六の末まで、大きな桃割にばつかり結ふて居たが、十七のお正月から十九の末まで高島田ばつかり、たまには唐人髷にも結ふたけれど、此時分に

は紫の麻の葉絞りの繻絆の衿に、黒繻子の掛衿のかゝつた黄八丈の着物に色繻子と、ゆうぜん縮緬の鯨帯を〆めて、大柄な縮緬や縞お召の前だれ掛けて居たもの、それからは銀杏返しばつかり、前髪を額い一ぱいに大きく取つて鬢も髱もふつくりと出して髷は更に大きく頭一ぱいに結ふて、クリームの横紐か珊瑚珠をかけて居りますが此後は、どんな髷に結ふのかと思ふて居ります、今流行の庇髮にはまだ一度も結ふた事は御座いませぬ、皆様方はどんな御髷に御結び遊ばして？

名古屋風俗史の一面(許)

○盲女を送りて　三ヶ島　よし子

今日の日和に雨だれのよく乾いた軒端を、きれいに揃いて、葉ばかりのびた福壽草の鉢を眺めてゐると、おばさんの肩を按んでゐたおはつさんが、これから歸らうといふので、私は急いで手を洗ひそこまで送りませうと手をとつた、青い麥畑の間を一町ばかり通つて、やつと九尺幅の道へ出ると、もう大丈夫ですからと辭したが、いくら慣れてゐても二十町もある道程、杖一本に委してしまへば、きつと日が暮れてしまふ、暗くつても同じだらうがたつた一人のお父さんが、どんなに待つて居るだらう、私は何といつてもその村まで行かうと決心した、二段坂といふ石だらけな坂をのぼると、右の山腹に若い杣が三人ばかり、伐り倒した樅の木のかげに、息つき〳〵のぼつて行く二人を見おろしてゐた、私はこゝで二十歲に足らぬ盲女の手が、自分を送る兄の手の如くに心強く思はれて、しつかり握りつめたまゝ、落日とともに坂を下りきるまで、話もできなかつた、幽かな流の音に添うて行くと淋しい水車の音がだん〳〵に加はつてきて、はるかに草屋根が二つ三つ見えてきた。低い木橋を渡つた所で「ほんとうに助かりましたよだがあなた歸りなさるのが大へんですねえ」こう云つて分れた人の後姿を、瀧の音する木立にかくれるまで、見送つてゐたが、ふと亂れ髮の女が澤へ下りてきたので、もう、たまらなくなつて鳥のやうに身を轉じた。

さきに獨て目に留めてをいた、菫の紫も若草の綠も全く何かに蔽はれてしまつて暗は四方から迫つてくるばかり。私は唯山をはなれてゐる空の色を「白い物と燈火とは赤く見えます」といふその赤いといふ色も知らないおはつさんの目には、いつもあんな色が映つてゐるのだらうなどと思ひながら、行き逢ふ人のないのを幸ひ、上ばかり仰いでゐるとピカと目に輝くものがあつた、星だと思つたが瞬くひまに消えて、又一方にピカと輝きそれきり閉ぢても開いても目に見えなくなつたので、思はず一歩退いて下り來つた山のかなたをかへり見た、もしや空高き半月は美はしき凡ての色を集

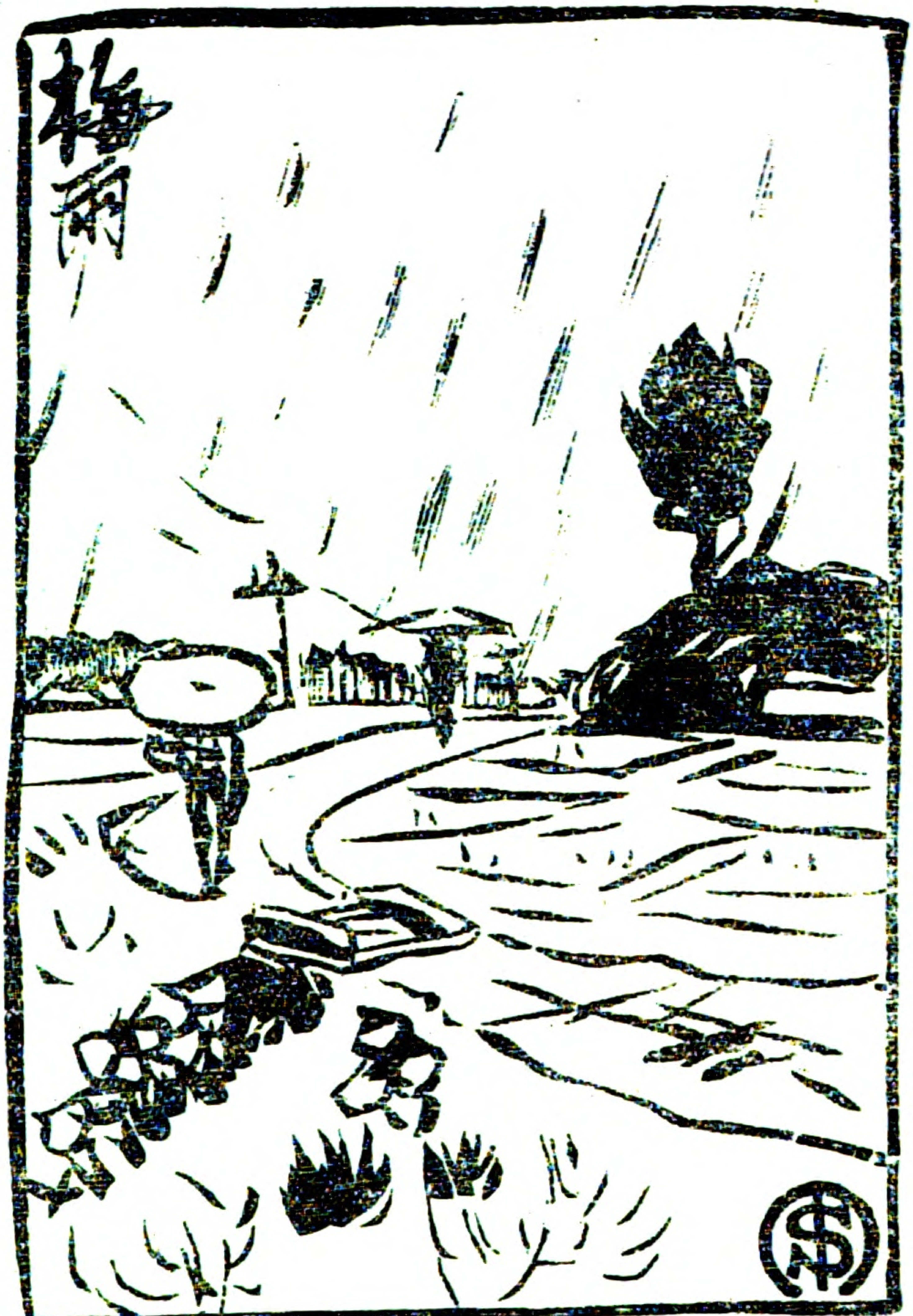
めて、美くしき光を今我が身に送らうとしてゐたのであつた。

山村の夕景が微かに眼に浮ぶ（評）

○花見時

日本橋　吉田さく

今か〳〵とまつ、電車は、中々來ませんで、後の酒店ては開業式と見へて心もうきたつような樂隊てはやし立てます、空は又々、あぶなくなりまして、ぽつりと、頰をうつ、私は氣はせき、心ぼそくて、伯母樣のおつしやるようにとめていたゞけばよかつたにと、思ひながら多くの人の方へ行きますと、お隣りのおば樣がやさしいお顏して立てゐらしつたので、嬉しくて〳〵、すがらないばかり、おば樣は弟にと云ふて、お土産をお渡し下さいました、其中三田行の電車がきましたので、おされたりもまれたり、はぐれぬようと、よーやく、のりこみますと身動きもならぬ、車は、はなやかな、雷門や、よいどれの道化姿、美しくきかざつた、花見返りの人々を、跡にずん〳〵進みます、たえず、夜櫻の、にぎはしい、さまがうかびます、仲の町の、まん中に、すつかり植へつけた櫻、處々にぼんぼりが立て居て、引手茶屋の、おはやしの、かけ聲、高い、にぎやかな、三味線の音か聞きました、時は、草双紙で見た、紀文大盡の、廓通ひの有樣が一寸うかびました、こしをかけたもつかのま、いつか、水天宮前へきましたので、二人つれだつてをりました、おば樣は、何より信心が樂しみだとお話しなさいます、私も觀音樣のお札をいたゞきました。



梅雨　神田　白井つな子

家庭日記



○規定　家庭を主として書いた日記文を云ふ實際的の日日の出來ごと又は心得となるべき事若き奥樣の新しい經驗談も宜し二十四字詰三十行限り半紙又は罫紙に認めること乙種の賞を送呈す

○小猫日記（天賞）

大阪市北區　片山清子

三月廿三日。生れてから今日で七日目、一番丸々して居る親に似た三毛が目が開いた。「母さん三毛の目が開いてよ」、と大聲で言つたので「何てすよ騒々しい」とお叱りを受けた。でも嬉しい。

三月廿四日。學校から歸つて見ると、斑も黒も目があいて居つた。親猫はしきりに世話して遊ばせて居る。で取あへず、東京の姉樣へ御知らせした。

三月廿五日。お魚をかけて、始めて御飯を食べさして見る、なか〳〵口には、入らねらしい。終には四足をお皿に入れてしまふ。それでやつと三毛が四粒に、斑が二粒、黒が三粒ばかり……そして今度はさもおいしさうに、お乳を飲んで居る。

三月廿七日。三匹お揃へに、緋ちりめんで首輪を縫つてやつたその樣子の可愛いことゝッたら……あゝ猫好きの姉樣に見せてあげたい。

三月廿八日。斑は今日、階段から落つこちた。幸ひ怪我はしなかつた。歩けないくせに、下に降りたがつて、皆首を揃へてのぞいて居る　夜親猫は鼠をとつて來た、がまだ小猫は齒がたゝなかつた。

三月廿九日。學校からかへるとすぐ横町の叔母さんが居らしつた、猫を見せてあげたら大さはぎ、そして三毛を是非呉れろつて。ホヽもう三毛は養家が、きまつたのだ。「三毛ちやんお前は叔母さんとこへ大きくなつたらお嫁にゆくんだよ」といつて聞かしたら、たゞニヤーン。

日記などと云ふものは、少しもむづかしく書く必要はない、此の文章のやうに自然に面白く出來て居れば好い、つまり文字の苦心でなくして、注意力の深いものが勝を占める、心持を入れかへてかゝれば好いので、其人の人格さへ好ければ、自然何を書いても好いわけになる（評）

○指の血（壹賞）

京橋區　夏　清

今日は皆御寺詣て私と女中が御留守番、誰も小言を云ふ人が居ないから、何か變つた事がしたいと、種々考へた末、精進揚を思立ち薩摩芋とうどんの粉を女中に求めさせ、下女が致しませうといふのもきかず、丼へ粉をとくと、かたまりだらけ、下女にまあお上手と云はれて口惜しくあたり棒でつぶしたがどうしても上手にゆかず。もう自烈たく成たのでお芋の皮をむき初めた、今度こそは薄く切るのだから、むづかしいと思ひながらも、初めてなので面白く、下女がお孃樣お手を切るとおあぶのう御座いますと云ふのもきかず、一ッ二ッ三ッ四ッ目に、上が薄くて下が三倍も厚いので、下だけを剝ぎとらうと思ひ、庖丁をあて丶力を入れるとあら‥‥さあ大變庖丁がすべッて手を切てしまッた。私はびッくりして庖丁を放出してじッと疵口を見ると、左の人差指がこういう樣に剝げて眞紅な血が噴くように出て來た。私はじッと見て居ると頭が何だかすーッとしたと思ふと目がまはッてうつぷしてしまッた。下女は驚いてすぐ床を取てくれた、私も夢中で橫に成ると下女が藥を付て繃帶をしてくれたけれども、疵口がずきん／＼して痛いこと／＼。其内皆が戻てきて、お祖母樣が一番に見附てお前どうおした‥‥私はきまりが惡くてふとんをかぶッてしまッたら、下女が傍からおさつをお切にならうと思て、お手をお切なすッて‥‥ほんとうに其



新聞紙伊　うすむらさき

時のお顔色と云たら御座いませんでしたよ、眞青にお成りなすッて……まああぶないねえ指でもおとしたらどうおしだ……まだ痛いかいとおッしやるそこへ父様もいらしッて、たのまれもしないに馬鹿だねえとしかられました。私はもうお芋を切るのはこり〱……

お孃さまに取つては確に一大變事、それが如何にも一大事件らしくて。而かも僞りがないから、此文章は可愛らしい（評）

○强者たらん（入選）

失　名

三月二十四日、エ、口惜しい、なぜ人は、こんなに意地が惡るいのだらう。先生、テニスのボールが失へた、と云つて私を敎員室迄引つぱつた、級長が無責任だと――、思へば思ふ程腹がたつ、何處の國に、テニスのボール迄番させる學校があらうか、人を馬鹿にして居る、ボールの小使ぢやあるまいし。一日中走りまはつて人のお世話させていたゞいて、その人の忙がしさもお察し無く、火のつく樣に用を云ひ付ける、あゝほんとうに學校がいやになつた。いつもの道を、サッサッと歸る、呑氣さうに笑ひ興じて行く、女學生の群には目もくれないで今日の出來事をくり返しながら宅へ歸つた、おゝ淋しいホーム、勢の無いかほをして、母樣は火鉢のおそうじをしてゐらつしやる。あゝ石にかみついてもといふ心が、ムラ〱と沸いて來て、今迄の問題をぬぐつた樣に忘れてしまふ。

私はどうしたつて立身しなければならぬ此のやせ腕をふるつて母を保護せねばならぬ、思へば責任ある體である。私はなぜ男子に生れて來なかつたらう神樣はなぜ男子にして下さらなかつたであらう、自分が、かりに男子なら、もう十七だもの、こんな田舍に、どうしてまご〱して居らう、現在に滿足しろとは、お孃樣連中へのたしなめ言葉私共の樣な貧窮者は、中々現在に滿足は出來ない、自分の兩袖には母といふ重荷が入つて居る。自分は何處か安全な場所を見つけて、そしてそこへ母を下さなければならぬ、自分は、この學校即ち中等教育を受け終つたら、どの方面に向かはふか、今の私の身體のまはりは、恐ろしい〱惡魔誘惑が幾百といふてねらつてゐる、私は腹帶をしめて幾百かの惡魔を拂ひ除けねばならぬ。追ひのけねばならた、あゝ思ば思ふ程責任ある自分の體の未來がしのばれる

理性のしつかりした女性と見受ける（評）

【秀逸】

○帳面つけ

松山市　ぎよう子

夜半から蚤にせつかれて、寝かへり計り打ちつゞけ、東の窓の白み初めるのを待つて早速とび起きた、まだ誰れも起きてゐないから釜の下も焚かなきやならぬのだけれど、明日の紀念式見物に着ると云ふ、叔母様の紋付羽織をぬひかけて居るので、お化粧も顔計りして、二階に歸り綿入れにかゝる。其内だん〳〵と皆様起きられる様子て、重吉もガラ〳〵と店の戸を繰り乍ら、「玉吉ちやん〳〵」と一人の方の小僧を呼び起してゐる私も一寸仕事をおいて、起癖惡い千枝子をなだめ起しおひな様を扱ふ様に支度して、學校へ送り出す。門に出て見るとお城山は一面の霧だ。

あとは唯しづかて、針の手も思ひにまして早くすゝみ、十時にはもう全く仕立上げてすぐにお晝支度にかゝつた。十二人の家内が二組に別れ、入りかはつて食べるのだから、お給仕もうるさい程に賑やかだ。

食後先刻縫ひ上げた羽織を手に通して見たり、衣桁にかけて眺めたり、はてはおしをかけ乍ら、針箱を引きよせた。杉浦さん左近さんへ繪はがきをと思たけれど湧いて來る萬感に胸もみだれて、唯昔の春したはしい此頃は君なつかしさも一入てあると云ふ意味だけかいて筆とめておく。朝から營所で打ち出す砲音はヅドーン〳〵とお城山へつき當つて反響を起し窓の戸もかすかにふるへて居る。つと耳をすますと雨だ。此れては明日の天氣も思ひやられる。など思ふ中弟妹ども學校から歸宅千枝明日の城山見物のお辨當と云ふけれど、お天氣がお天氣故、明日の朝早くの事にして今宵は燒鯨とだんごまゐの味噌汁で樂しい夕餉をすます。

臺所を片づけて三十分間程はきぬたを溫習つたが、店が忙はし相なので、下りて行つて帳役をして上げる。今迄は店が忙しからうが、どうしようが一寸も氣兼なんどした事のない私だが……あゝ矢張り年をとつたからだ。客の絶間に「ぎようも近頃は大分商氣が出來て來た樣だ」と父樣が母樣に云つてらしたが、本當に私は何故あんなに商業を賤んだのだらう。同化されたのかもしれんが私は近頃職業に貴賤の別はない唯日々出來得るだけの事即ちベストをつくすのが一番よい仕方だと云ふ風な事をしみ〴〵と感ずる。店をしまつて寢たのが十時、雨はいつかからりと上つて、星のまたゝきが美くしい。――三月九日。

心を家事に配るやうになつた心持の變遷を書かうとしたのは、一寸好い考でした（評）

○初夏十日

大阪　花影

一日。店の暖簾を新らしいのと掛け換ふ。そよ吹く涼風に紺の香たゞよひて嬉れし。

二日。遠雷を聞く。地の中にて石臼を擦るが如し。晝寝せる阿兄、愕然として覺めたり。可笑し、

三日。綿入を袷に更ふ。而して天滿の青物市場へ買ひ物に行く。氣持、何と無くすが〳〵し。

四日。離れ座敷の障子をはづし。青簾をかく。風かをる――。

五日。柿の花咲く。晝の月空に有り。光も無く、魂のぬけ出しカラの如く、美しくも無し。

六日。中の島の「三木彩虹」樣の宅へ俳句の運座會に行く。二階の硝子障子越しに土佐堀川添ひの青柳の風になびけるが見ゆ。ゆかし。

七日。卯の花咲く。京の「百田ちさと」樣ゐらせらる妹は「然うすかエ」「然うどすワ」など、しきりにちさと樣の京訛りを眞似て笑ふ。我れはなつかし――。

八日。夜。風出てゝ庭の若葉しきりに搖る。打水のしぶき端居の我れの袖を濡らす。なつかし。なつかし。

九日。雨の中を紅葉傘さして「寺井ゑん子樣」より御使まゐる。宇治の土産なりとて新茶を給はりしなり。香なつかし。

十日。櫻の宮へ葉櫻を見物に行く其處此處の木陰に釣魚する人有り。趣き深し。――

眞に續けてゆくつもりの日記ならば此の如くあるべし（評）

○臺所失敗の記

熊本市　原田淳子

四月三日　一寸用事が有るからお前この章魚をゆでといてお呉れ、と母から頼まれたので早速初めた、がその實一度も實驗した事がないので少々マゴツイたが何かの知れた章魚ぢやないかと例の調子て、人に尋ねるのを好まない私は、水と一緒にたこを入れて沸騰する迄煮た。もう是れ位でよからうと思つてふたを取つたら大變だ、章魚は何處へ行つたと思ふ程小さくなつて湯氣の中に轉んで居た。

同七日　魚の煮つけをしては混ぜつ返して骨も肉もバラバラにし、たま〳〵お芋の煑しめをすると醬油くさくこげさせるので、今朝から炊事の役を仰せつけられた。まあ暫くは如何でもやつてさへ居れば馴れると云つて、母は只指揮する許りだ、私と妹は學校が遲るゝ遲るゝとそれ許り口にして、御汁の味が惡るからうと、御飯の出來が拙づからうと、そんな事には頓着なして、只迅速を主としてるので小言は忽ち起り始めた。いじ惡るの兄樣はつらあてらしく、胃活許り飲んで見せる。大きい兄樣は又、廿五年間用を辨じて來た胃の構造を、

改めねば躰が危いと憎まれ口をきく、負け嫌ひの私は妹と口を揃へて、こんなにうるさいならもう臺所大政を奉還すると申立てる。と優しい母樣が間に立つて下さるので今も出校前におさんどんをする。

臺所過渡の時代にはありさうなことです（評）

いとおつしやる。え。何んでも御座いません餘り若樣がそりみにおなり遊ばすからつい、御免遊ばせ。

三月二十三日、

今日は某樣へお嫁きなされし姫樣の誕生にて私共までもお祝ひ下さる、生れて三十三におなり遊ばすまで御實家で誕生を遊ばして三十三の御時へそのをと初毛とを三寶にのせ嫁家へおやり遊ばすとの習はしとかと承る午後お姫樣の御供をして上野へ行く。夜、奧樣より御招きにあづかる何やらとおそる〳〵伺へばお姫樣の御古なりとて紋付一重いたゞく。

本所　安藤エイ子

上流社會の消息も窺はれて、珍しき日記なり（評）



鳥追ひ

○小間使

下總　善子

三月二十日

夕方、盛りの梅の木の下でお姫樣と若樣とバイヲリンをお引き遊ばした清い月がお姫樣のちようどお頭の處へさしかゝり、美しい事天女の樣だつた、若樣はお姫樣よりおへたなので時々妙な音を出すちつとも調子が合はないので可笑しくて思はず笑ふと美代何が可笑し

○店番の三時間

北見　涌田ひて子

「此頃は、まるで話しにならない、不景氣風がどこにも、吹いてるから、この行末が案じられる」と。皆樣は、云はれるが、家では、相當にいそがしい。悲觀するには、及ばぬと思ふ。今日から兄上が御留守、私がかはりをする。きちんと、火鉢の前にすはつて外を見てゐた。「御免下さい」と、暖簾を潜つて入つて來たのは三十位の女の方。「毎度、有難う御座います、さあ御一服」姉樣はほんとに、御口が御上手。私も云はうと思つたが、出ない。馴れないからと、りくつをつけてをく。火箸で灰の上へ字を書いてゐた。これでも談話會の時川尻先生に辯者だと、ほめられた事もあつたと、思ふとをかしくなる。「こゝにゐたのけ、よいのがあつたべいか」と、十七八の娘さんが、はいつていらした。「外は寒いてしよう、ずつとよつて御あたり遊ばせ。」今迄の啞も、やつと口を開いた。ニユッと太い腕、糠馬大根のようだ。あれ、これを、見てゐらつしたが「之もらひます」と、出したのは、私の嫌な柄。人にはすき嫌のあるものよ、歸りなさつたあとで、愛想がないと叱られた。今度は砂金山の七人連、服裝を見れば一圓も持つてゐないやうだが、馬鹿には出來ぬ。皆で七八十圓買つて行つた。「今日は」をや、御客樣。「友染の珍柄を。」「はいあれを御覧下さい」と陳列棚を指さした。目うつりし給ひてか。なか／＼きまらぬ、なんぼゆつくりした、人なんだらう。「秀さんちよつとそろばんを入れて頂戴。」「はあい「何といふ高聲を出すんです」と母樣に叱られた。さつきは、愛想がないつて叱られ今又、何事も三度と云ふから、もう一度叱られるのを覺悟してをこう。時計を見たら三時。晝御飯後店へ出てから、もう三時間、働いてゐると時間は早い。

御商賣は呉服屋さんらしい、働いてゐると時間が早いと言ふほどとも働いてゐないやうですが、考へてお世辭を言ふなど甚だ振つてゐます（評）

○行商の一日

伊知子

三月十四日　晴

五時起床。妹と先に御飯を食べて昨日用意して置いた野菜に果物、私が、チギや大根や白菜等で妹は夏蜜柑です。未明薄暗い夜明前を妹を先に私は後から尾いて行くのです。何人も氣味の惡いと云ふ膀堤に來た時は何んだか恐しかつたが寂しいと云へば妹が心細いだらうと思ふて、わざと唱歌等を歌ふて行く、だんだん明るくなつて來ました。針尾島の後の方から眞紅な雲が上つて來ました。長坂に來かゝつた時大きい眞紅の、

お日様が出た。野菜だつて果物だつて私等姉妹二人の物ではないんですけれ共「お前等が暇の時に賣り歩くなら其お金は與へる、と言はれましたので此度で二度ですが初めての時は恥しい心地もしましたけれど今日は何んともありません。先日は初めての事で皆様の持つて行かるれば一圓許りは取れるのを六十三錢しか取れなかつたの、だつて敗けとけと云へば直ぐ其通りして上るんですもの、今日は少しは上手になつて八十五錢取れましたが彼の長家の嫁さんのコギルのには實にあきれて仕舞ひました。何處のお孃さんだつたか夏蜜柑四ッ取られて十五錢お出しに成つたので妹はお釣錢の三錢を上げようとしたら、イヽと仰つて行かれた時は其のお心の優しいのが嬉しかつた、妹のは七十一錢餘り取れました。二人共明日は學校へ持つて行つて貯金するのです。

何處の田舍か知らないが、青物賣に出かけて、其金を學校へ持つて行つて貯金するなどゝは質朴の風俗想ひやらる（評）

○誰れにも見せられぬ記

本鄕　姬百合

御となりの椿が今眞つ盛りだ。机に凭り懸つて見てる私の心は、少しの纒りもないやうだけれど、却々そうて無い。二言目には、つまらないわと出る。實際私は不滿足だ。痛くも痒くもなくて、死ぬる藥があるなら、今にも死にたい。けれ共凌雲閣から逆樣に降りる程の勇氣もない。矢つ張未練があると見える。一體女は、好きな衣を着、食べたい物をたべ、何が不足つて、仰しやるだらう。あゝ人間といふものは、どうして衣食計りで、滿足されやう。あゝ私は親がほしい。たとひ、棟割長屋に暮しても、兩親が欲しい。是は內證の咄だ。御祖母さんに知れたら、嘸ぞ御怒り遊すでせう。此上何が不足だつて。あゝ何方の御仕うちが、氣に喰はぬと、申す譯ではないが、この頃は、熟々悲しくなつた。一體私は、將來どうなるんだらう。いやだいやだ。姉さんも御祖母さんも親切にして下さるが。どうして親にこしたものがあらう。私は一生伯父樣の御世話にならうか知ら。つまらない。やがては、やがては美しい奧樣を迎へ、可愛らしい子供も出來るんだらう。つまり私の從妹や從弟が出來るんだ。あゝ居候扱ひにされるのはいやだ。姉さんは。やがて義兄さんが出來る。矢つ張私は、烟たがれる。せめて親友でもあればいゝけど。春子樣はもう青山の御墓だし、良子樣は御嫁入りの事計り考へてる氣に喰はない。山田さんは。御人好しで馬鹿見たいだし、あゝ賴みになる人は一人もない。女敎師になつて容そうか知ら。居候になるより增しだ。友達は高等師範つて馬鹿にするけど、私には命の親だ。藝妓になるんぢやあるまいし、誰にも恥ぢ入る事はない。けれ共落第に違ひない。良子さんは御嫁

にゆくつて樂しんで居らせらるゝけど、私は平凡な氣がする。私の敬慕する伊東先生は仰せられた。自分といふ者をすてゝ莽せつて。私の心の惑うのも、盃くこの我が先きに立つからだ。午後に唐物屋が來た。何か欲しいかつて仰しやつたから、いゝえと申上げた。良子さんは私のたぼ櫛を見て、野莽ねと笑うたけれど私は廿八錢ので滿足しよう。

徹底せざる悲觀と認む（評）

○兄弟喧嘩

美濃　藤井秀子

雨がシトノ＼降る日の事で書齋へ入つて今朝着いた文壇を見てると郵便と云つて投りこんだ、見ると文森堂へ注文した藏書の印が屆いた、早速兄さんの机から肉𦘕を持て來て紙に押して見ると鮮かにうつる。モー嬉しくてならん、本箱明け放して手當り次第捺して行く金色夜叉不如歸己が罪などから色々の本に五十册を捺して手首が拔けそうだから一寸休めてると「秀さんそんなに捺すと朱肉の値が上りますよ」いつのまにか兄さんが後て笑つて居らしやス「アラ御口の惡い兄さんよ」と言ふと「一寸御見せ」と仰しやるから「ドーゾよくうつりますよ」と云つて渡す兄さんには印面を見て居らつしやつたがいきなり机の上にあつた私の大切の大切のハンカチにポンと一つ捺した。私は泣き度くなつた、兄さんは笑つて逃げる樣に出て行きなさる、是も内所で肉を借りた罪だと思つたが「デモ餘りひどいわ」の千萬遍も云つて本を片付けて居ると、茶の間で母さんが「御飯だよ」と仰しやるから、飯臺の傍へ行つて座ると、兄さんは笑つて顏を見て居なさる、私は「い……」をしてやつた。

○餅つき

信濃　うめ子

今日はかき餅をつくるとて朝からの大騒ぎ、弟のつき手とちう姉さんの合取は大へんよく似合つた、私が畫に趣味てもあればスケッチにするものを惜しい事をした、私は火の番にあんこを作る役、あんこは絶え間なしにかき廻さないとピチノ＼とんで燒どをする、ちう姉さんがお餅を持つて來たが此方はまだまに合はない一生懸命かきまはして、うちはてせつせとあふぐと少しはかたくなつた、お餅がみんな出來上つたから私はあんこをつける役、ちう姉さんは丸める、けれどもさつぱり上手に丸めない「もつと姉さんきれいにやつて下さい」〃だれも奇麗にやりたいけれどとあんまり長い間かまはんておいたからかたくなつて思ふ樣にならないよ私があんをつけるからお前是をおやり」ゝ言はれた時は閉口した、お終ひに殘つたのは襤褸の樣なくづだらけ、それでも丸めてよこすから附手の私はもうどうする事もできない、せつかくかためたあんこがビショビショになつてしまつた、やあかたきをとられたなと思つて一生懸命て砦けてもノ＼ボロになる、父に見つかると叱かられるから鍋蓋をしてかくしておく、皆が茶の間で喰べてる間ちう姉さんと二人で鍋に手を入れて先きのくづ餅よりも襤褸餅を喰べる「いやだれきたない樣て〃いえそれても切れて居るから契る手間がなくつて大へん結構だよ」オホヽヽ其中かつ姉さんが歸へつて來た、襤褸餅のしまいどこにまごついて居ると遂見つかつてしまつが、何をも云けないから一安心、かつ姉さんは喰べたが上手に出來たとも美味しいとも云けず默つて出て行つてしまつた、ちう姉さんと私はあつけにとられてたゞポンヤリして居る、後て洗溜をして二人で髮を洗つて私は日なたぼつこをして女子文壇を讀む

○花の日曜

越中　橋川まつ子

五時半起床よく眠り居る健ちやんを驚かしてやらうとして失敗してしまつた。髮がひどくこわれて下へ水くみに行くにきまりが惡いこと、どうしやう健ちやん起そうかしらんと思ふ、然しよく眠つてるのに可哀想と仕方なく水くみに下りるあいにく岩雄さん流し下に居給ふ、ハッと思ひ、て顏から火の出るやうに恥かし、ニコノ＼お早ようと仰つたのに返事もそこノ＼いそぎ水くみて上る、今日午前に土井様入しやる筈なれど早く入しやればいゝのにと案ずる、橋川さんお客樣……おや土井樣かしらと

下りて行つたらまあ早くから本所の民子さん……まあよく入つしつてねえといそぎ臺數片付るお召しの着物宜くおにあひなさる、私しのは未だ國から送つて來ないから仕方がないなんて思ふ、土井様とうく入しやらない口惜しくて夜なんだかいやに暖かくつて兄様の許へ手紙認めて入れに行かうと表へ出たらばつたり土井様と逢ふ、今日出られない用事があつたとか逢つてお話しするうちさつきの口惜しいのも忘れてしまつた。九段に夜櫻見に行きませうと連立つ、ほんとうに春は樂しいと思ふ、きれい……とと二人一聲に云つておかし、あの大村さんの眉毛隨分長いのね……と土井さん感心なされたように仰せらる、まつたくいくら見ても長い事、上ばかし見て居たら書生さんがドンとぶつかつた、失敬なつて二人でずんく來てしまつたら後てへ、つて笑つて居るの隨分だ事お汁粉食べませうれ……とうく花よりだんごになつてしまつたわ……明日は又早く學校があるから途中でお別れして家に歸る、兄さんより手紙來て居た、とうく行違ひになつた。

○試驗日記

茨城縣　岡田うめ子



晩春　小橋　鈴木登美子

三月十五日。月曜日朝は曇り後晴る今日から六日間平素不勉强な私等が苦めちるゝ學年試驗です、今年の様な試驗時間表はない、六日の内に日曜がないだもの。而しどうする事も出來ません、しかたなし、昨夜泣きなき調べた英語と歷史とを包むで登校いたしました、歷史は四題出て、三題出來たからまあ七十點ぐらゐだらうすると第一學期が乙で二學期が丙だから歷史では安心です、英語も八十點ぐらゐは取れませう第一日の試驗もこれで無事に過ぎました、これから毎日自分で採點して附けて見ませう、而し明日の代數と地理とは不安で堪まらない、夜十一時迄代數を調べて臥す

十六日。曇り　起床したのは五時です、顔洗に井戶へ行くとお隣りのお婆さんに『まあ今朝に限つて早い事それだから今日は曇つたのです』と笑はれました、今日の代數が氣に掛つて朝飯もおいしくない、代數は四題で、二題きり五十點ぐらゐ、あゝこれで落第點數が一つ出來ました、地理は三題で、二題、而しこれでも滿足ですが代數が不安で堪へられない早く二十五日が來ればよい

和歌

與謝野晶子選



○（天賞）　名古屋　岡田明子

天つ神君のみ戀へと嚴かに宣るを聞たる我ならなくに

○（地賞）　讃岐　衣輪すゑ

我思ふ如くに君も思ひつゝありや日も夜も絶る暇なく

○（人賞）　備後　すゞな

思ひ出の涙こぼしぬ春の日の山櫻ちる白き光に

【秀逸】

○　美濃　堀ときは

見へて消へて無覺束なさの炎陽を凝視る少女悲しき少女

○　大阪　梅本龍子

なかなかに尊き心はたやすく盜める人は惡けれどよし

○　兵庫　杉山春翠

わが胸の底にぞ刻む悲みのひとときを覺ゆ君を見る時

○　福井　やまざと

儚くも寂みし悲き時のきて一日に十年老ゆるを思ふ

○規定　別に新派舊派の名稱にかゝはらずと雖も成るべく清新の作を迎ふ一人一首限りにて必ず半紙又は罫紙に認むること一人にて二首以上ある時は沒書とす丙種の賞を送呈す

○　美濃　篠田欣子

たゞ今は小暗き窓にかの君も悶え玉ふと人傳手にきく

○　長野　山口はま子

白百合の花の樣なる手をのべて漁すなり諏訪の少女は

○　本郷　菰田文子

女と男との區別も知らずたゞ人を懷しみたる少女なりしか

○　京都　ます子

ふと君を思はずなりぬしみじみと安けさ覺ゆわれ心地よし

○　山城　木の花

人の事作り口して時にいふ少女なれども忘れかねつゝ

○　大和　ほう子

春の雨友が形見のふたを琴わが姉の手にならされてある

○　成多　榊原つた子

若き人住むと覺ゆれ絶間なく小琴ひくなり我が胸の家

○　大阪　山内溪子

櫻咲く下に小さきむしろ敷花輪つくりし少女なりける

○伊豆　堀井りゑ子

美しさ花と競はむうれしくも我は二八の少女子なれば

○芝　多歌子

その人も今は世になき哀なる古りたる戀を思ふ悲しさ

○和歌山　木澤てる子

灰色の雲の亂れぞ目に映るそこはかとなく天を仰げば

○若狭　瀧本なみ子

薄色のひわは妹山雀は兄よと思ひ飼ひ馴すかな

○臺北　稗貫美津子

秋の野に萩ちる音のそれよりも微に破れぬわが魂は

○伊賀　岡花子

君がこともはらに思ふよき性の日に日にきへてわれは老び行く

○信濃　赤津かずえ

ときは木の森はしたはずひたすらに枯木の林わけ入るわれは

○信濃　赤津ふみ子

かくやくと日は照りてれりわが心常闇の世のくらきを戀ふに

○安房　阿部けん子

妹は今朝犬ころを飼ひたしと父に願ひて許されしかな

○相模　山本文枝

興とづれば君が面わの浮びきて我れに物言ふ心地する哉

○京橋　喜代子

彩羽ふる蝶のごとくにこの夕戀しき君の館に舞ひぬ

○京橋　柴田千代子

君が魂わが魂ひきて結ぶかとおぼろの春の月をおもひし

○長野　小池いち子

五月雨の晴れたる後の橘こえてわが花賣りの少女はきたる

○本郷　小稗菊江子

五月雨の或る夜は月も見るべきに我れの涙は晴るゝ隙なし

○仙臺　南もり子

春の夜の町をあゆめど面影の似る人を見ず心淋しき

○本郷　小山いづみ

世の中に我が胸を割く利刄のあらばとかゝることおもふころ

○徳島　吉田紫花

この思ひ今終焉の母の目を見るにも似たる花散る夕

○函館　ふぢ子

君を知りし日よりこの子はなにとなくたゞなにとなく誇おぼえぬ

○山口　櫻子女

なつかしき春風そゞろ吹きそめて鶯の啼く日もありしかな

○奈良　中富よしみ

風呂いてゝ崖の白百合手折る日の初夏風のこゝちよきかな

○奈良　白ぎく

冬の國野寺の門に小狐の啼きてさびしき月夜となりぬ

○三河　天野清子

うたゝれに玉の宮居のつかさ人我が手たづさへいざなふを見ぬ

○福井　明星

春のそらかゝれる月をながむればうさぎのをどる心地こそすれ

○美濃　淺野柳子

不如歸一聲啼きぬ亡き君の魂弔らひて還へる山路に

○倭文香

うぐひすの來て啼くものか春七日後世人どもの念佛の寺

○盛岡　米澤白桃

十年の戀にやぶれしわが靈はわが身を捨てゝいなむとすなり

○下谷　山本芳子

うすものをたまはせつれば御かへしに夏の百句をまゐらせにける

○府下　照井みどり

十年の日記とりいてゝ師の君のふかきめぐみをいま更ぞ泣く

○　日本橋　吉田さく

父は笑み母は語りていとし子の衣ゑらびする春の家かな

○　日暮里　細谷鋭子

百の灯の一ときに消えくらがりの世となりし如我れはをびえぬ

○　長門　阿多貞子

わが胸の小暗き室に人一人寐りてあるを神は知らじか

○　美濃　酒井とみ子

君を得て心は和ぎぬ此思ひ老いじ若かれ百年までも

○　呉市　碓井呉竹

白桃の花のちらほら散りそめて病む姉上は日記かき給ふ

○　明石　嘉代子

戀しみぬ君が心のはなるゝを我が衰への眼にも見えつゝ

○　金澤　むらさき女

細き雨あれども一人ぬる夜は鐘ふるごとくおもはるゝかな

○　下谷　谷口桂子

鐘やみぬ野にたち泣ける罪の子よとくいれ心神にかへして

○　下谷　樋口ふさ子

春の野べ花ちるなかに日のくれぬ君が戸まではなほ一里ある

○　大坂　石田のぶ子

とつ國に病む兄思ひわが母はそらゆく雲に涙おとしぬ

○　神戸　香川菊枝

新潮は花貝ひらふ小女子のもすそ濡らしぬ明石の濱に

○　神奈川　森田田鶴子

雨ふりて寐られぬ夜半は又しても手筥の奥のふみを探りぬ

○　伊豫　曉子

夏の夜を楠の木かげに君とわれ冷やかに居てこゝちよきかな

○　豊前　行田百合子

桑の實の黑くうれたる五月雨晴をさびしき數に思ひけるかな

○　宮城　奥玉さだ子

春雨にみどりふかくも匂ふかな君とわが住む庭の青柳

○　若狭　蝶夢子

大鵬の翼を張りて翔るごと白き雲飛ぶ初夏の空

○　茨城　岡田杏子

玻璃窓にあやめ眺むる梅雨の朝ぬれて着きたる君が文かな

○　信州　山本操

梅雨晴の日と青桐のそよ風と見えて嬉しき窓ある家よ

○　廣島　芳枝子

京の都の花賣少女色白う姿優しく聲麗しき

○　横濱　臼井道子

櫻散るうす水櫻祝詞してかへる上衣の袖にそびらに

○　陸前　沼倉たか

永からぬ身とし思へば人を見て何故となく泣きもこそすれ

○　大阪　鹿島綾子

我が胸に秘めし恨は得ゝ言はて君の御膝に慄えて泣きぬ

○　静岡　清子

うつくしき春の夜なれど我一人寒き冬野に迷ふ心地す

○　河内　木村しま子

あらし山やまうなりすと聞けば丹後へかよふ汽車の見えきぬ

○　三重　みす子

舞姫のあふぎの風に銀燭のゆらぐ榮華は知らぬものから

○　山口　酒匂とし子

赤き花いとふ心といつの間になりにけるかや野邊に立つわれ

○　福岡　田中とよ子

北風の寒き日に居てふと夏の水色衣のなまめきおもふ

○　京都　大井順子

死といへる強き力に悲しみにあるかの如き消へがての灯は

○　伊豆　ふじ枝

青嵐臨川亭のおばしまに水色の袖吹かすは誰ぞや

○　群馬　須藤あさ子

絶えず來て人の命をついばめり時といふなる小鳥の群れは

○　兵庫　米子

櫻花一ひら散りぬ枕上我いたつきを悲しめること

○　大阪　田中とき
菜の花の黄に輝けるその上の雲の白さよ空の青さよ
○　神戸　山口さい子
松風も濱のひゞきもうちそろひ明暮うたふ須磨の浦哉
○　王子　政子
夜もすがら君を思ふとおもはぬと二つのことをおもひぬわれは
○　伊豫　越智奐惠子
笛の音にあこがれ出てゝ深戸に身を細くよせいつまでもきく
○　伊豫　つる子
わが君の御襖障子にかくれけり庭の柳に烏二羽ある
○　三河　永田舞鶴子
蜜よりも甘きことばに絆されて悲しき今日となりにけるかな
○　伊賀　山村龍子
相わかれ四五日後にふと逢はばなつかしからむなつかしからむ
○　三ヶ島　よし子
ためらひし長きその日を永き世におろかなりしとあざけらしめよ
○　羽後　三浦ふみ子
ふるさとや社にのこる相傘のゑをかきし人見えぬさびしさ
○　大阪　はな子
口かけし酒壺に咲く八重櫻かたゐの小屋に春風ぞふく
○　麻布　花子
我が名よぶ君かと見れば散る花の水に落つなるちさき聲なり
○　大阪　木村花子
雨ののち砂にこぼれし花貝を拾ひて春の日にかざしみぬ
○　大阪　河盛よしの
なほざりに文かく人はうたかたの久しからざる心と思へ
○　小石川　近藤愛江
六月や麥刈る日とも少女らがよき歌うたふ里すぎて來ぬ
○　北海道　伊東鋁子
春雨のそぼ降る夕門に立ちうせにし友を忍びて泣きぬ
○　釜山　富邉露萩子

君乘れるくるまとゞろき近よりぬうれしみおどる我が胸に似て
○　尾張　廣瀬かなえ
あさぼらけやよいの旅の信濃路の阪にきくなる鶯の聲
○　岐阜　中村澤子
山梨の花におく露すべり來てしづくしにけり紅の鼻緒に
○　豐後　吉良靜子
ぬる風や少女子人が平安の京のまちゆくたそがれ時よ
○　熊本　金子苺子
やう／＼にいひし一ことおん耳にきこえずつひに泣き伏しにける
○　大阪　西戸政江子
紫の振袖長き姫君の頬もかたゐをふきぬ春風
○　磐　立谷紫子
亡き母のいと慕はしく白梅の散る夕暮の雲のあと追ふ
○　媛姫　浮人
文机によりてそゞろ筆取れば思はず君の御名の書かれぬ
○　靜岡　壽衛子
姉ゐます森のあたりと吾が岡を霞棚引く春の朝あけ
○　内藤千代子
花散る日君こひしさに堪へかれて御文抱くひとり居の窓
○　讃岐　金井濱子
海底の目亡き魚ども見るやうに君見ざる眼は物皆を見る
○　岐阜　篠田とみ子
物賣るに人に目方をかけさする太七此頃いかになしけん
○　埼玉　長岡まき子
七とせの昔語りに思はずも都の君の慕はしき宵
○　月れい子
櫻花遠目路をめでぬ白雲の中の一枝はかざしてかへる
○　信濃　梅花
春日山春の月夜にながむればけだかさそふる神木の杉
○　信夫里　白梅
只一人急ぐ旅路はたそがれて幽かにきこゆ野寺の鐘は

和歌

○　備中　竹好幾子

胸の海に彩の霞の流れきぬ春のこゝちはうれしかりけれ

○　備中　紋子

手をのべて古き小箱の紐ときぬ若き心に甦りつつ

○　山形　きみ子

妹は梅の盆を手にのせて小窓の下をゆききして居ぬ

○　播磨　藤井梢

なつかしき君きませしと見し夢は覺めて悲しき春雨の降る

○　大阪　倉板小雪

春雨や京人形の着物など縫ひつゝきゝぬ鶯のこゑ

○　遠　中村千代

春雨のしとゞ降る夜のうら寂しとこの緋牡丹一ひら散りぬ

○　岡山　三船蕊恵子

子狐の白絹被り笛吹きぬ花の堤は朧夜にして

○　和歌山　鳥居邦子

夕榮の色もいつしかうすらぎて野寺の鐘に桃の花散る

○　佐賀　久代

さくら散る庭に遊べるひなとりの餌とみまがひぬ花の一片

○　兵庫　祥子

春の川水のながれにけゆら〳〵と岸の柳の影うつしけり

○　河内　倉利子

春の日をいともたのしく暮しけり古里の野にすみれつみつゝ

○　北見　涌田ひで子

さめやすき紫色を好む君心もとなしなど日記にかく

○　横濱　ふみ子

十坪ほど青き水をばたゝえたる池をめぐりて白躑躅咲く

○　大阪　さと野

君思ひむかし歩みしこの道を花散る夕べ我さまよひぬ

○　長野　桐野年子

雨ぐもの夢より淡き山里に梨の花ちる夕月夜哉

○　長野　若林まさ子

花に葉にやどれる露に美しく夕日輝やくの片岡家

○　茨城　岡田きよ子

ひざに伏してすゝり泣きするわが友の髪見詰めてはもらひ泣きしぬ

○　牛込　琴葵子

聊かの喜びに似る微笑みを見せたまひつれ別れの夜に

○　牛込　塚見子

花菖蒲汀に咲きて赤き鯉いと美しき雨霽れし朝

○　四谷　味方こう子

櫻照るあえかの月と水晶の梢の若きといづれやさしき

○　兵庫　辻井葭子

鶯や涙つきせぬかなしみをいだける人の窓にきてなく

○　青森　名久井ふみ子

何となふ亡き友がよぶ心地して朝戸ひらけば梅の花散る

○　群馬　江澤紫城

雨やみて雲のはれ間に月出て時鳥鳴く杉のむら立ち

○　大阪　花の影

恐ろしき針持つ蜂の一言をのたまいし日の忘れがたなき

○　秋田　田口かれよ

美しき人よと菜種咲く徑をかへりみすれば蝶むつれゆく

○　札幌　土門秋子

あはれさよおぼつかなくも雲間より裂町照らす春の夜の月

○　岩見　小松原徳子

庭櫻花は昔に變られどみるわれのみは變りけるかな

○　伊豆　木村綾野

山櫻まもなく咲ける一枝を金玉まとふよき手とみける

○　門司　臼井幸子

春の海終日波はのたのたと君と對ひしこころにも似て

○　韓國　原登里子

果しらぬ枯野を一人迷ひゆく寂しらに居ぬ君失ひて

○　丹波　藤田靜枝

大方の世の人皆の心はも知れりと云ひぬ君を見ぬとき

○　桑員郡　山崎安子
琴の音もしばしとだへて山茶花の花ちる小窓時雨ふりくる
○　大坂　中野喜代子
梅雨晴れの靜けき庭に蝶一つとびて戯むる白百合の花
○　白川入千代子
白殿する小床は草にあられとも秋くる宵は露けかりけり
○　弘前　川村露子
若ければ春のゆふべのちさき夢ちいさき胸に秘めて笑むわれ
○　秋田　すみれ子
おぼろ月君がみ魂とわが魂と花野にあはむ夜かと思ひぬ
○　近江　小林とし子
わが長き髪けずりつゝふと見れば薄霧すきて白き鳥とぶ
○　周防　重原美女子
春雨の降り來る夜半はなんとなく都の人のなつかしきかな
○　沼津　渡邉とよを
この膣の花の信を龍宮の殿になしつる春の夜の夢
○　山城　小森幸
亡き姉の御靈慰さめまつらんと櫻一枝手折そなりけり
○　下野　須藤紫星
佐保姫の歌をせにきく心地して花野路すぎぬ雲雀なく日に
○　長野　赤津しろ子
夕日さす花野の原をさまよへば美くしき鳥あまたとぶかな
○　筑前　高松ひで代
屋かげのまたゝきいづる夕暮れのそゞろありきは心晴れゆく
○　宮城　杉田うめ
大方の花も跡なく春老いてさびしくなりぬわが裏の山
○　下野　瀧澤秀子
白絹に包みて秘めし銀鈴を振りて歌はむ春の夜の雨
○　遠江　島花子
芙蓉さくはなの中なる君が家夕もやのして鐘と暮れゆく
○　播磨　菅原靜野

あげ雲雀大野の花の吐息すゝ春のまひるのしづけさをきく
○　佐賀　田中要子
二三人馬子が過ぎける並木路　ちらほら立てる朝かすみかな
○　佐賀　深川たか子
春日野に摘み草すなり白の蝶紫の蝶友となしつゝ
○　豊後　藤田富子
君なしも我れの墓ふと人はいふ君もきけりや風のたよりに
○　栃木　宮田いち子
春雨にぬれし胡蝶のいぢらしくわがはちうへの梅にやどりぬ
○　大阪　香崎靜子
人毎に問はるゝまでにやつれしも思ふ君には見えぬ悲しさ
○　門司　鈴木靜枝
悲しかる春にもあるかいとどしく久しくなりぬ君と別れて
○　近江　梅園女
かゝる日よ野に萌え出づる若草のあらむと思ひ春の雨きく
○　秋田　加藤うん子
雨降れば亡母思ふ我が胸はせまりて淋びし秋の夕暮れ
○　岐阜　村井かれ
紫の山より出づる紅の日の照りわたる茶の花の路
○　岐阜　日野秋子
いざわれは唄を歌はむいざ君は琴ひきたまへすみやかに來て
○　靜岡　青木靜山
叔母君の來ますを石に腰かけて待つを里の子しけしげと見る
○　秋田　萩原とよ子
むらさきに藤の花咲き露かなる山路の奥に啼くほとゝぎす
○　熊本　雨森愛子
綸島堂に椿の花を糸にぬき少女はありぬ春のまひるを
○　若狭　津田たき子
千よろずの少女の舞へる中にいてものを思へる我れなりしかな
○　清國　長孤女
ともすれば我亡き親の影を追ひもろ袖絞るわが身なりけり

○わか〳〵と春の夕日のにほふ時孔雀飛ぶなり島より島に　常陸　中内泉子
○我が思ふ人車してこの朝け訪ひ來と思ふ春雨の門　下總　鈴木たい子
○摺かみて音ばや石に石のごと冷き子よと君譏るうた　仙臺　こう子
○我が窓に咲きにし櫻歌人に見せまほしとぞ京へ文やる　常陸　松本起美子
○菜の花の黄ばみそめにし畑中に猫うまひして蝶は遊べり　石川　茶木雄子
○窓おせば野邊の菜の花盛りけり舞ひあがる蝶舞ひ下がる蝶　神奈川　森田靜江子
○ふとあひし面輪そむけて眺めにし一重のうばら紅のうばらよ　丹波　塩見喜代子
○ひとり行く野は黄昏れて春雨の中に香ふは白梅の花　大阪　土橋仙花女
○金屏にゆらめく火のかげまばゆしと桃のこかげに前髪よせぬ　香川　き代子
○亡き妹が手植し黄菊色あせて羽のやぶれし蝶のとまれる　茨城　平岡幸子
○久に病むわが床ちかく梅の花死の色帶びて二つ三つ散る　出雲　岸香草
○春雨のそぼふる門を出しかさの下より匂ふそらいろの袖　甲斐　あや子
○憂き人のうなじまくにもあらぬ手を冷たき二つの乳の上におく　東濃　猪野杉山
○誠れに人のくだきし背戸川の氷なかれて芹青みきぬ　尾張　ばら子
○ほのぐ咲き壁にもたれてわれをみてつひに涙をおとし給ひぬ　羽前　白萩女
○白梅のしら〳〵淡き香の如き美くしき子にあひぬ春の日　紀伊　田中文子
○春の月小石拾ひし手に照りてなつかしかりし磯をわすれず　近江　辻よし子
○戀もなく悶えもあらぬ我身にも秋は淋しく物あはれなり　北見　今村りせ
○庭に散る深紅の椿見つめては思に沈む夕暮の窓　石狩　河合菊子
○春の月登るともなくおぼろにて影ぞ身にしむしら梅の花　札幌　森山彰子
○それとなくとへど答へずうつむきぬさゝやく如しうつくしき髮　大阪　平尾時子
○柴笛の遠音きく夜は欄によりおもひに堪えぬ悩をいだくわれ　横濱　吉川香都子
○片言に十九のはれを叔母とよぶ亡姉の形見をいだきて泣きぬ　神田　三好富美
○翅ある君がみ心めてしよりわざはいの日はまためぐり來ぬ　下總　月沖ゆり枝
○花あやめ君と相見しその家の面影みゆれ菖のにほひに　千葉　小澤まゆみ
○ちる花をのせて流るゝ春の川世の中かこつ風情とも見ゆ　常陸　田村かれ子
○春雨の降りそゝぐ毎に野の面はみどりいやます心地こそすれ　茨城　喜惠子
○夢ながら君が後につとよりておん手にふれつ温かかりき　淡路　加藤菊子
○おはしまに星を眺むる若き子の顔ほの白き春の宵哉　下總　ふみ江
○霞たつ野邊の千草の色もえて蝴蝶の袖に春風のふく　長野　宮島千代子
○はづかしみ面を覆ひて白扇の裏なるうたをふとみいだしぬ　伊豆　加藤爲子

新論文



○規定　論文と云へどむづかしきことにあらず諸孃が考へしこと思ひしこと文學上又は一般女子に就いての平易なる論談を歡迎す二十四字詰三十行以内一人一章に限る乙種の賞を送呈す

○内所話（地賞）

神田區　三好富久子

世の中に何が不愉快だと云つて、恐らく内所話をされる位不愉快な事はありますまい、あちらの隅へ行つてはコソ〳〵、こちらの隅へ來てはコソ〳〵、實に其時の心持と云つたら、何とも形容の出來ない厭な心持がいたします、それですのに世間にはよくかう云ふ人があります、友だちと仲良く遊んで居る所へ來て、一寸山崎さん、なんて云つて、親しく遊んで居る内の一人を向ふへ引つぱつて行つて、何かコソ〳〵さゝやく、折角今まで面白く遊んで居たものが皆ふさいでしまいます、そして、てんでに、私等の事を云つて居るのでは無いかしら、何を云つてるのだらうと思つて心配いたします、たとへ、私等の事でなくとも、そこは女ですもの、自然とよけいな邪推も出て來ます、ですから人に聞かれて惡いやうな話なら、誰も居ない所へ行つて話したら宜いじやあありませんか、さういたしますれば大勢の方に惡感情を起させなくとも、すみますし、又樂しく御交際も出來ると云ふものです、私はどうかして此内所話などをする人が一人も無くなるやう希望いたします。

密談には動もすれば誹謗の分子が交るもので、而も女の弱點であるやうです、謹みたいものです（評）

○感じたまゝ（人賞）

下關市　無名草

いつだつたか活動寫眞を見に行つた時のことであります、五六枚目に辯士が出まして「英國の或る銀行員がストライキをいたしましたが其の家族たちに怪我があつてはならぬと云ふ處から之をある宿屋にあづけましたが然し無邪氣な子供等は其んな事とは少しも知らず唯だ急に友が益したのと家が廣くなつたので面白半分に順から順に惡戲をして行くと云ふ滑稽てあります是れはMパテー會社の方からも笑はずに御覧になつた當

客樣方へ五百ドルの懸賞をすると云ふ位です皆樣何卒お腹を落されぬやうに御用心下さい」と長い口上を云つて入りました。それから間もなく寫眞は映されました、それから其れと惡戯をして行くのに笑はぬものはなく滿場はさながら壞れんばかりてあつた。やがて十分間もして寫眞は終り以前のやうに電氣も附けられましたが、然し笑ひ聲がまだ絶えません、其の時妾の横にゐました紳士は友人らしい人に「僕はちつとも笑はなかつた五百ドル貰うかのハ……」とかう云つたのです。私は眞に此の時に何とも云へない不快な感じがむら／＼と湧いて來ました。この紳士は「五百ドルの懸賞」と云ふ言のために笑ひたい笑ひを遂に發することが出來なかつたのです。よし戯談に云つたのでも苟くも紳士たる者が口にすべき言てせうか、之れでも文明の紳士かと思へばあまりなさけないてはありませんか。笑ひと云ふものは人間に特有な天帝からの賜てす、人間に於て笑ふといふ程幸福な而も樂しいことはありますまい、此の特權をこの紳士は五百ドルのために犧牲にして笑ふ事が出來なかつた、あゝ憐れといひませうか、何とも云ひ樣がありません、妾しは唯だ之ればかりとは云ひません今日相當な地位ある人々が地位に恥じても云ふべからざる事を平氣で云はれるのが悲しくてならぬのてあります。

なか／＼鋭るどい筆法恐縮の外ありませぬ。（評）

【秀逸】

○長所と短所

播磨　石坂まさ

人間と云ふ者は、一方に長所があれば必ず他方に短所がある。恰度利のある所には又必ず損が伴ふと云ふ樣なもので、これは到底免かれない、ですから其長所を啓發せしむると同時に、一面内に顧みて短所を匡正せねばなりませぬ。若しそうでなくして其長所のみ伸揚發達せしめんとならば、偏執の者となつて遂には却つてその長所自らが身を破り世を誤ると言ふ結果になります「長ずる所即ち短所なり」とか諺にもある通り此長短を調攝することが天禀の美質を發揮する所以てす。嘗てベーコンと云ふ人は、若し諧謔の念慮多き人は數學を研究すべく諧謔の思想少き人は勉めて諧謔を學ぶべし、又判斷の遲鈍なる人は宜しく律令を學ぶべし。と斯う言ふて居られます、まことに味ふべき言葉てはありませぬか。

要領を得た議論てあります。（評）

○くひしんぼう

山形　白萩女

くひしんぼう！廣い世界の中には、隨分と食道樂の圖も多くありませうが、然し日本人程、くひしんぼうの

國はまたと他にあるまいと思ひます。論より證據、何處の市街を歩いて見ても、其肆店の十中の七八は、皆飲食品を賣る所である。供給以て其需要を推すに足るとせば其大勢や知るべしです。子兒泣けば、之をすかすに菓子を以てする、訪問の土產物も大半は飲食物を以てします。客が來ますと、必ず茶に菓子を添へて出すを禮とする。酒を出せば、無理にすゝめて、大に醉はせなければ、好意を表したものとしません、そして少數の上戸を除きては、間食しないものはありません。人にほめられると、おごりませう、若くは、おごりませぬよ、といふを例とし、貴婦人迄も、之を口にして、恬として恥ぢない。おごると云ふは、即ち御馳走をすることとて、飲食にもとづけるのである。神を祭る儀式も、食物を供ふることが、其最大要素である。神葬より食物を供ふる事を除けば、神官の仕事は殆んどなくなるのであります。素より飲食は、生命をつなぐ



紋附　　青森　松尾千代子

最大要素であるけれども、日本人はあまりに飲食に重きを置いては居ますまいが。唯其れ食道樂の國民であります。故に又胃病の國民でありまず。胃病の國民は、神經質であつて、堅忍不拔の意志を缺きます。日本國民が、世界の上に雄飛せんには、先づくひしんぼうの城を脱却しなければなりません。

ある意味から云へば飲食に重きを置かないから、自堕落な過食をやるのでせう、而してこれは、食ふ爲めに生きて居るのか、生きてる爲めに食ふのか此の根本問題で決まるのであります。（評）

○足元の注意

兵庫　田中落葉子

先づ歩み方から申せば田舍の人は。足がおそくて、都會の人は無暗に早いと云ふことですが疑ひもなく左樣です。その人は見ずとも、足音さへ聞きますならば、大抵氣質を知る事が出來ます。それから日本古來は、女子は內輪が、恰好が可いなど、申したものでざいますが、今から考へると、愚かな事でございます。さりとて外輪なのは、見よくはございませぬ。そこらは、程を見はからつて、衞生上よりも、容儀の上からも、善い樣にする事が肝要です。次に履物。身分相應と、年令に相應と、申す事は、第一の要件。工女などが馬鹿に美しいのを穿いて居るのは、よくありません。お母さんが、娘のを、引つかけて居るのも、同樣。履物の、高いのや、低いのは、皆樣のお好み次第です、けれど、それとても、身長の高い方は比較的に低く、身長の低い人は、高いのがいゝでせう。それからよくある事ですが、下駄に泥をつけて、他所樣の玄關前を汚したりいたします。あれは、餘程つゝしむべきです。ある先生からきゝましたが、日本人は、非常に足元がきたないとの事です。西洋などでは、辻々でなくとも、一町ほど毎に、靴を磨く子供が待つて居るさうで、これに拭はします。だから靴に塵などをつけて、他人を訪問することなどはないさうです。日本はまだ、そこまで參りませんから、紙でも用意して置いて、拭くのがまあいゝだろうと思ひます。女學校の生徒などで、着物は美しくして居ながら、靴の踵の土を、平氣であるいて居る人もあります。變な感じが致します。歩行に關係のあることです。雨道などではねをよくあげる人がありますが、醜いですから、注意を致すことが必要です。

足袋に、靴下、これまた餘程品位にかゝはるものです。靴指の先や踵が見えたりする事は女として、決してあつてはなりませぬ。足袋は白くよく洗濯を要します。靴下て下駄をはいてゐるのは嫌に見えます。女子が十四五になりましたら、外出をいたしますときなど、足をあらはに履を穿くなどゝいふ事はなりません。兎に角

足元は、見えぬ所の樣ですが、深く〳〵注意すべきことす。

細密な心掛、女子の論文として尤も適して居る。（評）

○人の野性　信濃　操子

包むべきことは包み、かくすべきところはかくしてこそ、人の世の美しくも嬉しくもあれ、如何にありの儘がよしとて、わざと醜きところを人前に現はさでかなはぬことゝもあらじかし、髮をあげ、衣裳をつけて人前に出づるを本來とする女性が、衣裳も着けず髮もおどろにふり亂して人前に出て、これ自然なりと云はゞ、誰かその狂を笑はざらん、自然主義の人々が、好んで人の野性のみを描かんとするは、恰も之れに類せずや野性をおさへ靈性を展べんとするものこれ人ならずや野性は人の餘義なく携ふるところの先天の穢なり、野性のみを描きてこれ人なりと云ふものは、自ら人の地位をひき下げて他の動物の伍伴に入るものなり、笑止の極みにこそ。

此文もと「自然主義に就いて」とありましたが、それにしてはあまり斷片的ですから斯う改めました、要するに天眞流露が貴いので抑制にしろ暴露にしろ凡べてわざとらしいのは厭であります。（評）

○境遇　岐阜　村木たけの

私は人間と云ふ者の其の境遇に支配せられること甚だしきを今更つく〳〵感じます。尤も意志の强い方は境遇から脱して其の人固有の性質を發揮する人もありますが、其れは十分意志も堅固となり、常識も水平線以上に在る人の事で。未だ常識も良心も萠芽時代の兒童にあつては全然境遇に支配せられるものと云つて宜ろしい。古への英雄が幼年の時に此の子供は大英雄になるか大惡黨になるかのどちらかだ……といはれた事を往々私等は聞くのであります。其の意は育てよう即ち其の境遇でどんなにでもなると云ふ事です。若しも人が生れた時の性質のまゝで成長して行くものなら人の運命は生れた時から定つて居なくてはならぬ筈ですが、事實はさうはゆきません、人の一生には精神上にさま〳〵な變化が有る。而も其の變化は皆境遇から來るものです。私が最も深く境遇と云ふ事に感じましたのは、私が始めて教師として某校の尋常四年の女子部を受持つた時です。私は一週間程熱心に各生徒の習慣態度、衣服の着工合等を觀察いたしました後に、境遇の大部分を形成する家庭の職業を推察いたしましたが、十中の八九迄適中いたしましたので、私は愈々固く少年の境遇に支配せられるものなる事を感じました。殊に私が注意いたしました一生徒は、どうも見るもの〳〵が欲しい性質が有るので誠に困りました。そ

して何時も不安さうな樣子て、キヨト〳〵した目つきて、どんな朋友でも皆敵視する習慣があるのてす、其癖私が說諭をいたしますと、始めから泣いて謝まつて、涙て私の同情を買つて說諭を遁れようとするのてす、私は始めの間は其の性質を甚どく惡みましたが、其の家庭が私の想像した通り、いかにも悲慘な境遇にありましたから、後には一種の哀愁と同情とを以て其の生徒を視るようになりました。近時世の風潮に從つて感化院の設立をボツ〳〵見ますが私は自分の事のように大層嬉しく思つて居ります。

らしきことにあられ共有益な文字てす。（評）

○女は美しきもの

熊本市　原田滯子

思ふ云ふ議論が立てあるやうてすが、狹少な私の考へては如何しても女子は美しくなくては成らぬ者だと思ひます、美は人間に限らず草花、衣服、其の他日用品ても、見にくいのより美しいのが床しく慕はしく思はれます、美を愛するのは人の眞情てす。まして女は先天的に美しかるべく形つくられてあるのてはないかと考へます、何故ならば女の美は人をして、殊に其夫をしてその心を柔らげしめ且つ、慰藉を與へ美しい感化を與へるのてす。それは餘り美人てない方を妻にしてゐる方も澤山あります、現に美人に限らないと云つてらつしやる方もありますけれども、それ等は自分の情を僞つてらつしやるのではありますまいか。

これはつい先日の事てした、兄の友達が四五人遊びにいらして話は直ちに妻君撰擇に移りました、一人が先づ心だてとお仰いますと其所此所から裁縫が巧いの、料理が上手の、文學者、音樂家、と出たのてどれに贊成者が多く出來るのかと伺つて居ましたら、兄は僕だと顏を第一にすると云つたのてす。何故だとの答は學問技藝は敎ゆれば覺えるし、心はいれかへる事が出來る、だけれども顏許しは造り換へる事が出來ないのだと申ました。此の言葉が皆樣の胸には何と響くか存じませぬが、私はつく〳〵本當だと思ひました、のみならず交際上（と云ふと少し語弊もありますが）にどんな心細い思ひするか知れません。て私等女子たる者は身分相應に出來得る限り、美しくなる事に力めるのが寧ろ至當てはないかと考へます。

何所迄も美しく優しかるべき女が自分の心を僞つて迄、美貌論を排斥されるのは、外から見てよくない事と思ひました。

『女は美しかるべきもの』とするは可、而も美人とは何んなものかと云ふとは決し難い問題てある、假りにそれが投票か何かて決するとしても、其所謂美人が必ずしも萬人の愛を喚ばないかも知れぬ、要するにこんなとは價値の問題てある、標準は主觀的にあつて客觀的に存しないのてある、又心は入れ替へが出來るが顏は作りかへが出來ぬとあるが、その意味て云はゞ心も入れ替へられない、心が入れ替へらるれば顏も作りかへられるのてある、これは理窟の沙汰てなく實驗するところてあります、要するに此議論は更らにある深所に觸れれば立てられますまい（評）

○時間を正確に守ること

京都　向井光子

時は金也と格言にもある通り、此上ない財産で世の中のあらゆる物は、皆此時の力に支配されてゐます、此時は一度去れば亦ある事の出來ないものなるが故に誰しも此寶を貴く惜しまずには居られない筈でありま す、しかし人は眞に其時を惜しむで利用してゐるでせうか、頗る疑がはしい事です、勿論西洋の諸文明國では大層時を大切にして、就業、遊戯、食事、訪問、休息等何から何まで機械のやうに規律正しく時間で働いてゐるといふ事をきいてゐますが我邦はどうでせう。

遠い處まで、尋ねるに及ばずもうすぐ目の前にある事を見てもその一斑を知る事が出來ます、鳥渡例をあげて見ますれば、今晩七時から宅にて幻燈會を開きますから同刻までに、出席して下さいとの報に接した或人が、果して同刻までに間違なく其處へ行つてゐますするでせうか、必らず一時間乃至二三時間遲いです、これらはまだ大した、差支へもございませんが、公衆の會なんぞの時に一人が遲刻した爲に正確に時間を守つて早くから來て、待つて居る人は實に迷惑です、即ち時を正確に守らぬ人は、約束にそむくのです、人に迷惑かけるのです、事業を害するのです、

文明の進歩はもはや封建時代の安閑なる生活を許しません、時來れば汽車は着き又出てゆくので、何でもない不注意の事が、案外なる不調子を生ずるのです、私共の方では定刻より二三時間遲れるのを京都時間といつて居ます、それは京都の人に限つてきつと〳〵時間を守らないからださうです、私等は此惡い京都時間を破つて定められた時刻がきたらどんなものでも容赦せずに出るといふ汽車時間を固守するやうになるのを望んで止まないので御座います。

此惡習慣は今に牢乎として殘つて居るやうです、而もそれが京都に限りません、各々は責任を以てこの矯正に努めたいものです（評）



石工　室蘭　大坂なほ子

散文詩



○規定　詩歌的情緒を口語を以て綴るべし形式は問はず凡て自由なり所謂口語詩の類にても可なり二十五行以内にて凡て擬假名を要す賞は乙種

○流れ灯（天賞）

熱海　木村綾野

これで二日の雨。
だるい身を門に半面だして、
泌々と宵の町を眺めて。
又、流火を見入つた。
長い幾つかの影となつた流火をぢつと見つめると、ずんずん底へ底へ魂が引張込まれさう。
あの地の下には暗い暗い國があつて行く道ばつかしあんなに美しい灯が澤山並んでゐるのぢやないかしら、其くにには魂より他に行けないで毎日毎日人の幾百の魂はあの道から出入してゐるの、あの華やかな灯を見いみい‥おゝいやな灯！
靈を誘ふばつかしにあんな僞の灯を點して暗いふちへ落さうと
中央の灯影は大きい、あれが灯の指揮者なんだらう……大きいのが一つ搖れると中央から遠ざかる灯ほどいそがしさうに、またたいてゐる――
早く早く――灯がゆらぐごとに疲れた魂はつりこまれるのでせう……
私の魂は灯かげの上て、はいろうはいろうとして覗いてゐます。
肉体は魂を離すまい離すまいとします。
灯は熱念深くもつり込まう釣込まうとして……。
魂はさわぐけど身は靜です、
灯は搖ぐけど肉は振はずに――。
雨の音は強くなつてきた……。

流れ灯と云ふもの丶印象が一寸はつきり分りかれるけれど、魂が誘はれてゆくと云ふ感情は充分に傳へてゐる、此君散文詩のオ能あり、自重せよ（評）

○心おびゑ（地賞）

阿波　長曾我部菊子

あふ魔が時――古い家の壁隅、戸の隈、柱かげ――
棚から天井から何時とはない佗しいうら悲しい夕ぐれの暗は、ひたすらひろごる――ひろごる――
窓をすかして外を見ても外だつて暮れやうとしてゐる。木の葉が靑から灰色にうつつて、雲が紅から黒樺色とかはらうとしてゐる。歸る烏黑く、迷へる黄の蝶蝶も、あたふた降りて草かげに一點……黒い…………
（私の見てる眼の下だのに――）
日暮はいやだなあ――心がうむので

子供も泣き出す頃である。
たれが日暮が好きなものか!! 黒い夜の力に壓せられて今に私の頭――さう、軀ばつかりじやない心まで、毒蜘蛛に血を吸ひとられるやう、じよじよ、滅されるか知れない。――呪ふべき暮よ、いまはしき夕暮!……
「否。」實は座敷の夕掃除をしてゐたんだので、物思を、ちやつと思ひ棄てゝ、再び、箒を動かしはじめる。
淺い灰色のたたみ……いつか濃い灰色の疊となりゆく上を、すつすつと箒を動かしてゐる、と、――
赤いもの!!! 箒が動くと、ふつふつと浮いて走る、むかうへ。箒が止まると、ぽつと居すわる。動くと止まると走る……ゐすわる……胸がふるへ、手がわなわな! て若い我が心おびえ。おびえて拾うて見ると紅絹の布である――。

少し複雜して居るが、詩の心持は動いてゐる(評)

○額(入賞)

陸奥 若葉子

私は毎朝お針の師匠へ行く時
毎朝繪草紙屋の前を通る。
上の方の壁に一尺に二尺ばかりの
寫眞の額が、
軍服姿の若い……腕を組んで
始めて見た時は何ともなしに、
二度目には立派な威嚴のある顏だ
と三度目には優しいような眼だと
それから後は見る度何となく向ふ
ても見てるように……。
もうあの寫眞の前を幾度通つたか
然しいつも同じ懐かしい樣な眼て
見てゐる……その度、
何とも云はれぬ嬉しさを感ずる、
毎朝通ふのが樂しみのようで
ほゝ笑んで見るけれ共、まだ何處
の誰だか解らない。

昔は繪姿に戀した男もある、今の世だからとて其れに似た感じの起らぬことはあるまい(評)

【秀逸】

○毒の針

丹波 鹽見喜代子

永い間かゝつて溜めて置いた針の折れを、あぶないから捨てやうと思つて取り出した。
赤うさびた、みゝぞのないのやら、尖端の折れたのやらが、小さい瓶の中で見るから毒々しい青い呼吸をしてゐる。
おゝいやだ。こんなもの、一瞬も手元に置いておけない。何處へ捨てやうか。塵埃溜塲?、鎭守の森?、いや、あぶない誰にたつか分らん。仕方がない。二尺許土を堀つて、瓶の上から紙て、幾重も幾重も自分の氣がすむだけぐる〳〵巻いて、埋めて置く。

ふと夜思ひ出した。
あの針か、此世にある間は、何處迄も人間に祟るんじやないかしら。と思ふと、暗い暗い闇の中から、青い呼息を吐いて、人々の顔へ吹きかけよる針の顔が、死んだお婆さんに聞いた、怨靈とかいふものゝ樣な形になつて、眼の前をちらつく。絶えずふー／＼毒氣を吐きながら、ふわ／＼と漂ふて居る。
今に、私に飛びつきさうだ。

毒の針、着想からして詩的、詩の趣向を語つてゐるやうで、未だ、醇化した詩にならないやうな氣もする、是が渾圓として詩化されゝば立派なものが出來るだらう（評）

○戀ふきみよ

横濱市　さゝ川

戀ふきみよ、おほくを語りたまふな
妾はきみが一言をだに
洩さじ忘れじと耳傾けて居るものを
妾が忘れたらどうしやう
愛の言葉の若しも盡きたら
あふれる泉のとまるやうに
きみの愛は枯れてしまふのだ
毎夜逢つて一言づゝきゝたい
一夜に語りつくす言艸も百夜に延して永い戀衷を
毎夜の短い懐かしい言葉に
かぎりなく微笑みたい。

戀衷を祈る女子の心情、切なるもの（評）

○暗い穴

神戸市　田中ますゑ

何をしに行くのだらう
雨あがり——
崩れかゝつた石垣の
苔の香はしんみりと。
胸にしむ水錆の香り
朽ちた城壁は水に姿を見せて居る
我前を通る鳥さへ
啼きもせぬ、淋いてはないか
ふと見ると何處から來たのか
小さな赤い蟹が
石垣の穴の口に一匹居る
凝乎と見てゐると
ごそ／＼と這入つて行く
あゝあの中は暗黑だのに
何をしに行くのだらう。

感情てはないが、考の方にしても意味がある（評）

○お美輪さん

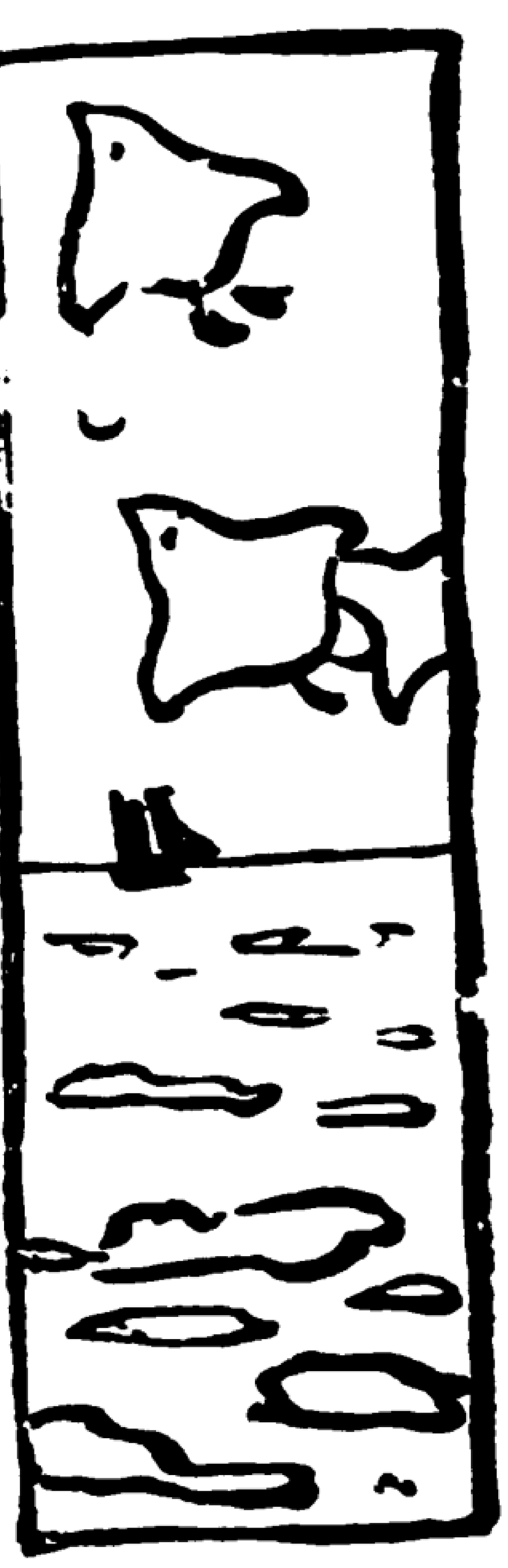
越後　佐藤浪子

一時は煙ですよ、妾の顔を一日／＼に煤けさせて行くの、惡らしい、だけど其中に甘い露が有る如な氣がしてね、クル／＼、と渦巻く煙の中に「甘露」をさぐつて居るんですは、惡いけれど矢張り煙の中が好いと見るは……一笑つたり沈んだり面白い人、紫紺矢絣の袖は長いけれど、全躰幾年になるだらう。

散文詩の自由なるところ（評）

短文

中村文學士選



○規定　短くし入氣の利いた文章を募る十六字詰七行以内凡て振假名つきハガキは許さず一人一章に限ること賞は丙種を送呈す

○癖（天賞）

伊豆　加藤　爲子

ぢつと一點を凝視るのは私の癖、癖といはうか……。失禮か知らねど、人樣同士話してゐる時、傍て其の人の顏をいつも凝視てゐる。すると知己でも朋友でも皆一面識の人のやうで、私はこの方を知つてゐるのかしらといつも思ふ。

（評）いゝところを摑みました。

○笑（地賞）

小石川　三宅　恒子

笑とや、只華やかに美しきものとのみ思ひつるに……床しげなる大人のつどひては交し合ふあてなる笑の裏に我等少女の涙にもいやまされる、苦しさも悲しさも、ふくまるゝと知り得し今、淺ましさか、世は、人はとひたすらにおのゝかれて……

（評）ゆくへはかなき思ひこそすれ、

○牧場の初春（人賞）

下之關　谷　子

麗らかに春の光が照つてゐて、空の純白い雲が長閑な牛の聲に送られてうごくともなく搖れてゆく。私は柵に凭れて孤り故鄕の友を一人一人と描いて微笑んでゐると、斑のある白い牛が乳を滴して前を行く。綠の草へかゝつた乳は軈て美しい花の咲く糧てせう。

（評）牧場の趣がよくあらはれました、

秀逸

○杣小屋

小石川　近藤あい子

新木造りの板小屋に六月の日光が、鬱蒼とした木の間を洩れて、散らばつた木屑を照らす。朝からの勞れに樵夫は鋸を投げ出して、引きかけた大木を枕にグッスリと眠つてゐる。黑蟻が兩の毛脛に長い列をつくつて歩く。汗がギラ〳〵と胸を流れた。

寫生、

○罪

京都府　向井　光子

私は罪を知りました。世の中は皆罪ですのね、花が咲くのも罪、鳥が鳴くのも罪、人が生れるのも罪、時のうつるのが最も大いなる罪だと自分は思ひますが……あゝ私も罪は逃れられません。

わかつた樣なわからぬ樣な

○馬車　攝津　山下芳子

私が湊川神社の方を歩いて來ました時に、遠く向ふの方から二頭方の馬車が來ました。私は自分も一度は彼の樣な、馬車に乘つて見たいと思つて居ました、追々近よつて來ましたので、見ましたら、罪人の乘つて居る、黒い箱の馬車でしたので私は思はず、身振ひを致しました。

そんなものに乘つたら大變です

○花子樣　磐城　橋本房子

繪端書交換でお友達になつた花子さん、死むだ姉の名と同じなので懐かしくつて堪まらない、今年の冬休みに花さんを尋ねたら、髯むしやのお方……、あゝ浮世は皆なこんな夢の連續でせうか。

油斷がなりませんね、

○隣の伯母さん　伊豫　ゆき子

隣の伯母さんは、酒呑みの夫と、馬鹿の子をもつて居ながら、少しの心配ごとも言つた事なし。いつも大きな聲で面白いことのみいつて笑つてゐる。四十六とはみえない。

羨むべき樂天家！

○思ひ出　紀伊　早苗

私は何かに拗ねたのでした、闇い納戸に入つて隅に積重ねた蒲團に凭れて歔欷きました。板の間では茶碗の鳴る音、匙が鍋の底に觸る音、賑やかに御飯を食べる樣が眼に見えるやうです。蒲團は泪で生溫く濕りました。

小さい時よくある事です

○友　北見　今村りせ

お友達の〇〇さんがお嫁さんに行つてからは、お湯屋などで逢つても見ない振りをして居る。私が〇〇さんと呼びますと、ハイと一寸笑顔をしたばかり、なんにも云つて下さらない。でもお嫁さんに行けば、友達などに言葉をかけられるのは嫌やなものかしら。

さアどうでせう、

○春の朝　横濱　吉川香都子

糸のやうな雨が、庭の海棠にそゝぐ朝、鶯の摺餌をこしらへて居ると、お向ふのお妾さんが爪彈で端唄を彈出した。と同時に、御隣では御隱居の謠が初まつた。私の家では籠の中から、ホーホケキヨ。

結末妙、

○願ひ　長野　山口はま子

風通お召の二枚襲ね、厚板とテリヤ織との晝夜帯、狐色の地に光淋模樣

の襦袢の襟、眞紅の疋田形のある絹縮みの帶上げ、そうして根の下つた丸髷に赤い手柄を掛けて、後丸の下駄を穿いた二十許りの奥樣さらぬだに印象の強い女だのに、道行きを纏つた六十位の男らしい男を連れて。思ひ出せば今も髣髴とする。妾もお嫁に成つたならば、ああして見せ附けて與れたい……　……

そしてその後は？

○或る人が

京都　川田　益子

そんなに美しくなくても、ちよいと、ふりむかせる位の顔てね、髪は思ひきり濃くて、體は中肉て背は少し高い方、そうして、いつも〳〵流行におくれない装をして、いつまでも若くて暮して居たいわ、と、或る人がいつて居ますの！

或人ぢやないてせう

○可憐

府下　照井みどり

「來るなつていふに從つて來やがる此餓鬼……」一寸ある、露路からかけ出した、七つ許の可憐な小娘の頭上目がけて打下す鐵拳、是でもか、と、いはぬ許の母親が凄しき勢に、泣きながら歸へる後姿の哀れさ、行末は又斯いふ親に成るのであらう。

めぐりめぐる世！

○待つ身

本　筆子

花は咲いた、春風にそよめく音さへもしやと、私等の胸はときめく。春になつたら歸ると、兄樣が有仰つてから既う三年……。今年はお召からお部屋まで、心をつけて昨日今日、あゝちら〳〵と花は散るのに、待つ身は殊更姉樣が、肩の疲。

かくてわが世は？

○春の夕ぐれ

信濃　黑田　直枝

鮮かな夕日が眞白い日本アルプスの山上を淡紅に彩つて靑空との配合が又なく美しい、野遊びがへりの二人の子供、健ちやん軍歌うたつて急ごうよ、扶桑の空に聳えたつ富士の高根の旭かげ、これから先は知らないわー！ー、颯と吹いて來た春風に緋桃の花がヒラヒラと散つて小川の水に流れて行く。

●叔母

姫路　田村　米子

山本の甥は今年大學に入學つた。そして本田の甥も東京の第一高へ入學つて、柏の微章をつけて威ばつて居る。又姪は昨年女學校を卒業した、かんじんの叔母は今女學校の三年生いつも甥や姪に云ひきかされて居

る。

小さい叔母さん！

○お星樣の取れる時

鳥取　ゆかり子

お姉ちゃん、好ちゃんお星樣がほしいがどうしたら取れるの‥‥そーねーあれは大將樣にならなくては取れないのよ‥‥好ちゃん何時大將樣になれるの‥‥それはね、お母樣のお乳を哺ま無いように成つて、お星樣の數程本を讀んで、字を書いて、それからです‥‥。

小お伽噺、

○燃ゆる花

福岡　田中とよ子

桃、櫻、椿と今が眞盛り、何れが如何とも、淡紅、桃色、眞紅と皆美しい。それても私は、何れが一等美しいと交々見て居た、突然椿がポタリと落ちた。ハツとした機に目が暗んだ。其儘目閉ぢて居ると、燃るわ、燃るわ、眞紅の花が‥‥。やがて漸々大きくなつてくる〱とまひ始めた。

鏡花式でゝれ、

○おぼろ夜

大阪　山内溪子

朧の夜です、街のはづれは薄白い靄にまかれた樣です、二三株の柳はゆたりと靜にゆれてゐる、樋守の小家は眞暗てす、其暗い中から赤い灯が一つもれてゐる、折々人の笑い聲も聞えます、私はぢ――ツと立ち止つて朧夜の靜けさを、おぼえました。

可

○お友達

佐賀　久代

靜子さんは沈み勝ちな國語に勝れた美しい方。幸子さんは活潑な短かいお袴に靴を召した、愛らしい級ても評判の庭球の選手なのです。そして此のお二人共私とは極親しいお友達です。一人は温和な方、一人は快活な方。三人中の私はさてどんな性質てしよう。

自己の性質、他人をよく知る、

○朝景色

磐城　立谷繁子

朝霞が浦一面に深くこめて、うつすらと魚小屋や、すら〱と紫の水の上を棹さして行く舟人が影の樣に見える。暫くするとそれがだん〱はつきりとなつて、棹から落ちる雫までが見える樣になる。私は朝な〱是を眺めるのであるが。あゝいゝ景色と口ばしらぬ事はない。

奨ましい

○初夏の嵐山

京都　みやま木

花か散つて、人の心も漸く鎭つた頃、

右も左も、清々しい新緑に包まれた山と山との間を、大堰川は、青ら澄んで流れてゐる。葉末から、今にも露の滴りさうな木の下蔭に、船を寄せて、心靜に、河鹿の鳴く音を聞く時の心地は……‼

眞に妙なるべし

○入學試驗場

近江　梅園女

席についた受驗者數十人、先生が前に立つて問題の入つてる封筒を持たれた、暖爐がどん／＼燃えてゐるのに皆の躰はふるへてゐる、やがて紫洋墨でかいた問題が一枚づゝ渡ると、首を捻る者、青くなる者、微笑む者等種々雜多、身躰のふるひはまだ止まぬ。

げに學生の危難

○長閑

兵庫　祥子

「私しや歌ずき……」と例のれむそうな調子で

畑の方から鎗やの十八番の歌が出た。ぼうと霞んだ向ふの蓮華畑の中では、美いちやんと貞ちんとが赤いリボンをひら／＼させながら、一生懸命に花束を拵らへてゐる。少し南へはなれた風呂屋の煙突からはたへず煙りをはき出してゐる。

○濱

三重　吉川澄江

朝まだき濱に出る。廣い廣い春の海は、睿の樣な潮を湛へて、かり／＼斜に走る漁舟もある。對岸の山々は、霧の裡に包まれて、繪の樣に、ほのかに見えてる。十月の漁村は、未だなかば眠つて、何處からか、鷄の鳴き聲が聞える。

○長閑

下谷　樋口房尾子

ほんのりと日當よき寄宿の窓をがらりと明けた、緣先では姉が粋樣る小唄、子雀は花壇に遊んで、村境では堤普請のエンヤラ節が聞え、遠かの丘では太郎さん組の進軍喇叭、そうして雲雀は朝早くより碧空高く囀つて居る、庭の敷石には糸遊がたつて長閑な日です。

○霞の朝日

下谷　谷口桂子

私しの國は石洲江の川の川上で、遠正寺の曉きの鐘が鳴ると、ゴー／＼と川瀬の音が聞え出し、山も川も全く八重霞に罩められて仕舞ふのです、すると東山から手球の樣な赤い赤いお日樣がゆら／＼と昇つて出る、川下からは白帆が幾つともなく霞の中につゞくのです。

○春の日

福岡　筑紫富士

皆樣は、今日は日曜だからと云つて、美しいお籠をさげて摘草にと、お友達誘ひ合せて、おさげのリボンや長いお袖をひら／＼させながら、ゆる／＼歩いてお出でなさる。それに私は、丈の短い筒袖に手拭を被つて、朝早くから土筆や芹をせつせと取つて、賣りに行くのであります。

○春の宿場

埼玉　船津ゆかり子

宿場茶屋の桃が咲いて春風が輕く「お休み所」といふ旗をまくつて居る、馬子が七臺計り續いて來て休んで居る。後ろの馬子が前のに「三ちやん、後が來たぜ行かうや」と聲かけた、「オーイ」とやがて起立、ながら歩み出した、お神さんの愛嬌聲が聞える。

○溫泉

牛込　塚原けん子

私は體をそーと入れた、湯氣は絶えず緩く昇つてゐる。谷間からなだれ落つる水が玻璃窓の下の泉水に微かに傳へて、金魚が樂しさうに浮きつ沈みつして居る。二階の間より美しい尺八の音が淸らかに流れる。颯と吹く風に庭の桃の花がはら／＼と泉水一面に散つた。

○春日和

大阪　服部喜代子

ポカ／＼と暖い日のさしこんだ緣に弟は背を反けて「太郎ハヨイ子デアリマス」と大聲あげて

おさらへの最中欠伸をする小猫の影が可笑しく障子にうつて、春の日は長閑だ。

○堤の下

横濱　北原　仙子

「山を通れば茨が止める、茨放しやれ日が暮れる」、と堤下から、懷かしい？聲がするので覗くと、風の吹く毎にユラ〳〵と水面をなでる葉柳のもとに、手拭を姉さんかむりにした娘が。赤い襷を掛けて。豬土のついてゐる夏大根を洗ひ乍ら歌つてゐるのでした。

○耕地の夕

布哇　上土井定子

凉々と暑を吹いてゐた東風止んで太平洋上の金銀の波鱗は夕陽に輝いてゐる、終業告げる製糖場の滊笛がボーと鳴ると甘蔗畑の中に唄ふてゐた朝鮮人の聲がぱつたり止んだ。

○寢る時

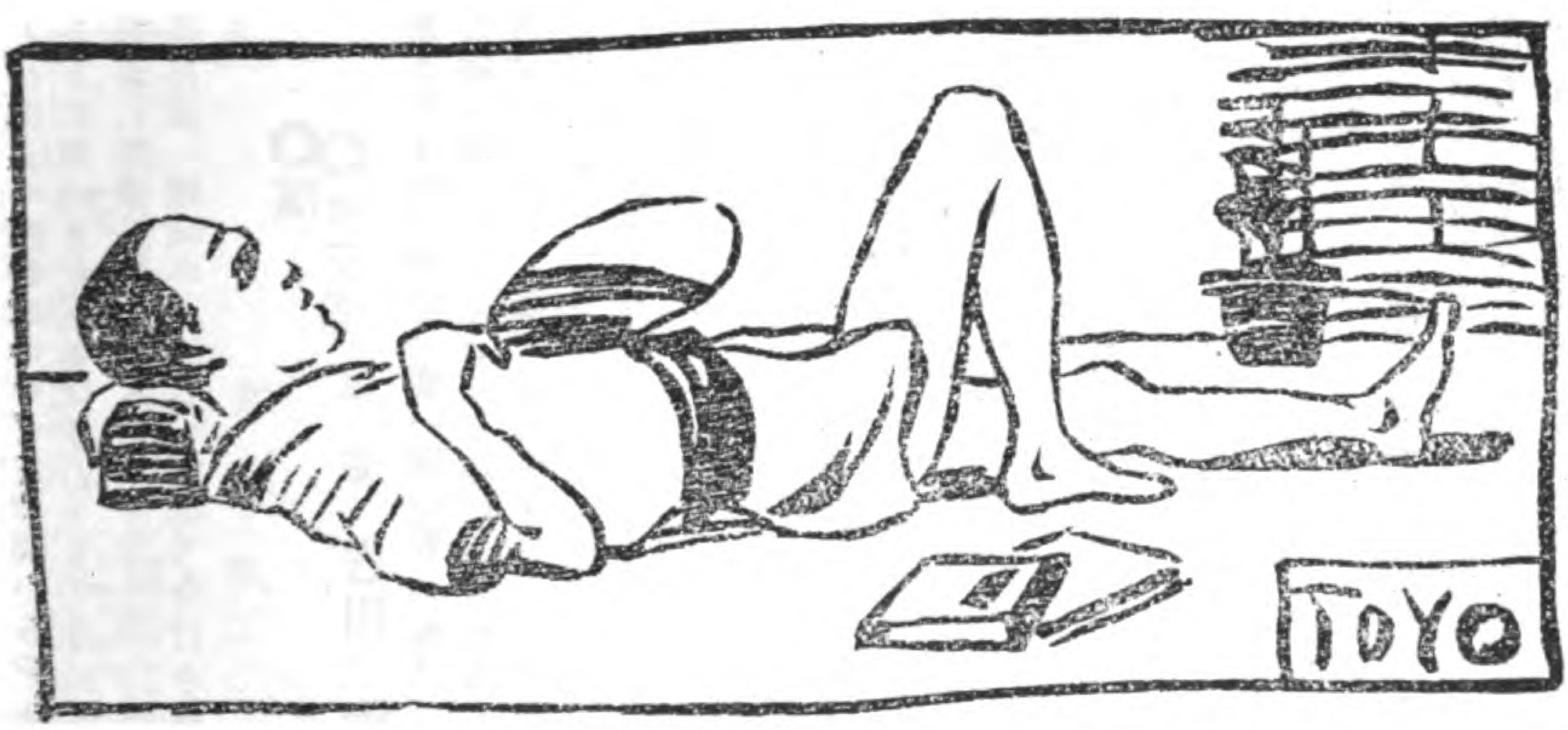
四谷　櫻　子

讀みさしの本を其儘其上にうつぶして、うつ〳〵とうたゝ寢する時。しとしととふる春雨の音をききながら、床の中に歌思ふ時。遠足の塵をさらりと湯に流して勞れた手足を樂々とふみのばす時。私はいつも極樂とはこんな處だらうと思ひます の。

○古　墳

下關　山本　榮子

私の家の裏に古墳が二つ程あります人の話によると源平時代のものださうです、古いい かにも神々しい樣な椎の古木がずつと塚の周圍を卷いて晝ても暗いそして風の吹く夜等はヒユウとその昔の叫喚をくり返すかの樣てす。



ひるね　繩津とよ子

○物思ひ

佐賀　深川たか子

ノート片手に友の御仕事して被在るのを茫然見てゐると深川さん、不思先生の聲に驚き振り返る……とたんいかにも可笑し相な先生の御眼とぱつたり全身の血が顏にのぼせて來ました。

○地獄風呂

岐阜　村木たけの

蓋をとると白ひ湯氣が柔かく顏を撫る桶の縁に兩手をつひて下司板の眞中を踏へて身體の重みて其を沈ませる、小さな渦が二つ、ゴーッと音を、たてて白ひ足を吸ひこむ、頸迄トップリ潜る、痛んだ海棠の花瓣を浮した湯が海流の如にゆるやかに流れる。

○小　鳥

京都　春日　朱鷺

草が青々と萌えて居る。和らかい生々としたその色頭の上を微風が撫ぜる。菜種の花が隅の方に少し咲いて居る。田舍めいた花の色、香、片田舍にはふさはしい花、野の匂がする鉢植のら細い黃にチラホラ咲いてる。土のついた莖て縛つた、櫻の花薄紅う白と交つた色に。小鳥の聲が春の空に騷いてる。鳥の影が小さう空氣の海の底をスーッと行く。

俳句

内藤鳴雪選



○（天賞）
春の夜の公達多き館かな　紀伊　富美子

○（地賞）
君はまだ大和めぐりや春の暮　若狭　津田たき子

○（人賞）
春浅き佛の顔の灯影かな　越後　藤原竹子

【秀逸】

見ぬ京のはなしする夜や春の雨　水戸　重子
雨斜め傘斜め京の春は逝く　常陸　春野朝子
鮎のぼる小川に髪を洗ひけり　千葉　高濱春枝
魔が淵や亂れ心に春の風　島根　長崎はる子
六月の鶯聞いて朝湯かな　千葉　葛岡花子

小雀や歩きそめたり二三疋　丹波　鹽見喜代子

○規定　同じ材料で二度以上使へば陳腐になるとか剽窃になるとか言ふ人もあるが餘計な心配である前の人と異つて他に轉換して活用して居れば幾度同じ材料を使つても差支ない（鳴雪）一人一句限賞丙種

古寺に京の客あり初櫻　京都　山下はる
夏近き明石の濱や浪の音　大坂　土橋仙花女
夏帽の一群瀧を見おろしぬ　出雲　岸ため子
此里の茶店の柳老いにけり　大阪　吉本ふさ子
旅僧の背中吹かれて花の風　岡山　高木清子
春月や山一つ宛殖えて見ゆ　紀伊　三木西のき子
ゆれやみて月に親しむ柳かな　尾張　愛薔薇菫紫
天の川芙蓉の上に流れけり　羽前　白萩女
鷄頭の畑に飛ぶなり蝶二つ　彦根　辻芳子
梅が香に井筒の昔偲びけり　四谷　笹原芳江子
夜衣のまゝ浮れいでたり花と月　熊本　雨森愛子
なつかしき郷出る朝の雲雀哉　下總　鈴木きく子
花の朝われは酒屋に走るべう　清國　重長孤女
ハモニカの吹く音もして夏の風　常陸　中内泉子
地震して雨ふる朝や秋近し　大阪　中野喜代子
白酒にいつしか酔て謡かな　本郷　相樂きみ子
舞ふ足の亂れにけりな花の宴　姫路　富岡綾子
金的を射る若殿や青嵐　下總　荒鵜子
水ぬるむ池のほとりや日傘行く　同　岩田よし子
白粉の水かけてやる菫かな　深谷　鈴木ごう
夕風や揚げしひばりの逆か落し　岡山　三宅白梅子
義經の千本櫻咲きにけり　丹波　藤田靜枝
椅子による午後の讀書や夏木立　京都　藤尾よしえ

朝の香や桃見て歸へる磯のみち　駿河　芙蓉子
山寺に陀羅尼をよめば時鳥　四谷　味方とう子
花の里美しく水めぐるなり　兵庫　辻井浜子
青東風に吹れて佃の下山かな　橫須賀　齋藤松代子
行く春や泣いて別かるゝ影法師　秋田　加藤うん子
春雨や渡月橋行く蛇の目傘　大阪　俣文子
指ざして名所の多き涼納かな　新潟　高山かをる子
おの子ならぬれても見たし春の雨　栃木　宮田いち子
梅をちこち人をちこちに畑打ち　下關　上杉玉子
泥の手に貸し合ふ櫛も田植哉　土佐　榮子
虎杖や谷の流れの冴して　攝田清子
賣ものゝ馬も肥たる夏野哉　越前　紺井岩子
春の雨晴れて傘月夜かな　讃岐　金井浜子
さゝなみや鱠の刺身にかすむ勢田　岐阜　篠田とみ子
客待の車夫に問ひけり梅の花　埼玉　長岡まき
閑かや猫と妹のふざけ合ふ　千葉　湖島ぜん
はづかしき君もありけり雛の棚　大坂　梅本龍子
尼寺の朧の窓や影法師　千葉　千本松花月
春の川手まれきしつゝ渡りけり　大坂　山内渓子
朧夜や櫻並木の馬子の唄　濱松　中村千代
春の野や小袴とりしは誰が妹ぞ　成岩　榊原つた子
花吹雪少女の肩につもりけり　南葛飾　紫葉女
穴蜂のすまひどころや土筆　近江　周防千代子
張板の緋紗に花の雫かな　備中　竹好幾子
涼しさや海をはなるゝなつの月　兵庫　杉山春翠
花の道たいまつともし通りけり　岩見　小松原登久
長門路や鳥雲に入り暮れにけり　門司　臼井幸子
琴やんで紅梅の窓に月昇る　韓国　原登里子
老猫も戀すなる夜のおぼろかな　長野　澤金蕗枝子
衣あらふ少女に秋の時雨哉　上總　森ふみ
白露や馬に鞍匿く月明り　羽前　白露子

風國分寺の塔迥か也　上總　葛岡花子
山門を遊さげて出る小姓哉　牛込　信子
縁に寢る小猫に櫻ちりかゝる　長野　西條宇女子
ゆく雁やくれて明るき水の村　羽後　三浦ふみ子
岩の上に人の店出す汐干哉　下總　三橋なみ
石塔の古きをしのぶ蘿かな　下關　鈴子女史
鯉跳ぬる音も凍りて冬籠　京都　春日朱鷺
古庭に目立つ一木や白椿　愛知　掛布つたの
春雨の降るや蝶々の比翼塚　靜岡　波多野いち
据風呂に伊豫節をかし萩の月　松山　曉子
庭に落ちし雛の首や春の雨　豐前　石田百合子
牡丹さいて朝寢し給ふおとゞかな　日本橋　松岡千代子
此村の櫻に誇る彌生哉　三重　吉川澄江
檜の上に櫻散るなり野邊送り　盛岡　米澤白桃
菜の花や妹の嫁ぎし家近く　下關　山本芳子
眉剃りて日永の顔となりにけり　長崎　天ケ瀬貞子
雲の中に櫻咲くなり鳥の聲　京都　をりえ
猫だいて立てる女や桃の家　明石　嘉代子
一本の梅に寺内のほこり哉　名古屋　太田秀蘭
散る／＼と童は櫻ゆすりけり　下谷　谷口桂子
さら／＼と圖碁崩しけり青簾　山口　河村しづ子
春風や雲なきに鳳二つ　山口　深山鶯
深綠の影や机の土佐日記　信濃　赤津ふみ子
暮るる日を待ち出てにけり夏の月　安房　阿部けん子
月よりも花の明るき吉野山　安房　阿部かれ子
摘草に行くや女の皆子持　神田　林馥子
五月雨に戀の片袖ぬらしけり　長野　山西てる
渡場に舟待つ人や夏の朝　長野　胡池かづな
百合咲くや狐の嫁の通り雨　本郷　小稗菊江子
吾妹子の前髪吹くや春の風　下總　石原昇榮女
こう／＼と海の響や冬の松　筑前　香原ふさ子

教への庭



○規定　此欄の投稿は女教師の方に限る十六字詰十行賞は丙賞

○感化（入賞）

丹波　百合子

私の生徒の中に極貧者の娘て、非常にひがみ根性のねじけ者がある。私は、如何しても是を矯正したいと思て、一所に遊て見たり、話をしかけたりして、近づかうとするが、少しも打とけないので困て居た。所が、此冬彼の手に凍傷ができて、見るも哀れな樣てあつたから、早速小使をして、校醫の許へ連させた。すると、白水をわかして、日に三度づゝ溫めよとの事てあつたから、痛がるのを無理に實行させて、遂に三週間て全治した。其後彼は私を見るとニッコリ笑ふ樣になり、傍に來て話をする樣になつて、餘程活氣を帶びて來て、成績もずつと佳良になつた。私はまことに嬉しく思ふ。

○滿お父さんの時間

愛知　加藤和佐子

或る時、尋常二年の子供に、明日は天長節てすから、用具を持たず、十時までに、いらつしやいと申しました。するど一人が手をあげて、先生お父樣の時間てすか、學校の時間てすかつて聞きました。何故かときけば内のお父さんは、十時と云へは、十二時か一時位にしか、出掛けないものと申しました。

○教科練習會

紀伊　早苗

增雄さんは登壇しました、「私は太吉とお菊の話をします」私は手を握つて行詰らぬ樣にとホロホロしました、增雄さんは又私の顏を只管に凝視めて話してゐる樣てす聽て無事に濟んで壇を降りる時、父兄席から霰の如く拍手が鳴りました私はほつゝ胸撫下ろして增雄さんの顏を窺きました、そして限りなく增雄さんを可愛く思ひました。

○廢物利用

鳥取　ゆかり子

五年生に讀書て敎へた廢物利用と云ふのを應用してめいくに表を作らせました所實に私等の思ひ及ばぬ事迄色々と書いてありました其中に傘の古いのは柄はつゑとし骨は火ばしとし布はつぎ合せて座布團とすと書いたのが有りましたので誰かと氏名を見ましたら古物買ひの子て有りました。

○師の恩

奈良縣　福西田鶴子

私は新入の一年生を敎へる每に、舊師の鴻大な御恩の程を思ひ出されて感謝の至りに堪へないのです。まあ右、左はおろか、きめて上げた自分の席、履物の置き場さへ知らないばかりか、文字を敎へて上げても、逆に書いたり、橫に書いたり、一一手を持つて敎へてやらればならぬのですもの。

○郊外散步

甲斐　あや子

明日の郊外散步に就きての注意を申含めて兒童を退散せしめ、校外敎授案を認めて、いざ歸宅せんと學校を出た幾分か曇つてゐた、朝よりの空模樣は大層氣支はしくなつて來ました。不動尊の側にある、石地藏に對つて二三人の女生徒が何か頻りと祈つてゐる、私を見た一生は、まがわるそーに顏を覆ふた私は可愛想になつて「皆樣がご熱心に御祈りするから屹度よい天氣にして下さるてせうよ」と申しましたら皆一度に笑ひました。



餘興



○規定　毎號課題を出して諸孃の餘興に供す十六字詰十行迄一人一章に限丙種の賞を送呈すべし新題は卷末にあり見落す勿れ

色彩（課題）

○石鹼玉（天賞）

本郷區根津　小稗菊江子

妾は石鹼玉が大好で造へては色彩の出るのを樂しんでゐます、玉を細い三本の棒で張て菱にしますと、奇麗に赤、橙、黄、綠、青、藍、紫、と云ふ風に映ります、此色彩を各々分て聯想しますと世の中の物事皆含まれて居る樣に感じられます、亦雨の後に神樣のお渡になる樣な、美しい長閑な淸い虹の橋も、石鹼玉みたい樣な小玉が集まつて出來てゐる樣に思はれて一入好きてす。

一寸面白い見つけ所

○濃き華やかな色（地賞）

京都　春日　朱鷺

私は濃い色彩を好む。紅紫綠、淺黄、茶は餘り好まぬ。濃い藍の赤光りするのは刺戟が强過ぎるし、然しおはぐろ蜻蛉の羽の色は好、赤味掛かつた紫も厭、同じ樣な色でも紅は好むが朱の方は最早ひとつ。要するに何色でも光澤のある、華かな生々とした色を好む。然の紫は重々しい如何かと言ふと暗い方が善い。

紫は沈むだ美しい程凄い色、怨恨歎嗟正に老孃の色である。紅は若い血の鳴り肉の躍り、呼吸のハヅム熱中した活動、炎の燃ゆる憧憬の色、見る人を美しと認め見る人を戀ふ、少女の色。綠は覇氣滿々たる少年、血肉足り筋力充實した靑年の理想の色、紅は花で櫻で女で綠は草て柳て葉て男だ。二色共靑春の標象代表である。

濃厚、華麗、光輝、生々、活動、憧憬、覇氣充實、靑春、あゝ獰猛なる哉、

○眞暗な室（人賞）

大阪　山内　溪子

灯を消して私は床に入りました、目をぢいッと閉て居りますと、暗い〳〵釣天井から、赤や青、黄や桃色、金や銀、それは〳〵何とも言へない色がもや〳〵と浮び見えます、私は面白いと思ふて、パット目を開ますと、やッぱり眞暗な室です、又目を閉ますと今度は、銀色の本目なりの物が見えました、私はふと、此美しい色で白の花を染たらなあと思ひました。

思つたら消えたんてせう

【秀逸】

○緑

愛知縣　加藤眞佐子

緑！眼の醒める樣な色、といふのはそれて、初夏の自然を飾る唯一の色彩てある、緑滴地にや落ちなむ若葉の陰……と、只かう聞いたばかりて、妾等の胸には、もう一種詩的の感想が、止度もなく湧いて來る。草といふ草、木葉といふ木葉が皆、靑々とした初夏の柔い、優しい空氣に、接吻して、互に淡い新緑の影を作つて居る。初夏の、海、山、空、野、夫等は恐らくは春、夏の夫等に比して、趣味に於て勝さること數等てあらう。紅を優しい京都の女といふならば、緑は厭味のない江戸ッ子とてもいはうか。要するに、緑は望み多い色てある、そして又飾氣のない淡白な色てある。

○林檎の色

大阪市　梅本龍子

華かな紅い春の灯に照らされた卓の上の林檎の色ほど美くしいものはありませぬ、艶々しい紅い色、潤ひのある靑い色、そしてみづ〱しい匂ひ……妾はいつも思ひます、戀をするならば、こんな美くしい色の戀をしたいと……。

○肺病色

京都　くちなし

私あの梅鼠て色れあれのちつとぢみなのを見るとどうも不如歸の浪子の着物や帶になりそうな色だと思ひます、それてぢき肺病色々々々つてましたがそれがどうしたものか私の物に多くて一時は姉のお納戸づくめを羨んだ事もありました、ところが此頃わたしは其肺病色が大變好きになりました。

○リボンの色

日暮里　細谷鏡子

私が經驗したリボンの色の配合を御話致しませう、先づ紺靑色のリボンは一番毛を黑く見せて人の目を惹きます、白、水色、クリーム色等は上品に見えます、赤や鶸色は愛らしく見せます、オレンヂ色、桃色、は毛を赤く見せて何となく人格を賤しくします、けれど紺靑は夜會等の時は割合にはりません、紫色は一たいに毛にうつりませんけれど、夜は白、時、水色等がハッキリして宜い樣です。

○色の葛籐

岐阜　篠田とみ子

私は夜と晝ともつれあふ空の色、白き砂地に松があつて海がもうすう――と靑くなつて、水や空、空や水と言ふ歲、手近に申せば伏見稻荷樣の山門京都の六極殿などの色彩、十七八の女子に筋立てゝ白粉つけさせて、お納戸色の朱珍の帶に黑い霰模樣などきせて金鎖を胸から、淡紅色のハンカチーフに鶸色の洋傘持たせて櫻の花がちら〱ひら〱する附近に彳ませるといふ色彩が好きてあります。

○九月の色

長野　山口はま子

眞靑な桑の葉、黃金色の稻穗、赤い薔薇の花、赤黑いなつめ、黑ずんだ松葉、その間を透して見ゆる、野良へ往き來する男の白い菅笠淺黃手拭を冠つた女、擔いだ白銀色の鎌、妾は一年の内九月が一番美しく思います

○雫の色々

秋田　いし子

春雨は淡紅色て夏の雨は綠．秋は紅て冬は銀色、少女の眼から出る雫はスミレ色て、おさんのは眞黑、商人のは黃金色て、肺病の佳人の雫は暗い慕の色をして居る、さて〱皆美くしいが無色なものは？オホギヤアと歎ふベビーの雫？

○うす桃色が懷しい

越後　佐藤浪子

幼い折植ゑた桃が一昨年初めて淡桃色の花を咲きました、其れからは非常に其色を懷しく思ひます、おつさりとして高尙な優しい色、嫌なと仰在る方もありませうが自ら養ふた花の彩てすもの可愛くつてたまりません、最早二三輪咲きかけましたの、日の暮れるまて花のお守りなしてました。

○自然の色

秩父　登久子

人工色彩は如何程美しいか山家育ちの私にはわかりませんが自然の色て私の一番好きなのは黃と綠とてす綠は生々として丁度人の靑年時代の樣黃色は作物の熟した色田が一面此の色になつ

た時の樂しさ村人の喜ぶ聲町のにぎわい等へても氣持が好い。
菜種の花も私は好みます。

○金の鋼銀の鰹

越後　木島しのぶ

朝は日の出ぬ前からもう金色の鋼銀色の鰹眞白の刀魚色あざやかな小魚等砂の上にピン／＼はれて居る。
夕は日沒の時は遠く紅の浪が連つて金色の浪がたゞようて世界の浪が一度に寄せて來る樣、實に心地好いものは海濱です此心地よい海岸に私等姉妹四人が朝な夕なに遊んでは感謝して居ります。

○野の色

信濃　赤津ふみ子

黄色の菜の花や、眞青な麥が遠く連つて居る間に、野の少女は白手拭に絣の襷を掛けて、春風に赤い襟出しをちら／＼させて畑を打つて居る、瑠璃色に澄みきつた空には、眞白な雲の一と塊りがフワリと浮んで、其陰に雲雀が隱れて鳴いて居る、萌黄色が烟つて見える柳の枝が嫋とゆれて、紫の菫が地になびくと、花に止まつた白と黄の蝶の羽が危くも飜つた。

○霧雨の夕

阿部かね子

霧雨の夕方、東の方へ七色の橋がかゝつた、之れを誰がわたるであらうか、あれごらんなさい色が渡つたてはないかと云はれて、顏が赤くなる、目は色を盜んで他の色は何を見てもぼんやりとした樣に見える、私のすきな賞ふに賞はれぬ此色。

○赤い舌

美濃　をとめ

妾の妹は大層赤い色を好きます、赤縮絆の襟に赤い袖、薄赤の頬に桃色のリボン、海老茶の袴に桃色の風呂敷、心も薄赤いのですよ、だつてどんな事があつても眞赤な舌を出す氣遣ひはございませぬ、眞赤な嘘をついた事もないのですよ、

○色の聯想

攝津　みなしご

紅や黄がゝつた色を見れば、甘味滴る初夏の果物を聯想し、灰色の上を赫色で彩うてゐる夕燒雲を見ると、近代の老態を聯想する。紫色は濃厚なる戀、青色は人の心、水色は果なき大野に小雨する日、翠僧の家に入る時、若色あらばかくやと思はれる。

○小松と紫つゝじ

韓國　富迫露萩子

眞紅に燃ゆる夕空に、かきり浮き出た向ふの山は目さむる樣な紫つゝじが白々とした岩石の間に點々として、中腹からは、みっしり、小松が生ひ茂つて居る。麓一面の芝生には裾野邇つた小川に韓婦人が洗つた純白の布がさらしてある。何共いへない美觀!! 私に寫生の筆なきが口惜しくてならない。

○二人のお下り

兵庫　荒川たま子

大姉樣は至つて色の白い方なのできものの地は主に濃紫か梅鼠色がかつたのを下着はとき色の類ばかり其れがそれは其れはよくお似合なさるので五つ位わかく見える、次の姉さんは色の黑い方なので鐵色か濃茶の地合を着られるので老けて見える、次の私は今の内はと仰つて二人のお下りばかりきせて下さるが幸ひ私はくろくも白くもないからよい。

○活氣ある赤

札幌　遊蝶子

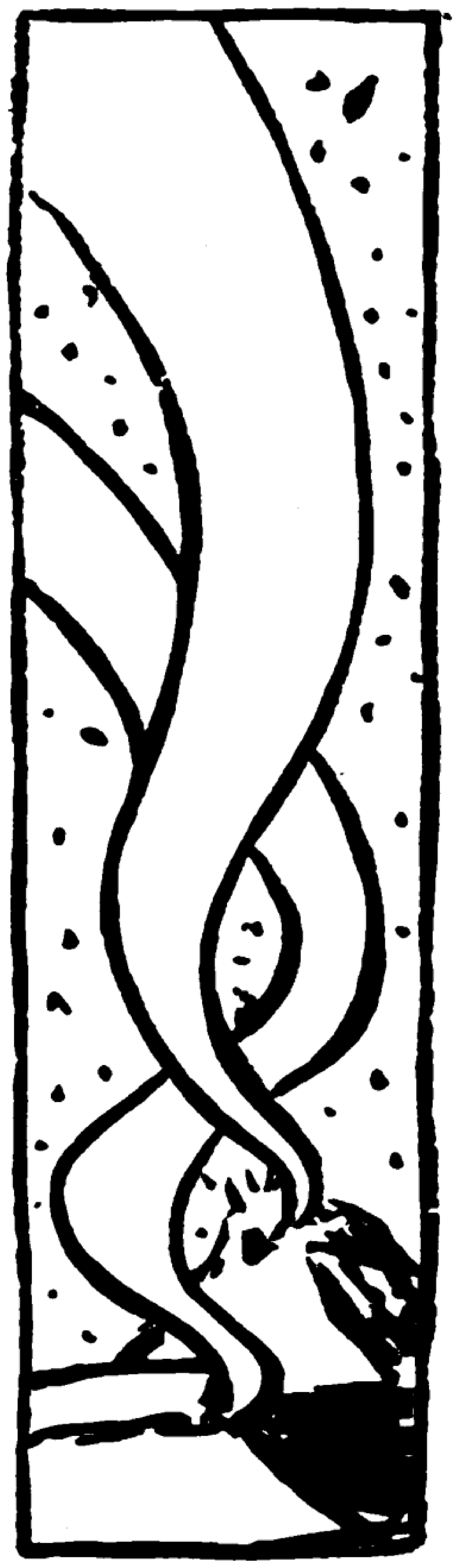
牧師さんとこの惠美ちやんと二つて彼の白いお顏に眞赤なボンネットをかむつてオルガンの側に、抱かれてニコ／＼してる時は可愛くて可愛くて、私は赤が大好きです、世の運命と奮鬪して活氣に滿ちてる人の心の樣です、もしも世の中に赤が有りませんでしたら廣い世界はやみの樣で有らうと思ひます。

○夜航綠燈

牛　平塚白百合

ボボボーと汽笛が尾を引いて、今氣船が出ます。極靜かな眞夜中。汽罐の音がガダ／＼鎖を卷く音もまじつてゐる。ふと見ると、檣の上に青い燈が薄つすりと、何だか憔悴した人の顏色見たいだ。と私は石炭臭い船室を思つた、黑くなつて働く火夫、出働ぎに外國へ行く勞動者、皆青い顏だ。夜行の米國行汽船を思ふ毎に私は、青い色の船とよんでゐます。

新歌謡



○規定　古來の俗謠の形式を取りて專ら優美洒脱なる作を歡迎す野卑猥雜なるものは斷る一人一章限りにして半紙又は罫紙に認むること丙種の賞を送呈すべし

○（地賞）　熊本　雨森愛子

君と別れた敦盛塚の雨の夕べを雁かへる

詩らしき內容あれど、歌謠として調子に洒脱のところなきを恨む、

○（人賞）　信州　山本操

露のお乳に若葉の產着中にうまれたさくらんぼ

無理な樣なれど、理窟を忘れて一寸面白いと思はしむるところあり。

【秀逸】

○　長崎　渚の千鳥

大山小山を霞が包む霞洩れくる斧の音

○　茨城　岡田きよ子

雪の降る樣な落花の中で私しや樂しい茶店番

○　下谷　樋口ふさ子

花は散る／＼野のはて見れば知らぬ都が戀しうなる

○　越後　木島しのぶ

名古の浦濱四五月頃は鯛て足ふむとこもない

○　福井縣　やまざと

夢を見て居る少女のやうに可愛らしいは百合の花

○　牛込　平塚白百合

昨日散らした櫻の精が迷ひ出たよな蝶のふり

○　下關　山本芳子

姿おかしき濱邊の松が枝て招けば波が寄る

○　越後　山田はぎの

花の幻はいつしか消えて今は綠の淡い夢

○　紀伊　うす紫

お庭流るゝ春雨川に離れ座敷の灯が映る

○　神戶　尾崎ます子

八瀬や大原の花うりさんが櫛を買ふたよ京の町

○　三河　岸本秀子

霞たなびくまひるの野邊はげんげつむ子の聲ばかり

○　熊本　金子片枝

藤のむらさきすだれにかけて宮の青葉が夏を生む

雛の節句に白酒飲んで酔うて散つたか桃の花　○　大分　阿南因果子

姉と妹が仲よく遊ぶやうにやさしい春の海　○　大阪市　四戸政江子

春の女姫の脣洩るゝ言葉のやうにも花が散る　○　牛込　塚原けん子

あどけない兒のまゝ事見れば何を買ふにも葉がお金　○　常陸　酒井花枝子

少女可愛いや花召せ召せと霞に消えゆく京の町　○　青森　橋本なぎさ

月の渚に羽衣舞へば磯馴松が枝霧を吹く　○　神田　三好富美子

燕可愛や一聲ないた二尺下た藤散す　○　大阪市　山内渓子

干した蛇の目に陽炎燃へて蝶々ちら／＼まふ様に　○　信濃　東條周子

お山越ゆれば百萬石の國の寶の青田面　○　本郷　小禰菊江子

關の小刀身は細けれど綾や錦を重ね切る　○　北海　たつ子

秋になつたら一度はごんせ霧に冷い柿進上　○　大阪　とき子

霞む御殿で雲雀が歌ふ蝶は菜種の園で舞ふ　○　高知市　中平靜枝

櫻はな咲く今宵の月を絹てつゝむだ朧月　○　美濃　をとめ

ぽつと霞にうれつた野路乳母や子守の傘が行く　○　美濃　日野歌子

春の海原かすみにくれて帆かけ島かげみなれむる　○　四谷　櫻子

神戸　渡邊良

春はうれしや海にも花がさくら鯛やら櫻貝　○　大阪市　淡雪

籠を背負た有田の少女蜜柑採る唄きかせたい　○　山口　酒匂とし子

庭の櫻を芽づみのお茶でおはぎ食べつゝながめます　○　神戸　野瀬悦子

こゝらあたりか千本さくらこゝは吉野て茶屋がはな　○　浪花　秋月花月

可愛子じやとてあまちやて育て末は涙のたれとなる　○　長野　東條文子

露か雫か花ちる夕暮へほたりと渡し舟　○　茨城　宇野とめ子

花を掠めてかすみに入つた鳥はお姫の使ひかや　○　大阪　平尾とき子

花もない庭さげしむ様にとなりの櫻はすましてる　○　丹後　岡田けい子

松は橋立白帆は與謝江波のまに／＼千鳥うく　○　三重縣　吉川澄江

雛のお酒にほろ醉ひ機嫌妻が琴弾く宵の雨　○　上總　あきはひで子

花を畫こか霞をかこか繪絹廣げた春の野邊　○　函館　ふぢ子

わたしや深山にさく山櫻人に折られて散てゆく　○　山口縣　深山鶯

國を出る時や涙で出たが都去る時や又涙　○　茨城縣　喜惠子

月も朧の紅梅小路嫁入傘が艶おろす　○　尾張　廣瀨かなえ

汽車と電車と大阪へんじや同じ線路を走ります　○　青葉女

花が盛りの菜畑てち兒等かくれ鬼事して居ます

書簡文



○規定　手紙又はハガキの通常の音信文を云ふ候文口語體何れにても隨意なり成るべく意味の透徹したる作を採る二十四字詰二十行以内とす一人一章に限る卷紙を用ゆべからず乙種の賞を送呈す

○學資に添へて都の兄に（増賞）

兵庫神戸市　田中ますゑ

此おぼろな月影を都の空で御兄樣には如何お眺め遊ばされますか。歌や文にのみ聞いて居ます、あの隅田の堤の逍遙ひに、折々花影に足を止め、白銀の鈴振る樣な水の聲に調合せて、お好きなお笛をお吹き遊ばして居らつしやる事でもございませう。

今しがた、部屋の灯を消しまして、私の方も、緣側にまとゐを開いて居りますの。居ながらに見る夜櫻も、中々詩的ですね。お父樣がね謠曲をお始めなさいましたので、騒いで居た私どもも靜かに座つて居ります。親子五人の影法師が障子にうつつてゐますの。あの兄樣が一度誦つて「文明的だ」つて父樣がお笑ひなすつた事があるでせう、丁度あの晩と同じ樣、ほんとに樂しいですわ。

これと申すも、みな兄さまが、學資を無駄にせず、よく勉強して下さるからですよ。乾度。昨日も一寸、聞いてゐましたらね、「近頃の、若い者に似合はぬ眞面目なもので、」とお父樣が兄樣のことをいつてゐらつしやいました。ほんとにさうなんだと私も思ひます。新聞で學生の墮落などと申すことを度々讀みますけれど「お兄樣に限つては」とちつとも心配いたしません。自分でも肩身の廣い樣な心地が致します。

學資のお催促が參りませんけれど、もう御入用の頃だと思ひまして、父樣に代つて私が切つて參りました。例よりも五圓を増してありますのは、新學期ですから參考書でもお買ひなさる樣に。はじめてお父樣に代つてお送りしまするのが私嬉しいの。夜は一入更けて參りました。どうかお兄樣も、この月の樣に、淸い所に濟く住むで下さいまし。

さよなら

この稚氣ある筆で、樂しい家庭の事を認めた手紙を受取る兄なる人は幸福なるかな、これではかゝる墮落なんてしたくても出來ますまいよ、嬉しさは爲替ばかりではない外の見る目も快い情緒たつぷりの好書簡（評）

〇田舎へ（入賞）

しらぎく

墨田の堤は花てかざられ候、満都の人は春に醉ふて居ります、花に誘はれた浮かれ心を、これよき折と諸々の呉服店はさま〴〵に装こらして客をひきかけ樣として居ります、沈默の冬から覺めて今都は活動の春景色となりました。

庭の木の芽は二三日のうちに目だつてのびてきました目黑から乳母が持つてきてくれた筍の若いのをひとりで湯でゝ煮付けましたら春らしいゆかしい香が心にひゞきました。

堤のよもぎはさぞ綠にもえましたでせう、廣野の牛は若草の中にさぞ樂しさうに遊んで居りませうくちかけた土橋の彼方の水車小屋てはやつぱりゆる〳〵音をたてゝ居りませう、丁度水彩畵にある樣の景色で、花も深山に氣高く咲いてこそ嬉しいとも見られますけれどこんな、街のかたすみに塵にまみれ、ほこりをあびては可惜盛の色も早くあせてしまひます。

清子樣、外見かざりの都のつきあひにはつく〴〵情なくなりました、此頃を如何御暮しなさいますか美しい御あたりのさまちと御きかせ下さいませんか。

櫻花ばかり獨擅の都の春を脱して、蓬萠え山吹挑む田舎の風物をおもふ人情なる哉（評）

〇妹の親友　【秀逸】

渡島　小百合

靜子樣此頃は、如何遊ばしてか、一向お見へになりませんので、御案じ申て居りました。就ては突然ながら、お願ひ申上たき事が、御座いますが御聞き入れ下さいますれば誠に嬉しく存じます。外でも有りませんが、靜子事此四五日前より何故か、書齋にのみ閉ぢこもりまして、毎日々々シク〳〵泣いて計り居ります、そうてなければ窓によつて茫然として深き思ひに沈んで居るので御座います。それで私が、如何なる事でも及ぶかぎりの事はして上げるからと申ましても「姉樣濟みませんが、此事のみは何卒聞かずに放といて下さい」と泣くのてす、說きつ、賺しつ聞きましても、頭を振て一言も云ひません、平常の氣性にも、似合ない此頃のそぶり、私も母の無き身ですから妹より外に賴る者はないのですもの、私だつて、氣が氣ぢや、ありません何の爲の煩悶か、何のための悲しみか、一向に解く事が出來ません、それて貴女とは、靜子も親密で、いらつしやるから、私の一生の御願て御座います、何卒靜子の胸中をそれとなく聞いて下さいませ。夜もおち〳〵寢られぬ樣てす、日増にやつれる妹の顏を見るに忍びませんので、貴女にお願ひ申すより外愚なる私には好い

考へも出ません、何卒お暇も御座いませんてしようが、是非御　、上ます。

好題、目書き方に一層委曲あらば猶ほよかりしならん（評）

○お互父様なしの身に

長曾我部菊子

いくゑ様。御心籠る御弔詞、それに私へのお心づけ、限りなき喜しさの情を、亂れみだれ、――一寸の長さに二寸の長さに、くりひろげ、もうよつく胸に泌みました。きつと悲しみに取り亂すなんて、――そんな不始末は致しませぬ。それは御安心下さい。



たより　紀伊　稗田花子

ても、それてもね、誰も見ぬ所ぢや私聲をもらして、悲しみにくづをれ伏しても、それはしばらく咎めないて下さい。實につらいものですね、胸が萎えるやうにも思ひます。あの、こんな事云つてあなたを泣かせるか知れないけど、あなたが、お父様にお死別れになつて、四十九日が五日手前にすんだといふ時、川島町の種さんところて、――それ――三人偶然出逢して、とうと種さん處て宿つた晩――覺えて？――折柄の十五夜を夏のよて涼しいから、三人揃うて吉野川の川原へ出かけて岩に凭れて六つの袖を伏せた時、渡

塲の向ふ河岸が、月明りで、夢とも現ともわかぬおぼろ〱に物かげが見えるばつかりでしたつけ。今二人の人をおくつた船頭がその深い夢幻境裏で、乘りてをよぶ……おー――い。おー――いと呼んでゐる淋しい呼び聲を三人が耳をすまして聞いてゐましたつけ。すると、いつの間か黑い一つの人影が土堤の方から急いで來るやう。荷物をもつてたか、足がわりに遲かつたぢやありませんかもう一心にその船にいそぐ黑いかげを見つめてたのに急にあなたが泣いたのに、びつくらして「しつかり〱」懸命に二人が問ふと、（あの人影が、亡くなつた父樣に見えます。父樣ぢやないか。父樣ぢやないかと。）あなたは、無性にお泣きなすた。いくゑ樣。（私は今書きながら泣いてます――）かんにんして頂戴。私、あなたの胸をえぐつて、新らしく悲痛をあたへてはすまないけども、あなたが父樣を失はれた當座の思にかへつて、どうぞ、この一ばいの胸をお酌み下さいませや。御問ひ越しの私父の病名は腦溢血。病みついたのが一月二十八日から。死去、三月七日夜八時十分前。享年四十五歲で御座いました。あゝいくゑ樣お互、父樣なしの身になつちまひましたね。うか〱してはならない、意志强くして人にそしられぬやうに仕事しとげませう。おふみを見てとりあへず、

かしこ

再び云ふ此作者美文癖あり、書簡として上乘ならず、（評）

○伊勢より

滋賀縣　磨　志　緒

第一信

御蔭で無事午後三時山田驛につきました雨になりさうで、あつた空も晴れて今は神都の旅館で夕飯もすませ湯にも入つて心地よく燈火の下で此手紙を書き始めました、私は二階に居ります、三階の團隊客が歌ふやら舞ふやら、それは騷がしいの此調子では夜も寢られんやうです。

第二信

昨夜喧しかつた爲め眠りに就たのは午前の二時、それから四時に早目がさめましたの、それは下の客が一番汽車でたつとかで大騷ぎ、ほんとうに眞中で靜に居る私達は人の歌ひに笑つて見たり騷ぎには閉口したりです、今日は兩參宮するつもりでしたのに。大雨朝から一室に閉ぢこもつて春雨といへば名は好いが此雨にはこまる等兄がこぼして居りますのよ、午後四時頃からあまり退屈でしたので從姉の所を尋ねて行きました兄は度々いつて居りますが私は始めて、それでも誠に快活な人で主人も氣の好い方活動寫眞の面白いお話目に見るやうに聞いて皆が大笑ひなの今夜は此家で厄介になります。

第三信

朝から仕度して從姉と三人兩參宮しました、よく御存

じのあなたに筆のまわらぬ私が申上る事はありませんが、あの宇治橋は、なか〳〵立派なもの、私が入つばかりの時此橋を通つた折は下に網を受てお金を投げるのを待てました。それだけ覺へて居ますが十年たてば一昔とやら、ほんとうに變つたもの、私がそう申しますと兄がお宮様に御機嫌よろしう、といへと申しますの行きにはぶら〳〵歩きましが歸りは電車で宅に着いたのは丁度十二時又兄が遊び方が上手だと勝手な自慢致して居りました。

御飯すませて直ぐ往復電車で二見ヶ浦に行きました、私の好な海、風が烈しいので波は小さな岩をこして其飛沫が顔にかゝります舟は唯二つ見へた計り、三河尾張の山山は霞が懸つてぼーつと向ふに立つてゐます青い〳〵波が山のやうに來て岩にあたると直に眞白う玉になつて、ころがる私はいつ迄も〳〵此所に居たう御坐いましたわ、兄はね御注繩のはつてある岩を指してこんな大きい小さい岩にするより向ふの大きなのにかけなきあ之ては夫婦岩とは思はれん親子だ、なんて申ますのよ、私でも女は小さい者よつて申ますと先刻の米國婦人御覽ですつて……米國婦人がね一人海邊で沖の方をじつと眺めて居ますの。私は國を思出して被居るだらうと心の中で思つてましたわ、言ひ出すと又兄に笑はれますから。こゝで三時間程遊んで歸りました、明日午前十時發列車で歸りますから御目にかゝつた上お話します、お土産も澤山あるのよ、待て居て頂戴。

とり〳〵に面白し（評）

○紙片

大阪 花影

今日衣を更え申し候。俄かに身輕と成り候故、身も心もそゞろと成り不圖野に出て見たく、家を出て申し候。靑葉若葉に包まれし小通を幾曲り、村を出はづれ候へば御承知の青田に御座候。山も野もたゞ青色に包まれ、吹く風さへも靑き心地いたし、すが〳〵しさ此上無く候。私は溶けて流れて其等の一つ〳〵に泌み入り度き心地いたし、草の上へ伏し申し候。靑草の上へ身を横たへ候へど、何か知ら恁う靜乎として居られぬ様な氣持がいたし、私は立ち上り申し候。折から私の頭の上を過ぎて靑田の方へヒラ〳〵と、鷗の群の飛び行き候如くあまた白き紙片の風に散り行き申候。氣が付けば私の肩にも膝にも、雪かとばかり白き紙片の積り居り候。ハッと思ひて振り返り候へば、後ろの土堤の上に並び居りし三つ四つのちいさき顏は素早く下に隱れ申し候。夕。おん窓に寄り給ひて物をお思ひ遊ばさるゝ折、白き紙片のみ前を過ぐるあらば、そははる〳〵我里より飛び行きし紙片と御思召くだされ度候。――（三

木彩虹さまみ許えまゐらす）——

白い紙片の謎が分る人でなければこの手紙の意味も分らないのでせう、書き方は例に依て巧妙（評）

○楓の若芽に添へて病める友の許へ

さすらひ

日一日と加はりゆく此頃の暖かさ、誠や心なき花も笑ふてふ春と相成候、御許様の御いたつきもぬぎ捨つる衣と共に、やうやく輕う御なり遊され候よし目出度うれしく存じ候、豊かにや肉つき給ひけんつやけき御顏に絶えて久しき御笑靨やあらはれてんなど、心にゑがきてはなかなかに讀む文さへ身に入らず候、例の入學試驗の準備にて何かと事しげく、つひ／＼御見舞も致さず打過候、何とぞ／＼御許し下され度候。

來るべき日曜日には何をおきても御伺申すべく候へど、年毎に御いつくしみ受けし庭の楓この頃の暖氣に誘はれてや、小さき赤き手を延して浮れ出て候か今年はわけて見事に御座候まゝ、しばしが間の我が名代にもと存じ一枝選みて、急ぎ御目にかけ申候、御氣分よき折々に眺めたまひてよき歌思ひ給ふ御題にも遊されんには打喜ぶもの獨この楓のみかは。

くれ／＼も御身御大切に御養生の程祈り入候。

よき贈りものゝよき手紙（評）

○六月の家より

小石川　近藤愛江

軒の繪すだれ、風吹けばさと風立ちて、風鈴の音色涼しき釣窓ひとゆれ搖るゝ夕暮や、柳にかゝる三日月のさびしき光りに思ひいづる、都の空のいと戀しくて、灯取虫灯に飛ぶかげに、蚊遣たく煙りにむせび、なつかしむ君へとかくは拙なき筆もて申し上げ參らせ候。

さても六月の里の家、朝は雉子のなくころに霧晴れ渡りて、青葉若葉にしたゝる露の色瑞々しく、花あやめ咲く水のほとり、涼しき風の生れ來るらん心地して、こよなう心地清々しく候。

蜻蛉追ふ眞晝の日ざし蒸し暑く、初蟬の二こゑ三こゑめずらかに、築山のかげ、したゝる綠りの楠の木の間にハンモック斜めにつりて、うたゝねの夢なつかしう都の學び舍に通ひたまふ親しき君の御姿のみ拜せられ申し候。かくて螢飛ぶ里の夕ぐれ、竹骨團扇片手に姉君や小さき弟と、宵星の光りを浴びて、水清き苗代小田に更くるも知らず狩りくらすその樂しさ。そゞろに浮世の憂さをさへ忘れ果て候。

老ひませるたらちね、今は嫁ぎ給へる姉君も恙なう、わが六月の涼しき家には早や香ばしき白百合の花、庭をめぐりて美くしう君待つさまに咲き誇り申候かしく

父好辞令（評）

○とりさんに

羽後　菊池りう子

丁度若い人の燃え苛立つてる胸の樣に、空を焦し、鳥海を焦し波を焦して、沈み入る日輪の頃から、今、更くる月影迄、私はとり樣の靈に語るべく立ち盡して居ります。火の樣な赤い、影が長く地に引いた時は、私の心も燃えて、或物に憧憬れて居ましたが——。今更けて、凄い程冴えた月にさす影は、とりさん！影は薄い、鳥樣變りはないの、病つてゐらつしやりやしないの、何故影が淡い、鳥ちやんの靈は今私と離れてるのぢやないでせうか——。鳥ちやん私は病んでます、けふ貴女の月下に立ちてをよんで、私はさんざ泣いたあげく、そつとぬけ出て、空寂たる境内に鳥樣の靈にあひに來たのです。いてふや松柏の老木が雲つく樣に繁つて、長く〜其影も地に引いて居ます、鳥さん是は誰の靈、え丶？此ぼけた老木の影は誰かの秘密を包んで幾千年無言に深更にのみさ丶やきつ丶經たのぢやない



よせ　青森　稻垣かをる

てせうか――。鳥ちやん私は此頃、多くの人の胸から離れて、私の靈は獨りはぐれて了ひました、鳥ちやん解るてせう。昨夜も私は夢を見ました。鳥ちやん！私は此儘死ぬのぢやありますまいか、私が死んだら鳥樣を獨りて――。どうせ鳥樣に見えてる柳は影幻です物、私や、死んでも〳〵きつと貴姉の影に靈は通つて居ますきつと、忘れちや厭――ね。あら月が隱れて、影も亡びた、柳の病軀も葬られた――噫そうでした、鳥ちやん形が滅びれば影も消える――。鳥ちやん私や死なゝいきつと癒ります、あつて〳〵抱きあつて泣く迄は、如何ても死なゝい。あれ、日本海の濤聲が――、あの荒波にもまれて投じ樣と誓つた事も有りましたね――。鳥ちやん私もう歸ります、痛んで來ました物、夜露にうたれて――私が亡びれば鳥樣も――鳥樣が消えば柳も――。鳥ちやんもあふ泣きつと身躰を大切に――。私も苦悶を忍んで生きます、冷い床に此夜も泣きませう――。

羨ましきは青春の人――とこれにも云ひたい、但し書簡文には是れては困ります（評）

○轉地療養の母に

牛込　里子

御母樣此頃の御容體は如何てすか、當方ては皆壯健て暮して居りますから何卒御安心下さい、田舍は嘸長閑て氣がのんびりとするてせう、私ほんとに行き度てたまりませんの、東京では新聞でも御存じてせうが櫻の花が眞盛りてす、此間ふじ子樣と學校の歸りに江戸川の一重櫻をながめながら歩いて來ると、花びらがそよふく春風にはら〳〵と散つてくるのてせう面白くてそれを取ろうと駈け廻つて居る中に、どうしたのかふじ子樣が御辨當を川の中にころがしてしまひましたの、さあ大變と途方にくれて居りますと幸にそこへ小舟がさかのぼつて來ましたので漸く取つてもらひました、家に歸つて其話を致しますと父樣つてば年ばかり十六でもまだ、から赤さんだねと笑はれてしまひました、まだふじ子樣と谷中の天王寺に迷ひ込むだ失敗もありますが、それは御歸りになつてから御話し申します、此頃は御母樣が御留守なので家の中は何となく火のきえた樣てす、もうもう御母樣さへ御丈夫ならリボンも靴もいりません、又今までの樣な我まゝも云ひませんからどうぞ一日も早く御全快になつて歸つて下さい、私等は朝夕神樣や佛樣にいのつて居ります、此上ながらくれ〳〵も御大切に。さよなら

こんなのがお母さんに取つては何よりの慰藉の文字てす（評）

お伽噺

巖谷小波選



○規定　新しきお伽噺を作ること土地の口碑傳説を採用して材料とするは宜しけれど既に在るお伽噺の焼き直しは許さず二十四字入十行以内凡て振假名つき罫紙又は半紙に認めること賞は乙種を送呈す

○鬼の角（地賞）

淡路　愛子

或る日私しは只一人、裏の山へわらびを取りに參りました。大變澤山有りましたので、知らず知らず登つて、遂々薄暗ひ杉の中へ這入り込みました。一生懸命に取つてましたら、妙な物を見つけました。それは恐ろしそうな角でした。牛のかと思ひましたが相ても有りませんから、珍しい品に違ひないと思ひましたので、籠の中へ入れて家へ歸りました。お父さん、お母さん、私しの三人ぎり。お父さんは四時人様より烈い頭痛家て、月の内に四五度はきつと會社を休みなさいますから、皆心配して居ますの。

「オヤ今歸つたのか大變取つて來たね、どれお見せ」

お父さんはかきまわして居られましたが、

「オヤ此角は何かへ」

「それ山て拾つて來たの、お父さん御存じないの、それじや私明日學校て先生にお伺ひしてみやう」と其の儘床の間の上へおいて床につきました。晝の疲勞て前後しらずに寢込みました。すると夜中頃に何だか耳元て、

その角返せ、　角返せ、
鬼の魔王の、　角返せ、

不思議な歌だと思つてますと、一人の鬼がひよつくり出て、又、

その角返せ、　角返せ、
角を返せば、　其の報ひ、
三千年の、　杉の木の、
洞にしまへる、　水一滴。

餘り大きな聲を出しますから、恐わ〳〵角を取りよせ

て、

「此の角はお前の、けれど一度折られて附るのには奈何するの、

「へイそれは三千年も前から私の先祖がしまつて置いた洞の水を一滴たらすと、へイ乾度引つ附きます。又頭腦の病氣なら何でもていて、全快ない事は有りません」

私しはこれを聞いてすぐ返してやつて、約束とほり水を小さい壺に入れてもらいました。早くお父さんに差上げたいと思つて夜のあけるのをまつて、翌朝早速お父さんの頭に一滴。



すると不思議、三日あげずに寢るのに、今度は一月たつても今だに何の障りもないので、お父さんもお母さんも、大變悦こばれて、お父さんは可愛いらしい人形。お母さんは美な布を御褒賞にと下さいました。やがて着物も出來、人形は三つになりましたが、お父さんの頭痛は今だに一度も起りません。

（評）書き方は幼稚なるもやゝ新らしい節が見えます。

○金の杯（人賞）

芝派　烈子

或處に春子と冬子と云ふ二人の可愛らしい娘さんがありました。二人共大の仲よして、學校へも一しよに行き、返る時も一し

よて、何時も二人で遊んで居りました。ある時、冬子はふと風邪をひいたのが元で、だん〳〵重くなり、春子の優しい看護もきゝめがなく、遂々亡くなつてしまひました。

春子の悲しみは一通りではありません、毎日泣き明かして居りました。そして冬子の好きだつた花などを持つて、御墓へ行く事をせめてもの慰めにして居ました。ある日春子は、いつもの通り御墓へ行つて、持つて來た桃の花を綺麗に挿して、「冬ちやん私また來ました」と云つて其處に休んで居りました。

春子はいつとはなしに、そこにうと〳〵として、よい氣持になつたと思ふと間もなく、どこからかいゝ音が聞えます。春子はその音のする方へ行つて見ましたら、廣い原へ出ました、そしてそれは〳〵綺麗な着物をきた女の子が澤山出て來て、

　春ちやんの御出、ようこそ來られた
　さあ〳〵御連れ申しませう

と、節面白く歌ひながら、四方から春子をとりかこんで、連れて參ります、すると向ふに綺麗な御殿が見えましたので、春子は、

「私は一體どこへ行くのですか、」あの立派な御家は何ですか、」と聞きましたら其中の一番大きいのが、

「あれは冬ちやんの御家です、そして冬ちやんはあなたの御出を先刻から御待ち申して居るのです」

春子は冬ちやんと聞いて嬉しくて〳〵たまりません。

「それでは早く連れて行つて下さい」

と云つて居る間にもう御殿へつきました。すると冬子が出て來て、

「まあ春ちやんよくいらしつてね」

「冬ちやん、私あなたが居なくなつてから、一人で淋しくて〳〵仕方がなかつたのよ、でもまた逢へて本當に私うれしい事よ」

「私も本當に嬉しいわ」

と二人は樂しく語り合つて、そして二人共きれいなお揃ひの衣服に着かへて、御庭を散歩しました。

その御庭の廣い事、そして何だか名も知れぬ樣な美しい花が澤山咲いて居て、向ふの方からは春子が先刻きいた樣ないゝ音が聞えます。

晩にはきれいな娘共のダンスを見ながら、食べきれぬ程の御馳走で御飯を頂きました。

春子と冬子とはこんな樂しい日を、一週間許り暮しました、春子も返る事を忘れて遊んで居りましたが、そ

んなに何時までも居る事も出來ず、歸る事にしました其時冬子は金の杯を出して「これに水を入れて見れば私の顔が見えます」と云つて春子に渡しました。

春子は娘共に送られて、御殿を出て廣い原へ來ましたら、娘共の姿がフッと見えなくなりました、

春子はオヤ變だと思ひましたら、目がさめてそして冬子の御墓の側にねて居たのでした、

春子はあゝ夢だつたかと思つて、ふと自分の體を見ますと、冬ちやんと御揃ひに着た美しい着物を着て、手には金の杯を持つて居りました、

家へ歸つて杯に水を入れて見ましたら、何程冬ちやんの顔が在々と見えます。

それからは春子は始終その杯を眺めて居りましたと云ふ事てす。

（評）春と冬とを人間化した所が御趣向てせう

【秀逸】

○蝶の御殿

水戸　重子

春風がぽか〱と袂をなぶるやうな日和に、花子さんは庭下駄はいてかけ出したと思ふとはや、近所の野原へ來ました。菫や蒲公英や色々な草花が我劣らじと色香を誇つて居ります。花子さんはぼんやりつゝ立つて居りましたが、やがて菫の花へ手をかけて、今にもポチリとしさうの時に「アヽモシ」といふ聲が聞えたので、花子さんは喫驚し手を止めて、キヨトキヨト見廻しました。而し名を呼んだ主が見えません「なんだつてまあつまらない」と又捕らうとすると「モシ待つて下さい」「ほんとに變だこと、一たい妾の名なんか何處て呼ぶんだらう」して呼ぶ聲だつてあんなに涼しい鈴の音のやうだし、ハテ聞きなれないこと」と、フサフサした髪をばら〱させて、愛くるしい顔をぐるぐると見まはした。が、何も眼に入るものがありません。すると上の方から黄色い蝶と、白い蝶とがヒラ〱舞ひながら、「花子さん私があなたを呼びました」と云ひながら下つて、そこの菫に羽を休めました。花子は蝶に向つて「お前がよんだの、そしてあたしのことドウして知つてゝ？」と、訪ねますと黄い蝶は「あたしは蝶姫樣の小間使ひ、召しつれよとの仰せによつて此處まてまゐつたのてあります。」と、ピヨコリヒヨコリおじぎする。白い蝶は「わたしも左樣て御座ります「さあどうぞこれへお乘り下され」といふて、小さい翼を廣げてむけた。花子は「あたしみたいなものがお前の

やうな小さい體へ乗れやしないワ」蝶は二匹そろうて「大丈夫ですから早くお乗りなさい」と、脊をむけるので潰れたらば……と思つたが、とう／＼乗るかと思ふともういゝきもちになつて、うとうとすると「サあお嬢樣お下り遊ばせ」といふ聲に、花子はハッと目を醒ますとこゝは立派な御殿のげんかん。紋黒蝶や紋白蝶や木の葉蝶や其の他いろ／＼美しい蝶が出迎へて、何卒こちらへ、と案内する花子は、パノラマでも見るやうな氣がして、だんだんついて行くと、やがて見るもまばゆい一室に通された。すると



あたゝか　　青森立花とも子

上座には蝶の王姫らしいのがにこにこしながら、「花ちやん、よくいらしつたのね、さ、ずつと傍へおより」と進められる、花子は黒目がちの眼を見はつて「こゝは何處なの？して、あなたは誰れ？」と訪ねますと蝶姫は「こゝは蝶の御殿ですよ、まるで天國と同じよ、あたしは蝶のかしらですよ、心配せずにゐらつしやいよ」と教へた。花子は室のうちを見まはすと、なるほど見たこともない程美しく、壁でも襖間でもすべて蝶にかたどつて、それか金かダイヤモンドかのものであらう、ピカピカピカピカ光り輝い

て居る。スルリと襖間があいたかと思ふと一つまりませんものですが召しあがれ一といつて、上菓子を山とつんである、それが又蝶の形で出來て居ります。花子はもじもじして居りますと蝶姫は「花ちやんどれお好き、どれでもいゝのあげませう。といつてとつてあたへました。花子は一口入れますと頰の肉がおちなければよいがと思ふ程、おいしくつておいしくつて、何ともいへない位でした。其のうちにお膳が出て、それには繪にでも書いたやうなお料理がどつさり。さあたべませうと云つて美しい器でおいしい御飯を樂しく畢へた。

すると面白いものお目にかけるといつて、蝶の舞を初めました。一對になつて十五組もあるでせう。それが交る交る小さいのが聲をそろへて、ヒーラ、ヒーラ、ヒーラヒラ菫はこゝの衣の形。たんぽは我れの髮かざり。ヒーラ、ヒーラ、ヒーラヒラ」と羽をひろげてうたふ。大きいのは蝶よ、花よ、と愛でられる我らの幸やいくばくぞ。ヒーラ、ヒーラ、ヒーラ、ヒーラヒラ」とうたつたり舞つたり。花子は蝶姫の腕に抱かれて、うつとりと見入つて居りました。間もなくその舞も止みました。そしててんてんにピヨコ、ピヨコ、おじぎしていつてしまいました。花子は夢からさめたやうになつて、フトお父様お母様のことを思ひ出して、急に家が戀しくなつてきました。蝶姫は「デハ又いらつしやい、お迎へを上げますから」といつて、澤山のお土産を戴いて蝶の翼にのつておくられましたとさ。めでたし〳〵。

○三人强盜

岐阜縣　小岩菊子

むかし或片田舎に、一つの大きな森がありましたが、其森は木や草が繁茂して居りまして、晝間も猶ほ暗いと云ふ、實に凄い森でした。して其森の中には、三人の强盜が住んで居りました。毎夜でゝは、其處を通る旅人等を殺して、金錢を奪つたり、又は人を脅かして、着物を剝いだり、亦た折々は村の人家へ躍込んだりしますので。其近邊の村人は、大變怖ぢ恐れて、誰も手を出すものもなく、小さくなつて居ました。或晩の事で御座いましたが、その三人の强盜は例の如く、森の中を何か甘い獲物がかゝらないかと、彿徊ついて居りますと、恰度此時、森の中を通る旅人が御座いましたが、此旅人は今晩中に、是非此森を脫けて、先の村迄行かなければならぬ用事が御座いますので、仕方なして薄氣味惡るく思ひながらも、此森の中へ差し懸りました。すると、最前からきよろ〳〵眼で、獲物を搜して居ました强盜輩は、旅人が此方へ來るのを知つて、コイツア占たと思ひながら樹蔭に隱れて、待

つて居ました。
此方はそんな事とは少しも知りませぬから、恐怖ながら足を急いで行つて來て、其の樹の下へ來ると、突然先きの强盜が飛び出しまして、待てつと呼びながら、其旅人を捕へ聲をも立たせず、三人掛りて斬り殺しました。すると强盜共はフヽンと、鼻先て冷笑ながらソレッと云ひさま、旅人の懷中かな胴巻を拔き取りまして、後をも見ずに、住家を指して逃げ去りました。
やがて强盜共は、自分の住家へ入りまして、早速其胴巻を、解いて見ますと、驚くまいことか、其中に金錢が數千圓も入つて居るので、三人の强盜は大に喜びました。
『ヤア、今夜は盜業の當り日だ……ドレ其祝ひに一杯飮まうぢやあないかと、相談しまして、其中の一番若い盜賊に町へ酒を買ひに遣りました。
後に殘つた二人の强盜は、其金錢を見つめて、ほくほく悅んで居ましたが、遂に慾張りの根性を起しまして、若し此金子を三人て分配る日になると、自分等の收入が少なくなる故ドーカ少しても餘計に金子を取りたいと、二人は相談を初めました。
『オイ熊公御前と己れと彼奴と三人て、此金子を分配れやあ、ソレ丈コチト等の收入が少なくなる譯ぢやないか、ドーダ彼奴が歸つて來たら二人て殺して、手前と己れとて、分配やうぢやないか』
と、之を聽いた一人の强盜は手を打ちまして、
『ウム、ソイツア能い考へだ、早速やつつけろ』
と、茲て相談が附きまして、彼の酒買に行きました强盜を、今や遲しと待つて居りました。
彼方はそんな事は少しも氣が附きませぬ、彼の强盜は酒買ひに行く途すがら、フト考へますには、
『待てよ、彼の金子を三人て分配て仕舞ふのは、ドー考へてもつまらない、ドーカ己れ一人て彼の金子を握つて、思ふ存分樂しみたいものだ……ウヽムドーカして己れの手に入らねーかしら……、アヽそうだ彼奴等二人を殺して……イヤ、待てよ、殺すにしても……、ウムある〳〵恰度己れが、酒買ひに出たのが幸ひ、其酒の中へ毒を入れて、奴等に飮ませりや、蛇度悶躁き死をするだらう、ソーすりや、彼の金子は此方のものだ、……コイツア面白い』
と何方も何方てす。急いで酒を買い、ドコデドウ求めましたか、其酒の中へ毒を入れまして、ナニ喰はぬ顔して歸つて來ました。スルト此方の二人の盜賊共は、彼方が歸つたら殺そうと、待ち構へて居りましたので、其盜賊が家に入るや否や、己れッと云ひさま、其盜賊の胸元目懸けてグサと刀を突き刺しましたからたまりません、アット云つたまゝ其處へ倒れて死んて仕舞ました、スルト此方の世界だ、ドレ、コレカラ悠々飮まうと、座に着きまして、先刻殺された盜賊の買つて來た、酒を取り出しまして、互に杯に酒を酌ぎまして、グット一口飮みますと、サー大變です、元々毒の入つた酒だから堪りません、血を吐いたり悶躁いたりして、ウム〳〵苦しむだ結局、遂々二人共も死んてしまいました。サア此後と云ふものは旅人等は安心して此森を通り脱けることが出來、又其近所の村人も枕を高うして寢る事が出來ました。

少女文壇



○規定　本欄は十五歳以下の少女に限り投書するを得文章和歌俳句唱歌等を採用す年齢及び生所姓名學校等を明記すること用紙は半紙賞は丙種を呈す

○だるま樣（地賞）

和歌山女子高等小學校　金田貞子（十四歳）

私のお父樣の煙草入の根つけには、木製のだるまさんがつけてあります。お父樣は、いつも〳〵この煙草入をおそばにおいて、そして、ひまさへあれば、指先でだるまさんをこすつてゐらつしやいます。それで、だんだん色が黒くなつて、いまては、目ばかりぎろぎろとして、手をさへても、きたないと思ふほど黒くなつてあります。それでもお父樣は、一向平氣でいつもながめては「だいぶん色がついてきた」と、にこ〳〵とおつしやつて、相かはらず、ごし〳〵とこすつてゐらつしやいます。私はなぜあー眞黑なのがよいのかと不思議でなりません。

もつともな疑問、文章も能く出來て居ます。（評）

○芥溜（人賞）

下野　春枝子（十五歳）

ま白に積つた花吹雪をそつと掃き取りましたが捨てるのが惜しくて暫くごみための前に佇みました。芥溜には未新しい卵殼が二つ三つ散らばつて隅の方には今朝すてた椿が眞紅な花片を落して、白元結の樣な葱の根や澤庵の切端美しいザボンの皮等種々雜居して居ます。

夏のま晝風もなく草木もグッタリ萎へて居る頃、只一輪淡紅色の晝顏の花が咲いて居たのも此芥溜です。燃ゆる樣な緋雞頭の根元を赤いとさかの雄雞がついばんで居るのを見てお姉樣が繪の樣だと仰しやつたのも此芥溜てした。秋の夕銀杏の葉を捨てに來た時どんなに淋しかつたでせう。冬の朝昨晩お話しながら食べた密柑の赤い皮をまつ白い雪の上に捨てた時どんなに愉快てしたらう。

少女の筆とも思はれぬほど、上手です（評）

○花ちやんは母あやの脊で月を見て　あれ頂戴と手を重れてる。　三重縣　つるへ子（十三歳）

○こきうすき花咲く野路二人行く少女のたもとかへす春風　北海道　鈴木スカ子（十四歳）

○清水のはとに餌をやる日永かな　大阪　山内シマ（十一歳）

○妹のリボンにとまる蝶々かな　紀伊　玉井八重乃（十五歳）

笑話



○規定　面白い話なれば何でもよし實際の話でも一口話でも隨意なり賞丙種

○とんだお客樣（地賞）

大阪　平尾　時子

お座敷にお客樣と妹が申ますから私は丁寧にふすまを開けて見ましたら、お人樣の影もなく床を後に火鉢を前にペスが眠つて居ります、とんだお客樣と申ますと犬はいきなりチンチンを致しまして皆、大笑ひ

○頓智のよい小僧（人賞）

神奈川　森田靜江子

倚子屋の小僧安樂倚子に晝寢をして居る處を主人「コラお客樣がお出になつたのに寢て居る奴があるものか」小「へいお客樣に寢心の良い所を一寸御覽に入れたので……」

○美人薄命

神田　三好富久子

花子「美人薄命と云ひますけれど、ほんとてしやうか」玉子「そうとは限りませんは私を御覽なさいこんなに幸福に暮して居りますもの」

○方程式

仙臺　く　に　子

兄樣のところにX生といふ名て手紙が來たが誰だかわからないて困つてると代數をやつと習ひ始めた妹が兄さん方程式をたてたらすぐわかろてせうつて

○熱い湯

神奈川　元木美和子

父湯場にて」熱くてならないから水を吳れろ」子「お父さんは熱いつて噓だわ」父「何故」子「だつて寒がつて震えて居るくせに」

○家系

信濃　赤津しつ子

爰の隣に極貧乏な人が住んて居て、自分の家系が古いと云つては法螺を吹く、或人曰く「實際古いぢやらうて、あの位迄家が毀れるには餘程年數を經たれば毀れないから」

○經濟

神田　さだえ子

妹が髮を結び終へてことことゝ臺所にいつた樣子、すると母樣が『久やお湯をとつてあげるから手を洗つたらそこにあるのも序にれ』『ぢやあ、お皿から先きに洗ふわそして其の後のお湯て手を洗へば即ち經濟つてものになるてしよう、子エ？』

○あほ

近江　よし子

母「ほんに阿呆に付ける、薬がないと云ふが、お前のことだ」子「お母さん、飲む薬でも擇はないことよ」

○ふしぎな事

德島縣　紫　水

甲「貴女こんどの成績はどうてしたの」
乙「よかつたわ」
甲「それにどうしてあがれなかつたの」
乙「ふしぎてすわ」

○入學試驗の朝

神戸　落　葉

「入學試驗の朝だ」」と、私は大變早く起きろと、まあ恐しい大雨てした。心配しながら、支度をして居ると、祖母樣は蓐の中から、「こんな大雨の日に、行かないてれ、お日和の日に、おしよ。」と、眞面目な調子。心配も忘すれて、私は大笑ひしました。

○自分のこと

濱松　中村　千代

姉「あら、美いちやんはなぜ其樣に一人てお錢を出すの、阿母樣に申上げますよ、」
妹目をまるくして、「あら姉ちやん、てもれ―學校の御本にれ、自分のことは自分て、せねばなりませんと、書いてあつてよ。

○押繪

上總　松村森文子

甲「御前それは親の敎訓なのか」
乙「いや是れは役者の押繪なんだよ」

衛生問答



産科婦人科専門
醫學士　北畠孝夫述

○規定　女子の身體に就て衛生生理疾病等各種の質問に應ず薬香差支なし、毎月一日〆切翌月發表す

第五十八問　●●●白帶下　私は月經が不順で滯る事がありて、滯る時には二ヶ月若くは三ヶ月位も滯る事があります。常に白帶下樣のものがおりて、滯る月には殊に多い樣に思はれます、子宮に故障があるからでせうか。こんなでも妊娠は出來るでせうか。滯りに効能ある藥があるならば御指名下さいませ。（田舍一少女）

答　月經不順と申しても其の意味の範圍は廣いですが二三ヶ月間閉經するのはその人々の體質にも關係し或は疾患の爲め或は生殖器（殊に子宮或は卵巣の）の發育不完全に原因する事があります、白帶下は生殖器管の生理的分泌に依り來る事もあり又た生殖器の病的過量の分泌に依りて來る事もあります生理的なれば白帶の量も少くその色及び程度も普通にして透明且つ濃稠でありますが病的白帶下なれば量多く不透明（多く帶黄白色）にして或は甚く濃厚若くは漿液性（恰も水樣稠度）なりてあります然しその他種々に變化する事が有ります、多量の白帶下ありとすれば何か生殖器殊に子宮若くは膣その他の部分に疾患あるのでしよふ、併し疾患あるとするも妊娠は有り得可き事です（卵巣及び子宮等に大なる故障無き限りは）、月經の閉止に對し猥りに藥劑を如何なる方法を以てするも用ゆる事は斷じて許しません醫士の命令に隨はれよ

第五十九問　(1)●●●海水浴　子宮病の者に海水浴は惡しく候や、鹽湯ならば如何、又月經時中足だけ湯にて溫めてよろしきか。(2)●●●精神感動の爲め　月經初まりてより精神感動の爲め月經の狂ふ事はなく候や、又あまりはげしき勞働は閉止を來し候や。（櫻女子）

答　(1)多くは子宮疾患に對し海水冷浴は餘り適當ならず、溫浴は全然良しとは云ひ難きも大體に於て良効ありと認めます、月經時の脚湯は格別害なし又餘り必要に非ず(2)精神感動の強烈なる爲めに月經の變調を來す事は往々見る場合があります、又劇烈なる勞働を月經中に行なふは頗る危險である、月經閉止よりも月經過多を引起す恐れあり、尚ほその他に續發的危險症の來る事が有ります。

第六十問　●●●寢小便　私の妹は七才ですがお寢小便をして困ります、如何したら止まりますか。（相模鶴の里）

答　夜尿症は醫士に治療を受けて治癒せしむるが良策ですが先づ良き習慣をつける事が必要であります、成るべく臨臥に水分に富める食物を用ひざる事、或は毎夜一定時に他より促して排尿せしむる事、（之に依り自身で一定時に尿意を催したる際目醒むる習慣が起ります）或は臨臥に必ず排尿せしむる事、或は仰臥せしめざる事、或は夜尿の弊害を懇戒する事、等の方法を執れば自然習慣性に夜尿を治癒せしめ得可き例が多くあります、然し之に兼れて醫士の治療を必要とするのです、

第六十一問　●●●●面皰と田虫　私は顔に面皰や田虫が出來て困ります、どうすれば治りますか。（愛讀女）

答　皮膚科専門の醫士に治療を受けられよ

第六十二問　顏が腫れる●●●●●　私は長く讀書しますと顏が腫れますがなぜでせう。又時々左の顏面及び手が腫れ、常に小便が少なう御座います。（十七女）

答　諸君の爲めに顏が腫脹する理由は無いです、又た時々他に腫脹の來る事と尿量の少なき事を考へ合すれば、或は疾患（重要の器官に）あるのでは無ひでしよか。甚だ貴孃の爲めに氣懸りてす、醫士の診察を御受けなされ

第六十三問　十三回なし●●●●●　月經は普通一年に十三回との事なれども私は十四歲の秋經行ありてより以來、每月一回、五日間あるのみ、內臟諸機關は云ふまでもなく、眼耳鼻口その他いさゝかも病める所なし、月經時の苦みもなく白帶下は殆どなき程なり、只心配なるは十三回なきと白帶下のあまりに少きことなり。何處かに病ひそめるものにや。（一女學生）

答　月經は生理的四週日即ち二十八日每に來潮するのである、故に一年間を通ずれば十三回の月經が來るべき計算なり、然し必ずしも誰人にも之は當てはまる者てはないてす、縱令ひ疾患の爲めてなくも、健康の人に於ても月經が遲速する事もあり、或は二ケ月に一回なる事もあります、貴孃は全然健康の樣てある（說明に依れば）且つ月經も一ケ月に一度あると申せば何も故障は無いのてある。白帶下の事も氣遣はれておいてゝすが、此號の五十八問に說てありますから、御覽なされ、帶下の少なきは生理的てす、何も御心配は不必要てす

第六十四問　月經未潮●●●●●　私は今年十六歲てすがたえず白帶下下りて月經はありません、どうすれは月經がある樣になりますか。又一方の目を入眼すれば他の目に影響しますか。（失名）

答　白帶下のみありて月經の來潮なきは疾病の爲めの樣に御考へてすが、十六歲と申せば或は月經初發の時期に達して居らぬのかも知れません。體質の如何により月經初發時期に遲速ある事は已に委く申し述べました。本邦婦人の月花の初潮は十六年前後てすが、强ち全部に涉りて申すのては無いてす、統計的平均を取りたる迄てあります、白帶の事は五十八問の答を御覽なされ又義眼の事を御尋ねてすが何も他に影響は無いてす（適當なる義眼を用ひ居る限りは）

第六十五問　腰が冷える●●●●●　私は常に白血下りて、右の片腰が氷の樣に冷えます、病氣てせうか。（土佐、二十一女）

答　白帶下のある事及び腰部の冷感は必ずしも、生殖器疾患を認むる事は出來ません、が多くの場合何か婦人科的疾患のある爲めに來るのてす、專門的技能に秀てたる醫士に就て根治せられよ

第六十六問　薄毛●●　私は二十歲てすが局部の毛が薄くて實に困ります、濃くなる方法はありませんか。（心配女）

答　體質上毛髮の粗生若くは密生の起るのてある故ゑ、之を人工的に殊更に左右する方法は無いてす、

第六十七問　止めたし●●●●　旅行する時など月經を止むる法はありませんか。（陸奥、愛讀一少女）

答　月經の來潮は生理的の必要よりして、自然に起るのてある、之を人工的に止めると云ふ方法は無いてす、又たその必要もありません寧ろ有害てす、

第六十八問　發毛の方法●●●●●　一旦毛のはげた所へまたはやす方法はありませんか。（一女子）

答　毛根を失ひ瘢痕となりたる所に再び毛髮を發生せしむる事は不可能てす

第六十九問　面皰●●　ニキビが出來てそのあとか瘢痕になつて困ります、（深山女）

答　面皰治療後の瘢痕は全然消滅せしむる事は出來んです、今現に發生せる面皰に就ては皮膚科專門醫に就き治療を御受けなされ、茲に御注意に致し度きは餘り石鹸を用い面部を猥りに摩擦したり、する事は却て皮膚を粗鬆くする恐れがある故ゑなさらぬ方が宜しい

第七十問　(1)白粉　白粉を多く用ゆる時は如何なる中毒を起し候か。(2)明礬　明礬を入れて清めたる水は身體に害なきか。(3)活花　活花を寢室に入るゝは害ありや。(4)食物の急變　俄に日本食より洋食に移りては身體に害ありや。(5)半熟　卵は半熟最もよしと聞きたるが滋養分には煮ても燒ても變りなきか。(6)肺病の黴菌　肺病のバイキンが日光に當てゝ死するは日光の熱き爲めなりや、冬の日は弱き樣感じ候が如何。火にかざすも又同じか。肋膜炎及び肺炎は傳染の憂ひありや、（文壇讀者）

答　(1)白粉は種類甚だ多く隨つてその成分にも種々の差が有りませふ、然し古より用ひ來りの品には鉛分の含有せられて居るのが多い樣です、故に是等の白粉を濫用したる爲めに鉛中毒を起したる例は甚だ多し

(2)水中に明礬を投じ清澄にする事は坊間に行なはるゝ例少なからず多量の明礬を少量の水に用ひざる限りは格別に有害と認めません

(3)活花の種類によりては頗る強烈なる芳香を放つ者があります是等の者を寢室におき空氣の流通を閉塞すれば芳香多く室に滿ち精神を興奮せしめ爲めに睡眠を妨ぐる事があります

(4)日常慣用の食物を突然變換する事は胃腸の甘じて首肯し能はざる事でしよふ隨つて胃腸に故障を起す例が往々あります、御自分の御經驗を伺ひ度いです

(5)雞卵を半熟的に煮て食するは頗る消化し易からしめるものです、之を强く煮たり燒たりしては蛋白質の凝固の爲めに胃之を受けて消化し去るに多くの勞を要するのです寧ろ胃に消化勞力の少ない方にして御遣りなされ、

(6)肺病にも種類は種々あります、結核菌なれば日光に長時間曝露しておけば死滅するのですがそれは光線の作用及び熱力の機能に依るのです、冬の日とても光線の作用は充分あります故ゑその殺菌力は變りません、結核菌を火炎に觸れしむれば素より死滅し去るは論を待たぬ、結核性膜肋炎及び格魯布性肺炎は傳染の危險あります。

第七十一問　生米を食る　私の妹は八歳の頃から生米を好み、毎日食べん日とてはありません、別に害にはなりませんか、又食べぬ樣になる法がありますか。（田中美惠子）

答　異食嗜好は習慣の然からしむる所實に厭ふ可き事です、生米を食すれば胃腸を害すべきは論を待たず重に、習慣の久しき胃腸も之に慣れ消化可能となる次第です、然し之を全然止めさせれば胃腸に故障を起さしむべき危險が絕へないのである、故ゑ成るべく止める樣に他に何か嗜好物を以て之に代ゆる樣に習慣をおつけなされ、特別に治療法とては無いです

第七十二問　唇の皮　私は唇の皮がむけて實に困ります、如何なる原因でせうか、又全治の方法はありませんか。（綾子）

答　口唇の粘膜に剝脫を來すは乾燥の爲めである、乾燥せざる樣にする方法を講ぜればなりません、故に常に濕潤ならしむる爲め、オレーフ油若くはワゼリンの如きものを單に塗布しておきなされ、又一つには之を殊更に剝ぎ取る習慣を（氣にして）御止めなさい茲に注意すべきは、口唇のみならず口腔の乾燥は種々の疾患に由りて來る事が有ります、餘り頑固なる樣なれば醫士の診察を受け原因を確められよ

第七十三問　白帶下　(a)私は一昨年の夏より、子宮から少し黃色を帶びた粘液が下ります。昨年の春專門の醫師にかゝりましたが、此頃は家の都合て歸宅して、日々食鹽水で洗つて居ります。が相變らず乳色、乃至黃色を帶た物

か下ります、食鹽水で洗へば少し位効能がありませうか。呑み藥や坐藥だけでは治りませんか。(ロ)私は前から鼻が惡いのですが、此頃は鼻腔が豆粒の樣に腫れてゐるといふことですがこのまゝ捨て置て差支ありませんか。（以上、あきすみれ）

答 (イ)白帶下は生殖器疾患殊に子宮内膜炎子宮頸管カタル、子宮膣部糜爛、膣炎及び附屬器の炎症等の爲めに分泌する所の排泄物であります、その白帶下に種々の種類ありて或は半透明にして粘稠なるものあり 或は殆ど透明にして粘稠なるあり 或は漿液性と申して水樣狀態の者あり或は帶黄白色にして粘稠なるあり 或は殆ど膿樣なる者なり或は血液を混じたるものあり 斯くの如くその種類は多く有ります、之を專門的に分てば種々の疾患の時期に依りて斯く異なる次第であります、一々詳く申せば餘り專門的に渉るからそれは述べませんが兎に角貴下の申さるゝ樣に多量の帶黄白色の帶下が排出せらるゝ樣では必ず子宮内膜炎若くは頸管カタル或は他の婦人科的疾患が有るものと考へられます、單に自家に於て食鹽水位で膣腔を洗滌するのみでは何等の根治的功能はありません是非早く婦人科醫に治療を御受けなされ、内服藥及び坐藥のみでは到底全治しません。

(ロ)鼻腔粘膜に腫脹を來したるは該局所の加多留らしく考へます、之は專門家醫士の手でなくは全治し難からん

第七十四問　月經時の腹痛と不順

(1)私は月經時になると下腹がしく〳〵痛み、僅か四五日で閉經します。二十八日毎に來潮することもあるし、又一月目に來潮する事もあります。來潮する十日位前より白帶下があり、それが止まつてから五六日すると月經が來ます、月經は多い時もあり、少い時もあります、このまゝ捨て置いて自然に治りませうか、貧しき者ですから何卒自家療法をお敎へ下さい。

(2)女子は總て月經のあるものでせうか。（以上、愛讀者）

答 (1)月經時に下腹痛を來すは、絶對に疾患の爲めなりとは申されません然し疼痛が甚だしきは恐らく婦人科疾患の有る爲めならん、月經は生理的二十八日毎に來る可き道理でありますが個人の體格及び營養狀態並に健康狀態に依りて必ず二十八日を期して來潮するものと斷言は出來兼ねます月經來潮前に白帶下中等量に排出する事は生理的にもあります之は必ず病的を意味すると申されません、月經毎に出血量の一定しおらずしてその差が著しきなれば疾患の爲めなりと斷言しても能いです、眞に健康なれば月毎の月經量は各年齡に據りて大差のあるものではありません以上の事實を綜合して考ふれば貴女は恐らく婦人科的疾患に犯され給へるならん、屢々御話し致す通り自家療法は何等の功を奏す可らず、醫師に事情を打明かし特別に仁慈の手に縋り給へ。

(2)月經は女子の身體に於ける生理的作用でありますが之に就ては前號に詳く述べおきました、卵巣の欠損を來せる婦人なれば無月經であります、子宮の發育不全喇叭管の不全的發育等のみあれば月經として膣より排出を見ざる事あるも代償性月經として齒齦の出血、衄血、肛門出血、腸出血、肺出血等を來せる例も有ります、

第七十五問　厭きやすし

此頃は物に厭きやすく、書見などすると直ぐ睡くなります、又記憶力も弱くなつた樣です、何故でせうか、其の療法もお敎へ下さい。（加江子）

答 腦神經衰弱の症候に一致しております、此疾患は種々の原因よりして起るのでありますから根本的療法を必要とす自家の攝生法としては適宜の運動、過勞（體力上及び精神上の）を避くる事、冷水浴、營養を佳良ならしむる事、睡眠時間を短縮せざる事、胃の障害に對して根治療法を行なふ事、等を嚴重に履行し且つ醫治を受く可きなり。

誌友倶樂部



○規定　本欄は誌友諸嬢の機關として随意に使用あれ各自に誠實を守られたし不確實の投稿は沒書とす住所本名は詳記すると字體の明瞭を要す

圖書換讀

○俳句書類　皆様御不用の芭蕉其角蕪村嗚雪嵐雪俳句集の内いづれでもかまいませんから私の野狹集古戰場前續二册花紅葉と御交換下さい。（仙臺市元荒町廿四泉田香）

○春潮と交換を　諸姉様から新聞を澤山送つて下さいましたので御かげて春潮も全くうつし終りまして別に不用のを一册書きました之は春潮をまだ御存じない方で金色夜叉か乳姉妹か或は吉丁字御持の方と交換して頂きたいと存じますの其他の小説では御斷り申します（滋賀縣甲賀郡吉川村林醫院内、踏志緒）

○「春」と「響」　皆様の内、若し、島崎藤村先生の（春）が御座いますれば御送り下さい又水野先生の（響）が御座いますれば送つて下さい御禮には（新夫人）（夏子）進呈致します但し二人限りです（備中連島大梵原こみれ）

○秀才文壇　皆様の中に御不用の秀才文壇あらばいくら古くとも宜う御座いますからお惠み下さい乾度御禮いたします尙澤山取纏めて御惠み下さるお方は前以て知らして下さい（山形縣玉川局區内南小國小學校内、朝尾加江子）

○獨步の作　誌友の皆様方に獨步の作でなんでもいゝです御持ち合せの方御ゆづり下さいませんか御送り下さつた方には先着者拾名限り醜いけれど妾の寫眞を添へて相當の小説で御禮します（靜岡縣引佐郡都田村都田字新木七九、波多野いち子）

○女學世界と少年世界　妾は女學世界三卷壹號から八卷拾六號までと少年世界四卷一號から七卷拾六號までの分を一册もかかさず全部揃へて所持いたしておりますが、册數はいといませんから青海小形か木下尙江氏の小説墓場かと御交換下さる方はありませんか、又其中で何號でもお望みのお方は郵便切手を封入してお申越し下さつたらすぐにお屆け申します しかしどの號も一册宛しかありませんからこれも御注意までに申しておきます（大阪南區谷町六丁目五、服部きよ子）

○技藝の書物　妾の手許に、女日用かゞみ。茶の湯と生花。造花一人習。新小説。新化粧法。洋齒講義錄。家事實修法。等澤山ありますから皆様の中に御不用の書籍が御座いましたら御交換下さいまし。繪はがき。玉章も御願ひいたします（北海道根室彌生町六、丸木美佐保）

○本誌初號より　皆様の御手許に本誌一卷一號より御持ちの方は私の小説類（二十册）其他種々の雜誌ありますから御交換下され猶九册以上御送り下さる方には私の寫眞とキヌハンカチーフとを添へますよ。（攝津國小濱局區口谷二〇八坂留方かめ子）

○私の手許に草合、破戒、女夫波、孫野、怪光、運命、己が罪、不言不語、百合子、紅塵、少女の戀、二人娘、五人娘、うき世日記、卯の花おどし、女海賊等ありますから皆様の夏子、雛子、多情多恨、思ひ出の記、みだれ髪、虞美人草、深山の美人、忘がたみ、窓、金色夜叉、魔風戀風と交換して頂戴、すべて繪葉書一組と、絹ハンカチーフとそへます 特に先着五名にはリボン枝折を差上げます（攝津小濱局區口谷阪留方翠子）○皆々様繪ハガキ交換を望みます 魔風戀風御不用の御方は御惠み下さい相當の御禮は致します（東京市下谷區下車坂町一〇泉方菊名文子）

○女學世界文藝倶樂部新小説などの古い雜誌がありますから其他のものとおかへ下さい（大阪府東成郡幸津村城ゆき子、○何方でも本誌本年三月號不用のお方が御座いましたなら御送り下さい、御禮には、先着御一人のお方には小説女心、次に二三人のお方には雜誌、其他の方々には葉書て返禮致します。（千葉縣長生郡鶴枝村下永吉石井きぬ子）○誌友の諸兄姉様妾の許に「家庭雜誌」「文藝界」「婦人世界」「洋裝」「衣裳」「新小説」「地底の犯罪」「筒國右衞門」「天一坊」「小弓御所」「春色英對」不用になつて居ますから皆様の「我輩は貓である」か「青春」と御交換下さいませ

んか外の本でもかまひません先著者五名に妾の寫眞をそへてお望のをお送り致します（大坂府東成郡中本村大字本庄七九五稲井太郎方同東月）○敬愛なる姉様方よ私の手許に美少年戀と人生、不如歸の歌、己が罪の歌、戀の忠臣藏の歌、嗚呼弥の世や、初航海、金色夜叉などが有りますから交換してください（千葉縣東葛飾郡福田村下三ケ尾内藤ひて子）○妾今度始めて女子文壇の讀者になりましたのよ、寫眞や玉章で此後とも末長く御交際をして下さるお方様に新金色夜叉、衛生新報、黄金窟の上下、新料理法など澤山ありますからお望みのを差上げますわ、但し男子のお方は絶對的いやです。（函館區旭町二百四十番地田本久平方谷内ふさ子）○「最新最詳英語獨習初歩」「英語獨修全書（第一初步用）」「國民英語學會講義錄一號より何號迄でもよし」右の外英語獨習書なら何にてもよし右の書籍御不要の御方は申込次第妾の藏書目錄差上ますから何卒御一覧の上御交換を願ひます（秋田縣沼館町、泉川けん子）○私にハガキ文學、早稲田文學全部尋常樂、戀衣、名流婦人のかゞみ、肚言術があいて居ますが皆様の中で破戒、響、あめりか物語、何處へ、罪、等の中の一冊と御換へ下さいませ（兵庫縣印南郡曾根村春海涙子）○なつかしき誌友の皆様私手許に和洋裁縫ひとり學び小野鷲堂の女子消息文女子文の粟家庭衛生叢書新ホトヽギス新金色夜叉新香談婦社會百面相逆咏（十餘篇）早稲田文學女子文壇少女世界その他小說や雑誌が百冊以上もありますから皆様の中にハイカラ令孃上、菅海一葉全集ハイネの詩玉島女學世界等御持ちのお方は何卒交換して下さいまた寫眞も御送り下さい御禮は必ずいたします（越後中魚沼郡十日町樋口きよ子）○妾の手許に、女殺し、新小島、まくらの友、等の小說外に秀才文壇、美文作法、新奇術法、などがあります諸姉様方の面白い小說か雑誌かをお送りになれば御好みのをお送ります（安藝佐伯郡大野村大原春子）○誌友の皆様私は田舎のもので小說等少しも持つて居ないものですが皆様の内に（ハイカラ田舎娘）（ハイカラ令孃）（ハイカラ夫婦）（伯爵夫人）（夏子）（百合子）（少女の煩悶）（はつ姿）（新婚旅行）（戀と戀）（新學士）等御持ちの方はどうぞ御かし下さいな、御禮には當地の名所繪ハガキと私の見苦しい寫眞を添へて御返し致します（山形市香澄町兵營前石崎かね子）○滿天下の諸姉様のうちに、不用の文學書類がございましたら御照會の上私のと御交換下さいませ、只今手許に古雑誌が澤山ございますのよ、皆様の内でお玉章お寫眞おめぐみ下さいました方々には、お望みの書を進呈いたします（岩代、喜多方町五十嵐濟子）○なつかしき姉様よ寫眞を御送り下さつた御方には四名にかぎり「金色夜叉」「不如歸」「夏子」「戀と戀」何れでもおのぞみなのを御送り致します（府下荏原郡駒澤村新町松本丑三方鈴木つね子）○私の手許に、明治節用大全、教育資料、家庭講話錄閨生著大石内藏之助、良人の自白四册、天うつ波上、淀殿上、雲がくれ柳浪著亂菊物語、ふた昔其他中等百科辭典、文章新辭典等ありますから皆様のうちにて、欺かざるの記前編、吾輩ハ猫デアル、三人羅曽、草合、追恨、女夫波、獨歩集、乳姉妹、月魄後編、嫁ケ淵上下御持らのお方は御交換下さいませ書籍着き次第雑誌數册相そへかたく〲御送り致します何卒宜敷（大阪市東區粉川町五十一松下春江）○妾の手許に伯爵と美人五枚姿運命開拓法婦人世界女學世界其他古本たくさん有りますから皆様の内己が罪女夫波不如歸の歌金色夜叉の歌御持ちの方は御交換して下さい（神奈川高座郡寒川村一ノ二字新道通木村伊勢子）○貴嬢方の中に、博文館發行の通俗作文全書中の田山花袋の美文作法西村醉夢の紀行文作法御不用の方は幸田露伴著新羽衣物語、大學館の戀の行末、江見水蔭の戀攻擊其他の小說と、御交換下さいまし、婦人世界四月の增刊結婚の卷不用、御入用の方は御申込み下さいまし、（長野縣東筑摩郡坂井村駒彬三二六、西澤素子）○諸姉様妾の許に魔風戀風前中後編三册新後不如歸三册金色夜叉合本不用でありますから皆様ヴワイオリン寫眞器械など御持の方御送り下さいれ妾小說に給薬沓シチリ見にくき寫眞などそへ御のぞみの小說と交換下さいれ必ず送ります（奈良縣山邊郡朝和村字長柄山崎方山崎やす子）○小說や雑誌の御交換を願ひ度いのです、皆様の内に何でも御不用の書物が有つたらお送り下さいませ必ず御返禮は致しますわ、（横須賀市米ケ濱一二諸九森まる方森訛子）○なつかしき誌友の姉様よ姉様方の御手許に小說己が罪……中編はございますから……前篇と後篇、浮沈後篇、捨小舟中篇母の面影、心の影、女夫波前後、いさゝ川、それから源氏物語つれ〲草、等がございましたら私のはつ姿金色夜叉中谷間姫百合後日の出島、白浪女、不動劔、七日間、其他和洋料理法、日向案内日記、少年界少女界日本少年、

四十一年より本年五月までの少女世界等と御交換下さいましな。それから御寫眞お惠み下さいな御送り下さる方には少女界を二册づゝ差し上げますわ。(大阪南區難波新川三丁目六三八的場二葉)○手元に古雜誌(文章世界、ムラサキ、文庫、秀才文壇、其他)いろ〳〵と、詩集及歌集(晶子)のみだれ髪、玉琴、小扇、黒髮等とあります、御望みならば、古本以外何でもと交換いたしましよう、次にどなた様も御手紙や繪葉書をお惠み下されませ、必ず御禮申ます(芝西ノ久保明舟町一鈴木内琴子)○皆様の中に良人の自白、青春、コブシお持のお方は二十日程お借し下さいませ女學世界ハガキ文學女子文壇の中お望のもの一册附てお返し致します(磐城國相馬郡松ケ江村、立谷紫子)○誌友の皆様の中に召集せられた教師の歌か孝女白菊の歌月岡花子の歌お持ちの方はお送り下さい御禮は必らず繪端書か古雜誌て致します(天鹽國増毛畑中町四丁目、田中仙子)○私も新小說が三四册婦人世界女學世界等不用の雜誌がありますから御望の方は無代進呈致しますから誌面にて申込みなさい又月琴が弐ちようありますから望の方は寫眞又は書籍と交換して下さい(三河知多郡成岩町南柳原丑太郎方つた子)○皆さん私の許に新體詩早學、漢文講義、國語漢文獨習自在、一簑一笠、高等美文斷片、紀行文集、檜木笠、美文作法、其他書籍雜誌種々ありますが、國語、漢文に關した書籍雜誌と御交換下さいませんか、御願ひよ(栃木縣那須郡荒川村須藤小夜子)○地方雜誌御持の方に。四方八方の愛讀者諸姉様よ妾は他國の地方雜誌が大好でありますから御持の方は何册でも御送り下さいませんか送て下された方には當方地方雜誌の新宮雜誌を返禮します先着三名に妾方十日町新聞附けて差上ます(新潟縣中魚沼郡水澤村字新宮村山やの子)○皆様の中に、網寫眞掛、御持の方は私の、安藝、伊吹、進水紀念、日本海大海戰第二三四回紀念呉、宮島名所繪葉書等と交換御願申ます、又大阪朝日新聞連載、吉田松陰十八、十五、廿、廿一、廿三、三十二、四十八、〃一ノ一、二ノ五、二ノ六、五ノ一、二、六ノ二、御送りの方へ御禮として繪葉書差上ます(呉市二川町四本通二丁目、碓井呉竹)○妾の手許に小說南北、青海、美文韻文作文辭書、英和和英袖珍字典、實踐道德學、年中用文章、最近世界新地理、鳩一道話、等不用になつて居ります故其れに相當の者御送り下されば直に御返禮致します(名古屋市中區門前町貳丁目太田吾郎方仝秀蘭)○皆様私の處に美文作法。青葉若葉上下。文藝倶樂部。新文明の利弊。女子成功鑑。其他色々の新小說を持つて居ます皆々様の新小說か上等な繪葉書と御交換して下さいな終りに御文の交換を(下關市岬之町鍛之內山本松藏方山本芳子)○國家人名辭書、白夜集、沈鐘チエホフ傑作集、浮草、生潮、響の內何れにても御送付給はりし方へは左の書を以て御返しします、青春、筆子、舞姬、二十五絃海賊、魔風戀風(全)病戀愛、及其他の詩集歌集十數種(山口縣玖珂郡米川、瀬波左久夏)○誌友の姉様方よ私の手元に左の不用書がありますから寫眞にて御申し越しください人の母、戀の闇、片戀、小女の煩悶、ほとゝぎす、等ありますから御望みのを早い方がお徳ですよ(千葉縣海上郡飯岡町宇井花月)○皆さんのうちで本年一月及び二月發行の本誌御不用の御方は中秀爾文壇、ハガキ文學、新文林高等美文斷片のうち何れかと御交換下さいませんか又作文百科辭林不用になつて居ます他の文學書と換讀或ひは交換を願ます(栃木縣那須郡境村大淵方須藤三五子)○歌集あけぼの、御持ちの方が御座いましたら御讓り下さるか又は相當の雜書類と御交換を願ひます其他歌本は何なりとも(能登輪島町勝田方且田曉星子)○女子文壇增刊新美文、五ノ四、三、ムラサキ、女學世界、女學校畫報、婦人世界、小說、御送り下されました諸姉様に、スミス洗粉、キレー水、リボン、美人紙おしろい、パール、化粧のをしへ、香水紙、家庭の栞、等て御禮します。(新潟縣中魚沼郡水澤村新宮、村山德正方仝潮子)○文章世界、秀才文壇、冒險世界、新文林、等の雜誌が澤山有りますから何かと御交換下さい、寫眞の交換も……取りつきりの樣な事は神にちかつて致しません、私も人に僞られた事も有つて、其時の事を知つて居ますから(福岡縣築上郡八津田村西、松尾ふし內、政子)○皆様の御內で本年三月號女子文壇、御不用の御方は御送り下さいませんか、婦人世界繪葉書て御禮致します(信濃國上伊那郡赤穗村下平一一九三番地、松崎よし子)○愛讀の皆様よ妾の許に天うつ波、多情多恨、青春、などの小說がありますから、皆様の內にムラサキ、四月號五月號お持ちのお方は右の小說と交換して下さい(茨城縣稻敷郡阿見村大字阿見入郎內坪、淺野すみれ子、)○御なつかしいの誌友の皆々様よ妾の手許に家庭小說。心の鬼。悲戀悲歌。寬

の池。嫁と姑。不如歸、女日用かゞみ。創世記。などが不用になつて居りますから、婦えらみ。ハイカラ令嬢。財婚夫人。朝顔日記などゝ交換を願ひます（千葉縣山武郡白里村四天木内山咲子）○皆樣の手許に教育聖諭教本、普通教育學、最近統合帝國地圖等いづれか不用のお方は、妾の俳句作法指南こゝろの日記、詩集花天月地、玉虫、こゝろの秘密、作文辭書、自然と人生、新寫生文の内のいづれかと御交換下さいまし。（千葉縣夷隅郡千町村上須賀谷峰島和枝）○みなさん妾の處に少年世界日本少年新少年合せて三十一册ありますからみなさん方の古雜誌と交換して下さい又は郵税のみお送り下さればさし上げてもよいの。此他に小學美文少年傑作集少女と文藝英文法新編文章作法、俳諧獨學等もありますから姉さん方の書籍と交換して下さいな御入用の方は葉書にて知らせて下さい（長野縣埴科郡松代東寺尾大平直枝）○金色夜叉、新不如歸、伯爵夫人、青春など御持の方が御座いましたら何程、古くてもかまひませんからお惠み下さい御禮には、お粗末でも祖父の書を差上げます（岡山縣淺口郡黑崎村、西勤）○只今の私手許に絹ハンカチヒクツキ編物など手製のが御座ゐ升から皆樣の手製のや又はうつしゑなどと御交換を希ひ升、お送り下されば早速送つてよ、又妾の寫眞も有り升し小說ては銀山王、不如歸、櫻の御所、血の涙、ハイカラ令嬢、想夫憐、毒有り升ので皆樣お持ちの多情多恨、己が罪金色夜叉、乳姉妹夏子、少女の戀、其の他の物と御交換下さい、見惡い乍送り升から、繪葉書下された方には妾の寫眞送り升わ、妾の家は妾一人ですからどなたでも差支へ有りません。（東京々橋區木挽町三丁目倉田德次郎方山本君枝）

記者と讀者

○記者樣、私は小學校へ參ります頃は作文が好きで人なみには出來ましたが高等へ行かずによして仕舞ましたから何も出來ません开れても何か作て見たく時々おかしなものを書き附けますが扨それを添削して戴く方がありませぬて少しも手があがりませぬけれど此年に成て習ひに行くも耻數又暇も無いものですから樣々の雜誌を見て人樣の良い文をまねたり何か致して居りましたが本年二月女子文壇を借りて來て見ました處が皆樣の好い文や記者樣の御心切なる御批評——私も皆樣の尾にても着く事の出來る樣成り度いと思ひまして直ぐ名古屋の書店へ行きました處が何處も彼處も品切てむなしく歸へりました。次の日義弟を中京堂へ遣り漸と一部殘て居たのを求め爾後愛讀致し投書を致して居ります。記者樣私は自分の投書致したのが載て居無くても決しておうらみ致しませぬ又何程沒書に成るとも毎月多少づゝ必と投書致しますから少し出來得る樣に成たら載せて下さいませ、私は其時を卒業致したのだと思ふて草深き賤の家て文壇をかい抱き東の空をあふぎます（琴子）（記者曰、此の樣な眞面目な愛讀者を一人でも得たのは、どんなに心强いことでせう、勉强して文章も上手になつて下さい、記者は今あなたの志を發表して、先づ其お心掛に讚嘆の意を表します）○俳句雜誌「ホトヽギス」の發行所と定價を教へて下さい（とよ子）（記者曰、「ホトヽギス」は麴町區富士見町四丁目ホトトギス發行所の發行です、一部二十錢郵税一錢）○遠方から品物求めます折にこちらから先に送金して先方に取りこまれる樣な事はございませんてせうか又よき方々がございますならば誠に御面倒てございませうが一所に御知らせ下さいませ（筑前恐女）（記者曰、本社用達部にお賴みになれば確實てす）○記者樣私は三四月前に不束なる寫眞を送りましたが貴社ては口繪に御掲載して下さらないのですかどうせそうてしやう私のなんて不氣量者てすから御掲載して下さらないのてせうそれはあんまりひどいと私ひとりて悲んて居るのよ御掲載して下さらないなら直ぐ返して頂戴なもう御掲載して貰らはなくも宜敷御座いますほんとにあたし記者樣を怨みますよ（牛込煩の娘）（記者曰、お怨みは御尤もですが本社寫眞部には諸友諸嬢の寫眞が幾百枚もたまつて居りますので、成るべく到着順には出して居りますけれど、三四ヶ月の遲延は何うしても免れません、それに製版の組合せの都合などもありまして、後れることもあります、決して御きりやうの好いわるいに依つて出す出さぬと云ふことはありません、まアそんなにお腹立なさらぬやうに）○記者曰、以下芳名を掲げた諸嬢には一々お答いたしませんけれど、御申越のことは凡て拜承いたしました、お問合せのことは大抵差支はないのてございます、神田、美代子。ちどり。木村登茂子。伊豫、渡邊文子。たえ子。兵庫、鎌田麻乃。長野、高橋てい子。姫路、富岡綾子。茨城、岡田うめ子。青山、細川みよし。羽前、橋本い

つ子。本郷、小稗菊江子。しづ子。下妻、好子大阪、服部きよ子。京橋、捺子。千夜子。奈良、福西たづ子。青森、林ちゑ子。秋菊子。釜山、富永清子。○千葉縣光子さんに、悪筆と云つてもあなたのやうなら決して然うてはありません、結構てす（記者）○牛込、山田美江さんに、お寫眞は只封じて郵便で本社へお送り下されば好いのてす、別に手數はありません（記者）○本所の次原さんに、衛生問答は本社へ送つて下さい（記者）

讀者通信

○北米より　　ロースアンジルス市には日本婦人が一千名ばかり住んて居ます、而して羅府佛教婦人會及び羅府婦人矯風會等がありまして各婦人ホームの設けがあります、當市は年中霜を見る事が出來ません、其代り十數ヶ所の公園には四季共に花が笑つて居ます、四月から十一月までは一滴の降雨もありませんて蚊などは居りません、されど私の故郷（廣島）よりも餘程冷たいてす、又四十哩乃至六十哩の間は汽車が縦横に通じて居りますて非常に便利てす、此の近方は果物に盛てす、近いと盼て進ぜますのに（北米、るり花）

○平戸より（一）　　皆様歴史て御學びになつてせう、明國の臣て臺灣て大そう手柄を立てたと云ふ鄭成功は平戸町から約二里許り南に當つて千里ヶ濱と云ふ砂濱てあります長サ十里に足りない平戸島に千里ヶ濱とはちと不似合な様でありますが此處の景色の良いことゝ云つたら到底私共の口や筆などで申上げる事は出來ません。濱の中央には子持石と名のある大きい石がありますこれが即ち鄭成功の母君（中野村川内浦の田川氏の娘）が此石に腰を下して向ふを通る帆かけ船や九十九島などの風景を眺めて居られた時急に産氣付かれて此石の上に生み落されたのが後世に名を上げた鄭成功であられます（平戸、伊知子）

品物交換

○なつかしき誌友の皆様寫眞、ハンカチーフ、ヒジツキ、シオリ、繪葉書、等の御交換を、又バイロン、ゲーテの詩御持の方は妾しの小說、雜誌と御交換下さいな（千葉縣東葛飾郡福田村上三ヶ尾字佐見雪江子）○皆様私は不用な物品がありますから皆様の内て入用の方は御一報下さいな目錄は左の通りてす「ヴワイオリン、洋琴、活動寫眞器械、日本家庭百科事彙、婦人かゞみ、踊雁の盃、食道樂、不思議な娘、其の他色々ありますから交換して下さいまし（栃木縣下都賀郡寺尾村字尻内福富定平方とめ子）○女子文壇誌友の皆様どうぞ寫眞編物リボン栞の御交換を願ひます男子の方はおことはり致します（常陸久慈郡河内村字町屋根本靜枝）○小說二筋道、硯の海、女學世界また外に澤山あります から風琴と御かへ下さい賴みます（大阪市南區鰻谷平の町一一三六小山たま子、小山はま子）○誌友の姉上様よシオリ、ヒジツキ、リボン、御惠み下さいな當地名所繪葉書て御返禮致します尙先着五名には妾のみにくき寫眞御送りしま す必ずいつはりは申ません（神奈川高座郡寒川村一之家新道通り木村伊勢子）○御情深き皆様の御手許にハーモニカ、手風琴、洋琴、いづれにてもよろしくあります故もし不用なのがございましたら御貸し下さいませんか尙繪葉書玉章などの御交換もとこしゑに御願い申します（九州福岡市博多下鰯町六ノ二中野さかゑ）○賢明なる誌友の御姉上様お志のある御方はレース糸の編物をお惠み下さいな私も必ず御禮は致します（北海道、留萌町三泊村字ウス十五、和野きよ）○私、ヴアイオリンの中古品が不用てすがたれか手風琴の中古品と交換して下さるお方はありませぬか最も美しき袋（弓）をそへてあげますお望みのお方は下名へ（京都府南桑田郡東別院村字鎌倉中川美枝）○皆様の中に上等手風琴お持ちの御方は御知せ下さいまし御禮は横戀慕貳册か諸雜誌繪葉書て致します（長野縣上水内郡三輪村上松、小林久子）

交際を望む

○文學好き　　皆様の中て文學に趣味をお持ちの方て私の様なものとても御交際して下さいます方が御座いましたら何卒下名へ御玉章御送り下さいませお返事は神に誓つていたします但しいやに氣取つた方はお斷りいたします（近江大津市橋本町小西愛子）

○越後の方に　　私本年の夏季休暇を越後の方て避暑致し度いと思ひますが未だ御地の事情を少しも存じませんのてすが皆様何卒御教示を願ひます（府下荏原郡南品川町二七六圓しづ子）

○軍人の奥樣　誌友の方に軍人の奥樣方がおありならば、御交際が願ひたいのでございます、けれど私は軍人の妻じやございませんのです（德島縣小松町西町、西野ひさし）

○短册の交換　皆さん短歌や俳句を書いた自筆短册の交換を御願申し升（羽後由利郡院內村三浦ふみえ）

○名所繪はがき　諸國の名所が知りたいのですが、就いては皆樣から日々五枚宛一まとめにして名所繪葉書を送つて頂きたいのです、開封にして住所姓名は封筒の裏に記し、はがきには何も書かずに下さい、私方も願を送ふて東京名所繪はがき五枚づゝ一まとめにして月每に御返送いたします（赤坂區檜町六、淸岡龍子）

○シカゴより　誌友の姉上樣にあまり遠方ながら繪ハガキや寫眞などで交換なして下さいませんか、お返事はかならずかならず致します、男子のお方は、かたく、おことわり申ます、（在市俄古、甲野俊、P. Kono 2017 Prairie Ave., Chicago, Ill.）

○皆樣よ、私れ一五月の文壇に交際願つたら四方から永久の交際を申込んで下すつてほんとにうれしいのよ、まだ下さらない方はドシ〳〵レター頂戴よ、お返事は必ずよ、そしてどなたでもエハガキが枚ばかりくださる方にはリボン一つづゝ御禮として差上ます、かりにもいつわりは申しません、（靜岡縣濱松町川端山群梅園）○靜岡市の鈴木ます子樣おなつかしいわ私と同姓よあなた十四れ私十五よ今年女學校へ入つたのよ私の國はれ三河よだけど私北海道で生れたのよ私女子文壇大好きよ今までは少女の友や少女世界を愛讀してたんですが女學校へ入つたのだから少し大人ぶつてこれにしたのよお手紙下さいな私も上げますかられさよなら（札幌區北六條西六丁目二番地、鈴木しげ子）○五月號當欄に諸國名所の神社佛閣の印影ある繪葉書或は同型紙を交換していたゞきまする愚弟のお願ひを擧げて戴きましたら諸國姉樣の御仁心により連日机上に各地から降つて來まして誠に厚く存じます、まだまだ交換にお返すべき繪葉書を弟も持つて居り、私も聊か有してゐますからどうぞ御交換の程お願ひ申します（姬路市本町富岡綾子）○本誌御愛讀の諸姉樣繪葉書並寫眞の御交換及御玉章の交際を願ひます（奈良縣添上郡柳生村大字柳生下今中恒子）○皆々樣よろしく御交際お願ひします、又繪葉書の交換もね、（本鄕區大學病院、皮膚科內、深谷英子）○誌友の諸姉樣妾は不束者ですが御交際を願ます繪葉書や玉章の交換も御願申ます雜誌小說もよ御返事は神にちかつて差上ますよ男子にても淸い御方なれば恥かしながら御交際下さいませ（大阪市東區左官町八三二吉田信三方ニテ石渡鄧枝子）○不束者には候へ共何卒御玉章下され度私の文は誠に亂筆なれ共屹度御返事致すべく候（京都市烏丸通り丸太町下ル今堀字多）○皆樣私れ一昨年戀しい東京を去つて此の淋しい田舍に住ふようになりました者です御同情ある御方はどうぞ御玉章下さいまし男の方でも宜しう御座います御返事は屹度差上ます（北海道松前郡大澤村淸水道）○皆樣どうぞ御交際下さいませ、（仙臺市北二番丁百十一番地後藤香子）○繪はがき五枚以上御送り下さる御方には私しの見苦しき、寫眞を一枚さし上げます（大阪市東區博勞町一丁目丸山まつ方、村田きよ子十八才）○親愛なる誌友諸姉上樣繪はがき御玉章あみもの澤山御送りくだされて誠に難有御ざいます尙此後も相かわらず末長く御見捨なく御交際ください御願ひ致します（大阪市北區旅籠町三七、中野艶子上田さだ子）○親愛なる諸姉樣妾は今年十七才の姉妹なき少女ですが淋しく古鄕を出てて大阪に學んで居ますから末久しく御交りを願ます尙繪葉書やレターの交換も願ます御交り下さる方へは妾の見苦しき寫眞御送り致ますよ（大阪市東區久寶寺橋西詰南入丸山方、岡田千代江）○親愛なる誌友の諸孃よ玉章エハガキの交換を願ます（福島縣岩代耶麻郡鹽川町、山田光子）○未使用の繪葉書十枚御送付の方へは妾の見にくき寫眞とカードを御送りいたします（大阪東區博勞町一丁目濱通丸山滿津樣方岡本はる子）○誌友の皆樣方私も愛讀者の一人となりましたからぜひ〳〵御交際下さい別けて長野縣の姉樣方ぜひ〳〵末永く御交際下さい御返事はかならず致します（長野縣西筑摩郡福島町、沼田まつの）○みな〳〵さま半生の悲哀を有することの私を可憐に思召し繪葉書や玉章を御交換下さいませ（京都市五條通油小路東入し、裁縫所にて神崎雀子拜）○目下妾の見苦しき寫眞を燒き增して居りますから皆樣から未使用の繪はがき五枚以上御送り下された方へすぐさし送ります（大阪府東區久寶寺橋西詰南入丸山病院內、鈴木つた子）○誌友諸姉樣方よ不束なる妾に御玉章御惠み下さい又漢詩に趣味ある御方何卒御自作のを御送り下さい、妾も拙

き乍らきつと御送り致しますわ、但し男子は御ことはり（愛知縣渥美郡二川町雲谷、夏目文子）○記者樣、文壇御愛讀の皆樣も御紹介の程御願申ます（北海道膽振國虻田郡虻田村字トコタン、松尾まつ子）○妾は山深き片田舍に住む無學の者てすが玉文寫眞の交換を願ひます（和歌山縣那賀郡長田村増田よし子）○御なつかしい誌友の諸嬢樣よ美しい繪端書や玉章の交換を御願致します又御寫眞の交換をも御願致します（石川縣鳳至郡七浦村字皆月酒井梅子）○誌友のお姉樣妾は極く片田舍に住む淺學の不束者て、十二歳の時に父親に死なれ母上弟を合手に三人暮し實に々々不幸者てす哀れと思ひ御玉章お寫眞等を御惠み下さい必ず相當の品て返事差上ます又私と余じ境遇のお方がありましたら心の中の話をしたいのてす（下野那須郡、院村下界三二蓮見きよ子）○妾は今や或るものを失つてより六ヶ敷い不愉快な日を送つて居るのてすわ、だから御見捨てなく御交際を願ひます、御交際の御しるしに御寫眞や御玉章を下さる方には妾から返禮として手風琴と奇麗な栞を御送りしますわ、けれど二組しかないのてすから御先の方だけよ（京橋南槇町一、小林方竹内きみ子）○又妾は愛讀の皆樣と交際を願ひ度のてす又男の方てもよいのてす（青森縣西津輕郡、鰺ヶ澤村本町富所入貢子）○御交際を願ひましたら男子の方許りなのてす此後は男子と認めましたら御返事致さぬ事に致したのてす斷然男子の方は御斷り致します（岡山市下石井渡邊菊子）○皆樣始めて御目にかゝります、何卒御交際下さい、又二枚みにくい寫眞がありますから御交際して下さる方に差上げます。（東京府豐多摩郡代々木山谷百六十木内方安達秋江子。）○橫濱の藤森秋子樣外十二三名の御方より美しきエハガキや御玉章下され有難く拜見致しました其の節は風邪にて病床に打臥し居り候に依りて御返事差上ざる御方もあるやも知りませんが何卒々々失禮てすが平に御宥し下され先は誌上を借りて厚く御禮申上候（和歌山縣海草郡紀伊村、鳥居邦子）○誌友の姉樣逆妾今度始めて愛讀者のかたわれになつたのよどうぞ御手紙の御交際を願ひますぞえ（大阪市南區松屋町三五増見方、さと野）○どうぞ交際して頂戴ね、玉章や寫眞や繪葉書の交換を、但し失禮てすが男の方には御免蒙りますわ、「男の方とこんなもののやりとりをするなら雜誌を讀んではならん」と兩親に叱かられましたから、皆樣どうぞ永久に御つき合ひ下さいね（三重縣安濃郡村主村神山、小宮あさの子）○旅行や文學や交際が大好き殊に繪端書や寫眞名產物等の交換が大好て今迄も皆樣と交際してをるのよ。何卒以後もどし／＼御交際を願ひ升（宇都宮市新宿町粟田方、内田美保子）○御姉樣方樂しき御玉章並に和歌の御交際を御願ひ申上ます（陸前國柴田郡大河原町、阿部芳枝）○今は京都に淋しく日を送つてゐる者てす親密に交つて下さる方に御交際れがひます男子ても潔白ならばかまひません（京都市上京區上長者町数屋町西入上野方政子）○皆樣お心やすく御交際を願ひます、（美濃國大垣町室、酒井とみ子）○皆樣お手紙を下さい（札幌北二條西一丁目松井方、鷹澤せつ）○北海の愛讀者諸姉樣、本誌に、振つて、投書致しましよう。そして、益々盛んならん事を祈りませう、終りに何永久にお交り下さいませ。（北海道渡島國龜田郡七飯村字鳴川一入伊東小百合）○皆さんと誠實に熱心に御交際いたしかたはら繪はがき雜誌の御交換いたしとうござります、例へ一葉のレターにせよ赤心籠めて下されば何物も之れにすぎません（下野那須郡境村大字小木須大關樣方須藤榮）○親しき／＼スクールの生徒よ不束ながら妾をも愛して下さいませ碧水の樣な御交はりをれ御健やかて冷水摩擦を御行ひなさる御方樣や、運動を御好みの方は朽ちるまで御引立下さい先は一寸御願ひ致します（橫須賀市逸見町三五七東畑方、向井貞）○本誌のお陰て親しいお友達ができてほんとに嬉しいてす、どうぞ皆樣も御玉章を下さい、私は乾度御返事いたします（京都市寺之内通り新町西入ル川田益子）○誌友の姉上樣方よ玉章や繪葉書の御交際下さい（茨城縣久慈郡李久村上河合岡田梅子）○皆樣の中て繪端書て御交際下さる方には私も繪端書て御返事きつと申します又ヴァイオリンの惡しいのを御持ちの方がありましたら御ゆづり下さいまし（青森縣弘前市下瓦町三十一松井方、長尾にしき）○賢明なる諸姉樣方御手紙下されて有難う存じます一々御返事は致して戴きましたが、つきましたてせう、併し男子の方や、變名女子と慥に認めらるゝ人にはおかへしをしない方もあります夫れの分はこゝにてお禮を申ます、猶引續き御交際して下さいな（東京市四谷片町三五齋藤方味方こう子）○皆樣、寫眞、レター、其の他のもの丶御交換を願ひます（下野那須郡境村小本須大關方須藤三五子）○以來國の鮎上とのみ臉が心に深き印象、

あれかこれかと胸の小田卷くりかへしては只管感謝の涙にむせんで居ます、願くば姉君よ、永へに文明の香を分ち給へ（廣島縣賀茂郡仁六町手島政子）○お情け深き誌友の姉樣方お差支ない方は玉章給葉書の交換を願ひます（陸中國稗貫郡臺溫泉場小瀬川たけ子）○萬天下の諸孃よ給葉書の交換や文通を御願ひします返信は神かけて致します、（南滿洲柳樹屯西街小杉方重長はな子）○無學無智の者ですが御情にて折々御交際數ならぬ拙なき姿の身をも。おいといなくば。玉章や給葉書の御交換を願ます又送つて頂た御方の内で先着五名樣には見悪けれど妾の寫眞を添へて御返禮申ます（横須賀市山玉町二六塚田方、黒沼勇子）○私は高等小學校を終へたまゝて内に引き籠もつて居ましたが以後は御玉章御寫眞の交換を御願ひ申ます（熊本縣菊池郡岩村水次、石淵ふゆ子）○誌友の皆樣、御敎導を願ひます、元より學淺き妾、どんな譯の分らぬ事を申しますか分りません、ただ、皆樣の、御智識を吸收するのに務めてます、云はゞ、皆樣の寄生蟲れ、ホ、、、始めから、こんな、無駄口を吐きまして失禮、マア、こんな、お轉婆だと思つてネ……どうか表面的を避けた、まごころよりの文通を願ひます（大阪市南區難波新地五番町佐治二郎氏内、星野妙子）○私は所謂花の都に文藝に餘念なく暮しゐますが寫眞や、給はがきの交換をお願ひ致します妾よりは御惠與次第御送付致します（京都市今出川通り室町東へ入る岡本與三郎方渡邊文子）○皆樣の御うちで「玲瓏高き仙嶽の千秋の雲影消くといふ歌と譜を御存じの方はどうぞ御知らせ下さいましな御願ひいたします（横濱市福富町二ノ五十七少川泉子）○誌上の姉上樣よ何卒ゑはがきや玉章の御交換を願ひます（京都市室町五條上杉山方ニテ今阪なら枝）○皆樣に御願ひ申します朝顔其他草花の種子余分に御持合せあらば少々御惠み下さい給はがき又は趣味ある御挨拶いたします（東京、柏木三八三竹内乙江）○姉君方よ給葉書の交換を御願ひ致します（京都室町萬壽寺下ル尾崎伊三郎方はる子）○皆樣どうか給はがきの交かんドシ／＼願ひます（京都室町萬壽寺南入杉山彌吉内靜江）○皆樣相かわらずレターや給葉書の御交際下さいまし（熊本市外古町雨森あい子）○誌友の諸姉上樣よ妾は齊梅山金剛寺下に住む者です何卒御交際を願ひます（府下西多摩郡青梅町天ヶ瀬一〇六一荒井春子）○誌友の姉樣妾は父も母もない身の上です、どうか玉章御惠み下さいませ（近江神崎郡山上村腦師あさ）○誌友の皆樣方私が兄ともし、交つて居る人にそれは／＼情深ひ優しい御方があります去年中學三年で病氣のため退學して今は淋しく暮して御居てるの男子の方ですが永久に交際する御方がありましたらどうか下記へ手紙を上げて下さい紀伊國北牟婁郡尾鷲町淺井隆邦。記者樣右の樣なのも誌友クラブへ記載してよろしいのでしたら何卒記載して下さゐ（三重縣本誌愛讀女拜）○誌友の皆樣澤山給葉書及びレーター下され幾重にも御禮申し上げます澤山の内ですから返信を忘れしやもしれませんが返信の行かぬ方は今一度御投函下さいまし必ず返信致します（北海道宮川溫泉寒月子）○不學なる私にまで御交際を下さいました皆樣方へ略儀ながら誌上を借りて深く御禮申上ます尚は在米中の皆樣方へも御交際願ひます。（愛知縣知多郡牛田町名切二八番地渡邊靜）○姉樣方よ御わすれなく御交際を御願ひ上げます（秋田縣横田四日町上石田歌子）○諸姉樣よ、妾は故ありて一時皆樣と御別れ致しましたが實に淋しくて成ません何卒又御交際を願ます又横須賀横濱の御方で御厚情に富んだ御姉樣達は御交際を重れて御願致ます。（日本橋區東町一ノ十四莊司方高橋照子）○私は先々月誌上へ御交際を御願ひしました處澤山の御方からの御手紙ほんとにうれしくつて御禮の申上やうも御ざいません、私からもすぐに御返事と御約束の品とを差上ておきました。然し悲しいことには、男の方からの御手紙がありましたため、伯父の嚴命で折角親しくなつた御姉上樣とも暫しの間交りを絕たなければならない樣になりました、御姉上樣方よ、私のこの小さき胸の内をば御察し下され、どうぞ惡からず暫しの間文通を御止め下さい（神田區駿河臺袋町五長谷川愛子）○妾は多くの雜誌の内で此の女子文壇が一番大好物なのよ、そして面白くてれ夜なんか更けるのも知らずに見て居りますわ、妾もこれから、未熟ながらも投書しようと思ひますから、諸孃樣よろしく願ひます、給葉書の交換もれ乾度ですよ。（千葉縣印旛郡成田町田町西村いつむ子）○誌友の諸姉上樣よ私は農に務めて居る片田舍の少女ですが以後濟い御交際を望みます、（茨城縣那珂郡額田村寺門柳雪方寺門ク　ニ子）○誌友の君よ私は稗史野乘に多大の趣味を拂ふの者。幸に御同好の君もあらば、下名へ趣味の交換を。（東京市本鄉區湯島天神町二丁目壹番地小山

いづみ）○読賣様にお伺ひいたします私は来る年に高女を卒業するものですが作法見習のため宮使の志もありますので皆様の内で少しの間でも宮使へお遊した方もしくは内容の有様を御存じの　お方は宮使へをすればどんな有様か、甚だ申し兼ねますが玉章にてくわしい事柄は勿論大體にてもよろしゆ御座いますから御通知下さいますよう御願ひいたします郵税金と共に身にかなつた御禮はいたす考へて御座います。（大阪市南區阪町二二八番屋敷加藤菊子）○和歌趣味、御厚情に富ませられ、新派　和歌に深ひ〳〵趣味を、お持ちの方は何卒御交際して頂戴寫眞交換もねえ（備後國深山町笠岡町藤井圓右衛門内かず枝）○誌友の皆様私は深山に朝夕淋しく暮して居ます御交際を願ひます、（三重縣桑名郡占決村瀬木方すま子）○私家の都合にて一時交際を中止致しますが又御交際いたす時が出来ましたら其時は改て御願ひ申上ます（桑名にて石川辰江）○鍵部貞久子様掛米郁子様末長く御交際を願ひます（四谷須美子）○優美心に富める御方々!!!私は花鳥風月に親しんで淋しく〳〵暮して居る哀れな者てす、只今野面は奇麗に百花が咲き揃つて居ますから押花として貯へて眺めていますす、此押花の御すきな御方は交換して下さいませんか玉章の交換も永久に願ひます（伊勢桑名郡古奥村瀬木八重子）○誌友御姉上様私は片田舎に淋しい月日を送つてをる愛讀者てすよ、是非御交際を願ひます、又絵葉書や雑誌の交換もてすよ。（京都府加佐郡舞鶴町字引土臼井淑蔵方八重子）○四月號の誌上にて皆様へ御交際ない願致しました處男子の方より續々お申込みがありますが、私は男子の方とは一切交際は出来ないのですから不悪思召下さい私は唯女の方とのみお交り致したいのですから左様御承知願ひます（北海道雨龍郡深川町堀江病院内藤枝浪子）○親々密々の御交際を偏に願ひます。（安房由基南小町安藤貞子）○讀者諸姉何うか寫眞や絵葉書や雑誌の交換を願ひます。（茨城縣稲敷郡柴崎村成渡風見貞子）○御交際を願つても五度も六度も返事を下さらない方がありましたが、私はそんな方とは以後しません、お情深い姉様方にばかり御願ひいたします。（岩代原島下共和乙中村清子）○方々の皆様から御情こめたる御玉章たまはりまして、誠に有りがたく深く感謝いたします、御返事を出し後れた御方へ誠に失禮てすが誌上を借りてお詫びいたします何卒悪しからず御用捨をねがひます。（美濃國　酒井とみ子）○私は親しき友の梅子様の御進めて本誌を愛讀して居りまで何卒四方の姉上様方よ此の後の御交際を御願ひ申します。（茨城久慈郡幸久村日野愛子）○誌友の姉上様達には御變りも御座いませんか妾は過にし日家事上の都合より草深き田舎の地へ歸郷の身となつて居たので遂思ひ乍らに御無沙汰致しまして申譯も御座いません何卒悪しからずこの後も末長く御交り下さい。（本郷區元町二ノ四八長谷川方北林峯子）○誌友の諸讀様、妾も一月號より女子文壇の愛讀者の一人となりました。何卒御交際を願ひます。（千葉縣山武郡松尾町八田三輪亮子）○誌友の姉様妾は此度都合によつて卒業学校を後に見て、親しい友垣とも別れ今は一人子となりはてました、おなさけ深い姉様、永久に親しい御交際をねがひます。（福井縣坂井郡鶉村淨土寺北利子）○親愛なる諸姉上様よ何卒御情深き御方さまには文の栞の御交換を願ひます。（千葉縣香取郡日吉村宇井多津代）○誌友の皆々様よ御玉章の御交際下さいまし（茨城縣眞壁郡下館停車場前東踏切久保芙子）

個人消息

○西尸政江子。　大阪市南區東清水町二〇中村敏次郎様方に轉居す

○細谷鏡子。　東京府下日暮里村元金杉二百二十四に轉居す

問合せ

○加藤ひさ子様。　東京の方です、目下の御住所を紙上てお知らせ下さつた方には御禮に指環をさし上ます（和泉、増井とし子）

○倉持峰子様に。　峰子さん貴女と御別れ申したのは櫻咲く四月の半よ其後如何に御暮し遊さるの私毎夕西南の空を眺めて貴女を思ひ出さない事は一日たりともございません、何卒誌上て御知らせ下さい（茨城縣久慈郡幸久村大字土河合岡田うめ子）

○陸せい子様。　昨年十二月頃まで常陸眞壁郡河内村杉山芳蔵様方にゐらしつた方てす。現在の御住所御存知の方は誌上て詳しくお知らせ下さい（詳子）

○姓は檜田　といつて二三年前に上野山下に宿屋を開業したんてす。御存知の方は直接お知らせ下さいませ。（下谷區中徒町一ノ一、小川友子）

雑報

女學世界

女學生の減少とか云ふ評判もあつたことてすが、それても猶ほ新らしい色鮮やかな袴の往來は、麹町に神田に小石川に織るが様に見受けられる▲女學生と云へば直ぐに墮落とか虚榮とか云ふ悪るい意味や聯想を持つ様に何時の程か世間がなつて了つた、いかにも是れは殘念てす▲て、當局の教育家に於いても、其れらの御憂慮から今度十五ヶ條の心得の様なものを御協議になつた、勿論結構な事てすが、又愆愍に一々勿れ律てやられても頭分と擡者が來る▲今の盛婦人商店なく女電車がないと云つた有様なる限り男子と交渉禁斷と云ふを現代に求めるのは不可能てす▲精神が無ければ規則は只兜簡なものゝなるばかりてす、見ず知らずの人、わけて異性の人と輕々しく交りを結んて宜いか惡いか位は恐らく其人の常識が判斷するてせう。

二葉亭氏の永眠

二葉亭四迷事長谷川辰之助氏は曩に東京朝日新聞の社員として露西亞に赴かれたが旅程に病を得て滯在一年ならず倫敦より賀茂丸に搭乗して歸朝の途中、五月十日午後五時十五分與慾ひ波悲しむ印度洋上に於て途孫として長逝された。遺骸は新嘉坡に於て火葬に附し遺骨のみ本月三日横濱埠頭に到着すると云ふことてす、行年四十八歳、留守宅には夫人及び三男一女ありて氏が無事を祈られつゝありしに終に此訃報に接す痛恨の情察するに餘りあるのてす。

氏は尾張の藩士て江戸の屋敷に生れた、幼年の頃より外國語を學び、殊に露西亞語に通曉した、明治第一期の文學隆盛時代にも氏は既に文壇先見の名士として知られた、其出世作『浮雲』の如きも圓熟したる言文一致て書かれ、思想も當時にあつては一歩他を摺んてた、其他『片戀』『カルコ集』『其面影』『平凡』『血笑記』『浮草』などの單行本あり、短篇の飜譯物は其數、幾十種に上つてゐる、

文壇に於ける氏の地位は一方に獨立してゐる、『浮雲』時代より坪内博士と深交あり其後ち作家として立つに到つても氏は常に文學を以て我一生の事業とするとは言はなかつた、何か大いなる抱負を持つてゐたらしく、露西亞行も恐らく其第一歩てあらうと思はれるが君自らの抱負は遂に實現されなかつた、假合實現された處て我等は人生至上の事業たる文學者長谷川二葉亭氏を上下するには足りなかつたてあらう。

女學生監督法

在京女子教育家懇話會委員伊藤第一高等女學校長外六人の方が御相談の上若い女學生の爲め男子に對する心得十五ヶ條と云ふものを選ばれました、いづれこれは會の協議にかけた上修正を加へられてから都下の各女學校に施行さるゝ筈てすが、其原案は左の通りてす。

一、青年男女は密室内にて對談す可らず、若し止を得ざる場合には必ず第三者の同席を要す

二、青年男子を訪問す可からず

三、父兄の外は何人たりとも適當なる保護者（婦人）なくして單獨に宿泊する男子を訪問す可からず

四、青年男子と交通す可からず但し文通をなす必要ある時は適當なる人を通じて爲すべし又未知の人より文書を受けたる時は自から開封す可からず

五、青年男子と寫眞其の他の物品を贈答す可からず

六、自己の寢室又は病室に於て男子と面接す可からず

七、日沒後は成る可く外出す可からず但し止むを得ずして外出する場合には年長なる保護者の同伴を要す

八、責任ある保護者なくして旅行、外泊すべからず

九、確實なる婦人の保護者を有する親戚又は知人の家庭の外單身にて寄宿す可からず

一〇、男子に對しては特に言語擧動を愼み苟くも野鄙の振舞ある可からず

一一、確實なる紹介なくして男子と談話し又は其の世話を受くべからず

一二、誤解を招き或は間違を生ずべき恐ある人又は場所に近く可からず

一三、年長の保護者なくして青年男女が互に散

歩遊戯娯樂等をなすべからず
一四、青年男子の旅行を送迎す可からず
一五、他人の目前に於て衣類の着脱をなす可からず

○周宮殿下御成婚　度々記した通り周宮房子内親王殿下と北白川宮成久王殿下との御成婚の儀は四月廿三日勅許に成り、同廿九日午前宮中に於いていと莊厳なる御盛典を擧げさせられました、其夜宮中に於かせられては兩宮殿下の爲めに豐明殿に御宴を催ふされ、これ亦眩ゆきまでの御盛儀のやう洩れ承はりました。

○跡見棚橋兩女史の古稀宴　閨秀畫家として又女流教育家として名高い跡見女學校長花蹊女史は今年七十の高齢に達せられましたので、同校關係の現今名士夫人の方々發起となり、同校創立三十五年紀念會を兼れ五月九日午後一時から日本橋倶樂部で盛大なる祝賀會がありました。又東京高等女學校長棚橋絢子女史も同様古稀の齢を重ねられたので同じ十九日午後一時より向島札幌ビール會社に、親交ある人々を招き實業に祝宴を開き其席上にて棚橋家累代の古器物を縦覧に供せられた由です、敬愛する老女教育家の爲め月を同じうして倶にかゝる目出度き祝會が開かれたとは洵に嬉れしいことでご座います。

○文學の講演　京都には詩歌研究を中心とした講話會があってなか〳〵盛んだといふが、東京には純文學の講話會と云ふものが割合に少い、毎月一二回開かれてゐる和强樂堂の文藝講演會ぐらゐなもので、辨士の顔觸は大抵大町桂月、馬場孤蝶、生田長江、岩野泡鳴、戸川秋骨、樋口龍峽其他の諸氏である、又此頃出來た文藝革新會の諸氏も追て講演を開くさうで前月にも一回あつた。

○山川とみ子女の訃　新詩社中の女秀才であつた山川とみ子女は數年來病氣の爲め郷里若狹に歸り靜養中であつたが、藥石功なく四月十五日終に永眠した、君の和歌に就いては本號に與謝野氏の寄稿があるから就いて御覧あれ。

○服部貞子女の出京　服部貞子女は郷里岩代より上京した、多分文學修養の爲であらうと思ふ。

○『煤烟』終る　『東京朝日』に連載中の森田文學士の『煤烟』は大喝采の中に終を告げた、何れ遠からず一册になるだらうが、其上で多少の所見を述べて見たい、世の批評もきゝものである、『煤烟』の次には大塚楠緒子夫人の『そらだき』續篇が出た。

○文壇と出版界　文壇は昨年來同じ歩調を保つてゐる、別に活氣づいたほどでもないが、又さして沈滞もしてをらぬ、出版界の景氣は世間の景氣に伴うて餘り振はないと云ふことだ。

○硯友社の紀念祭　往昔文壇の一勢力であつた硯友社では五月八日午後一時から芝の紅葉館で硯友社紀念祭と云ふが催されました、來賓は文士畫家書肆記者等百餘名、婦人席に紅葉眉山乙羽其他の遺族も會せられたのが特に目を惹いた、小波水蔭諸氏の談話、講談、演劇等の餘興があつて散會、尚ほ今日合祀された故人と云ふのは尾崎紅葉大橋乙羽を始め川上眉山中村靄後松酒家緑佐藤黄鶴松岡緑芽安倍春帆安川霞哉の九氏で今年は硯友社創立後恰度廿年に當ると云ふとです。

▲陌頭の柳が出殻(でがら)のお茶の樣な葉をひろげ埃(ごみ)〳〵して浚て居るのを見てもめつきり夏めいた感じがする、菓物店には枇杷が來(き)袋が若き夏橙の香が高い、夏物新柄賣出しの廣告看板が其處此處に出る、洋物店の見本箱中には新形の夏帽が競うて併べられてある、相變らず忙しきは都の有樣です。▲水の色こそ親まれけれと云ふ季節て、花は菖蒲、そのうち睡蓮も咲きませう、少し濁つた水に浸つた緑の影を破つて悠々緋鯉の行くのも都人には珍らしい眺めてす ▲近頃商科大學の事て高等商業學校の生徒さん方が激昂の末總退學をしたと新聞にご座います ▲東宮御成婚記念の爲め東京市から獻納した上野公園博物館内の表慶館は各室の出品陳列も終つたさうです、其構造は一般公衆の觀覧すべき建物としては他に類なき美しいもの〻由です。▲本所に雨降りになるとは拂塵子なぞを持て踊り出す老猫があるとかて一時評判て、其後生擒りにしたさうですが、矢張り踊るのかどうかは分りません。▲昨年十月三十一日萬朝報主催に係る全國長距

者の懸賞に一等賞を得た靜岡縣駿東郡印野村の鈴木さだと云ふ媼さんは今年百十二歳の頽齡を迎へた處、先月廿三日より風邪にかゝり五月の十二日に死去したとのことてす、枯れた骸は裾野に、執着を離れた魂は靈山の頂きにかへつたとでもありませう。

○興風女塾　小石川丸山町十八番地にある興風女塾は米國文學士田添幸枝女史が婦人興風會の事業として設立せられたもので、現時社會の風教頽廢を歎き其の矯正の爲め、女學生及び就職の女子を收容懇切なる監督指導の下に家族的生活を營ましめ、又和英數技藝等の學科を教授するとのことてすが、高燥なる土地て青葉に包まれた好き塾舍であります。

○一茶同好會　一茶は滑稽灑洒の俳人として古來名高い人ですが、長野市箱清水町三六中村六郎氏は其先代が一茶翁の知己で翁の遺墨遺稿を三百餘點を藏せらるゝ處から、今度一茶同好會と云ふを設け、追ひ〳〵に未だ世に知られざる珍本までも上梓して會員に頒つ計劃があるさうです。會員募集期間は來る十月卅一日まてて申込所は本鄕區西片町十ろ八號一茶同好會であります。

着物の色合

▲人物と着物の色　着色の色合は其人物を現す上に非常な關係を持て居るもので之に依つて其表情も全然變つて來る例へば茶屋場に於ける由良之助は古代紫のテレッとした着物を着て居るので如何にも優柔な樣に見えるが次の山科閑居の場ては澁い茶の着物を着て出るからキリッとした智慮ある武士に見える恁くの如く着物の色合は其人物の表情と極めて深い關係を持つて居るが先大體男女及び年齡、時候、職業等の關係て區別する、演劇ては此色合に依つて極めて巧に其人物を表はして居る例へば家康は黑い袴に淺黄の着物を着て如何にも家康らしく又漁夫は剝身絞りの襦袢などて其漁夫らしい處を現し田舍娘は綠色の着物て如何にも其初々しい野暮らしい處を見せる又忠臣藏の山崎街道などを見ても着物の色の配合が却々好い御承知の薄樺色の稻村などの背景のある處へ同じ樣な色の着物を着た與一兵衛が出て來るから其人物が弱弱しく纖に見える其處へ出て來る定九郎は眞黑な着物を着て居るので如何にもクッキリとして又凄味がある

▲婦人の着物　之は演劇の話てあるが一般の日本の婦人が着る着物の色は先づ紫と藍と鼠と茶の四種て之が色々と變化して上品になつたり意氣になつたりする十五六の女て云ふと濃い紫は上品に見え綠はハイカラてある十九、二十頃なら上品なのは藤紫、意氣なのは藍鼠、綠はモウ着られないから薄藍などがハイカラてある廿四五になると上品なのは薄い藤鼠、意氣なのはお納戸の如きものを着るそれから以後の女の着物には別にハイカラと云ふのはないが其代り澁いものを着る樣になる卅歳頃て云へば藍鼠は上品、藍藤鼠は意氣、茶は澁い、卅四五になるとすべての色がくすんで鼠がゝつて來る例へば鐵色は上品、茶鼠は意氣澁いのは鼠茶てある

▲色の表情　之に依つて見ると紫は上品て十四五から二十四五迄、藍は意氣て二十歳頃から三十歳頃迄着る鼠になると之は上品てもあり意氣てもありそして壽命も長く死ぬ迄着られる之と同じ樣に茶もお婆さんになる迄着られるが之は廿七八頃からてないと似合はない云ふ迄もなく茶は澁い色てある

▲光線と色　又色は光線に依つて大分變つて來る例へば夜會服などは晝間見立てゝ拵へたのが夜着て存外引き立たぬとなどは往々ある之は光線と色の關係を研究しないからてある元來ランプや電燈の光は何れかと云へば樺色に近いから之と接近した赤い色だとか又はオレンヂ白茶などは引つ立つが藍などは黑くなつて終つて全然駄目だ若し之を見せやうとするには餘程濃色にせねばならぬ（菅原文學士談）

雜誌界

○『無名通信』　二號三號と追々無名通信の無名通信たる特色を現はして來た、文士生活貿の素破抜などは兎に角人が見たがりさうなものだ、既に一歩斯う云ふ態度て踏み出した以上は宜しく猛烈に社會の不正な部分と正しい部分とを曝露して貰ひたい、新聞記事のやうに徒に好奇を挑發するものてなく、伏在したる人間の眞相を抉出して欲しい、上つらの事實を文字て誇張

ずるやうな三面記者的態度は不可、謹嚴にして根抵のある無名通信を切望する。

○『スバル』　短歌號と名乘るだけあつて、一部短歌の集と見るも好い、矢張與謝野晶子女史の作が最も引き立つてゐる、木下君の脚本『燈臺直下』も面白く讀んだ、白秋君の歌も好かつた、短歌の中には聊か輕佻なる態度も見えるのは同誌の爲に惜む、

○『新小說』　小山內氏の『途中』と云ふ小說がある、モデルがありさうだ、與謝野冴野兩氏のプシキン英譯『一擊』もある、『思潮』欄の戶川秋骨氏の『近代的の萌發』は系統立つた議論だと思ふ。

○『トキハギ』　新詩社の機關で、明星廢刊後の消息と社友の創作(和歌)とが載つてゐる、大形三十二頁、用紙は非常に良い、一部十五錢。

○『ホトトギス』　寒川鼠骨氏の卯の花と云ふ寫生文が卷頭にある、與平と夢二の兩氏の漫畫は面白い。

○『秀才文壇』　岩野泡鳴氏の『思索力の缺乏せる現文壇』は多少時弊に中つてゐる、一般の讀書界に推奬すべき好論文、服部嘉香氏の『實感詩論』は近來稀に見る眞面目な詩論である、少し抽象にすぎて議論に濕ひがないやうだけれど深く味ふと得る處が多い　森田相馬兩氏の小說もある

○『趣味』　入千代女史の賊と云ふ小說を讀んで、ヘヽア成程と思ひ當ることが多い、それは澁谷の郊外に岡田氏の住居を訪問したものでないと分らぬ。(以上五月分寄贈)

晶子女史の堺時代

私が歌を詠むと申すことは自分ながら不思議で成りません。田舍の町家に生れて、兄や妹や弟は學校の教育を受けましたけれど、私丈は母と一緒に忙しい家業に追はれて學校へも參らず讀書する時間と云へば、夜の十時を過ぎて店の用を仕舞ひ雇人どもを寢させて置いて其れから自分が床に就くまでの纔か一二時間、其れも毎夜と定つて居る譯でも有りませなんだ。讀む書物も祖母や父が昔讀みました源氏とか大鏡とか云ふ類の古書を倉から出して來て讀む計り、新しい小說や雜誌は學校に居る兄から送つて吳れましたので、十二の歲から文學界とかめざまし草とか、又水沫集や硯友社の小說の類を讀んで居りました。子供の時から歷史や哲學がかつた事が何よりも好きでしたから田口先生の史海と云ふ雜誌や三宅雄次郎先生の日本人なども讀て居りました。是位の事で何も學問を致さぬ私は文學を專門にしようなどとは考へ無かつたのですが、若し出來る事ならば小說と云ふものを一つや二つ書いて見たいと思つた事もありました。歌は古今集や新古今集位を拾ひ讀み致しました計りて、女の作者の歌は二三の人を除けば何れも〳〵拙いものだと愛想をつかした事もありましたが、自分が作つて見ようとは少しも考へませんてした。正岡子規先生の俳句の革新を唱へ出されたのを見まして初めて蕪村句集などを讀み俳句を面白いものだと考へ、小說では紅葉さん外國文學の大家では森先生、俳句では子規先生が宜いと存じました。宅が明治三十年頃『讀賣』に出した歌を見ました時、歌も此樣に新しくする事が出來るならば命があると初めて氣が附きました。「トキハギ」より

餘興課題　**買物**

買物と云ふ題なら恐らく何か書けない方はないでせう、何か書いて下さい、文章はこらなくとも宜しいのです、只有りのまゝを書いて見て下さい

▲買物の實驗に就いて書いて面白さうなことを考へて下さい▲諸孃は吳服店にも行くでせう、小間物屋にも行くでせう、本屋にも行くでせう、豆腐屋にも行くでせう、行けば何か見るか聞くか感じる筈です▲腹の立つたことでも、をかしかつたことでも、間違つたことでも、恥しかつたことでも、困つたことでも、嬉しかつたことでも▲或は心得になることでも▲買物に就いて得た知識もあるでせう買物をしたことの實驗談なら何を書いても宜しいのです▲併し成るべく能く考へて成程と人を感心せしめるやうなお話を思ひ出して下さい▲原稿は『買物』と題をつけて置いて下さい、操▲文章は十六字詰十二行內外にして下さい、假名はいりません▲賞品はいつもの通り天地人三人にさし上ます▲しめきりは本月十五日

新刊

○蝶

小山内薫著

小山内薫氏の短篇集です、私は卷頭にある『粘土』を最も興味深く讀みました、『熊次の家族』は集中で最も長く、形も變化があるのですけれど、何うも内容が乏しいやうに思ひます、『蚊』とか『蝙蝠傘』とか極く短い小話に何事か思はせる作があります、小山内君には斯う云ふ散文詩風の短くて氣の利いたものに上手な處があります、『旅役者』などは流石に作者が劇道にたづさはつてゐるだけあつて、他の知り得ない消息があるやうです、『十三年』とか、『中學生の日記』とかには何となく事實ではないかと云ふ念が起きて來て、藝術の香を薄くするやうに思ひます、『事業』『銀行』『沈默』なども矢張小山内式の觀察で、君の才が多方面に働いて人間と云ふものを觀る眼の博いことが分ります。 偖て釘裝は岡田三郎助氏の意匠で、極く美しく、殊に女の方が欲しさうな本に出來てゐます(定價八十錢、日本橋通油町水野書店發兌)

○黄昏

白柳秀湖著

「此小說は只明治三十八年代に於ける一部青年の生活を忠實に書いて見たといふばかりで、他に何の意味も無い」と作者の自序にありますが、主張あり信仰ある主人公其他青年の若々しい感情とはげしい現代の色彩とが出て居るので、青春の士女に取ては深い意味が味はれることと思ふ、云はゞ『春』を小規摸にして近代的の匂ひを持たせたやうなものです、附錄(?)の「驛夫日記」も其質量共に「黄昏」に比して優るとも劣らざる好小說であります。 定價は奥付に書いては無いが八十五錢だとのこと、(日本橋下槇町如山堂發行)

○リンコルン一代記

此書は北米に於けるワシントンに次ての大人格アブラハム、リンコルン百年祭紀念として出版されたもので、讀むうちに有益な感化を受けます、文章尤も平易、給入振假名と云ふ家庭向きの好讀物で裝釘も美くしいクロース本であります(定價金七十錢、巣鴨上駒込、内外出版協會發行)

○自然と印象

二十四頁しかない小さな詩集です、福田夕咲君の詩六篇と三富朽葉君の詩四篇とが載つてあります、福田君の作は北原君そつくりのやうです、餘り似て居るやうです、三富君の作の方に冥想的な、又獨創的な態度があります、此小詩集は篤志の人に讀んで貰ひたいと云ふのが目的で刊行されたのです(牛込築土前町自由詩社發行)

劇壇所感

▲革新の聲は四方に起りながら、革新の實の舉らないのは劇壇です、之れ一は好脚本の缺乏、之れ一は名俳優の凋孫、而して他に一つの大原因は見物の眼識の低い處にあらうと思ひます

▲一方に要求される新劇がありながら、一方になほ舊劇の根抵は動かない、新しい技巧は出來るは容易なことではない、新しい技巧を破壞する居らぬ、劇は要するに技巧の上に建てられるべきものだが、革新派は徒に理想を望んで、技巧に重きを置かぬ、偶ま技巧ある脚本、技巧ある技藝があつても、それは舊い型に準據する點が多くて、革新の曙光を認め難い。

▲學校に演劇科が起り、革新團が起り、自由劇場が起り、女優養成所が起り、運動は各方面に波及しつゝあるが、根本たる脚本と、俳優と、見物との三者の進歩が緩いから現下に目覺しい活氣も見さないけれど、何れ遠からず氣運が熟してくるであらう。

▲左團次の洋行も何の得る所なく、彼は依然として明治座に丸橋忠彌を演じてゐる、同座に於ける仁左衛門の眞は彼が關西の劇壇に於て鍊へ上げた多年の蘊蓄を傾倒して、舊劇の技巧を充分に發揮してゐる、完成したる藝術とは云へ一方の鎭たるを失はぬ。

▲所謂振事劇を見ても、吾人は今の劇詩家に、否今後現れんとする劇詩家に、少くも舞臺の上の注意、劇としての技巧にも諸君の新知識を應用すべき餘地の充分にあるべきことを信ずる。

(一記者)



寫眞を望む

誌友諸孃　お一人のでも二人三人一しよのでも多勢のでも凡て歡迎いたします愛讀者になつたと云ふ紀念に寫眞をお送り下されば結構です

女學校　女學校の授業の實地撮影、或は建物、或は附近の景、或は生徒の風俗又はさま〲の式日の摸樣など大いに歡迎いたします

女の子供　可愛らしい女のお子さんの寫眞も送つて下さい、美くしい寫眞版にして紙上に掲出いたします

風俗風景　風俗も各地女子風俗に限ります風景は成るべく珍しい場所を求む

返送報酬　［乞返送］と寫眞の裏に認めて下されば用濟次第返します、又良好の寫眞を送つて下されば相當の御禮をいたします

▲**投稿締切日**　凡ての投書は毎月十五日堅く締切ます

○女子文壇投稿各種**懸賞定額**　（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲特別賞金五圓

▲甲種（短篇小説、美文）
天賞金參圓。　地賞金壹圓五拾錢。　人賞金七拾錢。

▲乙種（お伽噺、家庭日記、新論文、書簡文、新體詩、散文詩）
天賞金貳圓。　地賞金八拾錢。　人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、笑話、歌謠、敎への庭、少女文壇
圖畫は二寸の三寸の大さにて薄き日本紙に限る）
天賞金壹圓。　地賞金五拾錢。　人賞金貳拾錢。

◎各種とも金壹圓以上の價格當選者には相當の吳服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

●賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽竊したるものは無効とす）

女子文壇定價明細表

振替貯金口座　東京第壹七貳九番

○定期發行分
▲毎月一回（一日定期發行）

一冊（一回分）	定價金拾五錢	：郵税一錢五厘	計金拾六錢五厘
三冊（三月分）	同前金四拾三錢五厘	：同四錢五厘	計金四拾八錢
六冊（半年分）	同前金八拾四錢	：同九錢	計金九拾三錢
十二冊（壹年分）	同前金壹圓五拾六錢	：同拾八錢	計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分
▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

一冊（一回分）	定價金貳拾錢	：郵税一錢五厘	計金貳拾一錢五厘
二冊（半年分）	同前金三拾八錢	：同三錢	計金四拾壹錢
四冊（壹年分）	同前金七拾貳錢	：同六錢	計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部―十六回

四冊（三月分）	定價金六拾三錢五厘	：郵税六錢	計金六拾九錢五厘
八冊（半年分）	同前金壹圓二拾二錢	：同拾貳錢	計金壹圓三拾四錢
十六冊（壹年分）	同前金貳圓三拾八錢	：同二拾四錢	計金貳圓五拾二錢

▽申込注意
振替にて拂込む時は誌代の外に貳錢登記料增すこと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絶）、凡て前金拂込に限る

廣告料金

特等	一頁三十圓	半頁……	部數多く有効に比し無類の割安
上等	一頁廿五圓	半頁……	
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	一行四拾錢
〆切	毎號十五日前		

特約取扱　○京橋　日本電報通信社　○京橋　明治廣告社　○神田　博報堂

明治四十二年五月廿八日印刷
明治四十二年六月一日發行

定價金拾五錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區四紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十一番地　電話［本局六〇七番］　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

中形

六月一日より

浴衣地新柄陳列會

外に新流行夏物呉服類
及び諸雜貨賣出し申候

子寶

巖谷小波編
杉浦非水画

出版界空前の美本
愛兒生育の歷史畫帖

「こだから」

出產に最好の贈品
六月一日より發賣仕候

東京日本橋

三越呉服店

（服部製本）

女子文壇 第五年第八號
明治四十二年六月一日發行（毎月一回一日發行）

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】



女子文壇定價金拾五錢 郵税

【東京秀英舍印】